

自分がツインテールの可愛い女の子だと妄想して日々の出来事を日記に書いていたら、転生して本当にツインテールの可愛い女の子になってしまった件

とんこつラーメン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

自分じゃない自分になりたい。

誰だって一度はこんな事を考えた事がある筈。

でも、それがもしも現実になったらアタタはどうする？

いつも自分が見ている転生系小説の話が自分に起こったら？

これは、その一例の話である。

2019／12／30 第二話の内容を一部変更しました。

目次

フィクションが現実になっても困るだけ	1
すぎ焼きの主役は牛肉、ヒロインはうどん	10
エッチイのはイケナイと思います！	18
そげなアホなっ!?	27
あいえすのほうそくがみだれる！	38
これはもう泣いてもいいよね？	47
胃薬とフレンズにだけにはなりたくない！	57
ちっちゃくないよ！	66
白くて速くて強い奴	74
SAY！ 斗甲斐（誤字に非ず）	81
結局はこうなるのか・・・	90
私はお前の主人じゃない	98
乱舞する白き刃	105
その後のお話	115
どんな体になっても筋肉痛は地獄である	123
牛乳はいつも裏切る	131
健康って素晴らしい！	141
もう一人のツインテール	149
Wツインテール	156
ツインがテールしてるからツインテール	165
萌え萌えキュンキュン♡	174
日中休戦協定締結	182
ツインテールと眼鏡なあの子	190
『萌え』こそ即ちローマである	198

なんか増えました | 208
有ると無いとは大違い | 217
私って、これが初陣じゃね？ | 227
黒の異形 | 237
皆がいるから | 247
刃 | 257
夢だけど夢じゃなかった！ | 267
遊びに来たヨ！ | 277
明鏡止水の心で頑張ります | 288
量産機は最高だぜ！ | 298
遂に来たよ、あの二人が！ | 307
奇妙奇天烈な二人の転入生 | 317
私の周りが皆揃ってキャラが濃すぎる | 326
初めて教師って職業を尊敬しました | 335
セシリアが死んだ!? この人でなし！ | 344

フィクションが現実になっても困るだけ

俺は昔から『女』に興味があった。

いや、こんな言い方だと絶対に誤解されるな。うん。

ここはちゃんと言い直そう。ゴホン。

俺は『女としての人生』に興味がある。

別に子供の頃はそんな事は微塵も考えた事は無かったけど、大人になつてからは激しく意識するようになっていった。

もしも自分が女として生を受けていたらどうなっていたんだろうか？

何かが大きく違つたりするんだろうか？

対人関係は変わるのか？ 恋人はいたりするのか？ 親との関係

は？

考え出したら本当にキリがない。

そんな事ばかりを考えているからだろうか？

俺はキャラメイク系のゲームばかりに手を出すようになっていった。

据え置き、ネットゲ、スマホゲー問わずに。

性別を変更できるゲームをする時は絶対に俺は女になる。

男を選ぶなんて論外で、最初から選択肢にすら入っていない。

P3Pとかスパロボとか、GEもそうだな。あとモンハン。

とことんまで、ゲームの中の俺は女であり続けた。

まあ……普通なら絶対に他人には話したりはしないんだけどな。

え？ そこまで女になりたいのなら性転換手術でもすればいいじゃないか？

アホ言うな。んなことしたって意味無いんだよ。

俺は『女になりたい』んじゃないかって、『生まれた時から女としての人生を歩んでみたかった』んだよ。

つまり、体だけ女になつたって意味無いの。分かりますか？

その前に、バイトだけで辛うじて食いつないでいる俺に、そんな金あるわけないし。

最近のラノベとかによくある『神様転生』とか出来れば一番なんだろうなく、なんちやって。

んな非現実的な事を本気で考え出したらマジで人間終わりだわ。現実とフィクションをごっちゃにしたら、それこそ人生終了のお知らせが入るっつーの。

幾ら、自分が変態だと自覚している俺でも、そこら辺の分別ぐらいはある。

そんな時、俺はバイトのストレスを少しでも解消させる為に、遂に禁断の遊びを実行してしまった。

それが『自分をツインテールの可愛い女の子だと思って、日々の出来事を日記に書いていく』というものだった。

最初はかなりの抵抗感があったが、慣れてしまえばマジで楽しかった。

自分じゃない自分が自分の日々を過ごす内容の日記。

万が一にでも誰かに知られれば、絶対に黒歴史確定だろう。

っーか、その瞬間に俺は躊躇なく自殺するわ。

因みに、日記の中の俺はピンクブロンドの小柄なロリっ子。

無論、スタイルはツルペタだ。だがそれがいい！ 賛同してくれる同志は数多い筈だ。

俺自身は立派な成人だが、成人なのにロリ体型とか冗談抜きで萌える。

合法ロリこそが人類の至宝だ！ ハッキリと断言出来るね！

今日も今日とて、己の妄想を大爆発させながら日記を書き、少し一息入れる為に近所にあるコンビニに煙草でも買いに行こうかと思つて、自分が住んでいるアパートから出ようとすると……

暴走した居眠り運転の2トントラックにぶっ飛ばされて即死した。

・ ・
・ ・
・ ・
・ ・
・ ・

・
・
・

「はあ……………」

ソファーに座りながら、手に持っている手鏡に映っている自分の顔を見る。

もう何度、同じ事を繰り返してきただろうか。

鏡の中には、嘗て俺が妄想したピンク髪のツインテールな美少女が写っている。

自分の体を見降ろすと、胸は見事にペツタンコ。

見る人が見れば、絶対に小学生に間違われるナイスバディ。

……これが、今の俺の姿だ。

トラツクに轢かれて即死した筈の俺なのだが、いつの間にかこんな体が変わっていた。本気で意味不明。なんで俺の妄想が形になっちゃってんの？

割とマジで最初は頭が混乱しまくって頭がクラクラしてた。

しかも、そんな俺の保護者を名乗っているのが、あろうことか、あの『女』なのだ。

「あれあれ〜？ おーちゃんが溜息だなんて、もしかして恋の悩みかな〜？」

「何か言ったか？ タバーネ・ジャスアント」

「タバーネ・ジャスアントっ!? 東さん、いつの間にそんなファンタジーな渾名を付けられたのになっ!?」

機械のウサ耳を付けた天下無敵の天災狂人。

皆大好き(?)な篠ノ之東大先生だ。

今いる場所は、彼女の特性の秘密研究室。

どこにあるかは秘密だ。つーか、俺も知らん。

もうこいつが出た時点でお察しの事だろうと思うが、念の為に言っ

ておこう。

俺が今いるのは『インフィニット・ストラトス』の世界だ。

そう、何かにつけてアンチの対象になりまくる我等がキングオブ鈍感主人公の織斑一夏と、それを取り巻く暴力ヒロインズが登場する、とある界限では大人気(?)なラノベ作品だ。

なんでラノベのキャラが目の前にいて、自分を保護したのか。

保護した理由は本気で不明だが、束が現実にいる事で俺は最も有り得ない仮説を立ててしまった。

俺……マジで転生したんじゃない?

『事実は小説よりも奇なり』ってどつかの偉い人が言ってた気がするけど、こんな事が現実になるだなんて思う奴が一体何処にいる?

少なくとも、俺の周りには一人もいない。ついでに友達も一人もいない。

そーいや、転生直後の俺ってなんか白衣っぽいのを着てたんだよね。

もしかしてアレか? この世界の俺ってなんかの研究所で実験体とかしてたり?

いや、流石にそれは考え過ぎか。漫画とかの見過ぎだな。

「いいかクロエ。あれこそが最もなってはいけない大人の典型だ。真面目な大人になる為にも、よく覚えておけよ」

「わかりました。オリカさん」

「クーちゃんっ!」

俺の隣でチビチビとココアを飲んでいるのは、原作にも登場した束の助手でもある銀髪美少女のクロエ・クロニクル。

内容はもう忘れてしまったけど、何かが原因で視力が悪かったんだよね。

でも、束の謎技術であつという間に視力を取り戻してしまいましたとき。

因みに、俺の方が先にいたせいか、彼女とは不思議と仲がいい。

「そうだ。また後で料理でも教えてやろう」

「いいんですか? ありがとうございますー!」

「この子は天使か。」

マジで俺の嫁にしたいわ。

「どんな料理を教えてくれるんですか？」

「本日のメニューは『ビーフ・ストロガノンドロフ』だ」

「お〜！」

「ちよつとおっ?!? なんか微妙に名前違うくないっ?!? どこぞの元盗賊で後に大魔王になる人っぽい名前が入ってたんですけどっ?!?」

「もしも失敗しても心配するな。その時は、あそこに座つてずっとキーボードを叩いているウサ耳の残飯処理機『タバーネ・ジャスアント』がなんとかしてくれる」

「まさかの無視っ?!? しかも残飯処理機って、もう人間ですらないんですけどっ?!? しかも、まだタバーネ・ジャスアント続いているのっ?!?」
「ご安心ください、タバーネ・ジャスアント様。きっと上手く作ってみせますので……多分」

「なんか最後の方に不安になる一言が聞こえたような気がするんだけどっ?!? っていうか、遂にクーちゃんまで私の事をタバーネって呼んじゃうのっ?!?」

「え……? 違うんですか?」

「違いますけどっ?!?」

また話が変わるけど、俺……いや、仮にも今の俺は美幼女なんだから、地の文の一人称も可愛く『私』ってすべきだな。よし、今からそうしよう。では、改めまして。

私が束に保護されて少しした後で、なんでか私は小学校に行くように言われた。

普通なら色々と思う所があるんだろうが、その時の私は転生直後で精神不安定になっていたせいかな、後の事なんて全く考えずに頷いてしまった。

……半ば強制的にニンジンロケットで送られた時は本気で殺意を覚えたけど。

それで知った事なんけど、私が転生した時期は原作よりもずっと前だった。

だって、小学校にはまだ幼い頃の織斑一夏と篠ノ之箒がいたから。学年は三年生。つまり、箒が転校する一年前だね。

だから、あの二人とは自然と知り合い関係になっていった。どーゆー訳かすっごい近づいてきてたけど。

そこから私は東のラボと小学校を往復する日々が続いた。

その過程で、東経由である人物とも知り合う事になったんだよね。お蔭で、私の中でのイメージが全部崩されてしまったけど。

原作でも割と好きだったんだけどなあ……。

そこからは皆も知ってる通り。

箒が途中で転校して、入れ替わりに鈴が登場。

彼女ともなし崩し的に知り合ってたんだよね。

んで、中学に上がったから色々あつて……。

いや、ここは別に話す必要はないか。

だってさ、もう皆は何があつたのか知ってるだろうし。

違う所を唯一挙げるとするなら『私は付いて行かなかつた』って事ぐらいか。

因みに、今は原作が始まる少し前ぐらい。

多分だけど、もうそろそろ一夏のアホがISを動かすんじゃないのかな……って。

「……なあ……クロエ？」

「なんですか？」

「いつの間に、私はチミに後ろから抱き着かれながら膝の上に座っているかな？」

「オリカさんが可愛かったからです」

「うん。全く答えになってないね。ちゃんと会話のキャッチボールをしようぜ？」

私が読者の皆様に説明をしている間に、クロエの抱き枕になっていた件。

一応言っておくけどさ、こんなナリをしても中身は30超えたオッサンよ？

クロエは勿論、東にも私が転生者である可能性は一言も言っていない

けど、絵面的には相当にヤベーよね？ 私の容姿が美少女じゃなかったら完全アウトだよな？

けど、私の体って本当に小さいよなあ……。

なんだって、転生した直後から全く体が成長してませんからね！

あつはつは！

体だけなら9歳なんだよ！ 一体何処の少女戦記だ！

ハア……合法ロリって見てる分には最高だけど、実際になると相当に大変なんだよな……。

まず、高い所に全く手が届かないし、どれだけ言っても私の年齢が15歳だつて信用されないし。

私さ……普通に子供料金でバスが乗れちゃうんだぜ……？

すっごいお得だけど、同時に空しくもなるんだよな……。

ターニヤちゃん……今になって初めて君の君の苦労が分かった気がするよ……。

そりや、可愛く足をプルプルさせながら背伸びだつてしたくもなるよな。

「おーちゃくん。ちよつとこつちに来て〜」

「ほ〜い」

あつ！ 一番肝心な私の名前をまだ教えてなかった！

私の名前は『ついで菜鞭おりか 緒理香』だ。

めつちや中二臭いと思ったそこの君！ 奇遇だな！ 束にこの名前を付けられた時、全く同じ事を私も思ったぞ！

そうなんだよな。なんでか名無しの権兵衛だった私に束が付けてくれた名前がコレなんだよ。

最初に聞いた時は『ん〜？』つてなったんだけど、段々と慣れていく内にしっくりくるようになったんだよな。

それに……さ。その……中二臭い名前って嫌いじゃないっていうか……分かるでしょ？ 私が言いたい事。分かるよね？ 分かるよねえっ!? つーか分かってっ!? お願いだから！ 後生だから！

「おーちゃくん！ ま〜だ〜？」

「へいへい。今行くよ〜」

ま、そんな訳だから、転生（仮）をした中身オツサンの合法ロリなお話を、どうか見ていつて頂戴な。主に作者の為に。

すき焼きの主演は牛肉、ヒロインはうどん

楽しい楽しいお夕飯の時間帯。

それは私達も例外ではなく、私とクロエと東の三人で食卓を囲んでいる。

今日の夕食は日本人なら誰もが愛する『すき焼き』だ。

クロエも大好きで、前に一回作ってやってから、すっかり虜になっていた。

え？ 前は『ビーフ・ストロガノンドロフ』だと言っていた？

いやいやいや。あんなの単なる冗談に決まってるでしょうに。

失敗する確率が高そうな料理に手を出す程、私は愚かじやないよ？

あんなのはもう少し上達してから挑戦すればいいんだよ。

「ねえ、おーちゃん。ちよつといいかな？」

何気ないタイミミングで話しかけてきた東だが、私にはその意図がすぐに分かった。

「クロエ！ 東が我等の牛肉を狙っているぞ！ 急いで野菜による絶

対防衛線を築くのだ！」

「了解です！」

「え〜っ!? なんで普通に話しかけただけでそうなるのっ!?」

「何を言う……すき焼きとは一種の闘争……！ 少しでも油断した者から至高の牛肉を食べる機会を失い、悲しみに暮れながら野菜やキノコ類を食べる羽目となるのだ……！」

「例え東さまでも、こればかりは絶対に譲れません……！」

「クーちゃんも、段々とおーちゃんに染まってきたよね……！」

「最高の褒め言葉です」

モキュモキュモキュ……何を話してるんだ二人して。

けどまあ、この肉だって東の金で買った物なんだし、少しは食べさせてもいいかな？

「ほれ」

「え？ いいの……お肉」

「どんなに変人でも、一応は私達の保護者な訳だしね……。私達ばか

りで独占するのはよくないだろ」

「遂におーちゃんが私にデレたっ!？」

「デ…デレてなんかないし!? 私は単純に(肉体年齢が)年上の人には敬意を払うべきだと思っただけだ! 別に束の事を心配してしたわけじゃないんだからね!」

「まるで教科書に書いてあるかのようなツンデレだー!」

うぐ……! 何も考えずに言ってしまった結果、無自覚の内に私にツンデレ属性が追加されてしまった……! 一生の不覚……!

「わ…私にもデレてください! 緒理香さあ〜ん!」

「クーちゃんにはいつもデレてるでしょ……!」

ワイワイしながらも鍋の中身は着実に減っていき、十数分後には殆ど空っぽに。

「ふい〜…食べたね〜」

「そうですね〜」

「ククク……! 何を終わった気でいるんだ? 二人共……!」

「え?」

「まだ『シメ』が残っているじゃないか……!」

私が冷蔵庫から取り出してきた物、それは……。

「冷凍……」

「うどん……!」

「その通り。すき焼きの締めはうどんと相場が決まってるんだよ!」

まだ残っている汁の中にうどんを三玉投入。

一人一玉の計算で、そのままガスコンロの火を着ける。

「ゴ…ゴクリ……!」

グツグツと煮込まれていくうどん。

野菜の出汁がたっぷりと染み込んだすき焼きの残り汁と見事に絡み合い、美味しそうな匂いが私達の鼻孔を刺激する。

焦げ付かないように菜箸で回して……つと。

うどんを煮込み始めてから数分後。

「「おお〜」」

締めのすき焼きうどんが完成!

やばい……見てるだけで涎が零れ落ちそうだ……！

「いただきます!!」

各々にうどんを取って、新しく出した卵の中へと入れる。
軽く混ぜてからパクリ!

「美味しい♡」

すき焼きとうどんの組み合わせ……本気で最強だわ……♡

最近鍋の締め色んな物を入れる事が多くなってらしいが、
やっぱりうどんこそ最強の締めだよな……♡

「お腹一杯だと思ってたけど……」

「まだまだ全然いけます!」

「私も!」

結局、三玉あったうどんは、あつという間に私達の胃袋の中へと消えていったのでした。

・
・
・
・
・
・
・

「「ふは♡」」

食後のお茶を味わいながら、私達はホッと一息。

鍋料理って、体だけじゃなくて心も温めてくれるんだなあ……。

「さっきの話の続きんだけどさ」

「さっきの?」

「そう。すき焼き食べてる時に私が話しかけたじゃん」

「……そんな事あったっけ?」

「お肉に夢中で覚えてません」

「私の話ってお肉以下なのっ!?!」

すき焼きの牛肉に勝るものなんてこの世にあるわけないだろ。何

言っただ。

「結構、重要な話なんだけどなあ〜」

「あつそ。で、なんなのよ」

「うう……おーちゃんのデレ期が早くも終わった……」

「こいつは真面目に話をする気があるのか無いのか、どっちなんだい！

「まあいいや……いつもの事だし。それよりもさ……」

「ん〜？」

「……………IS学園に…行ってみない？」

あ〜…はいはい。そーゆーことね。

なんか遠慮がちに言ってるけど、要は『原作介入』しろってことね。

転生（仮）をしたって事は、私も一応は『オリ主』になるわけだし？ 原作介入はある意味でお約束なイベントといえますか。

「別にいいよ」

「そうだよね〜。やっぱり駄目だよね〜……って、いいのっ!? 本当につ!?」

「うん。どうせ、仮にここで断っても、何らかの方法で強制的にIS学園に連行されそうな予感はあるし」

「ソ…ソソソコトハナイヨ？」

「目を逸らすな」

冷や汗を掻きながら視線を逸らした時点で『そうです』って言うてるようなものじゃないか。

ほんと、変なところでポンコツだよな。

「ってことは、受験とかしなくちゃいけないのか」

「いや、そんな事はしなくてもいいよ」

「なんで？」

「私からの推薦って事にしてあるから♡」

「うわあ……」

自分の権力フル活用じゃないですかヤダー。

ISの生みの親からの推薦ともなれば、絶対に断るわけにはいかないでしょように。

お偉方は今頃、腹を抱えて胃を痛くしてるんじゃないのか？
実際、私の隣にいるクロエもドン引きしてる。

「クーちゃんは どうする？ 一緒に行く？」

「そうですね……本当は緒理香さんと一緒に行きたいですが、もしも東さまを一人にしたら何を仕出かすかわからないので、ブレーキ役としてここに残ります」

「それがいいかもね」

「え？ 私ってばそんなにも危ないキャラだと思われてる？」

「それ以外に何があるの？」

「シンクロして言われたっ!？」

こればかりは全く擁護出来ないぞ……。

原作でも暴れっぷりを知っている身としては、クロエが傍でブレーキになってくれるだけで安心する。

「そういや、中学の時の進路相談の時も適当に誤魔化してたっけ……」

「どんな風に？」

「冗談半分で『高校には行かずに、そのまま東大受験します』って言うたら、真面目な顔をされて本気で応援された。なんで？」

「さ……さあ……う？」

また目を逸らす。なんなんだってんだよ。

(おーちゃんは自分がどれだけハイスペックなのか全く自覚してないからなあ……)

でも、高校受験は出来ないのか。なんか残念。

前世の知恵を活かして、全力全開の受験をしてIS学園の受験の歴史にとんでもない記録でも残してやろうと思ってたのに。

「教科書とかはどうすればいいんだろ？」

「その辺は向こうに行けば普通に用意して貰えるでしょ？」

「それもそっか。んじや制服とかは……」

「もうあるよー!」

「なんでっ!？」

テーブルの下から東がいきなりSSサイズと思われるIS学園の制服を取り出した。

どうしてあるの的なツッコみはするだけ無駄だからしない。

(ここままでして私をIS学園に向かわせたいつて事は、もうそろそろ一夏の奴がISを動かすのか……？ いや、それもあるだろうけど、等の事も心配なのか……)

なんだかんだ言っても、妹想いな姉である事には違いないんだよな。

その気持ちが伝わる日は非常に遠いけど。

(ん？ ちょっと待てよ？ IS学園って確か『あの人』がいたよな……？ それはちょっと拙いのでは？ 地味に貞操の危機なのでは？)

い……いや、流石のあの人でも、大衆の面前で変な事はしないだろう。根は真面目な人だし、弟の前なんだから、きつと大丈夫さ………多分。

・
・
・
・
・
・
・

ベッドの中でクロエと並んで静かに寝息を立てている緒理香を見つめる束。

密かに二人の寝室へと忍び込み、その寝顔を眺めているのだ。

「普段はツンツンしてるけど、寝顔は本当に天使だよね♡」

いつもはツインテールに結んでいる髪を解いて、ストレートにしている緒理香は、ほんの少しだけ大人びて見える。ほんの少しだけ。

「さっきは言いそびれちゃったんだけど……実はIS学園の入学式って明後日なんだよね。だくらくらく……」

束は、ベッドの傍に音も無く自分お手製のニンジンロケットを量子

化から解除した。

「寝ている間にIS学園まで行ってもらいましょ。あそこにはちーちゃんもいるし、大丈夫でしょ」

「何がどう『大丈夫』なのか詳しく教えて欲しいが、それもまた聞くだけ無駄なので割愛しよう。」

「うくん…むにやむにや…」

「あ。起きちやっただかな?」

「束…こつちに來ちや駄目だ…危険だから…」

「寢言か…。でも、夢の中とは言え、私の事を心配してくれるだなんて…♡」

「なんて思っただのか?」

「フフフ…引っかかったな、愚かな女め! どうだ! 私特製の地獄トラップは! うわあ…臭っ! くっさあっ! 束菌バリア! えーんがちよー!」

「夢の中まで酷過ぎないっ!」

「ふひひひ…そのまま溶けてしまえ…って、なにいつ!? ジョグレス進化だとおっ!」

「一体どんな夢をみてるのっ!? 本気で気になりますけどおっ!」

「もうダメだクロエ…束は完全な化け物に…アイツの意識がある内に、この超強力な地球破壊爆弾で跡形も無く消滅させるんだ!」

「容赦無さ過ぎなんですけどっ!」

「分かりました、緒理香さん…むにやむにや…」

「クーちゃんまでっ!? 寢言で会話してるっ!」

まさか、寢言で精神的にダメージを受けるとは思っていなかったのか、さつきよりもなんだかげっそりとしている。

「やっぱり、おーちゃんは凄いね…色んな意味で。でも、これなら安心かな」

あれだけハッキリとした寢言を言っていたにも関わらず、未だに爆睡している緒理香をそっと抱きかかえて、制服や携帯などの必需品と一緒に彼女の体をロケットの中へと横たわした。

「それと、これもね」

緒理香の右手首に白いガントレットらしき物を着けてから、その頭をそつと撫でた。

「おーちゃんの専用機。きつと気に入ると思うよ」

ロケットのハッチを閉じてから、研究所の壁に幾つもある緊急脱出路の一つを開け、それに向かってロケットの先端を向けた。

「それじゃあ……行つてらっしゃい。私の大切な……もう一人の妹……」

東がポケットに忍ばせておいたスイッチを押すと、ロケットは勢いよく空の彼方へと飛んで行つた。

ロケットが向かった場所はIS学園。

そこで緒理香を待ち受けているものとは……。

エツチイのはイケナイと思います！

人肌のような温もりに包まれて、私は耳に聞こえてきた奇妙な声で目を覚ます。

といつても、まだ瞼は開けてないんだけど。
もう少しだけ、この心地のいい微睡に身を委ねていたい。

「ハア〜…ハア〜…ハア〜…」

え？　なんでこんなにも息が荒いの？　なんかくすぐったいんですけど。

「大丈夫…：大丈夫だから…：優しくするから…：」

何が『大丈夫』なわけ？　優しくするって何っ!?

「先っぽ…：先っぽだけだから…：」

なんか物凄く不安になる言葉が聞こえてきたんですけどっ!?
マジで何なのよっ!?!　この変にリアルな幻聴は！

「もう見ているだけでは我慢出来ん！　緒理香！　愛してるぞ〜!」
って、よくよく考えたら、この声って『あの人』のじゃんか！

ここで本格的に目を覚まさないで、大切な物を失いそうな気がする
!

意を決してそつと目を開けると、目の前にあったのは…。

「遂に…：遂に緒理香と私が結ばれる瞬間が…：!」

顔を真っ赤にしてイヤらしい顔をしながら迫ってきている千冬さんがいた。

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!　貞操の喪失の危

機
!!!」

「あっ!?!　緒理香っ!?!」

形振り構っている場合じゃないので、必死にベッドの上から降りる。

っーか、なんでいきなり千冬さんに睡眠姦されそうになってるんだよっ!?!

ああっ!?!　よく見たら私ってば裸になってるじゃんっ！　なん
でえっ!?!

咄嗟にベッドのシーツを体に巻きつけてから部屋のドアをを目指す。

「ま…待ってくれ！ 緒理香——！！」

誰が待つかボゲエエエエエ！！

もう、何が何やらさっぱり分からんぞ！

一体全体、ここはどこで私はどうなっちゃってるんだっ？

「誰か助けて！ ヘルプミ——！！」

「ええええええええっ!?!」

扉を開けて廊下みたいなお場所に飛び出すと、そこには緑の髪のお眼鏡
ポイン美女が！

あれは間違いない！ 原作でも数少ない癒し系キャラの山田真耶
先生！

って事は、ここはIS学園っ!?!
どうして目覚めると束のラボからIS学園に瞬間移動してるんだ
よっ!?!

「逃がすかあああああああああつ!!!」

「追ってきたあああああああつ!?!」

「織斑先生っ!?!」

流石に誰かに見られる可能性は考慮したのか、ジャージ姿になって
私の事を追ってきた。

因みに、さっきまでの千冬さんは私と同じ裸でした。

妄想をした画面の前の男共、気持ちちは分かる。

「その人、お助け〜!!」

「ちよ…ちよっつとっ!?!」

急いで山田先生の後ろに回って、彼女を盾にするようにしてから安
全を確保する。

千冬さんも山田先生を力づくで排除して私を捕まえようなんて考
えは無いようで、さっきから出るに連れられないような状態となつて
いた。

「そこをどけ真耶！ 例えお前でも、私と緒理香の逢瀬の邪魔をする
のならば容赦せんぞ！」

「そ…そんな事を言われても〜!?!」

「お願いだから私を助けて！ このままじゃ、本気で処女をあの人に奪われてしまうー！」

「しよ…処女っ!？」

「いいじゃないか！ 私に処女をくれても！」

「絶対に断る!! 私が将来、玉の輿に乗る為の最大最強の武器になるんだから!!」

「それなら私と結婚しよう!! それなりに金には余裕があるぞ！」

「普通なら少しは心が揺らぎそうな提案だけど、そんな風に欲望丸出しの顔で言われても微塵も心は動かんわ!!」

「なんだとおおおおおっ!!?」

「ずつと前から疑問だったけど、どうしてこの人は私にこうも拘るんだよっ!？」

「こんなチンチクリンな体の何処がいいんだってんだっ!？」

「なんか…自分で言っつて落ち込んできた…。」

「私だっつてさ…一応は皆と同じように歳は重ねてきたんだよ？」

「それなのに、どうして体だけが一向に成長しないのさ…。」

「私だっつて、ブラジャーとか着けてみたいんだよ!!」

「未だにブラいらすの生活とか嫌なんだよ！」

「あのクロエだっつて普通にブラを着け始めてるのに！」

「と…兎に角！ まずは二人共落ち着いてください!! 冷静になっつて話をしましょう!!」

山田先生の鶴の一声により、私達は少しだけ我に返る事が出来た。

「うう…こんなお姉ちゃんがマジで欲しい…。」

・
・
・
・
・
・
・

IS学園の校舎内にある食堂。

今はまだ春休みの期間なので、ここにいるのは私と千冬さんと山田先生を除けば、食堂のおばちゃん達だけだ。

「落ち着きましたか？」

「あ……ああ……」

「はい……」

原作でも余りお見かけしない、プルプリと怒った山田先生を前に、私達は完全に冷静さを取り戻していた。

流石にあのままじゃ拙いので、私は千冬さんに脱がされたと思われる、自分が着ていたパジャマ(束お手製のウサ耳フード付きパジャマ)を着ている。

「あの…私から色々聞いてもいいですかね？」

「そうですね。私達が質問するよりも、そっちの方が効率がいいでしょうし」

「なんだ？ 式場の予約なら私に任せてくれれば……」

「織斑先生？」

「……すまん」

お願いだから、少しだけ真面目モードになつてよ。

原作での凛々しい織斑千冬はどこに行っちゃったのさ？

「まず、ここってIS学園ですよね？」

「そうですね」

「……なんで私はここにいますかね？ 私の記憶が正しければ、昨日の夜までは自分の部屋のベッドの上で普通に寝ていた筈なんですけど……」

「それには私から答えよう」

「織斑先生」

おっ？ ようやく真面目な『織斑先生』の復活ですか？

「緒理香がどうして自分の部屋から出てしまったのかの経緯は知らんが、IS学園にいる理由なら話せるぞ」

「その理由って？」

「あれは、私は日課である早朝ランニングを学園の近くにある海岸で

している時の事だった」

あ、ここから回想シーンに入るのね？ え？ 違う？ あっそう……。

「走っている私の前方に、なにやらおかしな物体が流れていていた」

「それは……」

「ニンジン型の個人用小型ロケットだ」

「個人用の小型ロケットっ!? そんな代物があるんですかっ!?」

「ある……というよりは、作っただろうな。あんなデザインをする製作者は一人しか思いつかんが」

ニンジン型のロケット……それは……つまり……。

「や……」

「や?」

「やりやがったなあああ……! あのエロウサギがあああああ……!!」

「ひっ!?」

私が予想していた事を本気で実行しやがるとは……!」

次に会った時、原作通りに行けば臨海学校の時だろうけど、覚悟しとけよゴラアア……!」

「その様子だと、心当たりがあるようだな」

「ええ……今回の事は間違いなく、ウチの保護者の仕業ですよ……!」

「お前の保護者という……束か」

「えっ!? もしかして、篠ノ之束博士ですかっ!?」

「もしかしなくても、その篠ノ之束ですよ」

はあ……本当に碌な事を思い付かない奴なんだから……。

こんな事をしたって何の意味も無いのに、恐らくは『面白そうだから』なんて適当な理由でしたに違いない。

「私が寝ている間にロケットに乗せて、そのままここに強制連行したんでしょうね」

「アイツなら普通にやりそうだな……」

「でしょ?」

千冬さんも束の友人であるが故に、私の気持ちは痛いほど理解出来

る筈。

それなのに……どうしてここまでキャラ崩壊してるんだよ……。

「で、さっきの話の続きだが」

「あ、はい」

「海岸で、ロケットを発見し、ハッチを開けて中を覗いてみたら、そこにはぐっすりと寝ている緒理香がいた訳だ」

「それで、そのまま私の自分の部屋に持って帰ったと？」

「だって！ 仕方がないじゃないか！ 中で寝ている緒理香の寝顔が余りにも可愛くてプリティーで欲情的で！ 思わず犯したくなつてしまったんだから!!」

「思わずで人を睡眠姦しようとしてせんでください」

「というか、普通に犯罪ですよ……？」

常識人がここにイタ——!!

最悪、玉の輿出来なかつたら、私は山田先生のお嫁さんになる！

菜鞭緒理香から山田緒理香になる!!

「それで、現在に至るって訳ですか……」

「そうなるな。フツ……緒理香の魅力に負けて我を見失うとは、まだ私も修行が足りんな……。いや、それだけ緒理香が可愛いという証拠でもあるか……？」

「まだどうか」

もう勝手に言ってるよ。妄想の中だけなら好きにしていいからや。

「けど、どうして篠ノ之博士はそんな事を……？」

「さあ？ あいつの頭の中を理解出来る人間なんて、この世にはどこにもいませんよ」

「はあ……」

寧ろ、理解をしてしまったら、ある意味で終わりだ。

「つーか、割と普通に私の事を受け入れてますけど、なんでなんですか？」

「貴女の事は予め聞いていましたから。篠ノ之博士から直々に推薦された特待生の『菜鞭緒理香』さん」

「そこまで驚かなくても……グスン」

他の人はともかく、山田先生に驚かれるのは地味に凹む。

「ご……ごめんなさい！　まさか、こんな小さな子が他の子達と同じ15歳とは思わなくて……あ」

「もういいです……」

どう足掻いても、小学生扱いされる運命なのね……シクシク。

「しかも、とても可愛い!!　私なんて一目で虜になってしまった程だ！」

「ソーデシタネ」

千冬さんと初めて会った日の事は今でも鮮明に覚えてるよ。

っていうか、忘れたくても忘れられない。

東に連れられる形で織斑家に行つて、そこでこの人に会つたんだよな。

あの時は確か、一夏の奴はどこかに出かけていて不在だったっけ。

あの時は確か、私の事を紹介して、その後に一夏達と同じ小学校に通わせる旨を伝えたんだよな。

でも、この人はそんな話を全部スルーして……。

（私の事をいきなり抱きかかえて急に『この子は私の妹にする！』とか抜かしやがったんだよな……）

あの時、初めて東が本気で呆ける顔を見たっけか。

すっげーリアクションだったよな。

「一応、聞いておきますけど、まだ入学式じゃないですよね？」

「そうですよ。入学式は明日です」

「やつぱり……」

ここに来るまでの間に一人も生徒を見かけなかったのは、そのせいだったのか。

にしても、入学式前日にロケット運送するって……。

（大抵のオリ主は入学式の日によく『一人遅れてやって来た』的な事を言われて来てるのに……）

斬新と言えば斬新だけど、される方は溜まったもんじゃないな。

なんせ、夢から覚めたら見知らぬ場所で見知っている人物に犯され

そうになってたんだし。

いや、知ってはいるけど、実際には来た事無いし。

「あれ？ って事は……」

「最低でも一日はここで過ごさないと事になるな。なに、心配するな。私の部屋で一日かけてタツプリと愛を育もうじゃないか」

「死んでも断ります。私が入る予定となっている寮の部屋とか無いんですか？」

「有りますよ。事情を話せば先に入寮する事は可能だと思います」

「それじゃ、それでお願ひします」

「そ…そんな……」

落ち込んだ顔を見せられても私の心は変わりませんからね？

「ロケツトの中には私の体以外に何かありませんでした？」

「グス…：緒理香のサイズに合わせたと思われる学園の制服とスマホしかなかったな……」

「私の私物はそれだけか……」

まあ、スマホがあるだけまだマシか。

私服の類や下着は後々で買えばいいし、勉強道具は…：今日中に買わないとダメだよな？ ココの購買部に売ってある…：に決まってるか。

なんか、束の掌の上で踊らされてる感が半端ないんですけど。

今更ながら、物凄くこの先の事が心配になってきた……。

ちゃんと私は原作のイベントを乗り越えられるんだろうか……。

そげなアホなっ!?

前回のあらすじ。

私、主人公（笑）の葉鞭緒理香！

前回、ウチのキチガイ科学者であり保護者でもある束によって、私は寝ている間にニンジンロケットに乗せられてIS学園に飛ばされてしまったの！ヘテペロ♡

そして、幼馴染の姉である千冬さんにレイプされそうになったのよ！

急いで部屋から脱出して、山田先生に助けて貰って、その後に食堂で事情を話すと同時に状況確認をして、私は明日ある入学式に備えて、先に学生寮へと入る事になったのよ！

…………ごめんなさい。流石にもう限界だわ。マジで勘弁して、作者様。

・
・
・
・
・
・
・

用意された部屋に入っつてのんびりしつつ、私は改めて現在の状況を確認する。

まず、私は束によつてIS学園に向かわされて、そして千冬さん達と遭遇、その後先に入室をして今に至る……と。

現在の所持品は……。

「私の着ているパジャマと下着。さつき、千冬さんがしれつと持ってきていたロケットのシートの下に格納された数着分の私服と下着と財布。最低限の筆記用具に自分のスマホ。それから、私用にサイズ

を合わせた学園の制服。そして……」

机の上に分厚い本が沢山重ねられている。

普通の感性なら、見ているだけでゲンナリするだろう。

私も、今までは文字でしか知らなかった物体を直に見せられて、かなり気が重くなっている。

「山田先生に貰った教科書多数とノート……か。これ、ちゃんと持っていていけるのかな……」

重量に負けて倒れたりしないだろうな……？

「教科書と一緒に貰ったこの鞆。この体には少し大きいよな……」

学園の指定鞆自体は私もよく知っている高校の革製の鞆だ。

けど、これをこの体で手に持つていくのはかなり困難になる。

どうにかして打開策を……あれ？

「この鞆、よく見たら外付けのベルトで背負えるように出来るのか……」

この辺も変わりないんだな。

でも、私的には朗報だ。これなら私でも重い教科書を入れて持つていくことが出来る。

「で、一番の問題はコレ……だよな」

いつの間にか私の腕に装着されていた、どこかで見たことがあるような腕輪……というか、ガントレット……なのかな？

兎に角、私はこんな物を身に着けた覚えは全く無い。

とすれば、間違いなく束が私を学園に送る際に装着した代物に違いない。

「ISの待機形態……なんだよね、コレ……。さっきは私もテンパってて言うのを忘れてたけど、明日にでもちゃんとコレの事を報告しなくちゃいけないよな」

報告、連絡、相談はどんな時も非常に大切な事なのだ。

皆も絶対に忘れるなよな！

「報告する前に自分で調べたいけど、この部屋にはパソコンの類は無いし、私のスマホに繋げたくてもケーブルとか持ってきてないし……」

見事な八方塞。

流石にこればかりはどうしようもない。

「まだ朝だし、なぐにをして過ごせばいいのかしらん？」

結局、この日は一日中、ベッドに寝転びながらスマホを弄っていたり、適当に昼寝をしたり、備え付けのテレビを見てたりしてた。

食事に関しては、まだ私は入学したわけじゃないから学生用の食堂を使うのは拙いんじゃないかと言う事で、仕方なく教職員用の食堂を使わせて貰った。

その際、色んな教員さん達にもみくちやにされかけたのは言うまでもない。

なんとか山田先生に助けて貰って難を逃れたけど、その代わりに千冬さんが山田先生に対して対抗意識をメラメラと燃やしていた。

にしても、前世以来の一人部屋だけど、一人で過ごす部屋ってこんなにも広くて寂しんだな……。

・
・
・
・
・
・

何事も無く次の日を朝を迎えられた。

なんでそんなにも警戒するのかわかって？

初日の事をもう忘れたのかい……？

部屋の鍵はバツチリと閉めてから就寝したのぜい。

コンコン

ベッドから起きて歯を磨き、制服を着ながら出かける準備を整えていると、急に部屋の扉をノックする音が聞こえてきた。

「恐らく、山田先生が迎えに来てくれてたに違いない。」

「は〜い。もう少しだけお待ちを〜」

櫛で髪を梳いてから纏めて、真っ赤なりボンでツインテールに結ぶ。

何があっても、これだけは絶対に譲れない。

ツインテールこそが今の私の存在意義レゾン・デートルなのだから！

最後に、戸締り&持ち物を指差し呼称で再確認！

「窓よし！ ガスよし！ テレビよし！ カーテンよし！ そして、

髪よし！ 鞆よし！ 携帯&財布よし！ トドメに……」

自分の右腕に目線をやる。

『び』で始まって『き』で終わりそうな物体があるが、今だけはまだ深く気にしない事にする。

「コレもよし。お待たせしました〜」

鞆を背負ってから鍵を開け、扉を開けた先に待っていたのは……。

「おはよう緒理香！ 私達二人の新たな門出に相応しい朝だな！」

ある意味で私の天敵である千冬さんでした。

スーツをビシッ！ つと着こなしている姿は純粹にカッコいいのに、その言動が全てを台無しにしている。

俗に言う『残念美人』とは、この人の為に生まれた言葉だと思う。

「………すいません。人違いでした」

「緒理香っ!?!」

被害を受ける前に急いで扉を閉めようとすると、脚を割り込ませてきやがった！

クソツ……！ 相変わらず、身体能力はチートなんだから！

「恐らくは真耶が来るのを期待していたんだろうが、アイツは入学式の最終準備に追われてココには来てないぞ」

「なん………だと………!」

そ…そんな……私の癒しである山田先生が来てないなんて……。

「それにしても、学園の制服を着た緒理香の可愛さは反則級だな！

昨日は見れなかったツインテールと相まって、素晴らしいの一言に尽きるぞ！ それでこそ私の嫁だな！」

「誰がアンタの嫁ですか………!」

うぎぎぎ……！ 私の小っちゃい体じゃ完全にパワー負けする……

「フーン！」

「うにやつ!?!」

千冬さんが一瞬だけ力を緩めて、次の瞬間に全力で扉を開いた事で私の体が軽く飛ばされるが、倒れる前に千冬さんにキャッチされた。「やっと捕まえたぞ。さあ、一緒に朝食を食べた後に私が入学式の会場まで案内してやろう」

「い……いや、会場案内はともかく、朝ご飯ぐらいは一人で食べれる……」

「初日から遅刻をするわけにはいかんからな！ さあ行くぞ！」

「ちよつとおつ!?! なんてお姫様抱っこするんですかねっ!?! 一人で歩いて行けるんですけどっ!?! っ！か、普通に恥ずかしいから止めてく!!」

その後、千冬さんとずっとくっついたままの状態で朝ご飯を食べる羽目になりましたとき。

トホホ……チートには敵わないよ。

・
・
・
・
・
・
・

原作でも入学式の描写は一切されてなかったから、どんな風なのかと思っただけ、割と普通の、私や皆が良く知っている入学式だった。

違う所があるとすれば、原作キャラいる事か。

どうやらというか、案の定と言うか、私は一年一組に配属されるら

しく、私と同じ列には箒やセシリア・オルコットの姿が見えた。
向こうは私の事には全く気が付いていなかったみたいだけど。
全てはこの体が小さいせいだよな……。

少し離れた場所には更識簪の姿も確認できた。

多分、彼女がいる場所こそが4組の列なんだろう。

ここまではいい。全く問題は無い……けど……。

とんでもない問題がここに来て発生していた。

(なんで……どうして……一夏の姿がどこにも見当たらない?)

アイツは一種の特異点だ。

女子の集団の中に男が一人紛れていれば、それだけで相当に目立つ筈。

それなのに、そんな風な様子が全く無いどころか、この場にいる気配すらない。

なんで……どうして? そんな訳は無いのに。

この場には一夏がいないとおかしいのに!

(いや……ちよい待てよ? 確か私、昨日は部屋のテレビでニュース

を見てたよな? 見てたけど……)

一夏に関するニュースが一切無かった……!

(なにコレ……猛烈に嫌な予感がするのは気のせい……だよね……?)

冷や汗を流しながら俯いていた私は、壇上に更識楯無が上がっていた事にも気が付かず、そのまま入学式を終えた。

・
・
・
・
・
・
・

入学式が終わると、そのまま自分達の教室まで行ってから、各々の顔合わせの後に授業が始まる。

私の記憶が正しければ、IS学園の授業数はかなり多くて、入学式の日から飛ばしていかないと間に合わないらしい。エリートつてのも考えものだな。

で、私も皆と同じように教室に来てるんだけど……。

「ねえ……あの子、どう見ても小学生だよね？」

「まさか……飛び級ってやつ？」

「え？ あれって実際にあるの？」

「いや、分かんないけど……」

こうして、このロリボデイのお蔭で見事に目立っております。

あの子達の気持ちも分かるんだけどな。

私だって、向こうの立場になれば同じようにひそひそ話をしていたに違いない。

そんな中でも、最も私の事を見ていたのは、窓際が一番前の席にいる筈だった。

(そんなにも驚いた顔で見なくてもいいだろ？ 言いたい事があるなら、こっちきてから話そうぜ？)

いや、そこまで言うんならコツチから行けよって話ですよ。はい。

でもね、私だってこの視線のレーザーマシンガンを浴びながら席を立つ度胸は無いんですよ。ヘタレなロリっ子でごめんね？

(列の一番後ろにいるセシリアも、なんかこつちを凝視してるんですけど……)

あの子に関しては、マジでなんで私の事を見るの？

イギリスでは私みたいなロリータ体系の同年代の女子がいないのかな？

いや、あの発育の良さから考えていないんだろうな……クソ……！
だけどね、それ以上に問題視している事が私にはあるのよね。それは……。

(どうして私の席が原作の一夏の席と同じ位置にあるのかしらねっ

!?)

教壇の目の前にある席。

ここは本来なら皆大好き織斑一夏が座る席でしょうっ!?
なのに、どうして私が座ってるのっ!?

それと、いつになったら一夏は教室にやって来るんだよっ!?
もうすぐ最初のHRが始まっちゃうぞ!

「皆さん、ちゃんと揃ってますね。それじゃ、早速一学期最初のSH
Rを始めますよ」

ほら〜! 言ってる傍から来ちやつた〜!

山田先生が教室にやってきたし〜!

「私は山田真耶、この一組の副担任を務めています。これから一年間、
よろしくお願いしますね」

「お願いしま〜す」

……あれ? なんで誰も返事しないの?

私だけが返事してしまったせいで、おかしな空気になったじゃない
のよ〜!

「き…気にしない方がいいですよ?」

「うう……ありがとうございます。菜鞭さん……」

私の事は嫌いになっても、山田先生の事だけは嫌いにならないでく
ださい!

何があっても、私だけは山田先生の味方ですからね!

「そ…それじゃあ、出席番号順に自己紹介をしていってください。ま
ずは……」

入学式直後のお約束。皆の自己紹介が始まった。

ある意味、ここで全てが決すると言っても過言じゃない。いやマジ
で。

(結局、最後まで一夏はやって来なかったな……。もしかして、どこぞ
のオリ主みたいに千冬さんに連れられて遅れてやって来るパターン
か?)

その可能性も否定出来ないな。

この場面だけでも無数のシチュエーションがあるんだから。

「……鞭さん？ 聞こえてますか？ 菜鞭さくん？」

「ふえっ！」

考え事をしている間に、私の番になっていたらしい。

山田先生が心配そうにこっちの顔を覗いてる。

けど、順番回ってくるの早くない？

『あ』から『ら』って、端から端じゃん。絶対に私が一番最後でしょ。

それなのにもうって、どれだけ薄い自己紹介してんだよ。

「え……えっと……」

ヤヴァイ。全く内容を考えてきてなかった。

ここは適当に言っておくか……。

「ら……菜鞭緒理香でしゅー！」

か…噛んだ！ よりにもよって、この場面で！

私は一体何処の陰キャだったの！

「よ…よろしくお願いしましゅ…」

また噛んだしく！ 今日だけで何回噛めば気が済むんだ私はく！

「えっと……それだけですk……」

「ううう……（泣）」

「あ。もう座っても大丈夫ですよ？」

「どうも……」

よかった！ 流石は私が尊敬する山田先生だ！

私の発する『これ以上は限界だ』オーラを感じ取ってくれたんだな

！

私の自己紹介が終わった直後、いきなり教室の扉が開かれて一人の女性が入ってくる。

もう言わなくても分かるよね？ そうだよ。我等が担任の織斑千

冬大先生だよ。

「なんだ。もう緒理香の自己紹介は終わってしまったのか。残念だな」

「織斑先生。会議はもう終わられたんですか？」

「まあな。一刻も早く緒理香に会いたくて早歩きで来てしまった」

走ってはいないんだ……。

地味に校則を守ってるのがなんとも『らしい』人だ。

あ、そうだ！ この人なら何か知ってるかもしれない！

「あ……あの……織斑先生？」

「なんだ緒理香。別に学校だからって他人行儀にしなくてもいいんだぞ？ 私とお前の仲じやないか。遠慮無く、いつも通りに『千冬さん』と呼んでくれて構わんぞ？」

「いや、流石にそれは……。」

私と山田先生がハモった。

これは地味に嬉しい。

「一夏はまだ来てないんですか？」

「は？ なんでココで一夏の名前が出てくる？」

「いやだって、一夏がISを動かして、それでここに入学したんじや……。」

「何を言ってるんだ？」

次の瞬間、千冬さんの口から放たれた言葉は、私の心を吹き飛ばすには充分すぎる威力を持っていた。

「男の一夏がISを動かせる訳がないだろう？」

あいえすのほうそくがみだれる！

束のラボ。

モニターの前で緒理香の様子を窺っていた束は、パリパリと煎餅を齧りながら静かに笑っていた。

「あく…成る程ね。おーちゃんは、いつくんがISを動かせると思っただんだ」

クロエは台所にて茶を淹れている為、この場にはいない。

だからこそ、彼女は普段ならば決して言えない事を言える。

「おーちゃん。それは大きな『勘違い』だよ。そもそもね、いつくんがISを動かす必要はどこにも無いんだよ？ だって……」

椅子に体を預けながら、ゴクリと煎餅を飲み込む。

『主人公』はもうソコにいるんだから」

・
・
・
・
・
・

「は……へ？」

一瞬、本気で思考が停止した。

千冬さんの言っている事が分からなかった。

「別に女尊男卑を助長する訳ではないが、ISを動かせるのは女だけというのは揺るがせない事実だぞ？」

「そ…それは…そうだけど……」

でも、一夏だけは『特別』なんでしょ？

一夏は織斑計画の被験体の一人で、千冬さんの『弟』だからISを動かせて……え？

「といっても、それに近い事はしようとしたみたいだがな」
「え？」

「一夏は藍越学園を受験して、見事に合格はしたんだがな……」
「なんかあったんですか？」

「あいつめ、道に迷って受験会場を間違えたんだ。併設していたIS学園の試験会場に迷い込んで、そこに運び込まれていた受験用のISに興味本位で触れてしまったらしい」

「それじゃあ……」

「だが、当然のように動かせるわけも無く、そのままISの装甲に自分の指紋だけを残して係に見つかって、怒られながらも元の会場に戻っていったらしい」

「ウソ……」

一夏は……ISを動かさなかったんじゃないやなくて、動かせなかった……!?

「それにしても……」
「ん？」

なんか千冬さんの様子がおかしい？

顔を押えてフラフラしてるけど……。

「よもや……この期に及んで緒理香に『ドジっ子属性』が付加されようとは……！ お前はどこまで私を萌えさせれば気が済むんだ……？」

「アナタは何を言ってるの……？」

私と同じように、他の皆も本気で困惑してるんですけど。

特に山田先生とかめっちゃオロオロしてますよ？

「兎に角、まずは自己紹介とかしたらどうですかね？」

「うむ…そうだな。緒理香にそう言われたら、しない訳にはいかないな」

急にまたキリッ！ とした表情に戻る千冬さんだけど、原作みたいにキヤーキヤー言われる事は無かった。

多分、教室に入って開口一番にあんな事を言い出したんだから、高嶺の花的な存在じゃ無くなったんだろうね。

それでも、過去の栄光とかの影響でまだ尊敬はされてるんだろう

ね。

ここからは原作通りの展開になったけど、この教室中に大きな悲鳴があがる事は無く、なんとも大人しいものだった。

念の為に密かに持ち込んだイヤホンを耳に付けて最大音量で声を誤魔化す作戦を考えていたけど、その必要は無かったみたいだね。

入学初日から激しく疲れながら、最初のSHRは終了した。

その内容は説明する必要はないよね？

・
・
・
・
・
・

一時間目の授業が終了し、皆はそれぞれに好きな場所で話し込んでいる。

男子である一夏がいない為、物珍しきで一組の教室まで見に来る連中はいない筈……だったけど……。

「あの子が噂の幼女ちゃん？」

「可愛い♡ まるでアニメから飛び出してきたような美幼女じゃないわ！」

「まるでお姫様みたい……」

一体、どこから私の噂が流れたんですかね？

ほんと、女子高生の情報収集能力ってハンパないわ。

因みに、授業自体は難無く受けられたよ。

伊達に束と長い間ずっと暮らしてた訳じゃないからね。

これでも、アイツからISに関する知識は徹底的に叩き込まれてるんだよ。

ぶっちゃけ、卒業までは割とマジで座学関連は余裕だと思う。

「はあ……」

今、なんとなく原作での一夏の気持ちが理解できた気がする……。この注目度は辛いわ……。

もう二度と、私は一夏アンチなんてしないわ……。

「あゝ……少しいいか？」

「ふえ？」

ストレスで胃をキリキリさせていると、私の机の前に一人の女子生徒が立っていた。

それが誰なのかはもう分かっている。

姉である束とは違う、僅かに吊り上った目と黒い髪のポニーテール。

原作におけるメインヒロインとも言える『篠ノ之箒』だ。

「ひ……久し振りだね」

「そうだな……」

それだけ。

昔から口数が多い方じゃなかったけど、たったこんだけで会話が途切れてたつけ。

「ここでいいの？」

「何がだ？」

「いや……なんでもない」

女同士だし、別に廊下とかじゃなくてもいいのか。

「全く変わってないんだな」

「まあね……箒の方は……」

私とは違って、見事なグラマラスボディに成長なさって……グスン。

こんな所だけは姉妹そっくりになりやがって……。

いいもんいいもん。私はいつか、ロリコンで金持ちな奴を捕まえて玉の輿に乗るんだもん。

「どうした？」

「にやんでもにやい……」

こんなロリボディでこれからやっていけるのかな……私……。

「お…緒理香。久し振りに頭を撫でてもいいだろうか？」

「好きにどうぞ」

「な…なら遠慮無く……」

「ふみゆ……」

箒の手が優しく私の頭を撫でていく。

心なしか、周りの皆がそれを羨ましそうに見ている気がする。

（相変わらず、可愛すぎるぞ緒理香……！ 本気で姉さんに嫉妬してしまうぞ……！ 私も緒理香と一緒に暮らせていれば、あるいは……）

な…なんか急に背筋がゾクってしたのは気のせいかな？

まさかとは思うが、第二の千冬さんが誕生したりしないよね？

「ふう……堪能した……」

「何を？」

詳しく聞きたいけど、怖いから聞けません。

「転校していつてからも、箒は頑張ってたみたいだね」

「ま…まあな」

「剣道の全国大会に優勝したの、知ってるよ。凄いじゃん」

「な…なんでそれを知って……」

「束の奴がめっちゃ嬉しそうに話してたし、その記事が書かれた新聞をスクラップしてた上に、ニュースが流れた時は速攻で録画してたから」

「姉さん……！」

箒が凄く痛そうに頭を抱えて苦虫を噛んだような顔をしている。

うんうん。気持ちは分かるよ。私やクロエも何度も似たような目に遭ってるからね。

アイツ、私が小学校や中学を卒業した時にはバカみたいにお祝いするし。

嬉しくは……あつたんだけどね。

「お互いに苦労するな……」

「だね……」

ほんと、妙な所で共感するよね…私達って……。

これも束に関わった者の宿命なのかしら。

・
・
・
・
・
・

二時間目の授業もかなり余裕だった。

教壇に立っている山田先生の言っていることは全部理解出来るし、ノートだつてちゃんと書いている。

当たり前だけど、私は参考書を電話帳と間違えて捨てたりとかはしてないよ？

そもそも、捨てる暇とか無いし。

「ん？」

授業中、なんだか横から変な視線を感じた私は、なんとなく視線の方に向く。

すると、隣に座っていた女子が恥ずかしそうにしながら前を向いた。

(なんだ……？)

特に気にする程でもないか。

今は授業に集中集中！

(背伸びをしながらノートを書いているの……すっごい可愛かった……♡)

でも、なんだか座りにくいな。

もう少しでいいから椅子の高さを調整出来ないもんかしらん？

「葉鞭さん。大丈夫ですか？」

「授業なら全部分かってますけど？」

「いや、そうじゃなくてですね。なんだか座りにくそうにしてるよう
に見えて……」

あ、そっちなね。

山田先生はちゃんと私の事を見ててくれてるんだな……♡

私、本気で感動してます。

「確かに少しだけ辛いかもです」

「そうですか。よかつたら、椅子の高さを調整しましょうか?」

「それは有難いですけど、今ここですか?」

「はい。少しでも生徒に快適に授業を受けて貰えるようにするのも、先生の立派な仕事ですから」

はい。私は山田先生と絶対に結婚します。

もうこの人以外に有り得ません。

「それは、私に任せて貰おうかあああつ!!」

「織斑先生っ!?!」

教室の端で授業を見ていた千冬さんがいきなり駆け付けたっ!?

なんでタイトスカート着てるのに、そんなにも機敏に動けるのっ!?

「ここをこうして……どうだ!」

「わっ……」

あつという間に椅子の高さがいい感じになった。

これなら凄く快適だけど……。

「えつと……ありがとうございます」

「礼には及ばんさ。緒理香の為ならば世界を敵に回しても構わん!」

「いや、別にそこまでしなくてもいいです」

なんだか久しぶりに会ったら、千冬さんって束に似てきてないか?

似た者同士の親友なんだろうか。

「あの……そろそろ授業の続きをしたいんですけど……」

「おっと、そうだったな。私も後ろに下がってから、緒理香の勉強姿を目に焼き付けなければ」

これから嫌でも毎日、見ることになるんだから、ここでんな事をしなくてもいいでしょうが。

ほら、千冬さんを尊敬してたっぽい子達の間からハイライトが消えかけてるんですけど?」

「そ……それでは授業の続きをしますね? もしも分からない事があつ

たら、いつでもなんでも聞いてくださいね！」

私の場合は、分からない事が無くても喜んで行きますよ。

少しだけ、これからの生活が楽しみになってきたかも。

・
・
・
・
・
・
・

二時間目も終わり、私はさつきと同じように箒と話していた。

今度も箒の方からやって来てくれて、今回は普通に昔話などに華を咲かせていた。

「相変わらず、姉さんは家事の類は全くしないのか……」

「そうなんだよ。だから、仕方なく私やクロエがやってるんだ」

「ったく……自分が保護した子供に家事をさせるなんて……妹ながら情けない……」

「それは、今度会った時にでも本人に直接言っちゃって」

「そうする。その時にはクロエの事も労ってやろう……」

なんだか普通にクロエの話をしてるけど、実は束経由で箒とクロエは既に知り合っていたりする。

苦労人気質な所が合ったのか、不思議と二人は仲がいい。

勿論、千冬さんとクロエも知り合いだ。

昔に戻ったような気分で話し込んでいると、またもや急に話しかけられた。

今度は誰よ？ 言っとくけど、お世辞にもコミュニケーション力が高い方じゃないんだからね？

「あの……少しよろしいでしょうか？」

「ん？」

話しかけてきたのは、金髪ロールな女の子。
たったこれだけだけど、もう分かるよね？

ISヒロインの中でも最もチョコロインと言われている、イギリス代表候補生のセシリア・オルコットだ。

「ああ……やっぱり……こうして傍で見ると、なんて可愛らしいのでしょう……♡ まるで、美しい森の中にある静かな湖畔で舞い踊っている妖精のよう……♡」

「……………ハイ？」

と…突然何を言い出すんだ、この子は？

私の知っているセシリアの初期イメージとは全く異なるんだけど……。

セシリアって、こんなキャラだったっけか……？

これはもう泣いてもいいよね？

えっと……今、この子はなんて言ったんだ？

妖精？ 誰が？ 要請の間違いじゃないの？

「やっぱりな……」

箒さんや。何が『やっぱり』なんですかね？

その所を詳しく、原稿用紙2枚ぐらいに纏めて教えてくれないかい？

「あつ！ 申し訳ございません！ 私としたことが、自己紹介も碌にしないで……」

「いや。君の名前ならもう知ってるから。イギリスの代表候補生のセシリア・オルコットさんでしょ？」

「まあ！ もう既に私の事をご存じだったなんて！ これは運命なのかしら……」

「さつき普通に自己紹介してたからね？」

あ…あれ？ マジでこの子はどうしたのかな？

少なくとも、私が知る限りでは登場初期の頃のセシリアは、もうちよつとこう……近寄りがたい空気を出しながらも、意外と真面目な部分もあつたりしてたと記憶してるんですけど？

なのに、今の彼女はまるで天然系のお嬢様って感じがする。

「また厄介な奴に絡まれてるな……」

そう思うのなら、少しは助け船ぐらいは出してくれてもいいんじゃないかな？!

「あ…あの……莱鞭さん？」

「なにかな？」

「その……えっと……いきなりで失礼だとは存じているのですが、どうしても我慢出来なくて……。その御髪を触らせて貰ってもよろしいでしょうか?!」

「おぐし？」

「御髪とは、髪の毛の事だ」

「あぁ……」

随分と時代がかった言い方をするもんだから、全く分からなかった。

「これでも一応、ギリギリ昭和生まれの人間なんだけどなく。」

「こんな髪でよかったら、幾らでも触っていいよ」

「あ…ありがとうございます！ このお礼は必ず致しますわ！」

「そこまで大袈裟にしなくていいから……」

「なんだろう……このセシリアは、千冬さんとは別の意味で疲れる……。」

箒も時々、似たような雰囲気を出す事はあるんだけど、まだまだ十分にマシな部類なんだよな。

だからこそ、私は個人的に箒の事は好きな方だ。

ぶつちやけ、一夏には勿体ないよ。

「そ…それでは…お触りしますわ……」

お触り言うなし。なんかニュアンスがエロいわ。

「はわああ……なんとという触り心地……。まるで最高級の絹糸に触れているようですわ……」

「昔から、特別な事をしていないにも拘らず、不思議とサラサラとしていたからな、緒理香の髪は」

「そうなんだよね。普通に市販のコンディショナーを使ってるだけなんだけど。」

だから、よく同級生の女子達からはとても羨ましがられてたっけ。

「この髪色も素晴らしいですわ……。このような髪の色のお方が現実にいるなんて……」

「確かに、桃色の髪を持つ人間なんて非常に珍しいだろうな」

「でも、別に私は染めてたりとかしてないよ？」

「それは知っている。姉さんも言っていたが、お前のその髪色は生まれつきの天然らしいからな」

「こんなファンタジーな感じのする髪色をしたもんだから、一時期は虐めの対象になりかけた事もあったんだよな。」

でも、地獄のような就職氷河期を経験した私に死角なんてある筈も

無く、そんな事をやろうとした連中は全員揃って、金的&ザンギエフ様の必殺技のオンパレードで黙らせた。

「はっ！ まさか……菜鞭さんは本当に妖精の生まれ変わりなのでは……」

「ないない」

流石にこれにはツッコまずにはいられなかった。

いつからセシリアは厨二病患者に片足を入れたのかな？

「はふう……♡ 満足ですわ……♡」

「そーかい」

さつきまで触っていたツインテールから手を放して、頬を赤くしながら深い溜息をついていた。

溜息をつきたいのはこっちなんだがな。

「緒理香さんの残り香……♡」

「ヒィィイツ!？」

頼むから、さつきまで私の髪を触っていた手の匂いを嗅ごうとするのだけはマジで止めて!!

こんな形で第二の千冬さんの誕生を見届けたくない!

しかも、しれっと私の事を名前で呼んでるし!

「本当にありがとうございませしたわ……♡ 今度は私の自慢の紅茶を御馳走致しますわ」

「た……楽しみに待ってるよ……」

「はいー!」

元気のいい返事と共に、彼女は自分の席へと戻っていった。

多分、もうすぐ休み時間が終わるからだろう。

「世界は広いな……」

箒、なんかその発言が嫌なフラグを建てたような気がするから止めて。

「にしても、あいつ……私の事は全く目に入ってなかったぞ」

「そこまで私に夢中になる要素ってあるとは思えないんだけど」

「いや、ありまくるだろう」

「え〜?」

体の発育が超遅れている事を除けば、立場上は皆と同じ華の女子高生なんだぞ？

一体何が珍しいというんだ？ 本気で意味が分からん。

「そろそろ私も戻る事にする。また後でな」

「ういゝ」

取り敢えず、学園生活における私の癒しは山田先生と箒になるのかな。

そんな存在がいるだけ、まだマシか……。

一夏の場合はそうもいかなかったみたいだしな。

今はその一番肝心な一夏がない状況なんだけどさ。

(もう、私の知っている原作知識はあてにしない方が賢明かな……)

下手に頼ろうとすると、後で痛い目にあいそうだ。

ここは状況に応じて臨機応変に対処しよう。

・
・
・
・
・
・
・

三時間目は千冬さんの授業。

その内容は『実戦で使用する各種武装の特性について』。

流石に自分が教壇に立っている時は、何もしてこない……と信じた
い。

「つと。そうだった。授業に入る前に一つ決めなくてはいけないものがあつたな」

「再来週に行われる、クラス対抗戦の代表者、つまりはクラス代表ですね」

「そうだ。本来ならば最初のSHRの時に決めなくてはいけなかったのだが、緒理香の新たな属性に萌えていて決める暇が無かったから

な」

おい。今さらつと私のせいになかったか？

けど、クラス代表……か。

原作では、ここで一夏が推薦されて、それに楸おこポンポン丸になったセシリアと口喧嘩に発展して、千冬さんの一言でISでの試合になったんだよな。

だがしかし、ここには一夏はいない。

どんな風な展開になるのか全く予想出来ないぞ……。

「織斑先生。クラス代表ってなんですか？」

「要は学級委員のようなものだ。先程言ったクラス対抗戦だけじゃなく、定期的に生徒会が開く会議に出席したりする役目を持つ者の事だ。それと、クラス対抗戦は、現時点での各クラスの実力の推移を測る大会だ。流石に今の段階では殆どの生徒が五十歩百歩だが、誰かと競い合う事はそれだけで向上心を生み出す事に直結する。因みに、一度でもクラス代表が決定したら、余程の例外が無い限りは一年間は変更が無い事を覚えておけ」

お：おおく……千冬さんが初めて教師っぽい発言をした……。

コレだよコレ！ 私の知っているカツコいい千冬さんは！

一日10秒間だけでいいから、こんな風になつてくれれば嬉しいんだがな……。

「自薦他薦は問わないから、誰かいないか？」

こここの場面も、一夏がいたら速攻であいつに決定するんだけどな。

今回の場合は……セシリア辺りが妥当か？

「はいっ！ 私は菜鞭さんを推薦します！」

ん？ 私の気のせいかなヤ？

とらつても聞き捨てならない言葉が聞こえたぞ？

「私も菜鞭さんがいいと思います！」

またかよっ!?

最初の子を切っ掛けにして、次々と私を推薦してくる輩が出てきてるぞ！

これはかなりヤバイ……！ こうなったら、私も手を上げてセシリ

アを推薦するしかない!

「ふむ。やっぱり緒理香を推薦してきたか。矢張り、緒理香の可愛さはクラスの顔にするに相応しいと誰にも分かるんだな」

頼むから…手を上げる前にこっちが脱力するような事を言わないで……。

「因みに、私も緒理香を推薦する!　というか、緒理香以外に有り得ん!!」

ゴンツ!

余りにもアホな発言に、思わず頭を強く机に打ち付けてしまった。

「た…担任が推薦とかいいんですか……?」

「何を言う。担任教師だって立派なクラスの一人だぞ?　推薦する権

利ぐらいはある筈だ」

ここで正論とかズルいよ……シクシク……。

「では、クラス代表は緒理香で決……」

「ちよつと待ってください!」

セ…セシリア……?

まさか、ここで原作再現発生なのか……?

「なんだオルコット。何か異議でもあるのか?」

「いえ。私も緒理香さんをクラス代表にする事には賛成ですわ」

マジかよっ!?

お前は私の味方だと思ってたのに!

筈はこんな場は苦手だから、頼れるのはお前か山田先生ぐらいしかないと信じてたのに!

「ですが!　緒理香さんにはかり全てを押し付けるのには反対ですわ!」

「どういう事だ?」

「よく考えてくださいまし!　緒理香さんのような小さく可憐な方が、クラス代表の仕事を全て一人でしているのを、皆さんは黙って見過ごせますのっ!」

「!!!」

どうしてソコで全員の頭上にピツシャーンって雷が落ちるんだよ。

セシリアの言い方にもかなりのツツコミ所があったけど。

「そ…そうだった…！ 私としたことが…自分でも無意識の内に緒理香に負担を強いていたのか…！」

今更かよ。とは言うまいよ。

千冬さんの事だから、すぐに自分の言った事を忘れるに違いない。

これまで似たような事に何度、騙されてきた事か…！

「それじゃあ、どうするんですか？ オルコットさん」

「決まってますわ、山田先生」

キリつとした顔で皆に言い聞かせるようにセシリアは大声で言った。

「クラス代表とは別に、クラス代表補佐を決めればいいのですわ！」

「…その手があったか!!」

ねーよ。

なんだよクラス代表補佐って。

二次創作とかでもよく出てくるけど、実際は何をする役職なんだよ。

少なくとも、私は『補佐』なんて言ってる奴が実際に仕事している光景を一度も目撃した記憶は無い。

「ですので、緒理香さんの事を影に日向に支える役目は、このイギリス代表候補生であるセシリア・オルコットが立派に務めてご覧ませますわ」

成る程。最初からそれが狙いだったか…！

補佐という立場を利用して、私に近づくのが目的だったんだな…！

クソツ…！ 悔しいが、学年主席なのは伊達じゃないって事か。

この短時間にそこまで計算して発言するとは…。

「待て」

「あら？ 貴女は…」

「ここで箒が立ち上がったっ!？」

「緒理香を支えるのは『幼馴染』である私の役目だ。勝手に取らないで貰おうか」

ほ…箒い〜！ お前は…体以外にも立派に成長して…お姉ちゃん嬉しいですよ！

でも、なんで『幼馴染』の部分強く強調したの？

「貴女…確か篠ノ之箒さん…でしたわね。それはどういう意味かしら？」

「そのままの意味だが？ 私と緒理香は互いに幼い頃から共に育ってきた幼馴染同士なのだ。分かるか？ 幾ら優秀とはいえ、ポツと出のお前よりは互いに気心の知れた仲である私の方が遥かに代表補佐になるに相応しいと思うと言っているのだ」

（つーか、いつの間にか私がクラス代表になる事は決定してる感じなの？ 私の意思確認とか一切無しで？ そんなのってアリ？）

でも、この状況でソレをいう度胸も勇気も私には無い。

今までの人生経験で分かる。ここで下手に言葉を挟めば、更なる被害を被るは必至！

（人生、諦めが肝心です）

なんか私の心の中で見知らぬオツサンがいい笑顔で呟いたんですけどっ!?

アンタはマジで誰っ!?

「言うじゃありませんの…！ こうなったら、どちらがより緒理香さんを支えるに相応しいか決める必要がありますわね…！」

「望むところだ…！ 緒理香の為に絶対負けん…！」

ふ…二人の間で火花が散ってるううううっ!?

これはもしや、箒とセシリアで試合をする流れかっ!?

流石にそれは拙過ぎやしないか!? だって、今の箒はまだ専用機を所持してない！

訓練機じゃ余りにも分が悪すぎる！

「ちよ…ちよつと！ 二人共落ち着いて！ 私の為に喧嘩とかしないで！」

「お言葉ですが緒理香さん…例えば貴女のお願いとはいえ、これだけは絶対に引けませんわ…！」

「大丈夫だ緒理香。お前の為にも、私は絶対に負けん」

「そうじゃなくて……」

セシリアはともかく、箒は一体何処から、その自信が湧いてくるんだよ!?

「修羅場だ……」

「うん。修羅場だね……」

「美幼女を巡って争う二人の美少女……」

「運命の三角関係だね」

言つとる場合かああああああああああつ!!!

誰でもいいから止めようとせんか———い!!!

「だったら、お二人で補佐をすればいいんじゃないんですか?」

「……は?」

や……山田先生……? いきなり何を言つて……?

「クラス代表補佐なんて役職は今までにありませんでしたし、無かつたからこそ『補佐は必ず一人ではなくてはならない』なんて校則もあります。だったら、今後の事も考えて試験的にお二人で補佐をやってみればいいと思いますよ?」

とんでもない事を言つてる自覚はありますか?

二人の喧嘩を止めてくれたのは嬉しいけど、それはそれでまた別の問題が発生しそうな予感が……。

「や……山田先生……貴女は……」

「天才か……!?!」

なんでそこで戦慄してるんだよ。

山田先生が凄いのは認めるけど、驚くのはそこじゃないだろ。

「では、クラス代表は緒理香で、クラス代表補佐を篠ノ之箒とセシリア・オルコットに決定する。異論はないな?」

「……はい……」

無いのかよ。

ほんの少しでも構わないから異論があつて欲しかった。

けど、今回は珍しく千冬さんが大人しかったな。

こんな時はいつも、自分から率先して割り込んでいくのに。

「補佐が誰であろうと問題は無い。緒理香がクラス代表で、私がクラ

スの担任である以上、緒理香と一緒にいられる時間は確実に増えるのだからな……！」

それが本心かよ。

最初の説明をしていた時に感じていた尊敬を返してくれ。

箒とセシリアの勝負が無くなったのは良かったけどさ。

こここの購買部って……胃薬売ってたっけ……？

胃薬とフレンズにだけにはなりたくない！

入学最初の授業が終わり、私は精も根も尽き果てた状態で机に突っ伏していた。

「ああ〜：うう〜：……」

「だ…大丈夫か？」

「だいじよばないい〜：……」

私の事を心配してくれたのか、箒が机の傍まで来てくれた。

でも、今の私には顔を見上げるだけの力は残されてはいないのでよ……。

「緒理香さん…：…なんて御勞しい…：…」

箒に便乗してセシリアも来たけど、お前も原因の一端は担ってるんだぞ？ 自覚ある？

「入学初日で疲れる気持ちは分かるが、だからと言っていつまでもここに居る訳にはいかないだろ？」

「そうだけどさ〜：……」

せめて、何か甘味が欲しい。

皆〜：私に甘味を分けてくれ〜：……。

「おりり〜ん。だいじよ〜ぶ〜？」

「ふえ？」

この、妙に間延びした特徴的な声は…：…？

なんとか頭だけを動かして声の主を確かめると、そこには箒やセシリアとは別にもう一人、袖がダボダボな制服を着た、ニコニコ笑顔の女の子がいた。

「…………『おりりん』って私の事？」

「そ〜だよ〜。可愛いでしょ〜？ あ、お菓子食べる〜？」

「なに…：…？」

彼女が机の上に置いたのは、丁寧にティッシュに包まれたチョコクッキー三枚。

今の私にとっては、それは砂漠で迷った末に見つけたオアシスの水に等しかった。

「いただきます」

「どうぞ〜」

遠慮なんてしない。

私にくれた以上、このクッキーはもう私の所有物だから。

「モキュモキュモキュ……ん〜……ん〜……♡」

あれ……？ クッキーってこんなにも五臓六腑に染み渡るような食べ物だったっけ……？

クッキーの美味しさ以上に、彼女の優しさに全ての私がスタンディング・オベーションだ。

今、間違いなく全米が泣いたね。

「えっと……君は……」

「布仏本音だよ。よろしくね、おりりん」

そうだそうだ。布仏本音だった。

割と特徴的なキャラなのに、なんとも微妙な立ち位置にいるから、影が薄いのか濃いのかよく分からないんだよな。

「本当にありがとう。お蔭でマジで生き返った気がする」

「えへへ〜……」

……可愛い。

山田先生と同じぐらいに嫁にしたい。

今の私は『布仏緒理香』になるのもやぶさかじゃないぞ。

「緒理香さんはお菓子が好きなのですね……。これは重要な情報ですわ……！〜」

「普段は頑張って背伸びしているように見えても、意外と見た目相応なところもあるんだな……」

ん〜？ それはどういう意味ですかね箒さ〜ん？

「布仏さん。このお礼はいつか必ずするよ」

「気にしなくてもいいよ〜。私的にはモキュモキュしてるおりりんを見ただけで超大満足だから〜」

「『同感』」

モキュモキュってなんぞや？

あと、同意してんじゃないよ、その二人。

「それと、私の事は『本音』でいいよ?」

「そうなの? じゃあ……本音で」

「うん!」

「どうやら、早くもI S学園で新しい友達が出来たようだ。」

「え? セシリア? こいつは……どうなんだろう?」

「少なくとも、私の中での好感度はまだプラスマイナスゼロなんだけど。」

「あれ? まだ教室にいたんですか?」

「四人で話していると、教室の入り口付近に書類を持った山田先生と千冬さんが並んで立っていた。」

「原作だと、ここで一夏の部屋の話をしてたけど、私の場合は既に部屋は割り振られてるから、シンプルに立ち寄っただけなんだろうな。」

「少しだけ休んでまして」

「そうですか。今日は入学初日ですものね。疲れますよね」

「よし。ならばこの私が担任として身を以て緒理香の体を癒して……」

「いや、結構です」

「なんとっ!?!」

「こーゆーのは早めに断っておくのが吉。」

「下手に渋ったり長引かせると、確実に自分にいい方向に解釈してくるからな。」

「あ、そうだ。忘れかけてたけど、実は先生達に頼みたい事があったんだ」

「何いつ?! 緒理香が私に頼み事だ……! 明日は結婚式か……!」

「……話、続けてもいいですかね?」

「……どうぞ」

「割と真面目な話をするんだから、そっちも真面目になって欲しい。」

「これを調べて貰えませんか?」

「ん? これは……」

「私は、ずっと右腕に着けていた白いガントレット擬きを外してか

ら、山田先生に手渡した。

「そういえば、昨日からずっと着けていたな。なんなんだ？」

「それが、私にも分からないんですよ。恐らく、私を学園に送る際が取り付けた物だと思っうんですけど。その正体が分からなくて怖いんですよね」

「アイツから何か説明とかは無かったのか？」

「何にも。メモとかも無かったですし」

「そうか……」

この時、またもや千冬さんは教師の顔になった。

なんでこの人はこの状態を一時間でさえ維持出来ないんだろうか？

「了解した。この腕輪は私達で一時的に預かり分析しておこう」

「ありがとうございます」

「なに、これぐらいは教師として、将来の緒理香の伴侶として当然だ」

「どーして、最後まで締まらないんですかね……」

一夏はマジで泣いていいんじゃないだろうか？

改めて言わせて貰うよ。お前も苦勞してるんだな……。

「それじゃ、私達はこれから会議があるので失礼しますね？」

「早ければ明日には分析結果が出る事だろう」

「分かりました。では、また明日」

「はい。また明日」

職員室へと向かって行く二人を見送ってから、私は皆の元まで戻ろうとした……のだけれど、途中で聞き逃せない一言が聞こえてきた。

「こ……これはずっと緒理香の腕に着いていたのか……ゴクリ」

「織斑先生？」

「べ……別に私はこれについている残り香を嗅ぐうだなんて微塵も思っ
てはいないからな!？」

「ハア……」

渡したのは失敗だったかな……？

・
・
・
・
・
・
・

箒、セシリア、本音と一緒に寮へと向かう途中、私は安定の注目を受けていた。

「え？ 何あの子？ 小学生？」

「違うよ。一組にいる葉鞭さんって行って、ああ見えても私達と同じ年らしいよっ。」

「ウソでしょっ!?!」

「これがIS学園……! 美少女の巣窟とは聞いてたけど、まさか美少女もいるとは思わなかったわ……」

一刻も早く、この環境にも慣れないと、私の方が先に参ってしまいそうだ。

慣れたら慣れたで、ある意味で終わりな気がするけど。

「皆さんの噂の的になってますわね、緒理香さんは」

「だろうな。背の低い生徒ならば他にもいるかもしれないが、緒理香の場合は『背が低い』だけではないからな」

「可愛いもんね〜♡」

「注目されても困るだけなんだけどな……」

目立つのは昔から嫌いだし、注目されるなんて以ての外だ。

まさか、束の奴は困っている私を見て楽しむ為にIS学園に入学させたんじゃないや……。

普通なら『有り得ないだろ』と一蹴されるかもしれないが、束の都合はその『有り得ない』をマジでするのがヤバいんだよな。

「ところで、緒理香の部屋はどこなんだ？」

「えっと……」

どこかで見たことがあるような部屋番号だったような気がするん

だよな。

何番だったっけかな？

「思い出した。確か『1025番』だったと思う」
「なに？」

箒が何か気にしてるみたいだけど、別に今聞くことじゃないでしょ。

「どうかしましたの？」

「いや……なんでもない。気にするな」

いや、明らかに何かを隠してない？

箒は昔から嘘をつくのが下手だったからなあ。

そこから、話の流れで他の二人の部屋の場所も聞くことになった。遊びに行く機会は少ないだろうが、それでも知っておいて損は無いだろう。

「ところで、さっきは先生方と何を話していたんだ？」

「ちよつと調べ物をお願いしたんだよ」

「調べ物？」

「そ。どこぞの天災が私に持たせた謎の物体をね」

「ああ……成る程な」

どうやら、箒だけは私の一言で全てを理解してくれたようだ。

流星は『篠ノ之東被害者の会』の副会長だな。

因みに、会長は私で書記はクロエ。

「あ。私はこちらですわ」

「私はこっち〜」

寮に入ってから暫く歩いていると、二人がそれぞれに別方向を指差した。

どうやら、ここで一旦のお別れみたいだ。

「緒理香さんと離れなければいけないだなんて……悲しいですわ……」

「また明日になれば会えるだろ……」

「おりりん、しののん、セツシー。またね〜」

箒とセシリアがコントをしている間に、本音は自分の部屋へと向

かっ行って行った。

のんびりしてるように見えて、あの子が一番まともだよな。

「しののん……って私か？」

「せっしー……」

いつの間にか二人にも渾名を付けてたのか……。

抜け目が無いな、本音は。

だから気に入った。

・

・

・

・

・

・

・

「……………」

自分の部屋に辿り着いたのはいいのだが、なんでか私の横には箒もいる。

そこで思い出したのだが、IS学園の寮は二人で一つの部屋を使うようになっている。

つまり、私にも同じ部屋で過ごすルームメイトがいる訳で。

「箒も……ここなのか？」

「ああ……」

色々と立て込んでたから、すっかり忘れてた。

けどまあ……。

「箒と一緒に安心かな」

「え？」

「だって、見知らぬ誰かといきなり同居生活をするよりは、最初から見知っている相手の方が気兼ねなく過ごせるし」

「そ…そうだな！ 私も緒理香と一緒によかったと思うぞ！」

「それはなにより」

部屋の鍵は私が持っているから、ガチャリとな。

「かなり広いんだな……」

「だよ。ま、三年間過ごせば嫌でも慣れるだろう？」

「確かに。荷物は……ちゃんと運び込まれてるようだな。緒理香のはあるのか？」

「私はいきなりだったから、必要最低限のしかない。一応、私は束推薦の特待生って立場らしいから、生活費とかに関しては困らないんだけど……」

「どこかで買い出しには行かないといけないのか……」

「そうなるかな。日曜日とかに外出届を出せば問題無いだろう」

周辺地図によれば、モノレールを乗った先に大型ショッピングモールがあった筈だ。

あそこならば大抵の物は揃うだろう。

いざとなれば、皆の味方『100円ショップ』に行けばいいだけの話だしな。

(これは、ルームメイトとしての立場を最大限に利用して、緒理香を買い物に誘うべきではないのか?! 恥ずかしがって渋り、その結果として誰かに先を越されたら元も子もない! 特に千冬さん辺りには!)

おやおや? 箒のあの顔は何かを企んでいる時の顔ですな?!

昔から箒は顔に出やすいから、隠し事には向かないんだよな。

「それに関しては追々、考えていくことにして。今は……」

私は箒に向かって手を差出す。

「これから三年間……よろしく。さつきは言えなかったけど、こうして再会出来て本当に嬉しいよ、箒」

「私もだ。また会えて嬉しかったぞ、緒理香。改めてよろしく頼む」
箒と一緒なら、ここに馴染んでいくのも早いかもしれない。

未来の事を考えて悩むよりは、今この瞬間を楽しむ事に全力を尽くした方がずっとマシだな。

「……久しぶりに会った記念に、今日は一緒のベッドで寝てもいいか？」

「え？」

ちつちやくくないよ！

篠ノ之箒の朝は早い。

剣道場主の娘として育てられていたせいかな、幼少期からずっと早寝早起きを日課とし、それが体に染みついているのだ。

因みに、姉である束も同じ立場であるにも拘らず、箒と同じようには起きられない。

毎日毎日、緒理香やクロエに叩き起こされている。

「ん……んん……っ？」

カーテンから差し込む日差しが網膜を刺激し、箒は目を覚ます。

最初はボーっとしていたが、少しして自分がIS学園に入学し、そこにある学生寮にいる事を思い出す。

それと同時に、ある大事な事も思い出した。

「そうだったな……私は……って、んん？」

自分の体に誰かがしがみ付いている感覚。

箒は寝る時に浴衣を着ているのだが、それが僅かにだけ着崩れている。

その原因は、目の前にいる幼い体をした少女だった。

「しゅびゅ……」

「緒理香……」

彼女のもう一人の幼馴染にして、密かに思いを寄せている相手。

昨日言った『一緒にベッドで寝たい』という何気ない冗談を真に受け、彼女は本当に一緒に寝てくれた。

その時は心の中で狂喜乱舞したが、流石に実際にはしなかった。

普段はツインテールに結んでいる緒理香の桃色の髪は解かれて、真っ直ぐなストレートになっている。

その点に関していえば箒も同じなのだが、自分の事なので気にしない。

（緒理香の寝顔……なんて可愛いんだ……♡ これこそまさに天使の寝顔だな……）

今まではなんとなく早く起床していたが、この時ばかりは早起きを

して本当によかったと思った。

『早起きは三文の得』という言葉を生み出した人は本当に天才だ。

(けど、姉さんはこの天使をいつも傍で見ていたんだよな……)

そう思うと、実姉に対して別の意味での嫉妬心が生まれる。

けど、それはすぐに目の前の現実によって書き換えられた。

(いや……この場にはいない人間に嫉妬をしても仕方がないじゃないか。今、緒理香の傍に居るのは、この私なんだ。だったらせめて、緒理香が起きるまではこの寝顔を堪能してもバチは当たらないんじゃないか?)

実際には、緒理香が箒の体に腕を伸ばして抱き着いているから、思うように身動きが取れないのだ。

緒理香は箒の豊満な胸に顔を埋めるようにして寝ていて、世の男共が見たら血の涙を流す事は確実だ。

「んんうく……」

「ん？ 寝言か？」

「私だつてええ……綺麗な洋服とか着たり……アクセサリーとか着けたり……お化粧とかして可愛くなりたい……」

ハッキリとした口調な寝言を聞いて、箒は頭の中で妄想する。

(緒理香には絶対にフリルとかが沢山ついた洋服が似合うのだろうな……。いや、意外と清楚系の恰好も似合うのではないか？ それとも……)

一度始まった妄想はそう簡単には止まらない。

箒がニヤけている間も、緒理香の寝言は続いている。

「だつてええ……女の子だもん……むにやむにや……」

この時、箒はある決意を固める。

緒理香と一緒に買い物に行く時は絶対に彼女に可愛い服を買い与えよう。

こうなった時の箒の心は、そう簡単には揺るぎはしない。

……

・
・
・
・
・

「ふわあく……」

欠伸を噛み殺しながら、私は箒やセシリア、本音と一緒に廊下を歩いて行く。

皆より一日早く来ているとは言え、まだまだこの環境には慣れてないみたいだなあく……。

なんか、思ったよりも寝つけなかったような気がする。

起きた時、箒の体に抱き着いていたのには本気でビックリしたけど。

「箒さん。なんだか朝から浮かれてませんか?」

「凄く嬉しそうだね」

「いやなに……偉大なる先人の残した言葉の素晴らしさを改めて実感しているだけだ……」

「はい?」

な……なんか箒が急に妙な悟りを開いてるんですけど?!

この子はこんなほんわかとしたキャラでしたっけ?!

そーゆーのは本音の役目だろおっ?!

にしても、道行く皆はまだ私の事を見まくってるな。

昨日、散々見たでしょうが。まだ満足してないのかい? この欲張りさんめ!

視線のマシンガンを受けながらも、なんとか食堂まで辿り着き、私は販売機の所まで急ぐ。

もう知っている人も多いかと思うけど、ここで一応の説明をしておこう。

IS学園の食堂は、最近よく見かけるようになった販売機にて食券を購入し、それをカウンターに出してから注文を受け取るシステムを

採用している。

こーゆーのに関しては、殆どの高校にある食堂と同じだと思う。
実際、作者の高校も全く同じシステムだった。

「ん？　なんだ、この台は？」

「ああ……それ多分、私のだ……」

「緒理香さんの……ですか？」

「うん。余り自分で言いたくないけどさ、私ってばこんな体だから、販売機の下から二番目までしか届かないんだよね。こんな風にいい……！」

思いつきり背伸びをしても、なんとかギリギリ二段目のボタンに届く程度。

一番上にはどう足掻いても届かない。

「だから、食堂のおばちゃん達が私の為にこうして台を用意してくれただと思う。って、聞いてる？」

なんか、さつきから三人の様子がおかしいんですけど？

心ここに非ずって感じがする。

(背伸びをする緒理香可愛い。略して『緒理可愛い』)

(足をプルプルさせて体を伸ばす緒理香さんが可愛すぎますわ〜♡)

(いつか絶対にチューしてやる)

ほ…本当に三人共どうした？　特に本音の目が凄い事になってるんですけど？

因みに、今日の私の朝食はきつねうどんだ。

前世からもそうだったんだけど、私は麺類全般が大好きっ子なのだ。

特にうどんは一番好き。一時期、本気で讃岐に引っ越す事を検討した程に。

この後、我に返った皆も注文をしたんだけど、いつの間にか鼻にティッシュを詰めてたんだよな。一体どうしたんだ？

・
・
・
・
・
・

販売機の一番上手に手が届かないのならば、当然のようにカウンターにも私は背が届かない。

頑張れば頭頂部ぐらいは向こうに見えるようなのだが、それでは意味が無い。

だから、ここにも私専用の台が設置してあった。

ううう……我が事ながらなんて惨めなんだ……グスン。

おばちゃん達からありがたいという言葉と注文の品を受け取り、皆と一緒に並んで移動。

丁度いい感じに空いている席があったので、誰かに取られる前に座る事にした。

するとまあ、途端に私達の周りに人が集まってくるわくるわ。

今までずっと立っていた連中の殆どが近くの席に座りやがった。

「いただきます。あむ」

「相変わらず、緒理香は麺類が好きなんだな」

「まあね。私の体は無限の麺類で出来てるから」

「これこそ私の宝具『アンミリテッド・ヌードル・ワークス無限の製麺』なんちゃって。」

「緒理香さんは麺類が好き……と。メモですわ」

「おりりんはよく食べるんだね」

「セシリアは一体何をメモしてるんだよ。」

「それと、本音は逆に少なすぎだ。」

「普段からお菓子ばかり食べてるから、そうなるんだよ。」

「ちるちるちる……プハ〜♡」

「美味し〜♡ やっぱり朝はきつねうどんに限りませう♡」

「お昼はどんこつラーメンでも食べましょうかね。」

「「お姉ちゃんのお部屋に来ないっ!?」「」」

「病院行け」

いきなり、周りに集まっていた連中が揃ってお菓子を持って私を誘惑しに来た。

けど残念。今の私は魅力無効のスキルが付いているのだよ。

それとき、もう何度も言ってるけど、こんな見た目でも一応はお前達と同じ年なんだぞ？ 完全に忘れてないか？

「緒理香は何をしても物凄く可愛いな！」

(全く、アイツ等は何を考えてるんだ！)

「箒、入れ替わってるから」

遂に箒もこんなギャグをするようになったのか……。

似てないようで似てるよな、篠ノ之姉妹は。

バタンツ！

「「ん?」「」」

後ろから何かが倒れるような音が聞こえた？

気になって振り向いてみると、そこには血文字でメッセージを残してジャージ姿で倒れている千冬さんがいた。

「お……緒理香のうどんを食べている姿が可愛すぎて辛い……」

……………放置だな。

他の皆も同じ結論に達したのか、すぐに元の位置に戻って食事を再開した。

その後、朝食を食べ終えてから教室へと向かったんだけど、そこにはいつの間にか復活していた上に、ちゃんとスーツにも着替えていた千冬さんがドヤ顔で教壇に立っていた。

この人はマジでチートの無駄遣いをしていると思うのは私だけだろうか。

……

校舎内の廊下を歩く二人の少女。
片方は特徴的な水色の髪をしていて、もう片方は眼鏡を掛けていた。

リボンの色が緒理香達とは違う事から、彼女達が違う学年…即ち、上級生である事が窺える。

「で、例の特待生の彼女について何か分かった？」

「いえ。調べれば調べる程、当たり障りのない情報しか出てきませんでした」

「そう……」

水色の髪の少女が自分の顎に手を当てて思案する。

その顔は真剣そのもので、本気で何かを探っているようだった。

「これ以上は無駄かしらね……」

「そうかもしれません。あの篠ノ之束博士から直々の推薦があつたとされる時点で相当に怪しいのですが……」

「少なくとも『亡霊』達と関係は無いと見るべきかしらね」

「はい。博士は自分の身内以外には微塵も関心を示さない事で有名ですから」

「そんな人物が自分から推薦をしてきたこと自体が怪しさの塊なんだから……」

頭の中で、以前に見た書類の内容を思い出す。

「菜穂緒理香……年齢15歳。篠ノ之博士の知り合いの子供で、父が事故死、母が病死した後、彼女の身柄を引き取ってから今に至る……ね」

「あの文面をそのまま信用するのは普通に有り得ません。そもそも、彼女の父親の事故の情報なんてどこにもないですし」

「分かってるわよ。だから調べてるんじゃない。でも……」

「でも？　いかがしました？」

「いえね。入学式の時に彼女の事を一度、この目で見ているのよ。背の関係からか、一番前に座ってたから」

「プロフィールを見る限りでは、相当に背が低いですからね」

「ええ。まるで体の時間が止まってしまったかのように……」

同じなのに、同じじゃない。

そんな事を考えるのは失礼だと思っただけでも、自然と頭の中で考えてしまう。

「兎に角、まずは一度お話でもしてみた方がいいかもしれないわね」

「そうですね。幸いな事に、本音が同じクラスで、既に彼女とも接触しているようですし」

「あの子自身は、普通に友達になりに行っただけかもしれないけどね。あの緒理香って子、かなり可愛いし」

「……………お嬢様？」

「べ…別に私は緒理香ちゃんと知り合いになりたいだなんて微塵も思っていないだからねっ!？」

「はあ……分かりました。その時が来たら、私の方もちゃんと準備をするようにします」

「それがいいわね。貴女の紅茶を飲めば、きっとあの子も心を開いてくれるでしょうし」

「そう簡単に事が上手く運ばいいですけどね……」

全く逆のテンションのまま、二人は『生徒会室』と書かれた部屋へと入っていった。

授業………始まりますよ？

白くて速くて強い奴

朝から色々とバタバタしていたけど、その後は割と何も無く過ごしていた。

そんな今は二時間目の授業の真っ最中。

教壇には教科書片手に山田先生が立っている。

「そんな訳で、ISとは元々が宇宙空間での活動を前提して開発されているので、操縦者の体を特殊なエネルギーバリアで包み込んでいます。それに加え、生体機能なども補助する機能が備わっており、機体が万全である限りはパイロットの身体機能を常に安定した状態に保とうとします。これには主に心拍数や脈拍、呼吸量に加えて発汗量なども加えられていて……」

山田先生が丁寧に説明をしてくれるから非常に分かりやすいんだけど、この辺はかなり前に束から教えて貰ってるんだよね……。

なんだか、急に申し訳無いような気持ちになって来た……。

私が心の中で皆に謝っていると、一人の生徒が手を上げて質問をしてきた。

「あの～…先生？ それって本当に大丈夫なんですか？ なんだか体の中を弄られてみたいなのがして、少し怖いんですけど……」

ふむ……ISは未だに『未知の機械』の傾向が強い。

まだ碌にISの搭乗経験が無い少女達がそんな風な感想を抱くのは、ある意味で必然なのかもしれない。

え？ 私はどうなのかだって？

何を仰る読者さん。私はこれまでずっと束の元にいたんだぞ？

当然のようにISに乗る機会なんて山ほどあったがな。

私がやってたのは、主にテストパイロットとしてのデータ収集だけだったけど。

「別に、そこまで深刻に考える必要はありませんよ？ そうですね～：分かりやすく例えると、皆さんはブラをしていますよね？ あれはサポートをこそすれ、それ単体では人間の体に悪影響を与えるような事にはなりません。あ、ちゃんと自分のサイズに合ったものを付けない

と型崩れはしちゃいますけど……」

はは……ははは……。

よりにもよって、私の目の前でブラを例えで持つてくるとは……。これはあれか？ 私は試されてるのか？ それとも無自覚でやってる？

あ……なんか涙出てきた……。

「う……ううう……」

「ら……菜鞭さんっ!? どうしました？ 何か分からない所でも……」

「………ない……です……」

「え?」

「私………生まれてこの方、一度もブラジャーなんて付けた事無いです……」

「えええええっ!?」

だって仕方ないじゃん!! 私の胸はブラを着ける程に大きくなつてないんだからさ!!

図らずも、こうしてTS転生をした以上は、私だって年頃の女の子のようにブラを着けて、更衣室とかで皆で着替える時に……

『もう……またブラがキツくなってるぅ』

とか言ってみたいんだよ!! でも出来ないんだよ!!

前世であんな妄想をした私だけだな、それでも限度つてものがあるだろうっ!?

どんなロリだって、それ相応のブラを着けてるもんだけど、私の場合は未だに体が小学生サイズなもんだから、着けたくても着けられないんだよ!!

こんな私に誰がしたっ!? チクショー!!!

「ちやんと……毎日ずつと牛乳を飲んでるのに……」

背も胸も一向に大きくならない癖に、体だけは無駄に健康優良児だよ!!

中学の頃は三年間連続で皆勤賞を取ってやったよ!!

ちくせう………どうして私がこれまで摂取してきた栄養素は、私が最

も必要としている部分にだけピンポイントで行かないんだ……。

「緒理香……なんて可哀想なんだ……。でも、そんな風に落ち込んで
いるお前も無敵に可愛いぞ！」

後ろでサムズアップしてる担任様は黙っててください。

「だ……大丈夫ですよ！ 成長期なんですから、きっと在学中に大き
くなります！」

「なるかな……」

「はい！ 絶対です！」

「ぜんぜい……（泣）」

やっぱり山田先生は教師の鏡じゃあ……！

もしも、背も胸も大きくならなかつたら、責任を取って嫁にして貰
おう。

『葉鞭緒理香』から『山田緒理香』にして貰おう。

嫌がらせに、仲人は千冬さんに頼んでやる。

「だから、泣き止んでくださいね？ ほら、チーンして」

「ん……」

山田先生が出してくれたティッシュで鼻をかむ。

ちよっぴり鼻がムズムズするけど、もう涙は引っ込んだ。

「それじゃ、授業を再開しますね」

最後に私の頭を撫でてくれた。

ああ……嫁が許されないのなら、せめてこの人の義妹になりたい。

それも無理だったら娘でも可。

まだまだ浮足立った感じで、この後も授業は恙無く進んで行った。

・
・
・
・
・
・

昼休みになり、皆は一斉に食堂へと足を運んで行く。

一夏がないせいとか、途中の専用機騒動なんかは全く無く、そのまま普通に授業を受けていた。

このまま何も無いまま済むのかな……なんて思っていたら、そうでもなかった。

私も箒やセシリア、本音といったメンバーと一緒に食堂に向かおうとしたのだが、途中で千冬さんと山田先生に引き止められてしまった。

「あ、菜鞭さん。ちよつといいですか？」

「この前の事で話がある。余り時間は取らせないから、着いてきてくれないか？」

「分かりました」

『この前の事』とは、私の腕にいつの間にかついていた例のガン卜レット擬きの事だろう。

流石は天下のIS学園。もう分析結果が出たのか。

「ごめんね。私には構わずに先に行つてていいから」

「私達はここで待つてても一向に構わんぞ？」

「それは嬉しいけどさ、私のせいで食事をする時間が短くなってしまふのは嫌だからさ、遠慮せずに行つて。その代わり、ちゃんと私の分の席を確保しておいてね？」

「緒理香さんがそこまで仰るのなら……」

「その善意を無下には出来んしな……了解した」

「待つてるからね」

「これでよし……と。」

別に邪魔とは思ってないけど、まだ皆に話すには早すぎると思うから。

「いいお友達ですね」

「はい。私には勿体ない位に」

「フツ……新たなライバル出現……か。悪くない」

素直に言えないんですかね、この人は。

言葉の割には嬉しそうにしてるけどさ。

殆どの生徒達が食堂に行っただのか、廊下の人通りは疎らになってきた。

これならどこかに移動して話す必要もないだろう。

「昨日、菜鞭さんが預けてくれた物の分析結果が出ました」

「単刀直入に言うとな、あれはISの待機形態だった」

「やっぱり……」

なんとなく想像はついてたんだけど、確証が無かったからな。

「機体名は『白式』。既に緒理香のデータがインプットされているように、フォーマットとフィッティングは完了しファースト・シフト一次移行しているようだ」

「世代は第三世代機で、軽く見ただけでも相当な高性能機だという事が判明しました」

白式……本来は一夏の専用機になる筈だった機体……。

どうしてソレを私に渡したのか、正直疑問は尽きないけど、ここで考えても意味が無い。

束の頭の中を理解しようとするのは常人には絶対に不可能だからな。

それこそ、ニュータイプかイノベーターかXラウンダーでも連れて来ないと。

「武装は確認しましたか?」

「それはまだだ。緒理香が実際に動かす際に確認した方がいいと思っ
てな」

「それもそうですね」

つつても、間違いなく『雪片式型』だけだろうけど。

あのね? 私は一夏とは違って剣一本でなんとか出来ちゃうような人間じゃないんですけど?

せめて、一つだけでもいいから飛び道具が欲しかった。

牽制攻撃するだけでもめっちゃ違ってくるから。

「取り敢えずは返しておきますね?」

山田先生が私の右腕に白式の待機形態を取り付けてくれた。

私用にサイズを弄ってあるのか、ピッタリと腕に巻きついた。

「しかし……緒理香が専用機持ちになるとはな……」

「私自身は全く望んでませんでしたがね」

「機体に使われていたデータに心当たりとかはあるか？」

「多分、私が前にISを操縦した時のデータを使ってるんじゃないですか？」

今にして思えば、あのテストパイロット経験は全部、この為の布石だったのかもしれない。

だとすると、私は束の掌の上でいいように踊らされたのか……。

「そんな事をしてたのか？」

「まあ……一応は。アイツの傍にいる以上、ISとは無関係ではいられませんから」

「確かにな……」

けど、だからこそ原作開始時に非常に大きなアドバンテージが得られたただけ。

授業に普通についていけるのは本気で有難い。

「だから、葉鞭さんは皆と同じ新入生なのに、代表候補生のオルコットさんと同等以上に授業についていけるんですね」

「なんかズルしてるみたいで気が引けますけど」

「そんな事は無いですよ。予習をする事は非常に大切な事です。それに、ISの操縦経験もあるとなれば、実技でも期待が出来ますし」

「あまり持ち上げられても困るっていうか……」

経験がある⇨熟練者って訳じゃないし……。

「そうだ。専用機を受領しているのなら、放課後にでもIS使用に関する規則が書かれた本をお渡ししますね」

「いや待て山田先生。渡すのはいいが、あれはかなりの分厚さがある。緒理香に持って帰れるか？」

「あ……そうでした。じゃあ、どうすれば……」

それって……原作でも一夏がセシリアとの試合の後に渡された例の超分厚い本の事だよな？

この目で実際に見た訳じゃないから何とも言えないけど、まず鞆に

入るかどうかが疑問だな……。

「部屋に直接送り届けるようにしたらどうだ？ そうすれば、色々手間も省ける」

「それが良さそうですね。菜鞭さんの事ですから、すぐに読破しちゃうそうですけど」

山田先生の中での私ってどうなってるの？

高評価を受けて嫌な気分はしないけどさ。

「いつか、時間を作って実際に動かしてみた方がいいだろうな、そうしないと分からない事もある」

流石は元世界王者。説得力のある言葉ですな。

「そろそろ終わりにするか。じゃないと、本当に昼食の時間が終わってしまう」

「ですね。菜鞭さん、もう食堂に行ってもいいですよ。皆さんが待ってるでしょうから」

「はい。それでは失礼します」

私は二人に一礼をしてから、早歩きで食堂へと急いだ。

そういや……今回は珍しく千冬さんが暴走してなかったな。

あの人も、ちゃんとシリアスとシリアルを使い分けてるって事なのか？

だとしたら、一体どっちが素なんだろうか？

あの欲情した姿が素でない事を心から祈りたい……。

SAY! 斗甲斐（誤字に非ず）

今日も全ての授業が終了し、待ちに待った放課後の時間が訪れる。二日目にしてもうすっかり学園に馴染んだのか、少女達は各々に色々な場所へと行こうとする。

中には教室に残っている連中もいるようで、そんな彼女達から部活動に関する話が聞こえてきた。

「部活動か……。そういえば、IS学園って何故か生徒全員の部活動所属義務があるんだよな。なんでだろう?」

「そこは私も疑問に感じていた。いくらIS学園が他の学校と比べて非常に特殊な学び舎とはいえ、この規則は余りにも異色だった」

「それは恐らく、この学園の部活動が『公式』じゃないからですわ」「公式じゃない?」

私と筈の疑問にセシリアが答えてくれたが、なんとも意味深な言葉だった。

「なんでも、IS学園の部活動は他の学校の部活動が普通に行っている大会などの出場が不可能だと窺っています」

「大会に出れない……?」

「それって、文化部、運動部どっちも?」

「らしいですわ」

「マジか……」

そんな規則があつたとは本気で知らなかった。

私もまだまだつて事かな。

「あくまで『趣味』や『自己研鑽』を目的として部活動を行うのではないかと」

「それもある意味では部活動をする目的の一つではあるけど……」

やっぱり、大会に出れないとなると、いまいちモチベーションが出ないんじゃないのか?

いや、だからこそ生徒全員に部活動を推奨してるのか?

折角の青春をISだけで消費しないように。

「そういう二人は、もうどこかの部に入ってるのか?」

「ただだが、剣道部に入ろうとは思っている。まずは今日、見学をしてから、その後に職員室に入部届を貰いに行くつもりだ」

矢張り、箒は剣道部志望か。

剣道の全国大会王者っていう立派な肩書があるんだから、高校でも更に頑張りたいて思うのは当然だよな。

「私はテニス部に入ろうと考えてますわ。故国でもテニスを嗜んでましたので」

あゝ……うん。めっちゃイメージ通りだわ。

セシリアがテニスウェアを着て、テニスコートに立っている姿が簡単に想像出来る。

間違いなくライバルキャラだけだな。

「緒理香さんはどうしますの？」

「私は……」

部活ね……。

前世では見事に中学、高校と6年間に渡って帰宅部だった。

なんなら、帰宅部のエースと言っても過言じゃないね。

それは転生してからも変わってなくて、二度目の中学も迷わず帰宅部を選択した。

別に部活動を否定する訳じゃないけど、どうも私の性には合わないんだよ。

けど、このIS学園じゃそうはいかないみたいだし……うゝん……。

「どうするかな……」

「迷ってるんだったら、生徒会なんかどうかな？」

「本音？」

……ここで、今まで会話に入ってこなかった本音の登場。

そーいや、この子って生徒会書記だったっけ。絶対に仕事してないけど。

「生徒会だと？ 生徒会は部活動じゃないだろう」

「普通の学校だとそうかもだけど、このIS学園だと生徒会も部活動扱いになってるんだよ」

「それはまた珍しいですわね」

「つーか、よくよく考えたら、これって二次創作とかでよくオリ主が生徒会に強制加入させられる時の常套句じゃないのか？」

『入りたい部活が無いのなら、生徒会に入ればいいじゃない！』って、マリー・アントワネットかつつーの！

「生徒会か……」

「ん？ 嫌なのか？」

「嫌というか、碌な思い出が無いというか……」

転生してこんな体になったせいとか、第二の中学の時は本当に苦労した。

その苦労の主な原因は生徒会にあったのだが、話したらマジでキリが無いので、ここはダイジェスト方式にしてお送りしよう。

- ・ 生徒会長（女子）が過剰なまでのロリコンだった。

- ・ その生徒会長が、私の事を無理矢理にでも生徒会に入れようとした。

- ・ 一夏達の協力でそれを跳ね除けたら、次はデフォルメした私の姿を学校のマスコットにしようと企んできた。

- ・ なんてか校長がめっちゃ賛成しやがった。

- ・ 結局、マスコットキャラである『オリカちゃん』が完成し、そのグッズが購買部で飛ぶように売ってしまった。

- ・ そのグッズの中の一つである『オリカちゃんぬいぐるみ』を一夏達も密かに買っていた事に本気で衝撃を受けた。

- ・ しかも、一夏に至っては『等身大オリカちゃん抱き枕』まで買っていた。

- ・ 一夏に頼んで買って来て貰い、実は千冬さんもそれを持っていた事実に、私は灰になった。

「ってなことがあったんだよ……」

ホント、中学の時はマジで波乱の三年間だったよ。

IS学園も負けず劣らずかもしれないが、毎日毎日に渡って生徒会長のストーリーキングが無いだけマシだな。

え？ 千冬さん？ あの人も酷いけど、ちゃんと教師としての一線は守ってる思う……って、なんか教室の入り口付近に千冬さんの姿が見えたような気がしたんですけどっ!?

(オリカちゃんぬいぐるみ……)

(オリカちゃん抱き枕……)

(めっちゃ欲しい!!)

ど……どうした三人共？ なんか目が怖いぞ？

「なんで私は緒理香と同じ中学じゃなかったんだ……」

「もう少し早く日本に来ていれば……」

「いいなあ……羨ましいなあ……」

……取り敢えず、我に返るのを大人しく待とう。

その方がいい気がする。なんとなく。

「と……とにかく、まずは見学だけでも来ればいいんじゃないかな？」

「そ……そうだな。見るだけならタダなんだし、騙されたと思って行ってみたらどうだ？」

「イヤならば、その場で断ればいいのですから」

「それもそうだな……」

本音の事だから、変に何かを企んでいるとは考えにくい。

ついでに言うと、彼女の誘いを断るとか私の良心が痛むから普通に無理。

(緒理香と同じ部活に入れないのは残念だが……)

(もしも生徒会長が緒理香さんの可愛さの虜になれば……)

(高い確率で『オリカちゃんグッズ』が購買部に並ぶ!!)

こ……今度はなんか凄い目が燃えてないか？

なんでそんなにも情熱大陸してるんだ？

「そうだな。行ってみるだけ行ってみるか」

「「やったー」」

何故にそんなに喜ぶ？

まあ、いずれは『生徒会長』とも接触はするんだろうし、そのタイミングが少し前後するだけの話だろ？

こつちから行かないと、向こうの方から寄ってきてそうだしな。

「それじゃ、早速行く？ おりりん！」

「ちよ……手を引つ張らなくても、ちやんとついていくから！」

こうして、本音に手を引かれながら、私は生徒会室へと向かう事となった。

教室を去る際、箒とセシリアがすつごいいい笑顔でサムズアップしていたのが気になった。

・
・
・
・
・
・

「着いたよ〜」

「早っ!？」

展開の都合上、文字通りあつという間に御到着。

私達の目の前には、超機械文明な感じの学園の雰囲気とは全く合わない、洋風のデツカイ扉が立ち塞がっていた。

少なくとも、私からしたらその巨大さから『真理の門』に見えてしまう。

私、別に人体錬成とかしてないよ？

「しっつれ〜しま〜す」

「せめてノックぐらいしろよ……」

「ただでテンション上がったよ……」

仕方がないので、私の代わりに扉を開けてくれた本音の後に続く事に。

中へと入っていくと、そこには大人数が座れるような大きな楕円形の円卓があり、その上座に水色の髪をした一人の少女が司令座りをしていた。

「うふふ……よく来たわね。葉鞭緒理香ちゃん。私がこのIS学園の

生徒会長である『更識楯無』よ。よろしくね」

「これはこれはご丁寧にどうも。一年の菜鞭緒理香です」

更識楯無……中盤以降になってから登場したヒロインの一人で、二年にして生徒会長を務め、更には暗部の当主をしながらもロシア代表なんて肩書まで持つてる凄腕。

でも、身内の事となると急にヘツポコになる印象が強い。

要は、優しすぎるんだよな。その甘さは嫌いじゃないけどさ。

「……………」

「あの〜…どうしました?」

「え? あ…なんでもないわよ? ジツと見てしまつてごめんなきいね」

「はあ……」

そんな風に見られるのにはもう完全に慣れっこだしな。

ははは……自分で言つて悲しくなつた。

(やっぱー!! 見た目が完全に美少女なのに、一生懸命に大人ぶろうとしてのギャップが可愛すぎて本気で見惚れちゃつた——!!)

おい。なんか顔が赤いぞ? 風邪でも引いてるのか?

「かいちよく、顔が真っ赤だよ?」

「そ…そうかしら? 暖房を強くしすぎたせいじゃない?」

「お嬢様。この部屋は別に暖房なんてつけてませんけど?」

呆れながら奥の部屋からやって来たのは、眼鏡を掛けたお姉さん。リボンの色から、彼女が最上級生である三年であることが分かる。

「初めまして、菜鞭さん。私は本音の姉の『布仏虚』と申します」

「こちらこそ初めまして。妹さんにはいつもお世話になってます」

「こちらこそ、いつも本音がお世話になってます」

「おね〜ちゃん……」

いやいや、割と本気で私は本音のお世話になってますから。

主に彼女の可愛さに癒されてます。あと、お菓子をくれたり。

「幼な妻……」

「「はい?」」

なんかスゲー事を口走つてなかつた?

(思いつきりご近所の奥さん同士の会話じゃない！ 緒理香ちゃんが奥さんになつたら……)

おくい？ 大丈夫ですか？

(いってらっしゃいのキスをしたり、帰ってきた時に『ご飯にします？ お風呂にします？ それとも…わ・た・し？ 的な事を言っちゃったりして♡)

完全に上の空だわ……もー知らね。

「どうしたんですかね？」

「お気になさらず。いつもの事ですから」

「ふくん……」

こりゃ、ほつとくが吉だな。うん。

「それよりも、紅茶いかがですか？ お茶請けのケーキもありますよ？」

「紅茶！ ケーキ!？」

布仏虚の紅茶と言えば、マジで絶品だってよく聞くからね！

紅茶を嗜むようなお上品な舌は持つてないけど、それでも本当に美味しいものとぐらいいは私にも分かる。

「私も飲む♡」

「はいはい。ちゃんと本音の分も用意してるから」

「虚ちゃん、私の分はっ!？」

「二あ。正気に戻った」

「私は最初から正気よっ!？」

嘘つけ。さつきまで妄想の世界に行ってた人間が何言うかね。

「うんしょ……つと」

「大丈夫ですか？」

「はい、なんとか」

高校にもなると、もう殆どの椅子には小ジャンプしないと座れなくなつたな。

小学生の時から私は背が低い方だったからなあ。

そのまんまの状態でここまで来てしまった以上、普段の生活から工夫をしていかないといけないのだよ。

「どうぞ」

「ありがとうございます」

まずは紅茶を頂きますか。

昔から猫舌な私は、お茶系は全部フーフーしないと飲めないのです。

「ふく…ふく…ぐくん」

お…お…美味しい♡♡

なんじゃこりや!? 今までそこまで多くの紅茶を飲んできたわけじゃないけど、それでも、この紅茶がぶつちぎりで美味しい事だけはハッキリとわかる!

例えるなら、お貴族のお嬢様方が薔薇が咲き誇る庭園で飲んでいる紅茶みたいな感じ?

「ん…♡ これは本気でほつぺた落ちる…♡」

ピキッ

「んん?」

何かが割れるような音が聞こえたような…。

「失礼しました」

虚パイセンっ!? なんか眼鏡のレンズが割れてるんですけどっ!?

しかも、それをなんでもないように予備の眼鏡と交換してるしっ!?

(不覚…! 一瞬だけ本気で緒理香さんの可愛さに見惚れてしまっ
た…!)

妙に先輩がプルプルしてるけど、下手に聞かない方がよさそうだな。

それよりも、お次はこのケーキを…パクリ!

「これ好き♡ 意識してなくても微笑んじやう♡」

ブボッ!!

今度は何かが噴き出るような音がつ!?

って、なんか先輩二人が鼻血出してるしっ!?

「虚ちゃん。ティッシュ」

「畏まりました」

澄ました顔で鼻ティッシュしても、普通にカッコ悪いだけですよ?

唯一、本音だけが何にもなっていない……なんでこっちにスマホを向けてるのかな？

「一部始終を全部録画して、しののん達に見せてあげないと……」

君は一体何を撮影してるのかな？

友情に熱いと言うべきか、それとも、君もそっち側だったのかと言うべきか。

「けど、よく私の分がありましたね？」

「急な来客に備えて、いつも余分に用意してあるのです」

「すげ〜……」

これが本当の従者ってやつか。

こいつあマジでリスペクトですわ。

リアルで尊敬できる先輩だな。

「どう？ 虚ちゃんの紅茶は美味しかったでしょう？」

「はい。生まれて初めて、紅茶を飲んで感動しました」

「うんうん。その気持ち分かるわ〜」

したり顔で言ってるけど、その鼻ティッシュが気になって仕方がないです。

まだ鼻血が止まらないの？

「緒理香ちゃん。これはあくまでも私からの提案なんだけど……」

へいへい。遂に言うんですね。あのセリフを。

「……生徒会に入ってみない？」

想像通り、ストレートに言ってきたな。

さて……と。どうしますかね……。

結局はこうなるのか・・・

「生徒会……ですか？」

「ええ。別に無理強いをするつもりはないわ。よかつたらでいいの」
よかつたら……か。

今までも、その言葉に何度騙されてきた事か。

「おりりくん……生徒会に入ろくよ」

「本音……」

その顔は反則だつて……。

今にも泣きそうな顔をされたら、思わず『うん』つて言いそうになるじゃん。

「こら。あまり緒理香さんを困らせたらダメよ」

「でも……」

「お嬢様も言っていたでしょう？ 無理強いをするつもりはないつて」

「うん……。ごめんね……おりりくん……」

「いや……気にはしてないけど……」

虚さんはこっちの味方っぽいけど、不思議とこの人の事も全面的に信用が出来ない気がする。

優しい人なのは間違いないんだけど、なんて言えばいいのかな……私の『勘』的なものが激しく警鐘を鳴らしてるんだよな。

「まだ聞いてなかったけど、緒理香ちゃんは、どこか入りたい部活でもあるのかしら？」

「入りたい部活か……」

前にも言ったけど、私が最も望むのは帰宅部だけだ。

だけど、ここではその選択肢を取れない。

ならばどうするのか最善なのか。

試しにここで、ちよつとした脳内シミュレーションをやってみよう。

もしも、私は普通の部活に入った場合。

まずは運動部。

球技系↓体格が小さいのでついていけない。論外。
ならばマネージャーは？↓絶対にマスコット扱いされる。これも
また論外。

陸上系↓私はマキバオーじゃないから無理。

水泳部↓残念。私はカナヅチだ。

格闘技系↓これも体格的な問題で論外。

文化系の部活ならばどうだろうか？

体の大きさとかは関係無いかもしれないけど、これと言って興味の
ある部があるわけでもない。

はあ……ダメだな。さつきから言い訳ばかりだ。

こんなんじや、前世の頃から何にも変わってない。

確かに生徒会と言う存在にはトラウマがあるけど、中学の時と今と
は全く環境が違うし、私の記憶が正しければ、癖はあっても理解はし
てくれる人物達であると認識している。

もしかしたら、これはダメな自分を脱却するいい機会なんじやない
のか？

それに……。

「あの……ちよつと質問なんですけど……」

「何かしら？」

「もしも生徒会に所属すれば、次からもこの紅茶とケーキが食べられ
たりするんでしょうか……？」

「そうね。仕事の合間とかの休憩の時には出るわよ？」

「やっぱりか……！」

心は男であっても、体は紛れもない女。

女としての本能が、この甘い誘惑に乗れと言っている……！

「ゴクリ……」

この紅茶とケーキをまた味わえるメリットは恐ろしくデカイ……
！

読者の皆には分からないかもしれないが、この二つにはそれ程の魅
力がある！

「は……」

「は？」

「入ります……生徒会に……」

「ほ……ほんと？」

「はい。おと……女に二言はありません」

「ホントにホント？」

「ホントですって……。そんなに何回も聞かれたら、逆に決意が鈍るんですけど」

私が楯無先輩の目を見ながらハッキリと言うと、いきなり虚さんが先輩の所まで行って、思い切りパチン！ と、ハイタッチをした。

「あ……私は何をして……」

「気持ちは一緒だったって事よ」

「おりりん……♡」

ほ……本音さん？　なんか凄く感極まっています？

今のやり取りに、そこまで感動する要素があったっけ？

「やった♡ 今日からおりんと一緒だ♡」

「わぷっ!」

きゅ……急に抱き着かないで……!

見た目に反して、とてつもない男泣かせのお胸様が私の顔を圧迫する……!

男の頃だったら喜びの余りに昇天していたかもだけど、生憎と東や千冬さんのお蔭で、もうその手の事には耐性が付いてしまっている。

つまり、今の私には単純に苦しいだけなのだ。

「本音……ギブギブ……!」

「わくっ!?! ごめんね〜!」

「大丈夫……気にしてない……」

酸素が足りなくなつて、白装束を着ている私の事を大きな川の向こう側から呼んでいる人達が見えたただけだから。

無駄にめっちゃ一杯いたのは気のせいだろうか？

「でも、なんで入ってくれる気になったのかしら？　なんだか迷っているようにも見えたけど」

「そうですね……。中学の時はどこの部にも所属とがしてこなかった

んで、この機会に帰宅部エースの座から降りようと思ひまして」

「それだけ？」

「それだけって言いますけど、割と帰宅部を捨てるのって勇気がいるんですよ？　だって、帰宅部のままだと放課後の時間を自由に使い放題なんですから」

「そう聞くと、なんだか魅力的に聞こえるわね……」

帰宅部か……何もかもが全て懐かしい……。

……別に死亡フラグじゃないからね？

「折角の高校生活なんですから、今までとは別の事に時間を使うのも悪くないんじゃないかと」

「……そうね。私も、先輩として、生徒会長として、緒理香ちゃんには色んな事を経験して欲しいわ」

「楯無先輩……」

なんだよ……今までは妹大好きなシスコン女なイメージが強かったけど、思ってる以上に真面目な人間だったんだな。

けど、当たり前だよな。いくらIS学園の生徒会長が実力で決定するとはいえ、それだけで今までやって来られるわけがない。

それ相応のカリスマだって絶対に必要にはなるんだろうし。

「けど、正式に入るにはどうしたらいいんですか？　本音からは、生徒会も部活動の一つとして認められてるって聞きましたけど……」

「その通りよ。IS学園では生徒会も立派な部活動。だから、入るには他の部と同じように、職員室に行ってから貴女の担任の先生に入学を貰って、それに自分の名前やクラスなんかを書いてから、また先生に提出すればOKよ」

「その辺は普通なんですわね……」

思ったよりも簡単そうじゃなかった。

問題は、ウチの担任が千冬さんだって事だけど、意外と教師をやっているあの人なら、二つ返事で書類をくれるだろう。

万が一、駄目だった場合は私の女神である山田先生にお願いしよう。

「たった今、思ったんですけど……こんな簡単に生徒会のメンバーを

決めても大丈夫なんですか？」

「それなら心配無用よ。基本的にIS学園の生徒会メンバーは、生徒会長の一存で決められるようになってるから」

「そうだったんだ……」

スゲーなIS学園生徒会。一体何処の独裁国家だよ。

「まだ時間はあるし、善は急げとも言いますから、今から早速、職員室に書類を貰ってきますよ」

「分かったわ。いつてらっしやい」

「私も一緒に行く〜！」

んな訳で、私は残った紅茶を一气飲みして、ケーキもパクリと全部食べてから、会釈をしてから一度、生徒会室を後にする事に。

・
・
・
・
・
・
・

二人が去ってから、楯無は急に今までの締りのある顔を崩し、いきなりニヤニヤ笑顔になった。

「これからは緒理香ちゃんも一緒かあ……。今まで以上に生徒会活動が面白くなりそうね〜……」

「そうですね。それには私も同感です。それに、直に話して分かりました。篠ノ之博士にどんな意図があるにしても、少なくとも緒理香さん自体はとても真面目で優しい少女であると」

「そうね……。篠ノ之博士の妹さんとは昔馴染みらしいからいいとして、それ以外にも二人もお友達を作れたのは、間違いなく彼女の優しさが大きいんだと思うわ。あと、すっごく可愛いし」

「全くですね」

遂には『可愛い』を否定しなくなった虚。

彼女も振り切ってしまったのだろうか。

「ところでお嬢様。実は緒理香さんの事を調べている時に非常に興味深い情報を入力したのですが」

「興味深い情報？」

「はい。実は……」

虚が凄く真面目な顔で眼鏡を上げる。

「緒理香さんが在学していた中学の購買部で、オリカちゃんグッズが発売されていたそうです」

「その話……詳しく聞かせて貰おうかしら？」

さつきまでの後輩想いなお前達はどこに消えた。

「では、まずはこちらの『オリカちゃん非公認ファンクラブ』のウェブサイトをご覧ください」

「早速登録ね」

この豹変っぷりを見た時、緒理香は何を思うのか。

今日も愉悦だ麻婆が美味い。

・
・
・
・
・

「そんな訳で、生徒会に入る為の書類ください」

「くださ〜い」

「お……緒理香が生徒会に入る……だと……!?!」

言われた通りに職員室に来たら、即座に千冬さんが戦慄してた。

（おのれ更識……! 一体何をどうして緒理香を籠絡したのだ……!）

はっ！ まさか……色仕掛けかっ!?!）

さつきから何をブツブツ言ってるんだ？

いいから早く書類を頂戴な。

「なんか織斑先生は忙しそうなんで、山田先生、書類をくれませんか？」

「いいですよ。確かこの辺りに……」

自分の机の引き出しを探ること数秒、すぐに例の書類は発見された。

「はい、これが入部届です」

「ありがとうございます。ここでササッと書いちゃってもいいですか？」

「構いませんよ。なんでしたら、私の机を使いますか？」

「いいんですか？」

「勿論です。仕事に使う書類とかはもう直してるんで問題無いですよ。えい」

「わっ」

いきなり山田先生に腋から持ち上げられて、そのまま彼女の膝の上に乗せられた。

かなり驚いたけど、なんか役得かも……。

「あ……ごめんなさい。つい……」

「気にしてないですよ。それよりも、早く書いちゃいますね」

サラサラサラくつとな。

記入箇所は少ないから、書くこと自体はすぐに終わる。

恨めしそうにこつちを見ている千冬さんさえいなければな。

「真耶め……！ 自然な流れで緒理香を自分の膝の上に乗せおって

……！ なんて羨ましいんだ……！」

拳を握りしめながら血涙を流す程ですか？

割と普通に怖いですけど。

「出来ました」

「はい、受け取りました。これで完了ですね」

「ありがとうございます」

再び腋から抱えられてから降ろして貰った。

その隙を狙って、今度は千冬さんが私を自分の膝に乗せようとしてきたが、私はマツハスペシャルで回避した。

「残念でした」

「うぐ……！」

そんな悲しそうな目で見るなよ……。

なんだかコツチが悪いみたいじゃないか。

「けど、まさか莱鞭さんが生徒会に入るとは思いませんでした」

「勧誘されたんですよ。最終的に決めたのは自分の意思ですけど」

「そうなんですか……。でも、私は偉いと思いますよ？ 頑張ってくださいね」

「はい！」

山田先生にまた頭を撫でられた……。♡

これだけでも、生徒会に入る事にして良かった。

「わ……私も偉いと思うぞ！ 応援してるからな！」

「あ……ありがとうございます……」

うわあ……必死になって点数を稼ごうとしてる。

でも、山田先生の後だと効果は薄いな。20点。

こうして、私は正式にIS学園生徒会の一員となった。

なんか状況に流されたっポイけど、未体験の活動ってのは、それだけでワクワクするから嫌いじゃない。

特に、生徒会の活動とかした事が無いから猶更だ。

でも……私の役職って何になるんだろうか？ やっぱ最初は雑用係とか？

私はお前の主人じゃない

「試運転？」

私が生徒会に所属をした次の日の朝。

皆が教室に入ったところで、既に教師まで来ていた山田先生と千冬さんに話しかけられた。

「その通りだ。緒理香の専用機登録は私達で済ませておいたが、学園側としてはちゃんとした起動データもあつた方がいい。それに、これからずっと世話になる機体なんだ。少しでも早く動かして慣れておくに越したことはないだろう？」

「それもそうですね」

「またもや千冬さんが教師をやっていることに感心しつつ、私は自分の腕に付いている白式の待機形態に目をやる。

（本当なら、お前の主は私じゃないんだよな……。でも、今はこうして私の元に存在している。東にどんな意図があるにしろ、こいつを無駄にしている理由はないし、無駄なままで終わらせたくもない）

東の元にいた頃にISの搭乗経験があると言っていたが、その殆どはシミュレーターを使ったものばかりだ。

本物のISに乗ったとしても、実際に空を飛んだことは一度も無い。

そんな事を出来るような環境では無かったしな。

だからこそ、ISに乗って空を飛んでみたいという純粋な欲求もある。

自己嫌悪をしたくなる程に俗な欲求だが、未知の領域へ行きたいと思うのは人間として当然のことだと思う。

「了解しました。で、いつするんですか？ 放課後？」

「そう慌てるな。目をキラキラさせて聞いてくる緒理香も可愛いが、まだ話は終わってないんだぞ？」

「はあ……」

しれっと変なことを言ってきたけど、こころは気にせず耳を傾ける。

「実はな、今回の試運転には別の目的も含まれてるんだ。というか、こっちの方が主目的と言った方がいいかもしれない」

「別の目的?」

話がよく見えないけど、私に何をさせる気なんだ?

「最近になってですね、IS委員会の方が若い内からISの才能を発掘しようという試みが出てきてるんです」

「いや……このIS学園にいる皆も十分に若いですよ?」

「私もそう思うのだがな、委員会の連中はもつと若い連中に注目してるんだ」

「それってまさか……」

余り聞きたくないような、聞かなきゃいけないような……。

「要は、小学生の頃からISの適性を調べて、小学校の必修科目にISを加えようとしているんだ。流石に本格的な授業ではないらしいが」

「英語やPCじゃないんだから、そんな簡単に……」

「別に今すぐにといいわけじゃない。将来的な話だ。いつになるかは完全に未定になっている」

私的には、『未定』イコール『しないのと同じ』なんだけど。

委員会や政府の『未定』って言葉ほど、信用出来ないものはない。

「その先駆けとして、まずは小学生女子専用のISスーツの試作が行われた」

「あ……なんとなく、何をするか分った気がする……」

「ですよね……」

山田先生が申し訳なさそうにする必要はないですよ。

少なくとも、先生は何も悪くないんですから。

「つまり、私にそのISスーツのテストをしろってことですよね?」

「そうなるな」

「やっぱり……」

んな事だろうと思ってたよ……。

でも、悔しいことに私サイズのISスーツが無いのも、また事実なんだよな……。

だから、専用機は持っていない、まだ肝心なISスーツは持ってい

ない。

「デザイン自体は学園でも支給しているスーツと同じらしいが、そのサイズがかなり小さくなっている。一応、お前のサイズは業者の方に教えておいたから、着る分には問題無い筈だ」

「なんで私の体のサイズを知ってるんですか……」

「愛の力だ」

「聞いた私がバカでした」

せめてそこは、歴戦の眼力で見抜いた的なことを言っただけで済ませよう。と、私は思っていた。しかし、

「だから、別に緒理香のISスーツ姿を愛でて、脳に全力で焼き付けてからオカズにしようだなんて微塵も考えてないんだからな？」

「……その一言で全部が台無しですね」

「なんだとっ!？」

どうして千冬さんは、己の評価を上げてから、自分自身の手で落とすような真似をするんだろうか？

もしかして、狙ってやってる？ この人なりのボケなのか？

「試運転は今日の放課後にしようと考えています。いつもならばアリーナの予約が一杯で無理なんですけど、今日はなんとか少しだけ時間が取れそうなので」

「逆を言うと、今日しか無理ってことですね」

「そうなります」

「それなら仕方がないですね。了解です」

「私達も全力でサポートしますから、莱鞭さんは難しいことを考えずに、ISを動かすことだけに専念してください」

「ありがとうございます」

なんて心強い一言なんだろう。

私の中で山田先生の評価は上がる一方だよ。

未だに落ち込んでいる千冬さんを放置して、私たちは一緒に教室に入ってしまった。

けど、この時の私達はまだ知らなかった。

この一連の会話を影から聞いていた人間がいたことを。

「フッフ……いい事を聞いちゃった♡ これは新聞部として頑張るしかないわね……」

・
・
・
・
・
・

放課後になり、予定通りに緒理香の専用機の試運転を行うことになった。

場所は第3アリーナで、ピットには千冬と真耶の二人だけがいる……答だった。

「なんでお前達がいる……!」

誰にも言っていないにも関わらず、なんでかここには教師二人の他に、箒とセシリアと本音、それから学年が違う楯無と虚までいた。

「生徒会長として、同じ役員の活躍は見届けたいですから♡」

「私は本音が粗相をしないように見張る為です」

なんて言っているが、明らかに建前だった。

虚に至っては、完全に妹をダシに使っている始末。

「ルームメイトとして、緒理香の事が心配でしたので」

「私は、代表候補生として、緒理香さんの専用機の事が気になったのですわ」

「おりりんのISスーツを見たくて来ました!」

本音以外は、上級生達と同じような言い訳をしている。

きつと、全員が同じ穴のムジナなのだろう。本音を除いて。

「今回の事は秘密にしておいたのに、どこで知ったんですか?」

「」「掲示板に貼ってあった学園新聞に書いてありました」「」

全員揃っての言葉に、千冬は一瞬で犯人を特定してみた。

「新聞部……恐らくは副部長の黛の仕業か……！」

「彼女、噂話とか大好きですからね〜…」

黛薫子。

二年生にして新聞部の副部長をしている少女。

普段は新聞部らしく、真実を伝える事に全力を注いでいるが、時と場合によっては記事を捏造する事も少なくない。

「ところで、今回の主役である緒理香ちゃんはどこにいるんですか？」

「アイツなら、まだ更衣室で着替えている最中だ」

それを聞き、全員が一齐に更衣室の扉を見た。

「あの扉の向こう側で……」

「緒理香さんが着替えている……」

「なんだかドキドキするね〜」

「うふふ……今から楽しみね」

「いけない……こんな事を想像しちゃ……」

まだ着替えには時間が掛かっているようで、その間に上級生組と下級生組の交流が行われていた。

「本音の姉君か……聡明そうなお方だな」

「メガネだからね〜」

「それは関係ないでしょうに……」

「まさか、こうして生徒会長と直に話せる日が来るとは思いませんでしたわ」

「私もよ。お互いに国の旗を背負っている以上、本来ならば試合以外で会話することは無いんでしょうけど」

少女達同士の会話が盛り上がっていると、遂に更衣室の扉が開き、着替え終わった緒理香がやって来た。

「えっと……着替え終わりました〜……」

恥ずかしそうに体を縮めながら歩いてきた緒理香は、彼女の体に合わせたサイズのISスーツを着用していた。

本来のSSサイズよりも更に小さくなっていて、非常に小柄な彼女の体にピッタリとフィットしていた。

「うう……見るのと着るのじゃ大違いだよ……。こんなにも恥ずかし

い物を普段から皆は着ているのかよ……。本気で尊敬するんですけど……」

物凄く恥ずかしそうに顔を赤くして、上目遣いで全員を見る。

「これで……いいのかな？」

余りの恥ずかしさに目に涙まで溜めていた緒理香は、想像以上の破壊力があつた。

つまり、何を言いたいのかというところ……。

ボンツッ!!^x5

こういう事である。

本音と真耶以外の全員が、見事に鼻から『愛』を噴出した。

「ええええええええええええっ!!」

いきなりの血の噴水に両手を上げて驚く緒理香。

目の前で出血沙汰が起きれば、誰だって似たような反応はするだろう。

「緒理香……それは反則だぞ……」

「緒理香さんの太腿……緒理香さんの二の腕……」

「や……やるわね……流石は私が認めた緒理香ちゃんだわ……」

「なんでISスーツは、こいつも破廉恥なデザインなんでしょうか……」
「……………」

箒は悶絶し、セシリアは血走った目で緒理香の体を眺め、楯無は『幼女万歳!』と書かれた扇子で顔を隠しながら鼻血を出し続け、虚に至っては目を逸らしながら文句を言いつつも、しっかりと薄目で彼女の事を見ていた。

千冬は立ったまま気絶していた。

「……っーか、なんで皆がいるの?」

「それは後で話します……」

「そーですか……」

聞かない方がいいのかもしれない。

真耶の溜息交じりの一言でそう悟り、取り敢えずは気にしないことにした。

「準備をしても?」

「はい。いつでも大丈夫ですよ」

「分りました」

全員の傍を通り過ぎようとすると、本音が突然のサムズアップ。

「おりりん。超可愛い」

「あ…ありがとう?」

喜んでいいのか分らない緒理香は、一応の礼だけ言っておいた。

全員から離れた場所まで歩いていき、立ち止まってから右腕に装着されているガントレットを左手で握りしめた。

(今の私はきつと、最低の恥知らずだ。他人の禪で相撲を取ろうとしてるんだから。だから、この瞬間だけで構わない……)

目を瞑り、静かに呟いた。

「私に力を貸してくれ……白式」

すると突然、緒理香の体が眩い光に包まれ、同時にその体を量子化したI Sが取り囲んでいく。

自分の体に『何か』が装着されていく感覚を覚えながら、緒理香は不自然なまでの安心感に包まれていた。

(なんでだよ……どうして……こんなの絶対におかしい……。どうして……私はこんなにも落ち着いているんだ……)

自分達の背後で光る存在によって我に返った面々は、すぐに背後に振り返った。

すると、そこにいたのは……。

「これが……私の……」

純白の装甲に身を包んだ緒理香の姿があった。

乱舞する白き刃

私が専用機…白式を纏うと、全員がこっちに注目してきた。
あんな派手な装着をしたんだから、当然と言えば当然か。

「それが…緒理香の専用機なのか…？」

「白式…って言うらしいよ」

「白…式…」

試しに手を動かしてグーパーをしてみる。

機体は何の違和感もなく動いてくれた。

(やっぱりおかし…)

幾ら、私のデータが予め束によって入力されていて、私に合わせて製作されたとしても、この白式を装着するのは今日が初めてだ。

大なり小なり違和感ぐらひは感じるのが普通の筈だ。

それなのに、さっきから全くと言っていい程に違和感を感じない。

まるで、この状態が当たり前であるかのように。

「見た感じでは高機動型の属する機体のようですけど…」

「背部にある非固定浮遊部位のウィングバインダーアンロック・ユニットがそれを表してるわね」

「そうですね。見た感じでは、機動力に極振りしているような印象を受けます」

「ってことは、装甲は薄いのかな？」

高機動型…か。

確かに、白式はかなりの機動力と運動性能を誇っている。

何故なら、この機体の武装はそれ程の機体性能がある事が前提と
なっているのだから。

「緒理香、何も異常などは無いか？」

「今のところは問題ないです」

「こちらでも、菜鞭さんのバイタルは正常を表示しています。勿論、機体
の方も問題ないようです」

「そうか…それならばいい」

一瞬だけ、千冬さんの顔が現役時代みたいになった気がする。

やっぱり、ISが関わるとこの人も真剣モードになるんだな。

(そう……何も問題は無い。問題が無いどころか、自分でも驚くぐらいに心が穏やかになってる)

こんなにも心が落ち着いていることは今までに一度も無かったかもしれない。

生まれて初めての感覚だ……。

「行けるか？」

「はい」

「よし。では、カタパルトに脚部を固定しろ」

「了解です」

超低空飛行をしてカタパルトまで行き脚を置くと、両脚部が勝手に固定された。

同時に、ステージへの扉が開き、巨大なシールドに包まれたアリーナの上空が見える。

「発進のタイミングは菜穂さんに任せます。心の準備が出来たらで構いませんよ」

心の準備……ね。

普通の初心者なら、ここで緊張を解す為に手の平に人の字を書いて呑み込んだりとかするんだろうな。

けど、今の私にはそんなのは不要だ。

心の準備なんて、白式を纏うと決めた時から出来ている。

「すうー……はあー……」

数回だけ深呼吸をし、息を整えてから前を向く。

「……菜穂緒理香。白式……行きます」

腰を低くし、カタパルトの衝撃に備えた瞬間、私と白式は初めての空へと飛び立った。

・
・
・

頭の中でシミュレーターをした時の事を思い出しつつ機体を制御して飛び出すと、いきなり無数の視線が私に襲い掛かった。

「……なんているんだよ……」

本来なら誰もいない筈の観客席には、大勢の生徒達でごった返していた。

まるで、後々に開催されるイベントの試合の時のようだ。

「あの……ピットの皆さん？」

『どうしました？』

私の通信に答えてくれたのは山田先生だった。

「なんで観客席が一杯になってるんですかね？」

『すみません……どうやら、今回の事が新聞部にバレてしまったみたいで……』

「ああ……」

それだけで何となく察しはついた。

新聞部と言えば、思いつくのはたった一人。

捏造大好きな黛薫子の仕業だろう？

あの手のキャラは、本当にどこで聞き耳を立てているか分からないからな。

『壁に耳あり、障子に目あり』とはよく言ったもんだ。

『莱鞭さん。織斑先生の提案で、訓練用ドローンを射出しようと思うんですけど、構いませんか？』

「訓練用ドローン？」

『はい。難易度に合わせて動きが機敏になったり、殺傷能力のないレーザー光線で疑似攻撃を仕掛けてきたりするんですけど。今回は初めてってことで攻撃はしないように設定しますけど……』

そうだな……ターゲット設定があると、こっちも色々やり易いかも知れない。

どうせ、後々には嫌でも本物を相手にするわけだし。

「そうですね、お願いします」

『分りました。では、訓練用ドローンを射出します』

通信の向こうでカタカタと操作するような音が聞こえてすぐに、私の目の前にホログラムで出来たドローンと思わしき物が複数出てきた。

成程、これなら片づける必要とかもないし、経費の削減にも繋がる。いざって時の危険性も無いしな。

「それじゃ、こつちも武器を出しますかね」

つつても、あるのは一つだけだろうけど。

「えっと……あった。これだ」

モニターを出して武器一覧を表示させると、そこにはポツンと一つだけ。

【雪片式型】

と、あった。

もうこれで疑いようがないな。

この機体は間違いなく、私が知っている白式だ。

「ポチツとな」

名前が書かれた場所をタップすると、私に右手に拡張領域に量子化された状態で格納されていた雪片が姿を現す。

その柄を握りしめた瞬間、私の意識が急にクリアになる。

ドクン……

心臓が大きく鼓動し、途端に周囲の歓声が聞こえなくなっていく。こつちを牽制するように小刻みに動くドローンの動きがスローに見える、遂には止まって見えるようになった。

(頭が……澄み切っていく……)

心臓の動きは段々と激しさを増していき、体が熱くなっていく。無意識のうちに私は雪片式型を腰に当てて、居合の構えを取っていた。

(私は刃……一振りの剣……！)

そして、私は己の体が赴くままに体を動かした。

・
・
・
・
・
・

「居合の構え……?」

ピットにあるモニターでステージの様子を見ていた全員は、緒理香の動きに驚きを隠せなかった。

「緒理香さんは何か武道を嗜んで……?」

「いや……私の記憶が正しければ、そんな事は無かったと思うが……」
雪片を握りしめた時から急に雰囲気が変わり、モニター越しでも充分に伝わるほどに鋭くなっているのが分った。

そんな中、千冬だけが緒理香の目をじっと見つめていた。

「まさか……入っているのか……?」

この場で唯一、千冬だけが見えているもの。

緒理香の瞳から迸る紫電のような、火花のようなもの。

「なっ……!?!」

「速いっ!?!」

刹那、緒理香の姿が消えたと思ったら、一番近くにいたドローンの背後にいた。

既に緒理香は抜刀し終えた後で、右手に持った雪片を斜め上に持つていつている。

ドローンは真ん中から横一文字に切り裂かれ、元の量子になって霧散した。

「い……いつの間……」

剣を嗜んでいる筈も、暗部として鍛えている楯無でさえ、先程の緒理香の動きを全く捉えられなかった。

千冬だけが辛うじて見る事が出来たが、それでも一瞬だけだった。

そこから始まる、緒理香の剣舞。

次は右にいたドローン目掛けて下段で構え、数歩で攻撃範囲まで移動し、斬り上げるよう一撃。

流れるような動きでそのまま、今度は近くに来ていたもう一体のドローンに刃を振り下ろす。

一連の動作で二体のドローンを破壊してみせた。

「綺麗な動きだわ……全く無駄がない……」

「まるで流水のような動きですね……」

楯無が本気で褒める。

いつもは飄々としていても、本当は自分にも他人にも厳しい彼女がここまで褒めるのは珍しかった。

虚も、緒理香の豹変振りに驚きつつも、その動きに魅了されていた。

『次……』

眼前の目標を撃破した緒理香は、次のターゲットを選定する。

突如、緒理香……というか、白式が急加速して、少し離れた場所にいるドローン目掛けて突撃する。

「あ……あれはっ!?!」

イグニッション・ブースト
「瞬時加速っ!?!」

「う……嘘でしょっ!?!」

「代表候補生レベルになって初めて習得可能な高等スキル……!」

「莱鞭さんは、もう既にそこまでの域に達して……!?!」

緒理香はドローンの少し斜め上に向かい、その流れで体全体を大きく回転させるように刃を振るい、真つ二つにした。

「お……織斑先生! 緒理香ちゃんのIS適正はどれぐらいなんですかつ!?!」

「……緒理香の適性値は……Bだ」

「ビ……B……?」

「Bと言えば……」

「高くもなく、かといって低くもない値……」

とつさに楯無が千冬に緒理香のIS適正について問い質したが、帰ってきた答えは意外過ぎるものだった。

「Bなのに、あんな動きを……?」

「適性値だけで全てが決する程、ISは甘くは無い。それは代表候補生や国家代表であるお前たちが一番よく分っているんじゃないのか?」

「ええ……」

「そう……ですわね……」

千冬が言い聞かせるようにセシリアや楯無を見据える。

楯無は真つ直ぐに見返し、一方のセシリアは気まずそうに目を逸らす。

「どれだけ適性値が高くても、技量が伴っていないくは宝の持ち腐れになるし、その逆も然りだ。私が知っている操縦者の中には、CランクでもAランク以上の実力を持つ者は多数いた」

「緒理香さんもその類であると……?」

「だろうな。アイツの場合は、技量で全てを補っているのだろう。BランクならばISを十全に動かすことが可能だ。後は己の腕がモノをいう。そのいい例が緒理香だ」

千冬が説明をしている間も、緒理香は次々とドローンを撃墜し続け、後はもう数体だけとなっていた。

・
・
・
・
・
・
・

(なんだろう……これ……)

右手で雪片を払いドローンを切り裂く。

(まるで自分の体じゃないように、自分の体が思い通りに動く……！)
そのまま体を回転させ、背後にいたドローンも一緒にぶつた斬る。
(次にどうするのが正しいのか、不思議と瞬時に判断出来る！)
突き攻撃でドローンを粉碎しながら、突撃して向こう側にいたドローンも一緒に貫く。
(すっごい疲れてる筈なのに、まだまだ全然いける気がしてならない！)

最後の一体に向けて、雪片をぶん投げてぶつ刺した。
(ISを動かすのが楽しくて仕方がない!!)
雪片が量子化し、私の手元に戻ってくる。
それを握りしめて、構えを解いた。

「はあ……はあ……はあ……」
終わったと思った途端に、ドッと疲れが押し寄せてきた……。
早く戻って休まくりたい……。

フラフラになりながら、私はピットに向かって戻っていった。
(あ……そーういや、零落白夜を使い損ねた……)

・
・
・
・
・
・

満身創痍といった感じでピットまで戻ってきた緒理香だったが、到着した途端にISよりも先に緒理香自身の方が力尽きたようで、白式が強制解除された。

「あ……」
「緒理香！」

ふらついて倒れそうになった緒理香の体を、千冬が急いで駆け付け

てからキャッチした。

緒理香の体は汗だくになっていて、息も絶え絶えになっている。疲弊しきっていて、今にも意識が途切れそうだ。

「千冬さん……私……」

「よく頑張ったな。最初にしては上出来すぎる動きだったぞ」

「はは……」

「だが、何でお前が『ゾーン』に……って、緒理香？」

「すー……すー……」

精も根も尽き果てたのか、緒理香は千冬の腕の中で眠ってしまった。

いつものような変な笑顔ではなく、まるで妹を慈しむ姉のような微笑みを浮かべて、緒理香の事を横抱きにして立ち上がった。

「織斑先生、ゾーンって……」

「超一流のアスリートの、更にその一部にだけ到達出来る究極の領域。精神が極限の超集中状態に入る事を言う。別の言い方をすれば『無我の境地』ってやつだ」

「無我の境地……」

箒も武を志す者として、ゾーンのこと自体は知っていたが、それを実際に見たのは今日が初めてだった。

セシリアと楯無も同様で、現実で見たのはこれが最初だった。

「現役時代は私もゾーンに入れはしたが、今では難しいな……」

「何ですか？」

「ゾーンは一度入ると、その圧倒的な力をもう一度体験したいという欲求が生まれ、それが却って雑念となつてゾーンへと到達出来なくなる。雑念はゾーンにとつて最も忌むべき存在だからな」

「織斑先生にもそんな事が……」

「私だって人間だ。雑念ぐらい幾らでも生まれるよ。今となつては特にな」

そう呟く千冬の顔には、心なしか寂しさが見えていた。

「なんで、おりりんがゾーンに……」

「それは私にも解らない。ただ……」

「ただ？」

「いや：…なんでもない。私は緒理香を保健室に連れて行って休ませる。お前達も早く帰れよ。山田先生、後は頼むぞ」

「はい。任せてください」

千冬は緒理香を抱えたまま、その場を後にした。

この日、少女達の中で緒理香に対する評価が変わった日だった。

小さく幼い少女だと思っていた彼女が、実は自分達と同じぐらいに強い闘志を秘めた存在であったのだと。

この日を境に、今まで以上に緒理香の事を好きになっていくヒロインズだった。

余談だが、千冬は緒理香を保健室に連れて行った時、本気で送り狼になるかどうか迷ったという。

その後のお話

緒理香の専用機の試運転が終わった後。

保健室で少し休憩をしたのちに、自室に帰ってからベッドにてスヤスヤと熟睡していた。

そんな緒理香の傍で寝顔を見ているのは、彼女の幼馴染にしてルームメイトでもある箒。

実は箒が千冬に頼まれて、緒理香を部屋まで運んできたのだ。

「すー…すー…」

穏やかな寝息を立てている緒理香の頭をそつと撫でながら、箒はさつきアリーナで見た光景を思い出ししていた。

（まさか、緒理香にあんな才能が隠れていたとは思わなかったな……。昔から、私や一夏と一緒に道場には来ていたが、ずっと端の方で見学ばかりをしていたからな。いや、それもある意味では見稽古にはなっていたのか？ まあ、それはそれとして……）

緒理香が寝返りを打ったことで掛け布団が少しだけずれてしまったので、彼女を起こさないようにながら、静かに掛け直した。

（緒理香がステージで剣舞を披露していた時から、ずっと気になっていた。どこかで見たことがあるような体捌きや剣筋。ずっとその動きが何だったのか思い出せず、まるで魚の骨が喉に刺さったかのようなもどかしさを感じていたが、今になってやっと思い出した）

ふと、箒は自分のカバンからはみ出している自分の竹刀に目を向けた。

（あの緒理香の動き、あれは……千冬さんと凄く似ていたんだ。いや、似ているとか、そんなレベルじゃなかったな。あれは完全に『千冬さんの動き』だった）

再び、寝ている緒理香の方を向く。

ついさつきまで、あれ程の鬼気迫る剣技を披露していたとは思えないほどに、可愛らしい寝顔を見せている。

（自己流のアレンジが入ってはいたが、所々に篠ノ之流の技術が見え隠れしていた。確かに、緒理香は千冬さんの剣を間近で見たこともあ

るし、篠ノ之流の事もそれなりには知っている。だが、それでもあれ程の腕前になるものなのか？)

色々と考えているうちに、箒はある可能性に辿り着く。

(いや…待てよ？ 緒理香は姉さんと一緒に暮らしていたんじゃないか。だとしたら、姉さんから篠ノ之流剣術を習っていた可能性は高い。インドア派に見えて、姉さんの剣の腕は千冬さんに匹敵するからな)

自分の中で疑問が氷解すると、途端に難しい顔が消え、掛け布団からはみ出している緒理香の手をそつと握った。

(きつと、姉さんに剣を習うことで一気に緒理香の才能が開花したに違いない。緒理香なら十分に有り得る話だ。だが、あの試運転が終わった直後のアリーナはすごい盛り上がりだったな……。歓声が凄すぎて、まるで何かの祭りのクライマックスのようだったぞ……)

どうやら、見た目の可愛さとISに乗った時の凛々しさのギャップが年頃の女子高生たちの心にダイレクトヒットしたようで、一気にそのファン数を増やした。

本人は全くその自覚は無いが。

「だが、心配は無いぞ。例え、誰が何を言おうとも、私だけは何があっても緒理香の味方であり、ずっと傍に居続けてやる。緒理香は私と姉さんを本当の意味で繋げてくれただけでなく、家族とも再び一緒にしてくれたからな……」

決意と慈しみを秘めた箒の目には、もう何の曇りもない。

ただ、己がやるべきだと決めた事をやるだけだ。

この後、箒は誰も見ていないのをいい事に、しれつと緒理香のベッドに潜り込んで添い寝をした。

・
・
・
・
・
・

部屋に戻ったセシリアは、すぐに服を脱いでからシャワー室へと入っていった。

別に汗を掻いた訳でもなく、かといって体が汚れたわけでもない。緒理香の戦いを見て、昂ってしまった自分の中の『炎』を少しでも落ち着かせるためだった。

セシリアが代表候補生に上り詰めたと同時に彼女の中に生まれた、一人の『戦士』としての『闘志』。

緒理香の戦いっぷりが『淑女』としてのセシリアを奥に引っ込ませて、『戦士』としてのセシリアを引きずり出してしまった。

(なんて……なんて雄々しくて……美しかったのでしよう……。あの剣捌きは正しく疾風。風の剣と言っても過言じゃなかった……。ああ……ああっ！ なんとということかしら！ あんなにも可愛らしい、あんなにも慈しみたいと思っている緒理香さんと、私は心から戦いたいと思っている！ 全身全霊をかけて、心行くまでお互いの力と力をぶつけ合いたいと願ってしまっている！)

別に、闘争本能自体は否定される事も卑下される事もない。

人間も生物である以上は、闘争心ぐらゐは誰もが当たり前のように持っているものだ。

だが、世の中にはその『闘争心』が人並み以上に高い人間も存在している。

普段から『お嬢様』として振る舞っているセシリアも、実はそんな人間たちの一人だった。

幼い頃に事故で両親を亡くして以降、彼女はずっと親との思い出が詰まった家を守るために必死に頑張ってきた。

その過程で様々なトラブルにも見舞われたが、それらを全て自分の頭脳と知り合い達の助力で乗り切ってきた。

自分自身の力をつけるという意味で、セシリアはフェンシングを初めとする『相手と競う競技』にのめり込んでいった。

そんな時に現れた『IS』という存在。

勿論、彼女はすぐにISの適性検査を受け、それにより非常に高い値を出し、そのままISの世界へと入っていった。

過酷な訓練を乗り越えていく内に、セシリアの中にある『炎』は少しずつ大きくなっていき、彼女が代表候補生となつて専用機を受領した時に最大となる。

そして知った。自分もまた一人の『戦士』だったのだと。

誰かと戦うことを至上の喜びとする人種なのだ。

(どうしましょう……私の心の中が緒理香さんで埋め尽くされてしまいましたわ……。入学式の時に緒理香さんを初めて見た時に感じたトキメキは間違いじゃなかった……！ 緒理香さんこそが、私がずっと探し求めてきた理想の人物……♡)

いつまで経つても体の火照りが消えない。

それどころか、緒理香の事を考えれば考える程に、自分の体が燃え上がっていくようだ。

「緒理香さん……私は……貴女の事が……♡」

・
・
・
・
・
・
・
・

試運転が終了した後、生徒会メンバーは生徒会室へと戻ってきていた。

だが、彼女たちの間にはいつものような楽しげな会話は一切なく、静かで重苦しい空気だけが流れている。

あの明るい本音でさえ、今は沈んだ表情で沈黙を貫いていた。

「あれが緒理香ちゃんの本性……なのかしらね……」

「そんなことない！」

「本音……？」

いつもの本音では絶対に出さない叫び声。

その痛々しい声を聞いて、流石の楯無も冗談を言う気は無かった。「確かにおりりんは少しツンツンしてる所もあるけど……でも……でも……本当はとっても優しくて、可愛い女の子なんだもん！ それはかいちよーもお姉ちゃんも知ってるでしょっ!？」

本音の必死の訴えに、上級生二人は目を伏せた。

「そうね……あんなにも美味しそうに紅茶を飲んで、ケーキを食べていた子を疑うなんて、どうかしてるわね……」

「……今のは完全に私の失言だったわ……ごめんなさい」

まだ少しだけの付き合いだ、それでも彼女たちは知っている。

菜鞭緒理香という少女は、自分の背の事や胸の事なんかを人並みに気にして、甘い物には目がない、どこにでもいる普通の少女であることを。

「図らずも、今回の事を多くの生徒達が目撃したせいで、確実に生徒達の中で彼女に対する態度の変化が出るでしょうね」

「そればかりは致し方がないかと。あれ程の光景を自分の目で見てしまえば、誰もが何かを思うでしょうし」

「そうね。けど、私達だけはいつもと変わらない感じで接しましょう。同じ生徒会の仲間として」

「そうですね」

「うん！」

流された形で生徒会へと入った緒理香ではあったが、その選択は間違いではなかったようだ。

少なくとも、ここで彼女は大切な理解者を得たのだから。

（もう緒理香ちゃんの事を疑うのは止めましょう。これからは、あの子の事を守るために、あの子の事を調べるんだ……!）

密かに楯無が決意を固める中、本音もまた別の事を考えていた。

（あの時のおりりん……なんだか、ISを動かしてるってよりも、ISに動かされてる感じがした……。大丈夫だよ……おりりん

……)

普通なら一笑に付すような考えだが、ISに限ってはそうではない。

近年の研究により、ISのコアには何らかの『意志』のようなものがあるとされている。

だから、本音の考えた事は一概に間違いとは言いつれないのだ。

(どうか…今だけはいい夢を…緒理香さん)

そう願わずにはいられない虚であった。

・
・
・
・
・
・

その日の夜。

千冬は自分の部屋で電話をしていた。

「あれはどういう事なんだ……!」

『あれって?』

「とぼけるな! 見ていなかったとは言わせんぞ! 束!!」

通話相手は束だった。

だが、その会話内容はお世辞にも親友同士の穏やかなものではない。

「あの動きも十分に驚いたが、それは今はどうでもいい。けどな、アレだけは誤魔化しようがない!」

いつもの冷静な千冬ではなくなり、感情的に激昂していた。

普段の彼女を知っている者が見れば、驚きの余りに立ち尽くすかもしれない。

「他の連中は見逃していたが、私だけは見ていた。緒理香は：

雪片を握った瞬間にゾーンに入っていた！」

『つばいね。私もずっと『切っ掛け』を探していたけど、まさか『兵器を触る』ことがスイッチになってるとは思わなかったな』

『切っ掛け……？ スイッチ……？ お前は何を言っているっ!？』

『でも、お蔭で安心したかな』

『なに……？』

『あの時、おーちゃんは白式を纏ってもゾーンには入らなかった。でも、雪片を握りしめた瞬間、突如としてゾーンへと入った。それってつまり、おーちゃんが身を挺して証明してくれたってことだよ？』

『ISが兵器じゃないって』

『お前は……』

電話の向こうの束は、とても穏やかで晴れ晴れとした口調だった。

まるで、今まで解けなかった問題が解けた学生のように。

『お前は何を知っている！ 何を言っているんだ！』

『ねえ……おーちゃん』

『……なんだ』

『おーちゃんはさ、おーちゃんの事をどんな風に思ってる？』

『決まっている。緒理香は私にとって掛け替えのない存在だ』

『それじゃあ……ダメだね。全然ダメダメ。全く足りない』

『なん……だと……？』

『私はね、おーちゃんの為なら全世界を敵に回しても、全人類を敵に回しても構わない。私にとって、おーちゃんはそれだけの価値があるし、それだけの決意と覚悟が私にはある。おーちゃんはどうか？ それだけの覚悟がある？ おーちゃんの為なら全てを敵に回す覚悟があるの？』

『それは……』

『この際だからハッキリと言うけど、その程度の覚悟も無いのにおーちゃんに近づくのは止めた方がいいよ。私はね、おーちゃんを守る為なら箒ちゃんだって喜んで敵に回すよ。おーちゃんはあるの？』

おーちゃんの事を守るためにいつくんを敵に回す覚悟が』

『……なんで……お前はそこまで……』

『おーちゃんにはそれだけの価値があり、この世の誰よりも幸せになる資格がある。だって……あの子は……』

「あの子は……?」

『ううん。なんでもない。まだ話すには早すぎるし、今のちーちゃんに聞かせるべき事じゃない』

そこまで言われて、初めて千冬は沈黙した。

だが、すぐに顔を上げて虚空を睨み付ける。

「お前の思惑は分らないが、これだけは言っておく」

『なにかな?』

「私はこれからも、今までと同様に緒理香の傍に居続ける。例え、何があろうとも緒理香から離れるつもりはない! 自分でも詳しく説明出来ないが、私の中の『何か』が叫んでいるんだ。緒理香が大切な存在だと。緒理香の事を守りたいと!」

『……そう。なら、私に見せてよ。ちーちゃんなりの『覚悟』ってやつをさ』

「ああ……存分に見ればいいさ。そして、いつの日か必ず聞かせて貰うぞ。お前が知っている緒理香の『全て』をな」

『いいよ。今度会った時、ちーちゃんに変化が見られたら……ね』

「変化……」

『んじや、おやすみ。おーちゃんと箒ちゃんの事、よろしくね』

通話が切れ、電子音だけが耳に響く。

携帯をベッドの上に投げて、テーブルの上にある缶ビールを自分のおでこにくつつける。

「覚悟ってなんなんだ……。お前の過去には何があるっていうんだ……緒理香……」

そう呟きながら携帯の壁紙を見る。

そこには、楽しそうに笑っている中学時代の制服を着た緒理香がいた。

どんな体になっても筋肉痛は地獄である

「あ〜：う〜：」

「ほ…本当に大丈夫なのか？」

「だいじょくぶ〜：」

ども、只今、白式の試運転でテンションを上げ過ぎて無茶をしてしまった結果、見事に次の日に全身が筋肉痛となってしまうた、お馬鹿さんな緒理香ちゃんです。

軋む体を頑張つて起こした後、箒に手伝つて貰う形で歯磨きや着替えをして貰った。

うう…：我ながら、なんて情けない醜態を晒しているんだ…：。

「いつ触つても、緒理香の髪はサラサラとしているな」

「そお〜？」

「ああ。こうして櫛で梳いても、全く引つかからない。凄く結びやすいぞ」

「ふ〜ん…：」

束もよく、私の髪を結んでくれる時に同じようなことを言っていたな。

やっぱり姉妹なんだな…：つて、なんか箒の手が止まってませんかね？

「な…：なあ…：…緒理香？ 一つ提案があるんだが…：」

「なに？」

「た…：偶には違う髪型にしてみるのはどうだろうか？ いい気分転換にもなるぞ〜：」

「違う髪型ねえ〜：…：」

つつても、私はどんな髪型があるのかよく知らないしなく。

私知ってるのはアニメとかでよく見る髪型しか知らない。

ツインテールの他には、箒がよくしてるポニーテールにサイドテール、三つ編みに〜：ツースайдアップなんてのもあったよな？

「よかつたら…：なんだが、私とお揃いのポニーて〜んじや、ツースайдアップでお願い」…：分かった…：」

え？ 今、なんか言いかけてなかった？ 私の気のせいかな……。
(お揃いの髪型にするのは叶わなかったか……。でもまあ、緒理香の髪を思う存分に触れただけでも十分だ！)

落ち込んでいるかと思いきや、また急に元気になりよったぜよ。

女子高生はコロコロと表情がよく変わるけど、箒も例外じゃなかったって事か。

・

・

・

・

・

・

・

「世話を掛けるねえ〜…」

「それは言いつこなしだぞ。緒理香」

「そうだね……」

食堂で朝食を食べ終えた私たちは、いつものように自分達の教室へと向かっていった。

と言っても、実際に歩いているのは箒だけで、肝心な私はというと、彼女の背中におんぶされています。

いつもならば絶対にしないことだが、今回ばかりは背に腹は代えられない。

全身筋肉痛のお蔭で、まともに歩く事すらままならない私は、仕方なく箒の『おんぶをしてやろうか？』という提案を受け入れた。

自室を出て食堂に向かうまでの道中もおんぶをして貰って、めっちゃ恥ずかしい思いをしました。

「こりゃ、この筋肉痛が完全に治るまでの間は、箒のお世話になりそうだな〜。いや、マジで申し訳ない……」

「気にするな。私たちは幼馴染でルームメイトじゃないか。困った時

はお互い様だ」

「箒……」

ああ……ヤバいな……。

箒の優しさが本気で身に染みる……。

こりや、一夏には勿体無いわ。ISのメインヒロイン(?)は伊達じゃないって事か。

そう……ここまではいいんだ。ここまではな。

私の筋肉痛に関しては、箒とかにフォローをして貰えば、なんとかなる。

それとは別の問題が、今の私に降り注いでいる。

「あっ！ 菜鞭さんの髪型が変わってる！」

「ツーサイドアップ……可愛いなあ……♡」

「なんかおんぶされてるけど、どうしたのかな？」

「どこか痛むとか？ どうしよう……」

さつきからずっと、他の生徒達が一樣に私に注目してくるのはなんでだろう？

もしかして、昨日の白式試運転(笑)を見られたせいかな？

自分でも驚くような動きをした自覚はあるけど、そこまで騒ぎたてるような事か？

「緒理香さん！ 箒さん、おはようございます！」

後ろから、妙にテンションが高いセシリアがやってきて挨拶をした。

この子って、こんなにも元気一杯なキャラだったか？

「あ……ああ、おはようセシリア」

「おはよう……」

「緒理香さん？ どうしたんですの？ なにやらお元気が無いように見受けられますが……。もしや、箒さんにおんぶされていることと関係が？」

「まあな。別にそこまで深刻な話じゃないんだ。単に昨日の一件せいで筋肉痛になってしまっただけさ」

「まあっ！ 筋肉痛ですよっ!?!」

「うん……なんか恥ずかしい姿を見せちゃってるね……あはは……」

「そんな事はありませんわ」

「セシリア？」

また急に真剣なお顔になっちゃった。

「あれだけの激しい動きをすれば、どれだけ体を鍛えていても多少の筋肉痛になるのは当たり前。特に、緒理香さんのように小柄な人は全身に掛かる負担も大きいでしょうから、私達以上に様々な部位が筋肉痛になっても不思議じゃありませんわ」

「おお……」

なんかセシリアから説明をされてしまった。

流石は学年主席で代表候補生だけはあるな。

一瞬だけ、本気でセシリアを尊敬したよ。

「私と箒さんは、お互いにクラス代表補佐。私も緒理香さんの筋肉痛が完治するまでは喜んで生活の補助をしますわ。いいですわよね？」

「あ……ああ……」

「では、緒理香さんの鞄は私が持ちます」

「ありがとね」

……セシリアって、こうもグイグイとくる女の子だったか？

昨日までとは別の意味で積極的になった気がする。

（セシリアの奴……何かが変わった？ こいつもまた、私と同様に昨日の緒理香を見てなんらかの心境の変化でも起きたんだろうか……）
んで、箒もまたセシリアを見ながら考え込んでるし。

今日はなんだか皆して変だぞ？

そんな事を考えてる間に、いつの間にか教室に到着。

ここまでする間も、すっごい注目されてました。

確実に入学式の日の数倍は注目されてたよね。

ガラガラガラ〜と教室の中へと入ると、またもや視線のマシニングが。

「」「菜鞭さん!!」「」

「うおっ!？」

きゅ……急に教室内にいた皆が押し寄せてきたあつ!?

「昨日のアリーナでのやつ、マジで凄かったよ!!」

「小さな体に無敵のパワー……最高だね!」

「人は見た目に寄らないってよく言うけど、菜鞭さんの場合は寄らなさすぎでしょー!」

「菜鞭さんをクラス代表にして大正解だったね!」

「うんうん! これなら今度のクラス対抗戦も大丈夫だよ!」

「やっぱり、美幼女は最高だぜ!」

すっごい……すっごい来てるよ……。

この無駄な熱狂ぶりはなんなんだ……?

何が君たちをそこまで熱くさせる?

「お前達! 緒理香は今、筋肉痛で苦しんでいるんだ! 少しは大人しくしろ!」

「そうですね! 皆さんの言いたい事は解りますけど、こんな風に一斉に押し寄せたりしたら、緒理香さんにご迷惑ですわよ!」

クラス代表補佐あ〜!

いいタイミングでいい事を言うじゃないかあ〜!

もしもこれが恋愛ゲームなら、今の私の中で二人に対する好感度がグリーンと上昇したぞ!

「え? 筋肉痛?」

「そっかあ……そうだよね」

「あれだけ動けば無理もないかあ〜……」

「りょーかい。私たちのせいで菜鞭さんを嫌な目に遭わせるのはダメだよね」

「何か困ったことがあったら、なんでも私たちに言ってよね!」

「いつでも力になるからさ!」

おお〜!!!

なんて良い奴等なんだ…皆…。

皆の優しさに私が泣いた。

「おはよ〜! って、どうしたの?」

おっと。ここで私の嫁候補の一人である本音のご登場ですか。今日も『のほほん』ってしてますね〜。

「おりりん？　なんでしののんにおんぶされてるの？」

「まあ……話せば短いんだけど……」

「短いんだ」

カクカクシカジカ。

カクカクウマウマ。

「えっ!?　筋肉痛っ!?」

「にやはは……情けない姿を見せております……ハイ」

「だ……大丈夫なのっ!?」

「一応はね。病気とかじゃないから、私の頑張り次第でどうとでもなるよ」

「……無茶とかしちやダメだからね？」

「うん。それはちゃんと分かっている。ありがとう」

今、本音が『可愛い』から『美人』に変わった気がする……。

はは……もしかしたら、私が本音を攻略するんじゃないやなくて、本音に私が攻略されるかもしれない……。

(これはもしや……)

(とてつもなく強大なライバルの出現ですのっ!?)

朝っぱらから青春群像劇を繰り広げていると、教室の扉が開かれて先生たちが入ってきた。

まだ予冷は鳴ってない筈だから、時間よりも早く来ただけかな？

「おはようございませす、皆さん」

「おはよう……緒理香？　なんで篠ノ之におんぶされている？」

もうこれ何回目だよ……。

今のところ、全員が聞いてきてないか？

「これはですな〜」

もう面倒くさいので、一気に省略。カクウマ。

「筋肉痛ですか。IS操縦者ならば誰もが一度は必ず経験することですね。特に初心者とかは」

「私も、訓練生時代にはよく筋肉痛になってましたわ。だから、緒理香さんのお気持ちはよく理解出来ますの」

ソーナノカー。

幾ら、IS側にパワーアシスト機能があるからと言って、あんなデカイ機械の塊を身に付けて体を動かすんだから、体にはかなりクるよなく。

「織斑先生…？ いきなりスマホを出して、どうしたんですか？」

「そんなの決まってるだろ…今すぐに119に繋いで、緒理香を病院に入院&手術をさせるんだ!!」

「えええええ——!?!」

いきなり何を言い出すんだ、この人は——つ!?!

「そんな事をしなくても、暫く安静にしていれば大丈夫ですよ!」

「何の根拠があつてそんな事を言っている! 私の可愛い緒理香に万が一のことがあつたらどうする気だつ!?!」

「筋肉痛で起きる万が一の事つてなんなんですかつ!?!」

だな。私も詳しく聞きたいわ。

「まだ実技系の授業は有りませんし、座学なら問題なく授業を受けられます…よね?」

「はい。それぐらいなら全然大丈夫です」

それぐらいの事は流石に…ねえ?

全身が筋肉痛だからつて、勉強が出来ない程に酷いつて訳じゃないし。

「ほ…本当か? 本当に大丈夫なのか?」

「そう言ってるじゃないですか。少なくとも、実技の授業が始まるまでには絶対に完治させますよ」

「ううう…なんて健気なんだ…。私の事を心配させまいとして強気に振る舞つて…矢張り、緒理香こそが私の嫁であり女神だ…」

この人もこの人で、朝っぱらから何言つてんだ?

酒の飲み過ぎで遂に頭がイカれちまったのか?

「「「あ」」」」

予鈴が鳴った。

もうそろそろ席に着かないと。

「そつと椅子に降ろすからな」

「お願い」

気遣いMAXな筈のお蔭で、私は殆ど痛みを感じないまま椅子に座れた。

いつの日か絶対にこのお礼はしないと。

勿論、セシリアにもね。

「織斑先生。そろそろ朝のSHRを始めてください」

「ん？ もうそんな時間か？ 私が緒理香の可愛さに耽っている間に時間が過ぎてしまっていたんだな」

素面でそんな台詞を普通に言えるって、別の意味で凄いわ。

そういや、いつもとは違う私の髪型に対して、誰も何も言ってこなかったな。

そこまで気にすることじゃないって事か？

(さつきからずつと我慢をしてスルーしてきましたけど……)

(ツーサイドアップにしたおりん……)

(悪魔的に可愛いぞ!! 一体どこまで私の事を魅了すれば気が済むんだ!)

ん？ 気のせいかな、千冬さんと本音とセシリアの顔が赤くね？

今日ってそんなにも暑い日だったか？

牛乳はいつも裏切る

「大丈夫？ おりりん」

「な……なんとか……」

放課後になり、生徒会役員である私は本音と一緒に生徒会へと向かった。

箒とセシリアは部活に行っている為、当然のように不在。

今、私は本音に手を引かれるように廊下を歩いていった。

「これからも箒におんぶして貰う訳にもいかないしな……。リハビリだと思つて、少しは自分の足で歩くこともしないと……。いたた……」

一歩一歩と足を動かす度に下半身に全体に激痛が走るけど、本音と手を繋いでいるお蔭で、辛うじて倒れずには済んでいた。

「もう少しだから、頑張つて」

「うん……」

私の目には、もう見慣れた生徒会室の扉が小さく見えている。

あともうちよい……。あともうちよい……！

「着いたよ」

「長かった……」

いつもはこんなにも時間は掛からないのに、今日に限ってはそうじゃない。

私の歩幅が小さい上に、歩行スピードが圧倒的に遅い。

本音にはマジで感謝の言葉しかありません……。

「ありがとう……。それしか言うべき言葉が見つからない……」

「これぐらい、お安いごよくだよ」

……。天使か。あ、違った。女神か。

「しっつれくしまくす」

「しまくす……」

いつものように本音が扉を開き、いつものように挨拶をする。

そしてまた、いつもの位置に楯無先輩と虚先輩がいた。

「いらつしやい……って、緒理香ちゃん？ なんだか辛そうだけど、どうしたの？」

「だ…大丈夫ですか？」

「大丈夫…とは言い難いですね…ははは…」

虚先輩が心配そうに体を支えてくれて、そのまま椅子にも座らせてくれた。

「なんだか妙に手馴れてるけど、もしかして虚先輩って将来は介護職希望だったり？」

「実はですね…」

恥の上塗りだと承知はしているけど、ここで中途半端に説明をして変な勘違いをされるよりは、素直に白状した方がマシだ。

「…つてな訳でして…」

「筋肉痛…」

「昨日、あんなに激しく動いたのですから、無理ありませんが…」

虚先輩。その言い方だと、さつき私が言ったみたいに変な誤解を生んじやいますよ？

「ロリな私が激しい運動って、それは確実にR―18な同人誌的な展開じゃないですかヤダ――」。

「それで痛そうにしてたのね…。具体的にはどんな感じなの？」

「もう全身がめっちゃ痛むんですよ。朝も箒に手伝って貰ってベッドから起きたぐらいで…」

「重症…つて、この言葉は筋肉痛にも適応されるのかしら？」

「怪我じゃありませんから、違うと思いますよ？」

「そっか。とにかく、大変な状態である事には違いないわね」

「せめてもう少し、私の体が大きく成長して全身の筋肉とかが歳相応以上に出来上がっていたら、こんな無様を晒すことは無かったんだろうなあ…」

「はあ…」

「緒理香ちゃん？」

「あ…いえ。何でもないです。ただ…」

「ただ？」

「…毎日毎日、最低でも牛乳を瓶で一本以上は確実に飲むようにしてるのに、なんでその効果が全く出ないのかな…って思っ…」

多分、今の私って無駄に骨だけが丈夫になってるんだろうなく。少なくとも、カルシウム不足には悩まされずに済むってか？

(牛乳ってことは、お風呂上がりの時とかに飲んでるのかしら……?)
(バスタオル一枚を体に巻いて、腰に手を当てながらグイッと牛乳を飲む緒理香さん……)

(それはそれで凄く萌える!!)

最終的には、手術とかするしかないのかしらん？

背を伸ばす手術とかって確かあったような気が……。

「と……とにかく、体が痛いんだったら、今日はゆつくりと休んでいいわ」

「え？ でも……」

「今は特に仕事とか無いから平気よ。こうして痛む体を引きずってても、ここに来てくれた事が素直に嬉しいから」

「そうですか……」

なんだよおい。めっちゃ後輩思いのいい先輩じゃないのさ。

これでシスコンな部分さえなければ普通に最強なのでは？

うむ……『更識緒理香』ってのも悪くないな……。

「では、紅茶とお茶請けを持ってきましようか」

「ありがとうございます」

虚先輩は本気で気が利く人だよな。

こんな人こそが、全ての男共が理想とする嫁なのでは？

「そうだ。緒理香ちゃんに知らせる事があったんだった」

「知らせる事？ なんですか？」

「あなたの役職についてよ」

「あゝ」

そーいや、ここに始めて来て役員になった時は、それ系の話は一切しなかったしな。

てつきり、流れで下っ端の雑用係、もしくは本音と同じ書記とかになるもんだと思ってただけだ。

この感じだと、そうじゃないようだ。

「緒理香ちゃんが帰ってから、私と虚ちゃんで少し話し合ってたね、それで決めたんだけど……」

ドキドキ。私はどんな役職になるのかしら？

『副会長』になって貰おうと思うわ。どうかしら？」

ゴンツ！

こっちの予想の斜め上を行き過ぎて、思わず頭をテーブルにぶつけてしまった。

「お……おりりん？」

「だ……大丈夫？」

「はい……」

ううう……また痛みが増えた……（泣）

「なんで一年生の私が副会長なんですか？ 三年生である虚先輩を差し置いて」

「理由は幾つかあるわ。今から説明してあげる」

聞かせて貰おうじゃないか。その理由とやらを。

「まず、緒理香ちゃんは今年の新入生の中でもかなり注目されている。それは何故か？」

「こんな体をしてるから？」

「それもあるけど、重要なのもう一つの方」

「もう一つ？」

何のことだ？

「緒理香ちゃんは、あの篠ノ之博士から直々に推薦された特待生だからよ」

「あ」

……完全に忘れてた。

そうだよな。私は余り意識とかしてなかったけど、束はISの開発者ってことで、いい意味でも悪い意味でも世界的な超有名人なんだつた。

そんな奴から直に推薦とかされれば、そりゃ否が応でも注目はされるわな。

「本当ならこれだけだったんだけど、最近になってココにもう一つの

理由が追加されたわ」

「それって……」

なんとなくく答えを予想していると、奥から紅茶とお菓子を持って来てくれた虚先輩が代わりに答えてくれた。

「昨日の試運転にて、いつの間にか受領していた専用機を使用し、他を圧倒するような動きを披露したからです」

説明をしながら私達に紅茶と、お茶請けである羊羹（明らかにめっちゃ高級そうな代物）を置いて行ってくれた。

「虚ちゃんの言う通り。あんな動きを皆の前で見せれば、あつという間に学園中に噂が広まる。恐らく、暫くは学園は緒理香ちゃんの噂話で持ち切りになるでしょうね」

「マジっすか……」

つまり、あの白式試運転イベントが、同時に私の生徒会副会長就任フラグに直結してたって事なのか……。

こんなの誰が予想出来るかよ……。

「仮に他の役職に就かせたとしても、他の生徒たちは納得しないでしょうね。だから、会長の次に偉い副会長にするしかないって事。納得してくれただ？」

「はい……」

つーか、これは納得するしかないじゃないか……。

学園の安寧の為に、私が副会長に就任する……ね。

副会長ともなれば、忙しくなるんだろうなあ……。

「あ。別に緒理香ちゃんが懸念しているような事は一切無いから安心して。それに、緒理香ちゃんはクラス代表もしてるんでしょ？ だったら、そこまで忙しくはしないつもりよ」

「それならいいんですけど……」

クラス代表つつても、名ばかりなんだけどな。

確実に私は一組の偶像扱いアイドルされてる自覚がある。

原作の一夏も、代表になった時はこんな気持ちだったんだろうか……。

「さ、小難しい話はここまでにして、虚ちゃんの淹れてくれた紅茶を味

わいませしょう？ 温くなったらいけないし」

「は〜い」

私に合わせて本音も元気よく返事をするけど、さっきまでずっと黙ってたのは、難しい話に書いていけないだけだったんだろうな。

「おりりんがふくかいちよ〜か〜。なら、おじよ〜さまが卒業したら、今度はおりりんがかいちよ〜になるのかな？」

「私はそれでも構わないと思ってるわ。昨日の動きを見る限り、強さに関しては申し分無いし」

「それでいいのか生徒会……」

普通なら選挙とかするんだろうに……。

民主主義はどこに消えてしまったんだろうか。

イデと一緒に因果地平の彼方に消し飛んだのか？

「あくむ。んっ!？」

こ……この羊羹……!？」

甘さ控えめで超私好みなんですけど〜♡

美味しい〜♡♡

(ねえ…虚ちゃん?)

(なんででしょうか、お嬢様)

(気のせいかしら……今、緒理香ちゃんのアップになってる髪が動か
なかった?)

(多分、気のせいじゃないかと)

(やっぱり?)

そして、この羊羹がまた紅茶と合い過ぎなんだよな〜♡

紅茶と羊羹の組み合わせ……これまた最強の悪魔合体だ……♡

これこそまさに、お口の中でルシファー様の誕生や〜!

(また動いた……)

(動きましたね……)

(あーゆーのって、てつきりマンガやアニメだけの演出だと思ってた
けど……)

(現実にも起きるんですね……)

(でもまあ……)

(可愛いからよし!!)

：ん？　なんで先輩たち二人は揃ってガッツポーズとかしてるんだ？

紅茶、飲まないのか？

「よし。バッチリ撮った」

本音は何をバッチリ撮ったんだ？

・
・
・
・
・
・

同時刻。

千冬に呼ばれて、箒とセシリアの二人が生徒指導室へと呼ばれていた。

「来たな、二人とも」

「あの…部活に遅れるんですけど…」

「心配するな。そこまで時間は取らせん。何か言われたら、私に呼ばれたと言っておけ。それで静かになるはずだ」

「はあ……」

なんで自分達が呼ばれたのか、イマイチ理解していない二人は、怪訝な顔をしながらも大人しく椅子に座った。

「お前達二人に来て貰ったのは他でもない。緒理香のことだ」

「緒理香さんのこと…？」

「そうだ。昨日も説明をしたと思うが、あの時、緒理香はゾーンに入っ
て驚異的な能力を発揮した」

「はい。あれは本当に凄まじかったです……」

「だが、強大な力には必ず、何らかのリスクが伴うのが必定だ」

「そのリスクというのが……」

「今日の緒理香さんの状態……ですわね」

「その通りだ」

千冬も椅子に座り、二人を真正面から見据えるように向き合った。「見ての通り、緒理香は他の者達と比べても、かなり小柄な体格をしている。だからこそ可愛いんだが、そこは今は置いておく」

「コホンとワザとらしく咳払いをし、話を戻す。」

「体が小さいということは、それだけスタミナと筋肉量も少ない事になる。であるにも関わらず、あれ程の動きをすれば、必然的に体に大きな負担が掛かる」

「今朝、緒理香はベッドから起き上がるのも辛そうにしていました」

「そうか……」

自分の愛する緒理香の苦しそうな顔を想像するだけで、胸が締め付けられるような思いになる千冬だったが、今だけは我慢をした。

「これはあくまでも私の個人的見解だが、あの時の緒理香は、あの武器……雪片式型を握りしめた瞬間に半ば強制的にゾーンへと入っていた」「きよ……強制的……ですの？」

「どうしてそんな事が……？ 本来、ゾーンとはそんな形で入るものじゃないのに……」

「それは私には分かん。だが、入るタイミングが分るといえるのは、こっちにとつてはある意味で都合とも言える」

「「え？」」

背凭れに体を預けて楽な姿勢をする千冬。

「これも昨日に説明をしたが、ゾーンにとつて最も唾棄すべきものは『雑念』だ。超集中状態であるゾーンとは最も対極に位置しているからな」

「では……」

「そうだ。今の緒理香にとつてゾーンとは文字通りの諸刃の刃だ。これから先、何らかの理由で緒理香が雪片を握ってゾーンに入った時、私達の手で緒理香に雑念を与えて強制的にゾーンを解除する。そうすれば、今回のようなことにはならない筈だ」

「そうですね……。どれだけゾーンが強力でも、発動をする度に体を壊していたら緒理香さんが保ちませんわ」

「だから、緒理香にとって当面の目標は二つになる」

千冬が見せつけるかのように、指でVの字を作る。

「まずは、ゾーンの反動にも耐えられるような体作り。完全には無理かもしれないが、少しでも軽減が出来るようになれば、ゾーンは緒理香にとって最強の切り札と成り得る」

「ですね」

「もう一つは、ゾーン自体の制御が出来るようになる事。ゾーンに入するのに何かをスイッチにするようでは話にならないからな。少しでもそこに自分の意志が介入出来るようにしなくては」

「心と身体。両方の修練ですね」

「そうなるな。なに、緒理香ならば必ずや成し遂げてくれるさ」

笑顔と共に言ったその一言に、千冬の緒理香に対する全幅の信頼が見えた気がした。

「今回、この事をお前達に話したのは、お前たちがクラス内で最も緒理香と仲がいいからだ。可能な限り、緒理香の傍にいてアイツの事を守ってやってくれ。頼む」

「織斑先生……」

自分の教え子に向かって、迷わず頭を下げる。

プライドなんか関係ない。

ただ只管に、緒理香の事を想えばの行動だった。

「先生に言われなくても、私はこれからも緒理香さんの傍に居続けるつもりですわ」

「私も同じです。もう二度と、緒理香と離れないと誓いましたから」

「そうか……」

自分の頼みが杞憂だった事を知ると、顔を上げて気を抜くように息を吐く。

「ま、それと緒理香を巡る戦いは別だがな。私は誰にも負ける気はない。無論、お前達にもな」

「その言葉は……」

「そつくりそのまま返さしてもらいますわ」

「いい度胸だ。小娘共」

本音に続く強力なライバルの出現。

だが、それに関しては全く危惧していない。

ここにいる者達は、ライバルであると同時に同志でもあるのだから。

「今回の話の事は、生徒会の連中には私から説明しておく」

「分りました」

「私の話はここまでだ。部活に行ってもいいぞ」

「それでは、失礼致しますわ」

軽くお辞儀をしてから、二人は部屋を出て部活へと向かった。

自分の生徒達を見送ってから、今度こそ本当の意味で千冬は体の力を抜いた。

「悔しいが……私一人では、どうしても限界が来る……。あいつ等なら大丈夫だろう……」

窓から見える空を見上げながら、千冬は静かに呟いた。

「もう二度と後悔だけはしたくない……してたまるか……！ 緒理香

は私が絶対に守ってみせる……！ 例え、束……お前が敵になったとしてもな……」

健康って素晴らしい！

「私……完・全・復・活!!」

「「おお〜」」

朝のHRと一時間目の間にある短い休み時間に、私は両手を上げてのガッツポーズ。

皆が私の事をサポートしてくれたお蔭で、思ったよりも早く筋肉痛とオサラバできましたのぜ〜!! わ〜! ドンドンパフパフ〜!

「自分の体を自由に動かせるのって…こんなにも素晴らしい事なんだね……」

改めて、体を万全に整える事の大切さを身を持って理解した気がするよ。

『貧乏よりも健康! 生きてさえいれば明日は来る!』とは、よく言ったもんだ。

(合法的に緒理香の体に触れなくなったのは残念だが…喜ぶ姿が可愛いからよし!)

(食事の時に緒理香さんのお口にスプーンを持っていく至福の時が終わってしまったうんですのね……)

(弱ってるおりりんも、元気なおりりんも可愛いよ〜♡)

なんとか入学して初めての実技に間に合った。

正直、ちよつと心配ではあったけど、終わりよければ全てよしってことで。

「今日の午前は確か、グラウンドでの初めての実技だったよな」

「そうですね。流石に全員揃ってのISを使つての授業ではないでしょうけど、軽く触れる機会ぐらいはあるかもしれないですね」

にゅっふっふ〜。

原作知識にて、私は最初から授業の内容を知っているのだよ諸君。

ま、あくまで原作通りに進めば、の話だけどき。

「遅刻したら大変だし、とつとと着替えようか」

「と言つても、既に中にISスーツを着ている私や緒理香さんは、制服を脱ぐだけですけどね」

「ん？ セシリアも中に着てるのか？」

「ええ。私も代表候補生として専用機を受領してますから。それに合わせて自分専用のISスーツも持ってますの。一々、着替えたりするよりは、中に着ていた方が効率がいいので」

「それは…大丈夫なのか？」

「勿論ですわ。一流の選手達の中には、スーツを下着代わりに着ている方々もいるぐらいですから。汗などを吸収する機能があったり、このままシャワーを浴びても問題なかったりと、思っている以上に万能性がありますのよ」

「そうなのか…。それなら、今後は私も中にスーツを着ておくべきか…？」

「個人的には、それを推奨しますわ」

「なんかセシリアが簡単に説明してくれたけど、ISスーツが便利なのはマジ。」

「実際、私も中に着てたりするし。」

「よく、水泳の授業の日に服の下に予め水着を着てくる奴がいたりするじゃん？」

「あれと似たような感覚だと思えばいいと思う。」

「そんなわけで、私とセシリアはパパッと制服を脱いでから準備完了。」

「私が制服を脱ぐ姿をめっちゃ凝視していた約三名がいたけど、ここでは誰であるとは明言しないでおこう。」

・
・
・
・
・
・
・

「では、今学期初めての実技を行う。と言っても、最初だからそこまで込み入ったことはしないがな」

ズラリと並んだ一組の面々の前に立っているのは、ジャージを着た千冬さんと山田先生。

割と重ね着をしている筈なのに、二人揃ってめっちゃ胸が強調されてやがる…。

女に憧れてた元男としては、なんとも羨ましい限りだよ…クソ…！

「まずは…そうだな。このクラスには二人の専用機持ちがいるから、試しに目の前でISの基本的な飛行操縦でもして貰おうか。では、オルコット。前に出ろ」

「分かりました…けど、緒理香さんはいいんですの？」

「何を言っている。緒理香は病み上がりなんだぞ？ お前と違って万が一の事が起きたら、どうするつもりだ？」

「…この先生…皆の前で堂々と臆言をしましたわ…。お気持ちちは分かりますが、それって教師としてどうなのかしら…」

「ありがとう。最高の褒め言葉だよ」

スゲー…セシリアの言葉にも全く動じてないよ…。

ある意味でガチのバーサーカーだ…。

つーか、千冬さんの目にハイライトが無いんですけど。

「それに、今からして貰うことを緒理香にはさせたくないしな」

「私ならいいんですのっ!？」

「当たり前だ。緒理香の絹のような柔肌に傷でもついてみる。世界の損失の瞬間だぞ？」

もうこの人が何を言ってるのは私にはさっぱり分らねえ…。

そして、この事に慣れつつある自分がめっちゃ怖い…。

流星は、あの束の親友なだけはあるわ…。

類は友を呼ぶって、こんなことを言うんだな。

…
…
…

・
・
・

「くちゅん！」

「束さま。風邪ですか？」

「うんにゃ。多分、おーちゃん辺りが私の話でもしてるんじゃないかな？」

「そうですね。束さまは風邪を引かないんじゃないかと、風邪を引いても気が付かないだけですもんね」

「クーちゃん……それって褒めてる？」

・
・
・
・
・
・
・

「話はここまでだ。まずはISを展開しろ」

「なんだか釈然としませんが……了解ですわ」

セシリアが普段から耳に付けているイヤークラスに手を当てると、急に彼女の体の周りに青白い粒子の光が纏わりつく。

この光景はよく知っている。ISが現れる前兆だ。

あつという間にセシリアの体に青い装甲を持つISが装着される。映像や情報としては知っていたけど、こうして直に見るのは当たり前だが初めてだ。

原作通りに試合が無かったから、これが初お披露目になるのか。

「「「おお〜！」」」

皆から驚きの声が聞こえる。

本当に一瞬の出来事だったから、かなり凄く見えたんだろう。

「これが私の専用機『ブルー・ティアーズ』ですわ」

なんとも綺麗な『蒼』なんでしょ。

白もいいけど蒼も悪くないね。

私は個人的には好きだよ？

グフもグフカスタムもブルーデイスティニーもめっちゃカッコいいからね。

リヴァイヴとは違うのだよ！ リヴァイヴとは！ とか言つて欲しいかも。

「その後ろに浮いているのはなんだ？」

「これこそがティアーズを象徴する武装。ビット兵器ですわ」

「ビット…兵器？」

「簡単に言っちゃうと、脳波で動かせる無線誘導兵器。小型移動砲台みたいなもんだよ」

「おりりん…物知りだね〜…」

これぞオタク知識つてやつですよ。

皆も一緒にアニメ見ようぜ!!

因みに、夜更かしをして寝坊するまでがワンセットね。

「流石は私の緒理香…なんて勉強家なんだ…。お姉ちゃんは今、猛烈に感動してるぞ…」

「誰がアンタの妹か」

私は完全な一人っ子…だと思う、多分。

「山田先生。この人は無視していいから、授業進めてくれませんか？」

「え？ あ…はい。では、オルコットさん。まずは上空まで飛行してくれませんか？」

「了解ですわ」

千冬さんが無駄に感動している間に、セシリアは空を飛んでいく。

あつという間に姿が小さくなって、点にしか見えない。

「よし。上まで登っていったな。オルコット、今度はそこから急降下と急停止を試してみせろ。目標は…そうだな、地表から10センチだ」

正氣に戻った千冬さんが用意しておいたインカムでセシリアに指示を出している。

どうして、この人はこの姿でいられないんだろうか。

『了解ですわ。それぐらいなら楽勝で……』

「それなら5センチに変更だ」

『なんですかのっ!』

「お前が成功して、緒理香にカッコいい姿を見せるのが嫌だからだ」

『オブラートに包む気ゼロなんですけどっ!? こうなったら、意地で

もやってみせますわ!』

なんか教師と生徒が通信越しにコントをしてるんですけど。

だくれもツツコんだりないけど。

「おっ!」

降りてくる、降りてくる。

こいつは凄い勢いですぞ〜。

「……ここですわ!」

おおっ!? 地表ストレスレのタイミングで見事に止まってみせた

ぞっ!?

わああお……これは素で驚いたわ……。

これから、セシリアを見る目が変わるかもしれない……。

「はあ……はあ……はあ……どうですの……やってみせましたわよ……!」

「ちっ……! 5センチジャストか……やるな……。伊達に代表候補生

じゃないということか……」

「あ……当り前ですわ……」

張り合うな、張り合うな。

冗談抜きでみっともないぞ。

(あ……危なかったですわ〜! 今のは本気で奇跡的でしたわね……。

もう一度、同じことをやれと言われても、出来る自信がありませんわ

……)

なんか汗を掻いてるけど、たったあれだけでも相当に疲労するの

か。

代表候補生のセシリアであれなんだから、これから私も体を鍛えて

いかなきやダメだなく。

鍛えれば、少しは背が伸びてスタイルも良くなるかもしれないし！

「次は、武装の展開をお願いできますか？」

「武装ですわね。了解ですわ」

ティアーズの武器って言えば、やっぱあれですよね。

セシリアが腕を肩の高さまで上げてると、一瞬だけ光ってから砲身の長いライフルが握られていた。

「それがティアーズの主武装なの？」

「ええ。スターライトMk-III。俗に言うレーザー狙撃銃ですわ」

いいよね〜スナイパーライフル。これも私は大好きです。

因みに、私はデユナメスとかよりも、ジムスナイパー系が好き。

（あれ？ でも、セシリアが武装展開をする時って、もう一段階ぐらいポーズがあつたような気が……）

私が知らないところでセシリアも成長してるのかな？

お嬢様だけど、実は努力家だったりするからね。

陰で努力する子は嫌いじゃないよ。

「次は近接系の武器を展開しろ」

「はい」

ライフルが収納されて、無手になったセシリアの手に光が収束する。

今度は少しばかり時間が掛かっているようだ。

原作でも、近接武器を出すのは苦手だったみたいだしね。

でも、名前を叫ぶことはせずに出すことに成功した。

「ふう……なんとか……」

「なんだ？ さっきとは打って変わって、随分と時間が掛かっていたようだな？ 実践でも相手に待って貰うつもりか？ ん？」

「くっ……これでも練習はしてますのよ……」

教師が生徒に喧嘩売るな。

そのドヤ顔はマジでやめい。普通に引くわ。

ここはクラス代表として、少しはフォローをすべきかな。

「大丈夫だよ。ありきたりだけど、セシリアだったら少し練習すれば

すぐに出来るようになるって」

「緒理香さん……♡」

おっとく？　なんてことない言葉の筈だったのに、あの恋する乙女の瞳は何かなく？

「結果的にプラスになったか……！　私も仕事を頑張れば緒理香に
労って貰えるのだろうか……」

せめて、そーゆーことは心の中で言ってください。

まんま口に出されたら、労いたくても労えないから。

その前に、そんな邪な考えで仕事をしないでくれます？

「あ」

ここで授業終了のチャイム。

授業と言えるような内容じゃなかったけど……気にしたら負けか。

余談だが、この授業の後からクラス内でのセシリアの株が上昇した
ようで、よく他の皆からも話しかけられるようになった。

色々あったけど、結果オーライ……なのかな？

もう一人のツインテール

「はあ……」

日がすっかり落ち、完全に夜となった時間帯。

あたしはIS学園の正面ゲート前に立っていた。

「何が悲しくて、あたしがこんな学校に通わないといけなのかしら……」

夜風に靡く自分の髪を手で抑えながら、ここから見える校舎を見上げる。

無駄に金を注ぎ込んだことが丸分りな程にでっかい建物だ。

成る程。もう見ただけでこれはエリート校だって理解できる。

実際、編入試験もかなり難しかったし。

「ま、このあたしにかかれば楽勝だったけどね」

嘘。ホントは少しだけ苦戦した。

「お上の命令だからって、こんな所まで態々……」

あたしにとつて、この日本は第二の故郷と言つても過言じゃないから、こつちに戻つて来れた事だけは純粹に嬉しかった。

あたしが向こうに戻っていたのは一年ちよつとぐらいだけだけどね。

「休みの日とかには『アイツ』の家とかに遊びに行つてみようかしら」

日本における数少ない知り合い。

少なくとも、孤立無援で送られるよりは遥かにマシだ。

いざとなれば、相談ぐらいは出来るから。

「さて……と。いつまでもこんな場所に突っ立ててもなんだし、とつとと目的の場所まで行きましょうかね……と」

服のポケットの中に入れているメモ用紙を取り出そうとするが、中々に見つからない。

あれ？ ホントにどこにやったっけ？ ここに入れたはずだと思うんだけどなく？

「あ。こつちにあった」

反対側のポケットに入ってた。

きつと、空港で一度だけ確認した時に、反対側に入れちゃったのね。
「えつと……」

メモには『学園に到着したら、まずは本校舎一階総合事務受付に行
け』と書かれてあった。

うん。言いたいことは分かるし、あたしだってまずはそれ系の場所
に行つて手続き的な事をしなくちゃいけないと理解はしてるわよ？
してるけど……。

「肝心な場所が書いてなくちゃ意味ないでしょうが……！」

こんなんだから、いつまで経つても中国は他国にバカにされるのよ
……！

「……こうなつたら自力で探すしかないか」

いざつて時に一番頼りになるのは、やっぱり自分の足と目だけ。

こんなにデカイ学園なんだから、校舎案内図ぐらいは必ずあるだろ
うし、まずはそれを探しましょうか。

運がよければ、教師に逆らつて外をうろついている不良生徒に遭え
るかもしれないし。

『アレ』を使つて空から探せたら、手っ取り早いんだけどなく」

なんて言つてみたけど、それが法律で禁止されていることは、あた
し自身が一番よく知っている。

だから、試しに言つてみただけだ。これホント。いやマジで。

「はあ……せめて、こんな時に愛しの『あの子』に遭えれば最高なんだ
けどなく」

本当に会えたら、その瞬間にこっちのやる気ゲージがフルバースト
するだろう。

もしかしたら、その勢いでそのまま超サイヤ人になってしまうかも
しれない。

「まずはどこから探そうかしらね……つて、あらっ？」

こっちが搜索を開始し始めた瞬間、女子の集団がISの訓練施設と
思わしき場所から出てくるのが見えた。

なんだか楽しそうに話しているが、そんなのはこっちには関係な
い。

まさに神がくれたチャンス。千載一遇の好機。

彼女達に場所聞いて、それから早く学生寮にある自分に割り当てられた部屋に行つてから長旅の疲れを癒したい。

そう思つて彼女達の方へと小走りして行こうとした瞬間、聞こえてきた声を聞いて自分の足がピタツと止まった。

「いや〜。流石は代表候補生だね〜。訓練の様子を見ているだけでも凄く勉強になったよ〜」

「そ…そうですか？ 緒理香さんにそう言つていただけるのなら、これからお好きなお見せして差し上げますわ！」

「え？ ホント？ いや、マジで嬉しいんだけど」

この声…：間違いのない！ 絶対に『あの子』だ！

あたしが『あの子』の声を聞き間違えるわけがないもの！

「緒理香、本当に平気か？ 放課後の訓練の他にも、クラス代表としての仕事に加え、生徒会でも頑張っているんだらう？ 疲労が蓄積してゐるんじゃないのか？」

「う〜ん…：それが、思つてるよりも大丈夫っぽいなだね」

「そうなのか？」

「うん。やっぱアレかね？ 生徒会室で糖分補給をしているのが効いてるのかな？」

「おりりん、本当に美味しそうに食べてるもんね〜」

「いやいや。あの紅茶とケーキの組み合わせに勝てる人間なんて絶対いないって。箒もセシリアも、一度でも体験すれば言葉じゃなくて舌で理解できるから」

「緒理香にそう言われたら…：」

「無性に気になつてきますわね…：」

急いで近くにあつた生垣に隠れ息を潜めて様子を伺つた。

やっぱりそうだ…：あたしがあの子の姿を見間違えるはずがない。

あの日本人離れたピンク色のツインテールに、今でも余裕で小学生料金でバスに乗れる小さな体。

（いやいや、ちよつと待つよあたし。もしかしたら、奇跡的偶然でよく似た美少女の可能性もあるじゃない。それもそれでアリだけど、

「ここはちよつと確かめてみないと駄目ね……」

生徒から少しだけ顔を覗かせて、あたしはそつとギリギリ聞こえるぐらいの声で呟いた。

「新沼健二は？」

「鳩が好き」

「やっぱりそうだ!! そうだったんだ！」

あたしの勘は大当たりだった！

「ん〜？」

「どうしましたの？」

「いや、なんか誰かが私と一緒にバドミントンに関して語りたがって
るような気がして……」

「はい？」

え？ なんで？ なんで緒理香がIS学園にいるの？

あの子、昔からISになんて微塵も関わってなかったわよね？

ここに行きたい的な事も全く言っただけ……。

はっ！ もしや……。

（あたしと緒理香って運命の赤い糸で結ばれてる？ いや、もう赤い
糸を通り越して深紅の糸で結ばれてるんじゃない？）

つーか、今までにISとは縁も所縁も無かった緒理香が何故かIS
学園にいて、そこにあたしが偶然にも転入してくる可能性なんて、そ
れこそ天文学的確率じゃない？

これはつまりあれね。運命が…神があたしに久々に再会した緒理
香と思う存分に愛し合い、その上で結ばれなさいって言ってるのね！

（感謝します!! 神よ！ 神よ！ 神よ！ 神よ!!）

ああ……今になって上層部の連中に感謝だわ。

生まれて初めて、あんたらがいい仕事をしたって褒めてあげる。

代表候補生になって、本当に良かった……。

念の為に、手荷物であるボストンバッグの中に中学の時に購買部で
買った『緒理香ちゃんぬいぐるみ』を入れてきて大正解だったわ。

にしても、なんか気になることを言っただけ？

クラス代表とか、生徒会とか。

相変わらず、どこに行っても緒理香は色んな場所に引っ張りだこのね。

当然のように、同性からも可愛がられてるし。

あたしも早く手続きを終わらせて、緒理香の事を愛でたいな♡

そうと決まれば、善は急げよ！

・
・
・
・
・
・
・

緒理香たちが去っていくのを見届けてから移動を再開すると、あつという間に目的地である事務受付に辿り着いた。

これもきつと、あたしと緒理香の愛の力が成せる技よね！

「これで手続きは終了です。ようこそIS学園にいらっしやいました。『ファンリンイ凰鈴音』さん」

「ありがとうございます」

お礼はきちんとね。

代表候補生として、この程度は常識よね。

「ところで、一つだけお聞きしたいことがあるんですけど……」

「なんですか?」

「この学園に『菜鞭緒理香』って子が在籍してますよね?」

「菜鞭……ああっ! あの、篠ノ之東博士から直々に推薦を受けた特待生の子ね! はい、ちゃんといいますよ」

ま…マジでっ!? 緒理香って特待生だったのっ!?

しかも、篠ノ之博士直々って……アンタってば一体何をしたのよ?

「あの子は確か一年一組に所属してて、クラス代表も務めてるらしいわよ」

「クラス代表……」

「しかも！ 入学早々に生徒会にまで入ったんですって！ 特待生は違うわよね〜」

「道理で……」

さっきの会話の中で『クラス代表』とか『生徒会』なんて単語が出たわけだ。

入学してまだ一ヶ月ぐらいしか経過してない筈なのに、もうクラスや学年の中心的存在になりつつある。

今にして思えば、小学生の時や中学の時もそうだったわね。

……中学の時は、主に当時の生徒会長の暴走が原因だったけど。

「貴女は二組。つまりはお隣さんになるわね」

「二組……ですか」

一組のクラスになれなかったのは残念だけど、いつでも会える機会が出来ただけでも十分に良しとしよう。

けど、重要なのはここからだ。

「もう一つだけ聞いてもいいですか？」

「何かしら？」

「二組のクラス代表って、もう決まっていたりするんですかね？」

「そ〜ね〜。聞いた話だと、暫定的には決めてるらしいけど、後々で代表に相応しい人物が現れたら、普通に交代させるとかなんとか……」

「それって、転入したてのあたしが代表にも慣れる可能性があるってことですか？」

「かもしれないわね。代表候補生なら、クラス代表としてなら申し分ないだろうし。実際、四組も代表候補生の子がクラス代表をしてるらしいわよ？」

「それを聞いて安心しました」

緒理香と同じ場所に立てる……！

これは圧倒的なアドバンテージね！

クラス代表同士で色んなことを話し合いながらランチをしたり、一緒に委員会に出席したり……妄想が膨らむわ〜……♡

「えへへへ……♡」

「だ…大丈夫？」

今夜はいい夢が見れそうな気がする…♡

今から明日が楽しみだわ！

こんな気持ちになったのはいつ以来かしらね…。

W ツインテール

「ふみや〜……」

あ。なんか変な欠伸が出た。

(可愛い)

(可愛過ぎますわ)

(いつか絶対に抱いてやる)

寝不足かな〜？ 別に徹夜とか夜更かしとかしてないんだけどな
〜。

最近の自分の生活を振り返りながら、私は皆と一緒に食堂から教室
まで移動していた。

朝から妙に熱い視線を送ってくる箒達を無視しながら教室へと辿
り着いた途端、いきなりクラスメイトの子に話しかけられた。

「おはよう。今日も変わらずツインテールしてるね〜」

「なにその日本語。初めて聞くんだけど」

ツインテールしてるってなによ。

「それよりも、菜鞭さん達は知ってる？」

「二何を？」

「二組にいる友達から聞いたんだけど、その二組に今日、中国から転校
生が来るんだって」

「中国からの転校生……」

この時期に来る中国からの転校生といえば、もう『あの子』しか該
当しないじゃん。

そっか〜。もうそんな時期か〜。

原作ではあった筈のイベントを諸々に飛ばしてるせいか、どうも時
間の過ぎる感覚が分んなくなっていく。

もう原作知識なんて殆どと言つていい程には役には立たないけど、
それでも一応の目安ぐらいにはなるからね。

まだ全ての知識を捨て去るには早すぎる。

「こんな半端な時期に転校生だと？」

「また急な話ですわね。何かあったのかしら？ 布仏さんは、生徒会

のメンバーとして何か聞いてませんか？」

「ん〜ん。私も何も知らないよ〜」

本音の場合、仮に知ってても一晩経ったらすぐに忘れる可能性がある。

ま、可愛ければそんなのは全く関係ないんだけどな！

「しかも、噂によるとその子、中国の代表候補生なんだってさ」

「また『代表候補生』か？」

「なんでそこで私を見ますの？」

「いや…だってな。代表候補生と言えば、私でも知っているレベルの存在だぞ？ そんな連中が一学年にここまで揃うのは、流石におかしいと思ってるな」

「私もその意見には同意しますが、だからと言って私に意見を求められても困りますわ。私が把握しているのは、あくまで自国の状況だけですから」

「それもそうか」

同じ代表候補生だからって、誰でも彼でも一色単にしちやダメって事だな。

「けど、その転入生ってどんな子なんだろうね〜？」

あ。本音のその発言をした瞬間、何かのフラグが立った気がする。

「それは…こんな子よ!!」

「「え？」」

いきなり聞こえてきた声。

その方向へと目を向けると、そこには不敵な笑みを浮かべながら教室のドアに寄り掛かっている一人の少女がいた。

忘れもしない、あの黒い髪のツインテールは……。

「鈴!!」

「緒理香!!」

ダダダ〜！ つと走っていったから、ガシッ！ つと手を合わせる。

「久し振りね、緒理香。いつみても見事なツインテールだわ」

「そつちこそ。いつ日本に戻ってきてたのさ。連絡をくれれば出迎え

ぐらいはしたのに」

「本当に急だったのよ。こっちに着いたのは昨日の夜だったし。でも、その気持ちだけでもすっごく嬉しいわ。ありがと、緒理香♡」

このノリ……ああ……久し振りだ！

これなんだよな〜！ 私が求めているのは！

少なくとも、千冬さんみたいな年がら年中、私限定で発情している人はお断りだ。

「お……緒理香？ そいつは一体……」

「どなたなんですか……？」

「あら。あたしとしたことが、自己紹介を忘れてたわね」

「コホンとワザとらしく咳払いをしてから、鈴は自己紹介を始めた。

「あたしの名前は『ファンリンイン鳳鈴音』。さっきまであんた等が話してた中国の代表候補生の転校生ってのはあたしの事よ」

「お前が……」

「それは分かりましたけど、そのあなたがどうして緒理香さんと仲がいいんですの？」

「そんなの決まってるじゃない」

「お？ なんか鈴がこっちに近づいてきたぞ？」

「そ〜しくて〜……後ろからギュ〜つとハグですか。」

「あたし達が『こんな事が出来るような仲』だからよ」

「「なっ……!?!」」

「いいな〜」

「こんな事って。」

小学生の時から、割と頻繁に同じことをしてなかったか？

私はもう完全に慣れたから何も言わないけど。

「ほ……本当ですのっ!?! 緒理香さん！」

「まあね〜。確かに、昔からよく鈴は私に抱き着いてきてたね」

「「そ……そんな……」」

「なんでそこで二人して愕然とする？」

「そんな事になるような要素が今までに一個でもあったか？」

「にしても、まさか緒理香がIS学園に入学してるとは思わなかった

わ。何があつたのよ？」

「まあ……色々。とてもじゃないけど、一言じゃ語り尽くせない……」

話そうとすれば、必然的に私の保護者である束の事まで話さないと
いけなくなるしな。

流石にそれは超絶的に面倒くさいので却下。

「あつそ。ま、私的には緒理香と一緒に学校の学校にまた通えるだけでも十分だけどね」

「それは私もだよ。クラスは違うけど、また鈴と会えて普通に嬉しい」
「緒理香……♡」

やっぱりさ、こう『ノリ』が分る気さくな友達つてのは重要だよな。

こういった子がいるといないとでは、場の空気が段違いだし。

(やっぱり、あたしと緒理香は運命の深紅の糸で結ばれてるんだわ：

♡ 日本はまだ同性婚は無理よね？ だったら他の国なら……)

けど、もうそろそろ戻った方がいいと思うんだけどな。

多分だけど、あの人がやってくる時間だと思うから。

「おいこら、その転校生」

「うっ……！ この声は……まさか……！」

ほら来た。

鈴が恐る恐る後ろを振り向くと、そこには……。

「私の緒理香に後ろから堂々と抱き着くとは……いい度胸をしているな……！」

「ち……千冬さん……!？」

完全にマジ切れプンプン丸になつて千冬さんと、この状況を理解
出来ずオロオロしている山田先生がいました。

山田先生……今にも泣きそうなんですけど。

「もうホームルームの時間だ……！ とつとと自分のクラスに戻れ……！」

「りよ……了解……」

お転婆の代表格とも言える鈴でも、この状態の千冬さんには逆らおうとはしないか……無理もない。

なんかもう、千冬さんの体から赤黒いオーラが漂ってるし。ぶつちやけ、私もめっちゃ怖いです。ガクブルです。

「それと、私の事はここでは『織斑先生』と呼べ。いいな？」

「は…はい」

そこはちゃんと指摘すんのね。

「そして……」

「まだあるの……?」

「緒理香は私の嫁だ……絶対に誰にも渡さん……!」

まだそれを言ってるのかよっ!?

あんたもいい加減にしつこいなっ!?

「悪いですけど、それは流石に聞き入れられないですね……!」

「ほう……? ではどうする?」

「ごうしますー!」

おお? おお? さっきまで怖がってた鈴が急に好戦的な雰囲気になっ?
?

って、私の顔が掴まれてるんですけど?

「チュッ♡」

「!」「あああああああああああああああああああつ!」「!」

ちよ……今……何をされた?

もしかして…鈴に頬にキスされた? マジで?

「それじゃーね! またお昼にでも会いましょー!」

「う……うん……」

「!」二度と来るな〜!!」

り…鈴って、あんなにもアグレッシブな女の子だったっけ……?う?

あれかな? 中国じゃ、友達同士でキスするとか当たり前な感じな

のかな?

だとしたら、何気に中国って未来に生きてるな……。

……

・
・
・

授業が始まってはまだ怒っていることが丸分りな千冬さんを横目で見ながら、私は先程までいた鈴とかいう女の事を考えていた。

(なんなんだ奴は!? いきなり緒理香に抱き着いたかと思いきや、去り際にキスをするなんて! 女同士で、しかも頬にはいえ、キスだぞっ!? そんなの私だってしたことないのに……)

髪型か? お揃いの髪型だから、あんなにも仲が良かったのかっ!? いや、流石にそれは無いか。狼狽えすぎて変な方向に思考が向かってるぞ私。

「はあ……」
私にも、あいつぐらいの積極性があれば……少しは緒理香との仲も進展するのに……。

少なくとも、大衆の面前であんな大胆な事をするなんて、私には絶対に無理だ!
羞恥心が爆発して死ぬ!

かといつて、二人きりの時ならば問われれば、答えはNOだ。
それでも恥ずかしくて死ぬと思う。
(何か……何か私に……奴にも勝てる武器は無いのかっ!? 考えろ私!)

私の武器……武器……武器……。
(そうだ! 今の私には、他の皆には無い圧倒的なアドバンテージがあるじゃないか!)

私は今、緒理香と同じ部屋に住んでいるんだった!
更に言えば、私は緒理香とよく一緒にベッドで寝ている!
そう……あの、天使と越えて女神の如き寝顔を毎晩のように拝んでいる!

これは間違いなく、私だけの強み!!
しかも、私は緒理香の幼馴染でもある!!

(なんだ……こうして冷静に考えれば、私にだって十分に勝ち目はあるじゃないか……)

勝ち目はある……ある……けど……やっぱり……。

「緒理香と……キス……したいな……」

「ほう？ 誰とキスをしたいだと？」

……え？ いつの間にか目の前に千冬さんが？

かなり小さい声で呟いた筈なのに、どうして聞こえてた？

千冬さんは、その聴力もチートなのか？

「授業中に呆けているとは随分と余裕だな、篠ノ之」

「い……いえ。私は……」

「そんなに余裕ならば、このページにある問題を全て解いて貰おうか」

「は……はい……」

授業は……ちゃんと聞かないとダメだな……反省……。

・
・
・
・
・
・
・

(いきなりやって来て……彼女はなんなんですか!?)

いつもならば普通に集中出来ている授業に全く集中出来ずに、頭の中がグルグルと回って、緒理香さんと彼女の事で一杯になっていた。(あの感じ……間違いなく、緒理香さんとは昔からの仲と見ましたわ。けど、幼馴染である箒さんが知らないようでしたし、となると……どうなるんですの?)

今思えば、私は緒理香さんの事も箒さんの事もよく知らない。

分っている事と言えば、箒さんが篠ノ之博士の妹であり、緒理香さんがその篠ノ之博士の推薦でIS学園へと特待生という形で入学し

てきたこと。

(別に、相手の事を良く知ることが仲良くなる事の必須事項とは言わないけど、それでも……何一つ知らないのは少し寂しいですわね……)

緒理香さんの可愛らしさに見惚れて、私はあの方とお近づきになりました。

けど、今は違う。私は緒理香さんの人となりと、その『強さ』に本気で惚れた。

(これからはもつと、緒理香さんと色んな事を話すべきかもしれないわね。お互いの事を知るのもまた、私達の為になるでしょうから) まあ、それはそれとして。

問題は彼女の持つ、あの積極性だ。

幼き頃から『淑女であれ』と育てられた私には到底、考えられない事だった。

(皆さんの目の前でキ……キスだなんて！ 破廉恥ですわ！ 破廉恥ですわ!!)

一体何を考えているのやら！ あの方には女らしい恥じらいというものが無いのかしらっ!?

そもそも、女性ならばこう……もつと肃々とですわね……。

「私ならば、まずはお茶にお誘いして、それを切っ掛けに徐々に仲良くなって、それから……」

「それから？ なんだ？」

「……………え？」

頭上から、非常に聞き覚えのある怒りを含む声が……。

「オルコット……」

「は……はい……ナンデシヨウカ……」

「そんなにも頑張り屋なお前には、私から特別に課題をくれてやろう。喜べ」

「ハイ……ウレシイデスワー」

今が織斑先生の授業である事を完全に忘れてましたわ……。

オルコット家当主として、恥ずべきことですよ……ううう……。

・
・
・
・
・
・
・

箒とセシリアがそれぞれに鈴の事で色々と考えている時、本音はと
いうと……。

（私もおりりんをぎゅ〜つてしたいなく。キスされた時の驚いてたお
りりん……ちよくちよく可愛かったにゃ〜♡）

いつも通りの表情のまま、同じように緒理香の事を考えていた。

あの千冬にすら全く悟らせないと、流石は暗部の家系と言うべき
か。

布仏本音の隠された実力の一面が垣間見えた瞬間だった。

ツインがテールしてるからツインテール

午前中の授業が終わり、私達はいつものメンバーで食堂へを向かうことに。

途中、なんでか箒とセシリアの二人が大きく肩を落としていたけど、それってさっきの授業が原因かな？

「なんか、さっきの授業で頻繁に千冬さんに当てられてたね」

「言わないでくれ……恥を晒す事になる……」

「オルコット家の人間として情けない限りですわ……」

この尋常じゃない落ち込みよう。

割とマジで何があったのかしらん？

「おりりん。人には知られたくないことだつてあるんだよ」

「それもそっか」

まさか、本音から教えられるとは。

この気遣いの良さ……私の嫁候補として一歩前進したね。

「取り敢えず、まずは食堂に急ごうよ。落ち込むのはお腹が空いてるからだよ」

「そうだな……」

「緒理香さんの仰る通りかもしれないわね……」

はい決定。

さくて、今日は何にしようかにやゝ？

なんて、実はもう既に決まっていたりして。

(願掛けの意味も込めて、今日のお昼は『牛カルビ定食』だな)

まだまだ私は諦めてはいないのだぜ！

今のこの体は絶賛成長期の真っ最中なのだから！

在学中の三年間で、私はこの幼女体型と決別する！

「三人は何にするの？」

「私はきつねうどんだ」

「洋食ランチですわ」

「カルボナーラだよ。おりりんは？」

「私は牛カルビ定食。大きくなりたいからね！」

一応、言っておくけど、別に私は牛肉だけが大好きって訳じゃない。基本的に好き嫌いは前世から存在しない。

どんな物も万遍なく食べて、健康的な食生活をしているつもりなんだけどなあ〜……どうして私の体は、その努力に形で応えてくれないの？

「待ち侘びたわよ！ 緒理香！」

「おお〜…鈴〜」

私達の前に現れたのは、既にラーメンを注文し終えていた鈴だった。

……ラーメンってのもアリだったかもしれないな。

なんで、普段からよく食べ慣れている食べものでも、人を見ると凄く美味しそうに見えるんだろう。

「げ……お前は……」

「また来ましたのね……」

「さつき振りだね〜」

「なんで上の二人は見るからに嫌そうな顔してんのよ」

箒とセシリアが露骨に嫌な顔……っていうか、疲れた顔をした。

そんな時はアレだよ。レッドブル。翼が生えるよ！

「本当は緒理香と二人つきりがよかったけど、こうなつちや仕方がないわね。先に行つて席を取っておくわ」

「さんきゅ〜」

こんな時、鈴の行動力は本当に頼りになるよな〜。

宣言通り、彼女は先に開いている席まで歩いて行つて、5〜6人ぐらいは余裕で座れる場所を確保してくれていた。

「元気だね〜」

「あの活発さは普通に羨ましいかもな……」

「あ。緒理香さん、注文の品が来ましたわよ」

「ありがとう」

……ここでも私は専用の踏み台に乗らないといけない。

最初は恥ずかしかつたけど、流石にもう慣れた。

慣れてしまった自分が悲しくもあるけど。

「はいよ。そんな小さな体の割に、意外とボリュームのあるメニューを頼むんだね」

「少しでも大きくなりたいたいですから」

「いい心掛けだ！ よし！ お嬢ちゃんにはこのミルクプリンをおまけしてあげようか！」

「ありがとうございまくす！」

ミルクプリン……私の為に存在するようなデザートじゃないか！

おばちゃん……最強に感謝だぜ！

その後、他の皆も自分の品を受け取ってから、鈴が待っている席へと移動した。

「お待たせ。待った？」

「私もさつき来た所よ」

（（なんでデートみたいな会話をしてるんだろう……））

ああ……本気で懐かしい……。

やっと、私の学園生活にも『面白さ』が追加されたよ……。

今まではずっと、私がツツコんでばかりだったからね。主に千冬さんのせいで。

生真面目な箒や癒し系の本音もいいんだけど、やっぱり私には鈴のようなノリの分かる人間が必要なのだよ！

「ほら。あんた等も早く席に着きなさいよ」

「あ……ああ……」

「分りましたわ」

「はい」

そんなわけで、皆で仲良く席に座ったのはいいんだけど……。

（どうして、私を中心にして座ってるの？）

上座にわたしが座らされて、両隣には鈴と箒が、その隣にそれぞれ本音とセシリアがいる。

これ……完全に包囲されてね？

「こうして鈴と一緒にご飯を食べるのも久し振りだな」

「そうね。中学の頃はいつも、一夏や弾も一緒に帰りに買い食いとかしてたものね」

「懐かしいね。弾がよく『奢ってくれ』って泣きついてきてたっけ」

「で、それを無情にも突き放すあたし達ね」

「うんうん。もう完全にお約束だったよね」

「まだそこまで昔って訳じゃないのに、ここまで盛り上がれるとは。」

「多分、こーゆーのは普通に鈴じゃないと無理だな。」

「お…お前は一夏とも知り合いなのか？」

「そりやまあね。一応、私と緒理香と一夏、それからもう一人『弾』って奴がいるんだけど、この四人は同じクラスだったもの」

「その『一夏』という方は、確か織斑先生の弟さん…でしたわよね？」

「そうよ。顔はいいんだけど、それ以外は可もなく不可もなくって感じね。唯一の特技は家事全般って所かしら」

「今の世の中じゃ、割とそれだけでもポイント高いけどね」

「確かにね。家事が苦手な女子とか増えてきてるし。主夫ってのも流行り始めてるって耳にするしね」

「家事が苦手な女子ね。」

「パツと思いつくだけでも二人はいるな。」

「その内の一人は私の目の前にいるし。」

「ハッ!? 緒理香さんは私の事を見つめているっ!? か…髪型はおかしくないかしら…」

「…何故にセシリアは急に髪型を気にしだした？」

「つか、そろそろこの子達の事を紹介してよ」

「そうでした」

「まだ自己紹介もさせてなかったっけ。これはうっかりだぜい。」

「まず、このポニーテールの子が、前にも話した…」

「あぁ…思い出した。あたしと入れ替わるようにして転校していった子でしょ？」

「む…私の後にお前が転校してきたのか…」

「そうよ。それと、私の事は『お前』じゃなくて『鈴』って呼んで。『鈴音』ってちよつと呼び難いでしょ？ だから、余程の事じゃない限りは、人にはこう呼んで貰うようにしてるの」

「は、人にはこう呼んで貰うようにしてるの」

「は、人にはこう呼んで貰うようにしてるの」

「は、人にはこう呼んで貰うようにしてるの」

「は、人にはこう呼んで貰うようにしてるの」

「は、人にはこう呼んで貰うようにしてるの」

「は、人にはこう呼んで貰うようにしてるの」

「は、人にはこう呼んで貰うようにしてるの」

「そうか。では、私もそう呼ばせて貰おう」

お？ さっそく仲良しフラグが立ったかな？

「私は篠ノ之箒だ。よろしく」

「よろしくね箒」

二人の少女がしつかりと握手を交わす……なんて感動的な光景なんだ……二人の間で迸っている火花さえ無ければね。

（あたしが来る前にいたって事は、間違いなく箒こそが緒理香がよく言っていた『幼馴染』に違いない！ 分かるわ……あたしにとって最大のライバルは千冬さんじゃなくて、この子だつてことが！）

（私には無い数多くの武器を備えている鈴……ここにきて、何という強敵の出現なのか！ だが……私は負けんぞ！ こんな所で折れたりは出来んのだ！ 緒理香との幸せな新婚生活の為にも!!）

あの火花にロウソクを近づけたら、本当に火が着くのかな？あははは。

……ごめんなさい。現実逃避してました。

「ふっ……お前とはいい関係になれそうな気がするよ」

「奇遇ね……わたしもよ……」

「ふふふふ……」

……怖い!!

なんなの？ この二人の不敵な笑みは……!?

「そして！ 私がクラス委員である緒理香さんを影に日向に支えるクラス代表補佐を務め、尚且つイギリスの代表候補生でもあるセシリア・オルコットですわ！」

「ふくん……つて、ちよい待ち。そのクラス代表補佐って何よ？ 初めに聞いたんだけど？」

「いいでしょう……このセシリア・オルコットが直々にご説明をして差し上げますわ！」

「どうでもいいけど、なんかこいつ……言い方が一々腹立つわね」

座ったままの状態で思いつきり胸を張ってから、声高らかに説明を始めるセシリア。

……そのたわわなメロンの1%でもいいから私に分けてくれませ

んかね。

「成る程ね。要は、クラス代表となった緒理香の負担を少しでも軽くするために、即席で作られた役職って訳ね」

「その通りですわ」

「おい待て。クラス代表補佐はお前だけじゃないだろうが。私だって同じ補佐だぞ」

「あら、そう言えばそうでしたわね」

「貴様……！」

めつちや喧嘩売ってますね、はい。

「……緒理香も苦勞してんのね」

「うん……」

こつそりと鈴が私に耳打ちしてくれた。

この心勞を少しでも理解してくれる存在は非常に助かるよ……。

「あの二人はしばらく放置して、この子が……」

「布仏本音だよ」

「なんか間延びしてるけど、アンタはかなり真面そうね。これからよろしくね」

「よろしく」

んで、私の嫁候補の一人でもあります。

他は一応、山田先生に楯無さんも最近になって加わりました。

「けど、昔からISとは縁も所縁も無かった緒理香がIS学園に入学してるとは予想もしてなかったわ。どうなってんの？」

「なんと言いますか……めつちや簡単に言えば、うちの保護者が私の知らぬ間に勝手に入学手続きをして、寝ている間にここへと強制移動させられてた……」

「……なんなのよ。そのツツコミ所しかない状況は……」

「気持ちには分かるよ……当事者だからね」

お蔭で、私の部屋に『胃薬君』という新たなルームメイトが増えたよ。

彼と私はとっても仲良しき！

「しかもね、おりりんは『特待生』なんだよ」

「と…特待生？ え？ IS学園って特待生制度とかがあったわけ？」

「私が最初らしいよ……」

「冗談でしょ……」

「これが冗談だったら。どれだけよかったことか……」

特待生としてのメリットは非常に大きい。

だがしかし、それ以上にデメリットもデカいんだよ！

めっちゃ目立つし、噂にもなるし！

私の平穏な生活から最も遠ざかっているんだよ！

「おりりんはね…篠ノ之博士の推薦で入学したんだよ」

「篠ノ之博士って…あの篠ノ之束博士っ!? あんた、いつの間にそんな

凄いや人物と知り合ってたのよっ!?!」

「昔からだよ。言っていなかったっけ？ 私の保護者が、その篠ノ之束

なんだよ」

「めっちゃ初耳なんですけどっ!? けど、待って。篠ノ之……?」

あ…：やっぱ分かるよね。うん。こればかりはしゃないわ。

「ん？ なんだ？」

「いや…箒ってまさか……」

「ああ…そういう事か。私はさつきまでお前達が話していた篠ノ之束の妹だぞ」

「やっぱり……」

でも、鈴なら他の皆みたいに色眼鏡で見たりはしないと思うんだよな。

鈴って昔から、それ系の話は嫌いだから。

「箒も箒で身内関係で苦労してるんだよ」

「みたいね。なんか、普通に共感しちゃったわ」

……鈴も大変だったからね。

「話が変わるけどさ、緒理香ってISの操縦は大丈夫なの？」

「なんとかね。一応、正真正銘の素人って訳じゃないし」

「なんかやってたの？」

「シミュレーションやテストパイロットみたいな事を少しね。だか

ら、操縦する感覚とかは普通に分かるよ」

「そうなんだ。ま、緒理香って昔から運動神経は高かったもんね」

体が小さいからって舐められないように必死になってたら、いつの間にか学年で1位2位を争うぐらいには高くなってた。

運動会の最後によくある『クラス対抗リレー』のアンカーに選ばれるぐらいには。

「ISに乗った緒理香は本当に凄かったぞ。こう…ズバー！　つと鋭い太刀筋を放っててな」

「他の方たちは緒理香さんの事を『ソードダンサー』と呼んでいましたわ。私から見ても、あの時の緒理香さんは本当に大空を舞い踊る妖精のように美しく……」

「皆、見惚れてたよね。私もドキドキしちゃったよ」

「成る程ね……」

鈴がなにやら意味深な笑顔を……？

「緒理香も相変わらずね」

「何が？」

「私はいつだって私だよ？」

（中学の時も物凄い人気だったものね。あの時、生徒会長がいなかったら、私の宝物の一つである『1/10オリカちゃんフィギュア』も、手に入らなかつたのよね……）

なんだろう……急に悲しくなった。

「でも、それならISの方は大丈夫っぽい？」

「そうだね。勉強の方もついていけるし」

「…何気に緒理香って文武両道を地で行ってるわよね」

「そう？」

私は単に必至なだけなんだけど。

「けど、そんなのとは関係無しに鈴とは今までに会えなかつた分、色々な話を沢山したいかな」

「……そうね。あたしも、緒理香といっぱい話をしたいわ！」

「紆余曲折はあったけど、こうしてまた同じ学校に入れたんだし、これからはいつでも話せるよ」

「そうね！」

また一段と、私の周りが賑やかになったな……。

色々不安もあるけど、それ以上にこれからが楽しみになってきたな……。

因みに、私達が話している間も、ずっと箒とセシリアは火花を散らしてました。

この二人も本当に飽きないよな。

萌え萌えキュンキュン♡

教師モードな千冬さんと山田先生に言われたこと。

私はISの操縦技術は申し分ないけど、その代わりに体力が低いので、当面は体力増強を目的にすればいいらしい。

体力づくりとは、またなんともシンプルではあるけど、だからこそ最も重要だと思うのは私も同感だ。

実際、昔から私は長距離走よりも短距離走が得意だったし。

そこで、IS学園の特徴の一つが役に立ってくる。

IS学園は、名目上は高等学校扱いとなってはいるけど、実際には専門学校に近い。

なんせ、全国の殆どの高校には無いと思われる施設が沢山あるから。

その最たる例が、ISの試合や練習などを行う『アリーナ』なんだけど、その他にも図書室とは別に、過去の試合の映像記録などを保管している『資料室』や、地下深くにも特別な権限を持つ人間した入れない解析所みたいな場所もあるし。

今回の私は、そんな普通の学校には無い施設の一つにお邪魔している。

「ハッ…ハッ…ハッ…！」

ルームランナーに乗って、丁度いい速度で走り続ける私。

そう、私が今いる場所とは『トレーニングルーム』だ。

伊達に金を掛けてはいらないようで、私から見ても分かるぐらいに最新の機器が沢山並んでいるし、端っこの方にはロープが張られたリングまである。

いつもはツインテールに纏めている髪を、今回だけはポニーテールにしている、格好もジャージや体操服じゃない。

下は黒いスパッツに、上は白いタンクトップ。

ちゃんとタオルとかも持参してきてるので問題なし。

でも……。

(なんで…さっきから私は注目されてんのかしら?)

ここに居るのは私だけじゃなくて、他にも多くの生徒達が利用している。

流石に入学したての一年生たちは、まだ気まずくて使用していないようで、その代わりに二年生や三年生と言った上級生たちが集まっていた。

(なんか…やりにくいなあ…)

いやいや。ここでめげてどうする私。

アリーナでの試合とか、此れの比じゃない程の人達に注目されるんだから、この程度で緊張してちやダメでしょうが。

「……よしー！」

そう思うと、急にやる気出てきた！

少しだけ速度を上げようかな？

・
・
・
・
・
・
・

「ちゆかれた〜……」

ルームランナーを降りた私は、ベンチに座る事も出来ない程に疲れまくって、床にそのままペターンと座り込んでしまっている。

タオルで顔を拭きながら、息を整えている最中だ。

「随分と頑張ってるじゃないか。大丈夫か？」

「ほら。立てるツスか？ ちゃんとベンチに座った方がいいツスよ？」

そんな私を心配して来てくれたのが、三年生のダリス・ケイシー先輩と、二年生のフォルテ・サファイア先輩だ。

私の薄れつつある記憶が正しければ、この二人も原作キャラだった

ような気がするんだけど……どんな人達だったかは全く思い出せない。

今の所、後輩思いの優しい先輩って印象だけ。

(顔を赤くして息も絶え絶えな美少女……エロすぎだろ！)

(風の噂では色々聞いてたツスけど……これは可愛過ぎじゃないツスカねっ!?)

なんで時折、急停止してから私の事を凝視してくるんだけど、なんで？

そんなに今の私って情けないかな？

「ん？ このタオル、お前の汗を吸いまくって湿ってるじゃないか。替えのタオルはあんのか？」

「にやかった……と思う……です……」

まさか、ここまで汗を掻くとは予想してなかったからなく。

タオルは一枚しか持って来てないでござるよ。

(可愛い)

(可愛い)

(私は今、ロリコンに目覚めました)

気のせいかな、周囲にいる他の先輩方の視線も痛いんですけど……。

「それじゃ、オレが持ってきたタオルを貸してやるよ。ほら、顔を貸しな。汗を拭いてやるから」

「ふみゆ……」

ダリル先輩によって顔を拭き拭きされる私。

いつもならば子供扱いするなって言いたいところだけど、今はそんな事を言う気力が無い……。

ここは、大人しく先輩のお世話になるとしよう。

(ふみゆって言った！ 今、確かにふみゆって言った！ めっちゃ可愛い……♡)

(心が……私の心がびよんびよんするツスよ……♡)

なんだろう……二人の先輩の顔が妙に赤いような気がする。

先輩たちも頑張ってたっぽいけど、私よりは確実に体力はあるだろうしなく。

そうそう、ここで余談なんだけど、今回は箒やセシリアたちは来ていない。

彼女達はそれぞれに部活があるし、本音は生徒会に行っている。

三人揃って、後で顔を出す的なことは言ってたけど。

(はっ！ 今の意識が朦朧としている状態なら、こいつに『お姉ちゃん♡』って呼ばせる事も可能なんじゃないかっ!?)

ん？ 今度はダリル先輩の顔が急に凛々しくなった？

「お……緒理香……」

「はい？」

「オ……オレの事を……その……『お姉ちゃん』って呼んでみてくれないか？」

「あゝ！ ダリルだけズルいツスよ！ 私も緒理香ちゃんに『お姉ちゃん』って呼んでほしいツス！」

……何を言ってるんだ、この人たちは。

でも、こうしてお世話になっている以上、ちゃんとお礼はしないとイケないよね。

別に、姉と呼ぶことで私に何かデメリットが発生する訳でもなし、大丈夫ですよ。

そこまで抵抗感があるわけではないし、肉体年齢的にも『お姉ちゃん』と呼ばれても不思議じゃないし。

つか、こんな事で礼になるんなら、好きなだけ呼んであげよう。今の所、私から二人に対する好感度は高いし。

「ダリル……お姉ちゃん？」

「はうわっ!!」

い……いきなりダリル先輩が両手で顔を覆ってから後ろに仰け反ったっ!?

(ヤバイ……これはマジでヤバイ……。この破壊力は……核兵器級だ……!)

……取り敢えず、今は放っておこう。

次はフォルテ先輩だ。

「フォルテお姉ちゃん？」

「あびばっ!!」

こつちもっ!? フォルテ先輩もダリル先輩と同じ体勢になったんですけどっ!?

(強烈ツス……私にはダリルっていう心に決めた人がいるのに……こんなにも可愛らしく、小首を傾げながら言われちゃったら……心が揺らいじやうツスよおく……)

えつと……え? ちよ……マジで大丈夫か?

なんか本気で心配になってきたんだけど……。

「だ……大丈夫ですか? ダリルお姉ちゃん、フォルテお姉ちゃん」

「!!!」

もつと仰け反ったっ!? もうこれ、完全にブリッジになってないっ!?!

(自分で言っておいてなんだけど……もう止めてくれ……。これ以上は、本当に萌え死してしまう……! オレの死因が『萌え死』になってしまう……!)

(キュン死するツス……このままじゃ本当にキュン死しちゃうツス……。緒理香ちゃん……魔性の美少女ツス……)

この状況……誰かどうにかして(泣)

周囲の他の先輩たちは、すつごくいい笑顔をしたままこつちを見るし。

「緒理香♪ 箒達から、今日はトレーニングルームに行ってるって聞いたから、様子を見に来たわよ……って、なにこれ?」

「あ……」

ここのでまさかの鈴の登場。

この子なら何とかしてくれる……かな?

「えつとね……鈴お姉ちゃん、これはね……あ。しまった」

つい、さつきまでの流れで鈴の事も『お姉ちゃん』って呼んでしまった。

「……ごめん。今のは……」

「へぶんっ!!」

「鈴もっ!?!」

なんで鈴も二人と同じように仰け反るのっ!?

「緒理香に『お姉ちゃん』って呼んでもらった……もう死んでもいい……」

「急に物騒な事を言わないでっ!?!」

私は鈴に死んでほしくなんてないよっ!?

寧ろ、めっちゃ生きてほしいからねっ!?

結局、トレーニングをするような空気ではなくなってしまい、このまま部屋に戻ることにした。

もう……本当になんなのさ……。

・
・
・
・
・
・

その後。生徒会にて。

「緒理香ちゃん！ 私の事も『お姉ちゃん』って呼んでみて！」

「えっと……楯無お姉ちゃん？」

「わびすっ!!」

楯無先輩も見事に仰け反りましたとさ。

・
・
・
・
・
・

『トレーニングルームお姉ちゃん仰け反り事件』があつた日の夜。
自室にて、ダリルは誰かに電話を掛けていた。

「もしもし?」

『もしもし? 一体どうしたの? そっちから掛けてくるなんて珍しい』

「ちよつとな……叔母さんに報告したいことがあつて」

『なにかしら?』

「今日さ……例の子と会つたんだ」

『そう……どうだった?』

ベッドに腰掛けながら、ダリルは放課後の出来事を思い出すかのよう
に目を瞑つた。

「控えめに言つても天使。大げさに言えば女神だな」

『でしょっ!? すっごい可愛いでしょっ!?』

「ああ……叔母さん達、実働部隊『モノクローム・アバター』が上層部
から下された緒理香の捕縛命令に異を唱えて反旗を翻して、『緒理香
たんを見守り隊』を結成したのも頷けるよ……」

『最初、私達は任務の為にあの子の周辺を探っていた。けどね……その
内に私達は、あの子……緒理香ちゃんの可愛さに目覚めてしまった』

「オータムの奴なんか、部屋中にオリカちゃんグッズを飾つてるんだ
ろ?」

『それは私もよ。知ってる? 緒理香ちゃんはね、欠伸をする時に『ふ
にゅ』って言うのよ! 可愛過ぎでしょっ!? 他にも、目を擦る時は
猫の手になるし、学校の近所にいる他の家の飼い犬と遊んでいる時な
んてもう……言葉では言い表せないぐらいに可愛かつたわ……♡
あれが決定打となつて、私達は全員揃つて緒理香ちゃんの虜になつ
ちやつたのよね……』

自分の知らない緒理香の事を自慢されて、少しだけムツとなつたダ
リルは、己の持つ最強の武器を取り出した。

「今日オレさ……緒理香の奴に『ダリルお姉ちゃん』って呼んでもらつ
た。しかも二回」

『な…なんですってっ!? そんなのズルい〜!』

「ふっ…先輩だけの特権って奴さ」

『私も緒理香ちゃんに『スクールお姉ちゃん♡』って呼んでほ〜し〜い〜!』

「…お姉ちゃんは難しいんじゃないか?」

『何か言った?』

「いや…何も」

幾ら親戚同士でも、言っている事と悪い事はある。

皆も言葉遣いには気を付けよう。

「そういや、近々そつちを抜ける予定なんだろ?」

『そうよ。あんな、緒理香ちゃんの可愛さを理解出来ない愚か者共に従う道理なんて微塵も無いしね。これからは非公認ファンクラブ兼防衛部隊『緒理香ちゃんを見守り隊』として活動していく予定よ』

「言うまでも無いけど、オレも参加するからな。先輩として、超絶可愛い後輩の貞操を守る義務がある」

『貴女なら、必ずそういうと思うていたわ。いいでしょう、一緒に緒理香ちゃんを守るわよ!』

「任せとけ!」

こうして、緒理香の全く知らない所で、また一つ彼女の心配事が消えると同時に、別の意味での心配事が増えたのだった。

『そうそう。実はね、私とオータムでIS学園に教師として赴任する事を今、計画中なのよね』

「流石にそれは初耳なんだけどっ!」

日中休戦協定締結

放課後にトレーニングルームにてたつぷりと汗を掻いた私は、そのままどこにも寄らずに、真っ直ぐと自分の部屋へと帰ってきた。

部屋には先に箒が戻ってきていて、既に部屋着の格好になっていた。

「なんかごめんね。先にシャワーを使わせて貰ってさ」

「気にするな。今日はトレーニングルームで頑張ってきたのだろう？」

「だったら、緒理香が先に汗を流すのは当たり前だ」

「なんて…なんていい子や〜！」

「箒ってマジで東と同じ親から生まれてるの？」

「姉とは似ても似つかない程にいい子過ぎるんですけど！」

「はっ！ そうか…東だけ橋の下から拾われてきたんだな。」

「うん。きつとそうに違いない。」

「じゃないと、この説明がつかないもんね。」

「シャワーを浴び終わったら、後で一緒に夕ご飯を食べに行こうね」

「そうだな。緒理香を待っている間に何を頼もうか考えておくとするか」

「それなら、私はシャワーを浴びながら考えようかな？」

「もう完全にお腹がぺこぺこなのですよ。」

「これはマジでお腹を背中がくつつくかもしれない。」

「やつほ〜。本音から部屋の場所を聞いたから、遊びに来たわよ〜」

「…って、どうしたの？」

「……………」

「なんちゅータイミングで遊びに来るんだよ、鈴は……」

確かに、原作でも箒達の部屋に来てはいたけど、まさか今の時間に来るとは思わなかった。

「あれ？もしかして緒理香って今からシャワータイムだったり？」

「まあね」

「そっか。あれだけ汗を掻いたんなら、それも当然よね。大丈夫よ、あたしのことは気にしないで、遠慮なくスッキリしてきて。箒とも少し

話したいと思つてたし」

「そう？ それじゃあ、お言葉に甘えて」

着替えと変えの下着とバスタオルを持って、シャワー室へとGO！

でも、鈴が箒に話つてなんだろう？

全く想像がつかないや。

・
・
・
・
・
・
・

緒理香がシャワー室へ入っていくのを見届けてから、鈴はベッドに座っている箒の隣に座った。

「お邪魔するわよ」

「邪魔するなら帰れ」

「吉本の芸人みたいなことを言うんじゃないわよ。つていうか、あんたもお笑いと見えるのね……」

「吉本は私にとって、数少ない心の栄養だ」

因みに、過去に箒は一度、一人で吉本の舞台を見に行ったことがある。

こう見えても意外と茶目っ気があつたりするのだ。

「それで？ 私に話とは何だ？ まさか、『緒理香と一緒に部屋になりたいから、自分と部屋を交換しろ』とか言い出すんじゃないな？」
「ンなわけないでしょ。あんたから見たあたしはどれだけ常識知らずなのよ。流石にそこまで馬鹿じゃないわよ」

「いや……なんとなく、そんな事を言い出しそうな気がしたから」

どこからか別の世界の電波でも拾ってしまったのだろうか。

ある意味で箒の予感は的中しているかもしれない。

「そつちこそ、いきなり怒り出して竹刀とか振り回しそうな感じがしたけど」

「幾ら私が剣道部で道場主の娘だからと言って、そんな事だけは決してやらない。竹刀や木刀は自分の感情を発散させる為の暴力道具ではないのだからな」

「それはあたしも分ってるんだけどね、不思議とそんな気がしたというか……」

「意味が分らん」

鈴も鈴で、別世界の電波を拾ってしまったようだ。

だが、ここでの二人はどっちも思慮深くて暴力沙汰には至っていない。

「なんだ？ まさか、こんな下らん話をするために、態々ここまで来たのか？」

「冗談。ちよつと箒に聞いたことがあつてさ」

「聞きたいこと？」

「そう。あんたつて、緒理香と同じ部屋に住んでるのよね？」

「そうだが？ それがどうかしたのか？」

「ぶつちやけて言うけど……もう緒理香と何かした？」

「何かとは何だ？ 具体的に言え。具体的にな」

「それをあたしの口から言わせる気？ つまり、緒理香の体を抱きしめたり、一緒に寝たりとかしたかつてことよ」

「本当にぶつちやけたな……」

だが、ここで変に羞恥心を晒したりしないのが箒と言う少女。

伊達に剣道で心身共に鍛えてはいない。

「そうだな。朝にはよく緒理香の髪を櫛で梳いてやったりはしているな」

「ああ……それはいいわね。緒理香の髪ってマジで超サラサラしてるもんね。手櫛でも全く引っかかったりしないし」

「全くだ。同じ女として本当に羨ましい限りだよ」

うつとりとしながらも、しれつと自分の優位性をアピールする箒。

彼女は言葉に出さずにこう言っているのだ。

『緒理香を本気で愛しているのはお前だけではない』と。

「で？ 勿論、それだけじゃないんでしょ？」

「ふっ……当り前だ」

「そうよね。超絶可愛い緒理香を目の前にして、それで終わるとか有り得ないわよね」

ここで箒は、自分の手札の中にある最大のカードを場に出した。

「緒理香と一緒に部屋になってからずっと、私は毎日のように緒理香と一緒にベッドで寝ている」

「それって、つまり……」

「添い寝だ。あの天使のような寝顔を間近で眺めながら、緒理香の温もりを体全体で感じつつ、いつも寝ているのだ。お蔭で、IS学園に入学してからはいつも朝まで熟睡だ」

見ているこっちが呆れるほどのドヤ顔を見せる箒。

だが、それをキツ化されても鈴の表情が全く揺らぐことは無かった

！

「そう……それは羨ましいわね」

「なん……だと……！」

完全に悟りを開いた僧侶のような顔を見せる鈴に、箒は戦慄する。

まさか、こちらのジョーカーが全く通用していないのか？

「箒はさ……今日、トレーニングルームで何が起きたかは知ってる？」

「緒理香が体力づくりに励んでいたのだろう？ それがどうかしたのか？」

「その様子だと、どうやら本当に知らないみたいね……安心したわ」

「お前は……何を言っている……？」

部屋の中で重苦しい空気が流れ始める。

箒と鈴との間には『ゴゴゴ……』といった効果音まで出現していた。

「あたしはね……今日……」

「ゴクリ……」

「緒理香に！ 『鈴お姉ちゃん♡』って呼んで貰ったのよ——

——！！」

「な…なんだって———！！？」

思わず大声を上げる箒。

だが、シャワー室にいる緒理香にはシャワーが流れる音で殆ど聞こえてはいない。

「流石のあたしも、まさか緒理香に『お姉ちゃん』と呼んで貰える日が来るとは思ってたわ。天にも昇る気分とは、まさにこの事よね……」

「なんて…なんて羨ましい……！ 私も緒理香に『箒お姉ちゃん』と呼んでほしい……！」

「緒理香は優しいから、頼めば普通に言ってくると思うけど？」

「そうか…そうだよな。よし、ならば緒理香がシャワー室から出てきたらダメ元で頼んでみるか……」

「是非ともそうしなさい。幸せ気分になれるのは保障するわ。なんせ、同じように緒理香に『お姉ちゃん』って呼んで貰ってた先輩二人が本気で悶絶してた程だから」

「緒理香の可愛さは、既に先輩達すらも虜にしているのか……」

「本当に可愛いものには国境も歳の差も関係ないって事よ」
素晴らしい事を言っているように聞こえるが、実際には『緒理香可愛い！ 緒理香最高！ 緒理香は私の嫁！』と言っているだけである。

そこだけは絶対に勘違いをしてはいけない。

「そういや、どうして緒理香にシャワーを先に譲ったの？ あんたも運動系の部活に入ってるって緒理香から聞いたわよ？」

「そんなのは愚問だろ」

「え？」

箒は真剣な顔で、真っ直ぐに鈴の目を見て告げた。

「緒理香の後に入れば、緒理香の残り香や緒理香の体毛の抜け毛なんかをゲット出来るかもしれないだろ？」

矢張り、あの姉にしてこの妹である。

篠ノ之の血は争えないようだ。

「それ、超分かる」

鈴、お前もか。

しかもこの少女、次の瞬間にとんでもない爆弾発言をする。

「でもさ、残り香はともかくとして、緒理香に首から下の体毛なんて存在しないでしょ。ゲットのしようがないじゃない」

「……ちよつと待て。なんでお前がそんな事を知っている？ それではまるで、鈴が緒理香の裸を見たことがあるみたいじゃないか」

「『あるみたい』じゃなくて、実際にあるわよ。忘れたの？ あたしと緒理香は小学校、中学校と一緒にだったのよ？ となれば当然、修学旅行とかにも一緒に行ってる。あんただって知ってるとは思うけど、基本的に小学校や中学校での修学旅行のお風呂って集団で入るのが基本になってるじゃない？」

「そ……そうだな……」

「あたしはよく緒理香と一緒にの班になってから、当然のように緒理香とも一緒のお風呂に入ったことがあるのよ。つまり……」

「緒理香の全てを見たことがある……と……」

「その通り。文字通り、隅から隅まで知ってるわよ？ 因みに、緒理香の体には上も下もなくにも生えてないから。プニプニのツルンツルンよ」

「プニプニ……ツルンツルン……」

想像してしまったのか、箒の鼻から真っ赤な『愛』が流れてきた。

鈴も当時の事を思い出したのか、同じように『愛』が溢れてきた。

（この勝負……私の負けだ……！）

一体いつから勝負に発展し、何をもってして敗北したのか。

そこの所をちゃんと読者にも分かるように説明して欲しい。

「あたしはね、不毛な争いはしたくないの。千冬さんって言う目下のライバルがいる以上、下手に拘ってしまつと、まさかの一撃で千冬さんに漁夫の利を取られる可能性があるから」

「そうだな……私も、誰かといがみ合うのは御免こうむる」

「でしょ？ それに……」

「それに？」

「緒理香の『初めて』は皆で仲良く、一緒に楽しみたいじゃない？」

「同感」

気持ちがいい程のサムズアップで応える筈。

こうなったらもう、この二人を止める術は無い。

「あの美幼女な緒理香を皆で弄って、思いつきり喘がせて……」

「私達の手で『女』にするのだな。最高じゃないか……」

ガシツつと熱い握手を交わす二人。

もうここには一人の幼女を巡って争う好敵手はいない。

いるのは、共に幼女を愛でたいと願う友だけだ。

「……なにやってんの？」

とんでもないタイミングで上がってきた緒理香は、全く状況が把握出来ないまま、目が点になった状態で固まっていた。

・
・
・
・
・
・
・

シャワーを浴びて心も体をスッキリさせて部屋に戻ってきたら、私の幼馴染二人がいつの間にか仲良くなってた件。

いやね、別に仲良くなるのは本当にいいんだよ？

原作みたいにピリピリしてるよりは、仲良く笑い合う方がすつといいし、私だって嬉しい。

けど、その経緯ぐらいいは知りたかったな。

「えつと……どうしたの？」

「なんでもないわ。ただ、色々と話している間に自然と仲良くなった、それだけよ」

「鈴の言う通りだ。共通の話題で私達は友情を育んだんだ」

その『共通の話題』がなんなのかは非常に気になるけど、今は黙ってしよう。

「緒理香」

「な…なに？」

「これからは、私達がお前（の処女）を守ってやるからな」

「大丈夫。一緒に（大人への階段を）楽しみましょ？」

……気のせいかな。

聞き取れない不穏な言葉が聞こえたような気がしたんだけど。

「まずは、私が髪を梳いてやろう」

「そして、その後はわたしが髪をドライヤーで乾かして、結んであげるわ」

「あ…ありがとう？」

「その後に、一緒に夕飯を食べに行こう（行きましょ）」

「う…うん」

すっごい息ピッタリだな……。

ここまで仲がいい筈と鈴つてのも新鮮かも。

けど、なんで嫌な予感が全く拭えないんだろう？

妙に背筋がゾクつてするとか……。

新たな千冬さんの存在が生まれたのを感じたというか……。

どうか、この予感が当たりませんように。

ツインテールと眼鏡なあの子

もう完全に恒例となっている、私の生徒会室訪問。

いや、今の私は立派な生徒会役員なのだから、生徒会室にやってくるのは当たり前前事なんだけど。

「まさか、中国から来た転入生の子が緒理香ちゃんのお友達だったなんてね」

「世間とは、我々が思っている以上に狭いのかもかもしれませんね」

そう言われると、確かに思ってしまおう。

前世でもよく、高校以来全く会ってない友人と意外過ぎる場所であつたりしてたからね。

例えば、バイト先で客と店員としてとか。

「私と鈴は、小学校と中学校が一緒だったんですよ」

「へ？ あの子って前に日本にいたことがあるの？」

「です。あれは確か：私が小5の頃だったかな？ それからずっと日本にいて、家庭の事情で中学2年の後半辺りにまた中国に戻っていくまでは、ずっとこっちにいましたよ」

なんとも懐かしいね。

あの頃はよく、一夏や弾と一緒に色々な場所を遊び回ってたもんだよ。

で、バカをする男子二人を見て笑ってたりしてた。

「ということは、彼女にとっては日本に来たと言うよりは『日本に戻ってきた』という感じなのでしょうか？」

「かもですね。鈴も実際、『やっと戻って来れた〜！』って言ってましたし」

「それだけ、日本に楽しい思い出が詰まってるって事でしょうね」
そうだろうね。

滅多な事が無い限りは、鈴は自分から中国の話題を出そうとはしないから。

「中学時代に別れた友人が、再会した時には代表候補生になっていた…ね。今更だけど、緒理香ちゃんの交友関係って凄いわよね」

あ。それを言っちゃいますか。
自分でも自覚はしてます。

「だからこそ、ちよつと考えてることがあるんですよ〜…」
「考えてること？」

「あ〜あれだね〜」

「本音ちゃんは知ってるの？」

「うん。さつき、ここに来る途中で今度ある『クラス対抗戦』のトーナメント表が張り出されてたんだよ〜」

「あら。珍しく今回は仕事が早いわね」

「どんな風の吹き回しでしょうか？」

おっふ……二人が学園上層部に対して辛辣だった件。

ま、私からしてもあんまし、いい印象はないけどね。

「で、そのトーナメントがどうかしたの？」

「実は……」

「おりりんの一回戦の相手が、二組のクラス代表であるリンリンだったんだよ〜」

「しかもそれが、トーナメントの第一試合だったりするんですよ〜……」

「はあ……」

あらら。でっかい溜息。

「一体何を考えてるのかしら……」

「よりにもよって、専用機持ち同士の試合を一番最初に持ってくるなんて……」

「感心した私がバカだったわ……」

やっぱり、学園上層部はバカだった件？

私からしても『アホじゃね』って思ったけどさ。

「それで思ってたんですよ。体を鍛えるだけじゃなくて、ISの方の整備もしないといけないんじゃないかって」

「成る程ね。それで悩んでいる風だったのね」

「そーなんです。一応、ISの知識は全て頭の中に叩き込んでいるんで大丈夫ではあるんですけど、整備とかってまだ一度もやった事が無

いんですよ」

東に聞けば一番早いんだらうけど、そうすれば確実にあいつに借りを作ることに、休みの日とかに戻った時に何を要求されるか分かったもんじゃない。

「それなら、本音ちゃんや虚ちゃんが教えてあげればいいんじゃない？」

「ほえ？」

「この姉妹が？ にやんで？」

「虚ちゃんはISの操縦よりも整備とかを学んでいる『整備班』で、本音ちゃんも整備班希望なのよ」

「そうだったんだ……」

マツタクシランカッター。

「だから、整備の事を勉強したいなら、二人と一緒に整備室に行つて実際に手取り足取り教えて貰えばいいわ。虚ちゃん」

「はい。私でよければ喜んでお教えしますよ？」

「マジですか！ それは本当に願ったり叶ったりです！」

やった！ これで白式の整備方法を勉強しつつ、東に変に借りを作らないで済む！

やっぱり、頼れるものは優しい先輩と可愛い友人だね！

「では、今から行きますか？ 時間的にも、まだ整備室は開いている筈ですから」

「お願いします！ 善は急げ、思い立ったが吉日ですから！」

「いいことを言いますね。では……本音」

「は〜い。おりりん、がんばろ〜ね？」

「うん！」

これは普通にモチベーション上がりますよ〜！

頑張るぞ〜！ お〜！

.....

IS学園には他の学園には当然のように無い『整備室』なる施設が存在している。

ここは主に『整備班』と呼ばれる生徒達が整備の事を学んだり、整備の授業で使用したりと、思っている以上に様々な用途で使われる事が多い。

そんな整備室に今、一人の少女が自分の専用機の整備をしていた。

「ここは……うん。問題無い」

どこかで見た水色の髪に分析用の眼鏡。

彼女の名前は『更識簪』。

名前で分かる通り、彼女もまた更識家の人間……というか、あの楯無の実の妹なのだ。

更に、日本の代表候補生であったり、彼女が在籍している一年四組のクラス代表だったり、実は薙刀の達人だったり、大人しい見た目にして、姉に負けず劣らずのキャラの濃さである。

だが、流石に性格までは似なかったようで、姉とは違って基本的には口数が少なく、引っ込み思案である。

ここで一つ補足をしておくと、『正史の世界』^原のように彼女の専用機である『打鉄式式』は、別の機体の開発にスタッフを取られて製作途中で放り出された……なんてことはなく、ちゃんと完全に完成された状態で彼女に譲渡された。

この世界における『白式』は束が一から製作した『緒理香の為だけに存在するIS』なので、開発元である『倉持技研』とは全く関係が無い。

よって、簪が緒理香の事を恨んでいるなんてことは一切無い。

単純に、クラスが違うから交流が無いだけの話である。

「よし。今度はこっちを……」

よって、本来ならば彼女が整備室に入り浸る理由は皆無に等しいのだが、どうも簪はこまめに打鉄式を点検しないと気が済まないように、こうして放課後にはよく整備室に立ち寄ってから、自分の愛機の状態をチェックしている。

「ん？ 誰か来た？」

今日もまた簪が自分の機体の整備に明け暮れていると、整備室の扉が開く音が聞こえてきた。

なんだろうと思って、ふと入口の方に目を向けると、そこには三つの人影が見えた。

しかも、そのうちの二つは彼女もよく知っている人物達だった。

（えっ!? 本音と虚さんっ!? なんてここに……って、虚さんは整備班で、本音も整備班希望者だったから、放課後にここに来てても不思議じゃないか……）

簪と本音は所謂、幼馴染同士であり、虚は本音の姉としてだけではない、自分の姉である楯無の友人としてよく知っている。

特に、本音は簪付きのメイドでもあるのだ。

因みに、楯無付きのメイドは虚である。

（あ……あれ？ 二人の間に誰がいる？ 小っちゃくてツインテールで……この特徴、どこかで聞いたことがあるような気が……）

なんだか急に気恥ずかしくなったので、急いで専用機を待機形態に戻してから物陰に隠れる簪。

彼女とて仮にも暗部の端くれ。その程度の事は造作も無かった。

「ほえ……思ってた以上に本格的なんですネ……」

「そうですよ。ここの設備は一流企業などにも決して劣ってはいません。ここならば十二分に整備が出来ると思いますよ？」

「私も初めて来たよ。凄いね」

「本音……」

二人の間で揺れる、ピンク色のツインテール。

そこでようやく、簪は前に聞いた噂を思い出した。

（そうか……あの子が噂に聞いてた特待生の子だ！ まるで小学生みたいに小さい体に、特徴的なピンク色のツインテール。まるで、少女

マンガのヒロインみたいに可愛い美少女だつてクラスの皆が話してたっけ……)

少しだけ顔を覗かせて、簪は緒理香の姿をよく観察してみる。

(大きな目に無邪気な笑顔……。何もかもが私と同じ年とは思えないぐらいに小つちやくて…プニプニしてそうで……)

虚の説明を聞きながら、緒理香が目をキラキラさせて整備室を眺めていく。

その様子はまるで、新しいぬいぐるみを買って貰った幼女のようにだ。

「すつごく……まるで、ロボットアニメの世界に迷い込んだみたいだ……」

今は美少女でも、前世では立派な男。

こんな場所で興奮するのは当然の事だった。

(か…可愛い……♡ これは確かに可愛い……♡)

簪も他の女子達の例に漏れず、可愛い物が大好きな女の子だ。

特に、彼女は二次元にも詳しい為、より一層可愛く見えてしまっている。

(気のせいか、あのツインテールがピコピコと動いてる……。あれってアニメだけじゃなかったんだ……。あれはちよつと反則だよ……♡)

顔を真っ赤にしながら悶絶する簪。

完全に緒理香によって墮とされた証拠である。

(もうちよつと…近くで見てもいいかな……?)

ここで大胆な行動に出た。

いつもならば、決してこのような勇気のいる行動はしない彼女なのだが、『緒理香をもつと近くで見たい』という欲求には抗えなかったようだ。

足音と気配を完全に消し、そそそそ……つと、三人がいる場所まで近づいていき、別の物陰に隠れる事に成功した。

「まずは機体をハンガーに固定しましょう」

「どうすればいいんですか？」

「訓練機などの場合は、ここに機体を直接運び込んでからアームに固定をするのですが、専用機の場合は少しだけ違ってきます。まずは、ここに専用機の待機形態を設置してください」
「え〜つと…こうかな？」

緒理香が恐る恐る、白式の待機形態であるガントレット(仮)を、ハンガーに設置してある機器に取り付けた。

「そして、ここをこのようにすれば…」

「おお〜！」

虚が機器を操作すると、ハンガーに純白の美しいIS『白式』が展開され、アームに固定された。

「はい。これでOKです」

白式の威容を眼前で見、別の意味で魅了された。

それはまさに、白き戦乙女の鎧そのものだった。

(凄く…綺麗なIS…)

実は、緒理香が前にアリーナにて白式の試運転をした時、簪もアリーナの観客席にて彼女の事を見ていたのだ。

その時は白式の高い性能と、見た目に反しての凄まじい實力しか見えていなかったが、これから先はそんな事はないだろう。

もう彼女は、緒理香の魅力をその目で知ってしまったのだから。

「こうして改めて見ると、やっぱりとてつもない機体ですね」

「ですね。白式は私から見ても、凄い機体ですよ」

「すっごく速いもんね。こう…ビュ〜！ って感じで」

本音の幼児みみたいな表現に、思わずズルつと脱力しそうになる。

(本音…高校生なんだから、もうちよつと理知的な表現をしようよ…)

だが、簪はまだ知らない。

一組にはもう一人、似たような表現を使う剣道少女がいる事を。

今頃は剣道場にてくしやみをしている頃だろう。

「それでは始めましょうか」

「よろしくお願ひします」

「しま〜す」

どうやら、今から白式の整備が始まる様子。

簪は密かにここで、三人の…というか、緒理香の整備をする様子を眺める事に決めた。

あの姉にしてこの妹あり…ということか。

(なんとかして、あの子の姿をスマホの写真に収められないかな…)
流石にそれは無謀過ぎるぞ。

『萌え』こそ即ちローマである

緒理香と本音と虚の様子を物陰から観察している簪。

その様子は、見る人間が見れば完全に変質者である。

矢張り、血は争えないという事か。

「まずは、この端末を持ってください」

「これですか？」

緒理香が備え付けの専用端末を虚から渡される。

だが、彼女の小さな手では整備用の端末は少し大きいようで、なんとか両手で持っている状態だ。

「結構デカいんですね。これ、片手で持つのは難しいかも」

「あらら。一応、普通サイズなのですが……」

「おりりんは、自分のスマホも思い切り手を広げて持つてるもんね」
そこで、簪は緒理香が必死にスマホを操作している様子を思い浮かべる。

使い慣れない道具を頑張って使おうとしている様子は、見ているだけで普通に微笑ましい。

(妄想だけでも十分に尊い……。実際に見たらどうなるんだろう……)

多分、他の者達と同様に鼻から『愛』を噴き出すだろう。

緒理香に萌えた人間達の大半が辿る末路である。

「では、私を持ってあげますから、緒理香さんはこちらの指示に従って指だけを動かしてください」

「分かりました」

虚に端末を渡してから、改めて画面を端から端まで見渡す。

そこには、現在の白式の姿がデータとなって、事細かに表示されていた。

「最初にここを見てください。この数値はですね……」

本格的に虚の整備講座が始まった。

緒理香は勿論の事、流石の本音もこの時ばかりは珍しく真剣な顔で説明を聞いていた。

(本音もあんな顔が出来るんだ……)

幼馴染の始めて見る顔。

だが、それで寂しさを感じる事などは無く、寧ろ、素直に見直した。(もしかして、いつものアレは、私達の事を安心させようとしてやっているのかな……)

だとしたら、自分はこれまでに何度、本音の優しさに救われてきただろう。

今度からは、もうちよつとこつちからも優しく接してみようと思う簪。

そう決意を固めると同時に、目ではちゃんと緒理香の事を追っていた。

「そうです。そして、ここをタップすると……」

「えい」

指定された場所を緒理香の小さな指が触れる。

すると、ハンガーにある整備用アームが動きだし、白式のボディを弄り始めた。

「おお〜！」

「基本的に、このようにしてISは整備をします」

「すつご〜い……まるで、ロボットアニメみたいだ……」

その大きな目をキラキラさせながら、動くアームを見続ける。

宛ら、憧れのヒーローに出会って興奮する子供のように。

その感情がかなり昂ったのか、左右のツインテールがまるで尻尾のようにピコピコと動いた。

(またツインテールが動いた！ もう……本気で可愛過ぎ……！)

勿論、その様子を緒理香の近くにいた二人が見逃す筈も無く、虚はもう毎度のように真面目な顔をしながらの『愛』を噴出。

本音は間髪入れずにスマホでの写真撮影。

「う…虚さんっ!? なんか鼻血出てますよっ!?」

「これは失礼しました。またもや、緒理香さんの可愛さに萌えてしまったようです」

「え? 今なんて……?」

普段の虚からは絶対に考えられない発言に、緒理香は素で目を丸くする。

それは、物陰から除いている簪も同じだった。

(なんか今……虚さんの隠されている一面を垣間見た気がする……)

本音の姉という事もあり、虚ともかなり長い付き合いになる簪。

そんな彼女でも、虚のあのような姿を見るの初めてだった。

(そして、本音……後でその撮影した写真を譲ってね。1000円までなら出すよ)

この少女、思い切り買う気満々である。

「お姉ちゃん。はい」

「ありがとう、本音」

ここでさりげなくポケットから出したティッシュを姉に渡す本音。

流星は従者の家系の少女。

他者のフォローならばお手の物である。

「う〜ん……」

「どうしました?」

「えつとですね。こうして白式の事を見て改めて思ったことがあつて」

「思った事…ですか?」

「はい。もう知ってるかもですけど、白式って基本的に武装はあの近接ブレードの『雪片式型』しかないわけじゃないですか」

「そうですね」

あの時の模擬訓練は誰の目にも鮮烈で衝撃的だった。

同時に、殆どの生徒達の白式の基本スペックや武装などについても知られてしまったわけで。

「雪片用の『鞘』が欲しいなくって思ってた」

「鞘…ですか」

「です。もう武器が知られているのに、態々拡張領域に収納して隠す必要はどこにもないんじゃないかって」

「一理ありますね。それに、予め外付けで装備していれば、武装の展開も早くなる」

「でしよう？　しかも、空いた雪片の分を別の武装を拡張領域に入れる事が出来るんじゃないかな〜…なんて」

「成る程〜。おりりん、頭いいね〜！」

ここで簪は、白式に鞘が装着された姿を頭の中で想像してみる。

その姿は正しく、白き武者。

(それ…めっちゃアリだ。というか、普通にカッコいい…)

今度は別の意味で興奮する。

『萌え』と『燃え』が共存している今の簪は、自分自身でもワケ分らないことになっていた。

(出来れば私にデザインさせてほしい！　いや、私に造らせて〜！)

興奮の余り、油断をして無意識の内に足を前に動かしていた。

それがいけなかった。

なんでか、簪の足元に誰かが直し忘れたスパナが落ちていたから。

カランカラン……

「あ」

「「え？」」

この状況でいきなり金属音が聞こえてくれば、誰だって嫌でもソッチの方を向く。

緒理香と虚と本音が音のした方を向き、其処にいた簪とバツチリ目が合ってしまう。

(なんでこんな場所にスパナがあるの——つ!?)

知りません。

「簪……お嬢様？」

「え？　ええ？」

「あ〜！　かんちやんだ〜！」

「ど…どうも……」

本音以外の間には、何とも言えない気まずい空気が流れてしまった。

特に、緒理香は本気で状況が理解出来ずに目が点になっている。

・
・
・
・
・
・
・

い…今、起こった事をありのままに話すのぜ。

虚さんと本音と一緒に整備室に来て、白式を使つての整備の練習をやっていたら、なんでか原作ヒロインの一人である更識簪が背後からジ〜つとこつちを見ていたんだのぜ。

ストーカーとか尾行とか、そんなちやちなもんじやない。

もつと恐ろしいものの片鱗を感じちやつたのぜありますですことよ……。

「簪様がここにいらつしやるという事は、機体の整備ですか」

「あ……はい」

ん？ 機体の整備？

確か原作じゃ、白式の開発にスタッフの殆どを取られちゃつて、その結果として彼女の専用機は中途半端な状態で開発を放置されてたんだよね？

で、彼女はお姉さんである楯無先輩に対抗する意味も込めて、自分一人で機体を完成させようと躍起になつてて……あれ？

(それじゃあ、『整備』じゃなくて『製作』つて言うべきなんじやないの?)

まさか、ここでも原作解離が発生してる？

チャンスがあれば確かめてみたいけど……。

「簪さま。この子は……」

「知ってます。一年一組の莱鞭緒理香さん…だよね」

「う…うん。私の事つてそんなに知れ渡つてたんだ……」

「有名人だから」

有名人……。

普通なら甘美な響きの言葉なんだろうけど、今の私にとっては普通に嫌な単語だ。

私は決して目立つことなく、穏やかな学園生活を満喫したかったのでござる。

東の手で特待生にされた段階から、その理想は完全崩壊してるけどね……。

「緒理香さん。この方は『更識簪』さまと仰りまして、楯無お嬢様の妹君であり、日本の代表候補生でもあるのです」

「そして、私の幼馴染でもあるんだよ〜！ ね〜！ かんちゃ〜ん！」
「一応ね」

原作通りの淡泊な感じだなく。

けど、根つこの部分は優しい子なんだよね。

緒理香ちゃんは何んでも知ってるのだよ。

「更識簪です。一年四組のクラス代表をやっています」

「ら……菜鞭緒理香です。一年一組のクラス代表をやっています」

う〜ん……なんともぎこちない挨拶。

私個人としては、ヒロインの中じやかなり真面目な部類に入ると思うから、仲良くしたいとは思ってるんだけど……今はまだ難しいかな。

（あ———！！！！ なに無愛想な挨拶なんかやってるの私は———！！！！
こんなんじや緒理香ちゃんを不必要に怖がらせちゃうよ———

———！！！！
き……気のせいかな？ さつき以上に表情が硬くなったような……。

「あ……あの〜……」

「なに？」

「整備って事は、機体は完成して……？」

「うん。専用機なんだから、ちゃんと完成した状態で渡されてるけど、それがどうかしたの？」

「う……ううん。それならいいんだ。うん。大丈夫、なんでもない」

やっぱり、簪の専用機である『打鉄式』はちゃんと倉持技研で完成されたんだ。

ってことは、この白式は東が最初から全部一人で製作したってこと

なの？

うわあ〜…凄いいけど、マジで引くわ〜……。

(何を聞きたいのか全然分からないけど……小首を傾げている姿が可愛いから全てよし!!)

なんでイイ笑顔で親指を立ててるの？

しかも、なんか眼鏡がキラーンって光ってない？

あれなのか？ メガネキャラは何かある度に眼鏡を光らせないといけないルールとかあるのか？

「よろしかったら、簪様もご一緒にご見学しますか？」

「是非ともお願いします!!」

「わ〜い！ かんちゃんも一緒だ〜！」

それはいいけどさ……凄いい気合入ってたね……。

やっぱあれなのかね？ こんな場所では気合が入るのかな？

(ナイスアシスト虚さん!! 私が言おうとしたことを向こうから言ってくるなんて！ 流石はお姉ちゃんの従者だけはある！)

……うん。まあ…なんだ。

本人が嬉しそうにしてるし、今はそれでいいか。

「それで、先程の話の続きですが」

「あ、はい。鞆のことですね」

「ええ。よろしかったら、私たち整備班で製作しましょうか？」

「い…いいんですか?!」

「勿論です。こちらにとっても勉強になりますし、整備班ではISの整備だけではなく、独自に試作武装なんかを開発をしたりもするんですよ」

「マジですかっ!」

それは本気で知らなかった……。

IS学園の2〜3年生ともなると、そこまでの技量が求められるんだな〜。

純粹に凄いつて思うわ。普通に尊敬する。

「特に何かを使用する訳でもないですし、そこまで時間は掛からないと思いますよ? 恐らく、明日からでも始めれば、クラス対抗戦には

間に合うかと」

「願っても無いですよ！　ありがとうございます！」

もう……マジ感謝！　マジ最高すぎ!!

この人は聖女様の生まれ変わりか？

「でも…なんだか申し訳ないですね。そこまでして貰うと」

「気にしないでください。私達もいつも、緒理香さんには『お世話』になってますから」

「そう…なんですか？」

特に何かをした覚えはないんだけど……？

「お姉ちゃん！　私も手伝いたい〜！」

「そうね。これぐらいならば本音でも大丈夫でしょう。一緒にやってみる？」

「うん！」

ここで本音の参戦ですか。

増々、完成が楽しみになってくるね。

「では、まずはその武装用のハンガーに雪片式型を出してくれませんか？　サイズを図らない事には造り様がないですから」

「はい」

えっと……これかな？　ポチポチつとな。

「あ………出た」

あの時は自覚してなかったけど、意外と雪片式型って大きかったのね。

そりやそつか。IS用の剣だしね。

「これをスキャンしてから……」

雪片がサーチライトみたいのでスキヤニングされていく。

すると、端末に雪片の情報が映し出される。

「これを参考にしながら鞘を作っていきましょう。何か形状のリクエストなどは有りますか？」

「そうだな〜……」

リクエストといえば……一つだけ考えてることはあるんだよね。

それで大丈夫……かな？

「可能であれば……なんですけど、鋭い形状がいいですね」

「二、鋭い形状？」」

「分り難かったかな……。えっとですわね、剣みたいな形で、刀身を収納した状態でも普通に鰐迫り合いも出来るぐらいに丈夫で……」

「ずつと前に何かの漫画で見たことがあるような気がするんだよね。」

「どんな作品かは完全に忘れたんだけど。」

「なんとなくですけど、緒理香さんの言いたいことは理解出来ました。同時に、私の中で大体のイメージも固まりました」

「おお〜……」

「虚さん……すっげ〜……」

「IS学園三年生の整備班って、よくよく考えたら普通に凄い肩書だよな……」

「しかも、この人はあの楯無さんが心から信頼している程の人だもんね。」

「そりゃ、これぐらい普通に出来て当然か。」

「デザインは私が考えます」

「え？ でも、簪さまはクラス代表で……」

「わ・た・し・が・か・ん・が・え・ま・す」

「は……はい」

「す……スゲー迫力……」

「こんな所だけは姉妹揃ってよく似てるわ……」

「期待してて待っててね。絶対にカッコいい鞆のデザインを考えるからー！」

「う……うん。お願いね？」

「任せて!!」

「クラス対抗戦の準備……いいのかな？」

「(なんか凄く大事な事を忘れてるような気がするけど、別にいつか!)
急に不安になってきた……」

「この選択は正しかったのかな……?」

なんか増えました

「フンフンフン♪」

虚さんから整備の事を教えて貰った次の日。

私が超ご機嫌な状態で朝ご飯を食べていた。

「今日の緒理香さんはとても上機嫌ですわね」

「そうなんだ。昨日、帰って来てからずっとこの調子でな。話を聞こうにも、緒理香の笑顔が可愛過ぎて見惚れてしまっただけだった」

「その気持ちはよく分かるわ……」

なんか箒とセシリアと鈴が言ってますけど、今の私は寛大な心で軽く受け流しちゃいますよ。

「おりりくん！」

「おはよう」

「あ！ 本音に簪〜！」

朝ご飯をパクパクしていた私達の所に、本音と簪がやって来た。

因みに、なんで私が簪の事を名前で呼んでいるのかと言うと、昨日の帰り際に本人から直接『名前で呼んでほしい』と頼まれたから。

やっぱり、名字で呼ばれるのには抵抗があるのかな？

「ここ、いいかな？」

「別にいいよ。皆もいいよね？」

「いや……いいとかダメとか以前に……」

「誰？」

そうでした。

この時点じゃ、まだ三人は簪の事を知らないんです。

「えっと、この子は更識簪って言って、四組のクラス代表で……」

「日本の代表候補生をしてるんだよ」

「ちよ……本音……」

本音に一番大事な部分を取られました。

「二に……日本の代表候補生っ!?!」

うお……すっごい驚いてるな……。

見事に三人揃ってハモってるし。

「そーいや、クラスの子が言ってたわ。代表候補生がいるのは一組と二組だけじゃなくて、四組にもいるって」

「全く存じませんでしたわ……」

「しかも、日本の候補生とはな……」

三人が戦慄している間に、私は本音と簪に空いた席に座るように促した。

このままだと、いつまで経っても座れそうにないしね。

「えつと……緒理香さん？　そこにいらっしやる更識さんとはどのような御関係なんですか？」

「初めて会ったのは昨日んですけど……」

「……で、今必殺の……かくかくしかじか！　かくかくうまうま！

「……ってなわけなんだよ」

「I Sの整備の勉強を三年生の先輩に教わっていたら、そこに彼女がやって来て……」

「そのままの流れで仲良くなったと……」

「流石はあたしの緒理香ね……。再会してまだ少ししか経ってないのに、もう他の子を虜にしちゃうだなんて……」

何が『流石』なの？

そここのところ、詳しく聞きたいな〜？

「そうだ。昨日行ってた『鞆』の件んですけど……」

「どんな感じ？」

「一応、簡単なデザインは出来上がったから、放課後にでも一度確認して貰えないかな？」

「勿論！　今から楽しみだよ〜！」

簡単なデザインって、ラフ画的なやつかな？

だとしたら普通に凄くない？

だって、頼んだのは昨日の放課後だよ？

もしかして、部屋に帰ってからすぐに作業に取り掛かったのかな？

「お……緒理香！　『鞆』とは一体何の話だっ!？」

「おっと。箒達にはまだ話してなかったっけ。そうだなあ〜……」

一応、クラス対抗戦で戦う予定の鈴にはまだ話したくないんだよな

」。

本番まで隠しておいて、試合の時に驚かせたいからね。

「教室に着いたら教えるよ。多分、千冬さんや山田先生にも話しておかないといけないと思うし」

「わ…分かった。緒理香がそういうのならば、大人しく今は我慢するでしょう」

「そうですね。我慢する事もまた淑女の嗜みですわ」

それは普通に初めて聞いた。

「ちよつと。あたしには内緒な訳？」

「ごめんね。でも、試合本番になれば嫌でも分かるから、その時まで待ってて。ね？」

両手を合わせながらのウインク。

これでどうにか誤魔化せないだろうか？

「し…仕方がないわね！ 緒理香の可愛さに免じて待っててあげようじゃない！」

効果絶大でした。

なんか鈴の鼻から赤いものが垂れてるし。

「けど、それなら四組の簪はいいわけ？ 一応、他のクラスなわけだし……」

「その点は心配無用。今回のトーナメント、四組は優勝を捨てる事にして一組に協力することで満場一致したから」

「「嘘おっ!?!」」

何がどうしてそうなったわけえ!?

「昨日の出来事をグループラインでクラスメイトの皆に話したら、いつの間にか一組…:というか、緒理香に協力する話になった」

「よく担任が許可したな……」

「いや、担任の先生が真つ先にその話に持つていった」

ゴンツッ×4

「いたた……。思わずテーブルに頭をぶつけちゃったよ……」

「それでいいのか担任……」

「箒さん。それに関しては、一組も余り他のクラスの事は言えません

わよ……」

「そうだった……」

生真面目の皮を被った変態が担任ですからね。

頑張れ山田先生！　と言わせて頂きますわ。

「もしかして……二組つて割と普通のクラスだったりする？」

普通なのが当たり前なんですけどね。

一組と四組が異常なだけです。

「イベントには参加するけど、緒理香との対戦の時には即座に降参することになってる」

「本当にそれでいいの？」

「大丈夫。一回戦や二回戦を勝ち抜けば、それだけで問題は無いと思う。重要なのは結果じゃなくて、試合の内容だから」

「そんなもんなのか……」

なんつーか、代表候補生ってのも大変なんだね。

機会があれば、私の知ってる代表候補生の皆を労うような事をしてもいいかもしれない。

えっと……セシリアに鈴に簪、それからダリル先輩とフォルテ先輩も候補生だったよね？

それから、楯無先輩に至っては代表だし、もっと大変な筈。

……次に生徒会室に行った時は、多少の我儘は許してあげようかな。

「そんなわけで、放課後にまた整備室に来てくれる？」

「りょーかいです！」

我ながら情けないと思っではいるけど、このワクワクは誰にも止められないんだにゃ〜！

うん！　男も女も関係なく、メカのパワーアップはロマンだよね！

「鈴！　プチパワーアップした私を楽しみに待っててよね！」

「うん……待ってる♡」

こっちは宣戦布告のつもりなのに、なんで慈愛に満ちた微笑みで応えるの？

・
・
・
・
・
・
・

「……というわけなのですよ」

「成る程……雪片に鞘を作り、外付けの装備にして……」

「それで空いた拡張領域に他の装備を入れられるようにする……成る程ですわ」

約束通り、教室に着いてから箒とセシリアに教えてあげた。

すると、割と普通の反応を見せてくれた。

「確かにそれは『プチパワーアップ』だな」

「大幅な強化ではありませんが、間違いなく今の白式には必要不可欠な強化ですわね。流石に剣一本だけというのは潔すぎますし」

「そうだよね」

全く。なんで束はこんな『特攻上等！』な武装にしたのやら。

いや……あいつの事だから、私がこの考えにいずれ到達すると見越して、わざとこんな風な使用にした可能性も……。

(……それは無いな)

それは深読みしすぎだわ。

絶対に面白半分でやったに決まってるな。

あいつに真面目さなんて求めちゃいけない。

「で、そのデザインを簪に任せて……」

「設計と開発を上級生の整備班の先輩方をお願いしている……と」

「そーゆーこと。まさか、昨日の今日でもう簡単なデザインが出来たとは思わなかったけど」

徹夜とかしてないだろうね……？

夜更かしは美容の大敵なのですよ？

束とクロエに耳にタコが出来るほどに言われたから、自然と癖になってる。

「鞄があれば、あの試運転の時に見せた居合も十全に発揮できるな」
「それだけではありませんわ。鞄があれば緒理香さんの『ブレーキ』になつてくれるかもしれません」

「うむ……」

ブレーキ？ なにそれ？

その後、教室にやつて来た先生方にも同じような話を話すと、山田先生は素直に感心してくれて、千冬さんはとても複雑な表情をした。

それが何を意味するのか、私には全く分らなかった。

・
・
・
・
・

昨日と同じ整備室に、昨日と同じメンバーが集結する。

簪の手には彼女の物と思われる端末があつて、そこには3Dで描かれた一つの鞄が表示されている。

「まずはこんな物でどうかかな？」

それは、近未来の刀剣である雪片に合わせた、鋭いブレードのように研ぎ澄まされた、白い装甲に青い線が入っている美しい鞄だった。

「白式や雪片のイメージに合わせてみたんだけど……」

「凄い……」

「え？」

「凄いよ！ 超凄い！ 私、これがいい!!」

まさか、あんな短時間でここまで素晴らしいものをデザインできる

なんて、簪って普通に天才じゃね？

冗談抜きで驚かされたよ！ 勿論、いい意味で！

「これが雪片の鞆かあ〜……カッコいいなあ〜……」

鞆にここまで惚れ込むことがあるなんて思わなかったよ……。

これが実際に雪片を収納し、白式に装着される姿を想像すると

……。

「えへへ……」

笑いが止まりませんにや〜……♡

(妖精ですか)

(天使だよ……)

(なにこの可愛い生き物。本当に私達と同じ人類なの？ 本当は女神の生まれ変わりか、もしくは現身とかなんじゃないの？ というか、それしか有り得ない程に可愛過ぎるんですけど)

でも、先輩達にばかり頼りつきりと言うのはよくないよね。

ここはあれだね。自分自身のトレーニングも挟みつつ、時にはこっちの手伝いをしに来た方がいいね。絶対。

「簪様のデザインがお気に召したのであれば、改良などはせずにこのままでもいいですか？」

「はいー」

「分かりました。では、そのように」

これで、雪片の鞆の開発計画が本格的に始動だね。

よもや、ここでこんな事になるとは予想だにできなかったけど。

「鞆を製作する前に、まずは白式本体の方に鞆を装着する用のアタツチメントを設置しなくてはいけませんね」

「そっか。着ける場所が無いと、幾ら鞆があっても意味ないですもんね」

「その通りです」

本格始動とは言ったはいいけれど、ゴールはかなり遠そうだな。たかが鞆だと侮るなかれ。

これはISの武装用の鞆なのだ。

そんな所そこの剣や刀の鞆と一緒にしちゃいけない。

「では、今回は本音も手伝いなさい。色々と練習などはしているようだけど、ここで少しは本格的な整備の経験をしておいてもいいでしょう」

「うん。いっぱい勉強して、おりりんのISの…白式の専属整備士になりたいから、私…頑張るね」

「その意気よ」

ほ…本音が燃えている……！

こんなにも真剣な本音を見るのは初めてだ……。

意外なギャップに、緒理香ちゃんは胸キュンでドキがムネムネして
ますよ？

「私も手伝います。自分の機体でそれなりにノウハウは掴んでますから」

「承知しました。何かあれば遠慮なく仰って下さい。いつでもフォローしますので」

「そうさせて貰います」

そっか。簪も何気に自分の機体を自分で整備出来るほどの実力を兼ね備えてたんだっけ。

そう考えると、やっぱり簪って他の代表候補生よりも総合能力的な意味で優れてるのだろう。

インドア派な見た目に反して、その中身は文武両道な優等生……いいね！

こうして、私の学園生活初めての大きなイベントは、かなりの大掛かりな事になってきた。

でも、不安材料が何も無いわけじゃない。

クラス対抗戦といえば、アレがやってくる懸念があるから。

(無人機ゴーレム……あれはどうなるんだろう？ 全く予測が出来ないや……)

この世界では東は無人機なんて物は開発してないし、それを送り込む理由も無い……と信じたいが、あいつの頭の中を読むのはそれこそ神様でもない限り不可能だ。

だから、一応の警戒ぐらいはしておいた方がいいかもしれない。

いざって時は、それこそ切り札で、試運転では結局、使うことが出来なかったあの『零落白夜』の使用を考えなくてはいけない。そんな事にならないのが一番なんだけどね。

有ると無いとでは大違い

学年別トーナメントまで、あと二日にまで迫った日。

私は今日もトレーニングルームにて、せっせと体を鍛えていた。

というのも、鞆製作には雪片本体が必要不可欠なので、ISの練習をしたくても出来ないんだよね。

だから。必然的にこうして筋トレをするしかなくなってる訳なのです。

「ちゅ〜……」

で、今はスポドリを飲みながら絶賛休憩中。

全身汗だくでタンクトップがベタついて気持ち悪いけど、思いつきり体を動かしてから地味にスッキリはしてる。

「ほれ。汗が拭けないからジツとしてろ」

「綺麗な髪も汗でベタベタになってるツスよ」

そして、なんでかダリル先輩とフォルテ先輩が私の体と髪の毛をタオルで拭いてくれている。

凄く良い笑顔をしながらタオルを動かしてて、なんだかホワホワした気分になってきた。

ああ〜…至福だニヤ〜……♡

(まるで猫みたいに、気持ちよさそうに目を細めて……)

(いつ見ても、緒理香ちゃん可愛いツス！ こんな妹が欲しかったツスね……)

気持ち良すぎて、なんだか眠くなってきたかも……。

でも、ここで寝落ちする訳にはいかないから、なんとか耐えた。

「ん？」

荷物の中にある私のスマホが震えてる？

誰かから着信でも来たのかな？

「おや」

来ていたのは着信じゃなくてメールの方だった。

メールの送り主は虚さん。その内容は……。

「にゃんこ」

遂に『鞆』が完成したんだ！

確かに、クラス対抗戦には間に合うとは言ってたけど、まさかここまでベストタイミングで完成するとは思わなかった！

「どうしたんだ？」

「誰かからメールっすか？」

「虚先輩からです」

「お前、あいつと知り合いだったのか…って、そういや何気に生徒会所属だったな……」

「ダリル先輩って、虚さんとお知り合いなんですか？」

「知り合いつて言うか、クラスメイトだな。割と話す方だとは思う」
「そうだったのか。」

「というか、それは普通に友達なのでは？」

「可能であれば、今から整備室に来てほしいって言ってますね」

「なら、とつとと行ってやんな。待たせる訳にもいかないだろ」

「ですね。それじゃ、軽くシャワーを浴びてから行ってきます」

ベンチから降りて、まずはトレーニングルームに設置してあるシャワーに向かう。

汗臭いままじゃ、虚さんに失礼だしね。

私自身も一刻も早く、汗のベタベタから解放されたい。

「シャワー室なら、今は誰も使つて無い筈だ。遠慮なく行ってこい」

「はーいー！」

シャワー室目掛けて、とつとと走るよ緒理香ちゃん。

ちゃんとバスタオルとかは忘れずにね！

「……これが『萌え』か」

「萌えっすね……」

お二方、一体何を言ってるんですか？

.....
.....
.....

シャワー室で汗を流してから、私は制服に着替えて整備室へと向かう事に。

まだ完全に髪が乾ききつてないから、ツイントールには結ばずに、そのまま流してるけどね。

でも、そのせいなのか、格納庫まで行く道中に皆からいつも以上に注目された。

「か…髪を下している緒理香ちゃんっ!？」

「これはこれでまた違った魅力があつて…：…凄く良い!!」

「ストレートにしている緒理香ちゃん…：…可愛い…：♡」

「間違いなく永久保存版ね！ このシャッターチャンス逃してたまるものですか！」

…別に私がどんな髪型にしても構わないでしょうがよ。

どれだけ暇なんだチミたちは。

IS学園に来てから集団に注目される事に耐性がついてはきてるけど、それでもキヤーキヤーと騒がれるのは苦手だ。

早く整備室まで向かわないと。

きつと、虚さんだけじゃなくて、簪や本音も待っていてくれるに違いないし。

流石に廊下を走るわけにはいかないので、早歩きで歩行速度を上げる事に。

「着いた…：…」

暫くして、ようやく念願の整備室へと到着。

これで視線のレーザーマシンガンからは解放されるよ。
てなわけで、扉を開けますよ〜と。

「お待たせしました〜」

「緒理香さん。よく来てくれました…：…たっ!？」

え？ な…なに？ どうかしたですか？

いつものようにハンガーの前で待っていてくれた虚さんと、彼女と一緒にいる本音や簪、それから他にも見たことのない先輩方の動きがいきなり停止した。

「お…緒理香さん…？ その髪型は一体…」

「ここに来る前にシャワーを浴びてきたんですよ。ついさつきまでトレーニングルームで体を動かしてたもんですから。汗を掻いたままで来るわけにはいかないと思って…」

「汗…」

ちよ…ちよつと？ 本当に大丈夫ですか？

何がどうして、そんなジョジョ風の顔になってるんですか？

（お…緒理香さんの汗…）

（舐めたい…嗅ぎたい…自分の体に塗りつけたい!!）

（おりりんが汗を掻いてる姿…絶対にエロかったんだろっうなあゝ…）

ええええっ!? なんか本音以外の皆の鼻から血が流れてるんですけどっ!?

「けど…それ以上に…」

「はい…」

なんだろう…凄く嫌な予感が…。

「髪を下した緒理香（さん）が可愛過ぎる!!」

急に顔を両手で覆いながらのブリツジっ!?

今、確実に総鉄製の床に頭を打ちましたよねっ!?

「おりりん」

「ほ…本音？」

「写真を撮ってもいい？」

「い…いいけど…」

「ありがとう」

本音って、なんでか私の写真を撮る時だけ素の口調と表情になるよね…。

これ…本当に大丈夫かな…。

・
・
・
・
・
・

「お恥ずかしい姿をお見せしました」

少ししてから元に戻った虚さん達は、いつもの顔になる…が、鼻に詰めたティッシュユがシユールすぎて、表情と全く合っていないんですけど。

「虚、この子がそうなのよね？」

「はい。噂の一年生の菜鞭緒理香さんです」

「そっか〜…この子が〜…」

「お…おう？」

今度は見知らぬ先輩方がにじり寄ってきましたよ？

な…なんだ？ やるのかコノヤロー！

「「「可愛い〜♡」」」

「ふにや〜っ!？」

そこら中から手が伸びて私の頭を撫でてくる〜!?

く…くすぐりたいからやめて〜!

「肌がプニプニでスベスベ…」

「この髪もサラサラしてて…」

「これぞ、正真正銘の美少女!」

「この可愛さは異次元だわ…」

「今…分かったわ。宇宙の萌えとは、緒理香ちゃんのことだったのね」
もうどこからツツコミをいれたらいいのか分からないんですけど?!?

誰でもいいから、何とかして〜!

「はいはい! 緒理香さんが可愛いのは理解できますが、今日ここに

集まったのは彼女を愛でる為だけじゃないでしょう？」

「そうでした」

「おやく？ 私の気のせいかな？」

虚さんの口から、鞆以外にも私を愛でる事もまた目的の一部みたいな言葉が聞こえて気がしたぞ？」

「緒理香さん。メールで知らせた通り、遂に雪片の鞆が完成しました」

「おお〜！」

「ごつちだよ」

「うん！」

簪に手を引かれて、ハンガーの近くまで案内される。

やっぱ、私の手って他の皆と比べても小さいんだな。

（自然な流れで緒理香さんの手を握ることに成功した！ 流石は私！）

なんか変な気を感じたような……。

「これは……！」

目の前のハンガーには、既に雪片の刀身が収納された状態の、デザイン画通りの姿をした、幾何学的な鞆が立っていた。

鞆の装甲に私の顔が反射して、自分の顔が見える。

それ程までにこの鞆は美しく輝いていた。

「どうですか？ お気に召しましたか？」

「虚さん……」

感動の余り、私は傍にいた虚さんの体にムギユツと抱き着いた。

「最高です！ 本当にありがとうございます！」

「ど……どういたまして……」

なんか呂律がおかしくなってますんか？

急に抱き着いたりして悪かったかな。

（お……おおお緒理香さんが私の体に抱き着いててててててつっ！？
こ……これは……私からも抱きしめてもよいのでしょうか……）

そろそろ離れた方がいいかな。

そうしないと、なんか離れるタイミングを失うような気がする。

「緒理香。私も頑張って手伝った。だから、ハグして欲しい」

「私も！ 私もおりんにギュ〜ってして欲しい〜！」

「二」「私達も頑張つて手伝いました!!」「三」

「あ…はい」

結局、皆にハグする羽目になりましたとき。

私の善意は混沌しか生まないのか…？

・
・
・
・
・
・
・

一通りハグをし終えてから、ようやく話が先に進んだ。

「では、実際に白式に装着してみましようか」

「はいー」

皆が少し離れてくれたところで、いつものように白式を展開する。

もうすっかりコレにも慣れちゃってるね〜。

「では、まずは手に取ってみてください」

「了解です」

ISを装着したことで延長した腕を伸ばしてから、固定されている雪片を鞘ごと手に取り、予め増設されている腰のハードポイントに装着する。

「どうですか？」

「いい感じですよ。思っている以上に違和感はないし……」

腰を低くしてから左手を鞘に添えて、右手で雪片の柄を握る。

「普通に抜刀も出来そうです」

「よかった……これで、本当に完成ですね。皆さん、お疲れ様でした」

腰に鞘を装着している白式…か。

これは何気にめっちゃカッコいいのでは？

「これって、鞄を装着したままでも普通に錨迫り合いとか出来るんですよね？」

「勿論です。緒理香さんが要望し、簪お嬢様がデザインした通り、この鞄自体が刀剣のような攻撃力があります。普通に見れば大きな剣にしか見えませんから、相手の不意を突くにはもってこいかも知れませんね」

不意を突く……それいいかも！

バトル系マンガの主人公みたいでかつびよいい！

「本当は試しに素振りとかしてみたいけど……」

「残念ながら、この時間帯からではもうアリーナは使えませんからね」

「本番まで取っておくほうがいいかも。どこに偵察の目が潜んでいるか分からないから……」

「そうだね！ 隠し玉は隠しておいてこそ意味があるんだもんね！」

「その通り」

簪の言う通り、ここは敢えて我慢をしてトーナメント本番で皆の度肝を抜いてあげよう。

それはそれでまた面白いかもしれない。

・
・
・
・
・
・
・

束の移動式ラボ。

彼女は今日もモニター越しに緒理香の様子を伺っていた。

「成る程ね。ゾーン発動時の反動に耐える為に体を鍛えつつ、雪片に『鞄』という『リミッター』を設ける事で、ゾーンを意図的に切り替えられるようにしたんだね」

頬杖をつきながら、束はニヤニヤとした表情でモニターに映っている緒理香の顔を指でなぞる。

「流石は私のおーちゃんだね。まさか、そんな形で『力』を制御しようと考えてるなんて。いや、あの様子から察するに、無自覚のままできてるのかな？」

緒理香がゾーンに入れるのを知っているのは、千冬や箒、セシリアを除けば後は束しかない。

最大の当事者である緒理香自身も、自分がゾーンに入って超絶的な戦闘力を発揮していることに気が付いていない。

その事が吉と出るのか、それとも凶と出るのかは誰にも分らない。「でも、これは私から見てもナイス判断だよ、おーちゃん。試合の時は鞘を付けた状態で力を温存して、『その後』に抜刀して『ゾーン』と『零落白夜』を開放して、一気に決着をつける。それぐらいでもない『定められた運命』を乗り越える事なんて不可能だからね」

背凭れに体を預け、意味深な笑みを浮かべる。

「私には何も出来ないけど、きつとおーちゃんなら大丈夫だって信じてるよ。だって……」

「おーち：ゃんは私の大切な妹なんだから」

私って、これが初陣じゃね？

遂に…遂にこの日が来てしまった。

原作でも一番最初の学園のイベントである『クラス対抗戦』。

ここで原作一夏は鈴と試合をして、その後に謎のISと連続で戦う羽目になるんだけど……。

(ここにいるのは一夏じゃなくて私だしなあ……)

本来の歴史とは何もかもが違う状況な為、これから先に何が起こるのか全くの予想がつかない。

東の立場も少し違うから、あいつの思惑が全然分からない。

色んな事に不安を感じながら、私は前に白式の試運転をした第3アリーナのピットにて試合の時を待っていた。

「おりりん、だいじょくぶっ？」

「う…うん。なんとか……」

試合を前にした私の傍には、いつものように箒とセシリアと本音の三人がいた。

箒と鈴は当然だけどここにはいない。

二人は別のクラスの代表だし、鈴に至っては一番最初の対戦相手だしね。

「大丈夫ですわ。緒理香さんならきつと勝てますとも！」

「その通りだ。緒理香が今感じている緊張感は私もこれまでに幾度となく経験したことがあるから、今のお前の気持ちはよく分るぞ」

「そ…そうなんだね……」

「そーいや、箒は剣道の全国王者だったっけ。」

「ってことは、それまでに何回も何回も試合を繰り返して来たって事になるのか。」

「うへえ…私には絶対に不可能だわ…」

箒…マジで尊敬するかも。

「別に緊張をするなどは言わない。程よい緊張感は自分の心を引き締めてくれる。その緊張感を楽しめるようになれば一人前だ」

「き…緊張を楽しむ…？」

なにそれ。そんな超合金Zみたいな精神力なんて人間に身に付けられるの？

「……あのさ。今ちよつと思つたことがあるんだけど」

「なんですの？」

「私つてさ……これが初めての試合じゃね？」

「「あ」」

ここで冷静に考えてみました。

本当ならば原作やよくある二次創作では、この前に一度、セシリアとクラス代表を決める為の試合をしているわけでした。

それである程度の経験を積むのがある種のお約束になってるんだよね。

でも、私の場合は……。

(なんでかセシリアとの試合はお流れになって、しかも当の本人は『代表補佐』なんて隠し玉で見事に逃れた。私がしたことと言えば、白式の起動実験とドローン相手に動いただけ。少なくとも、対人戦は冗談抜きでこれが初めてになるんだよね……)

人生初めての試合が、こんな大衆の面前でする公式戦って、どんな羞恥プレイなんですかつ؟!?

「ど……どどどどどうすればいいのかにや？ やっぱ、試合の前には挨拶とかしなきゃダメなやつ？ 歓声にはちゃんと応えて手とか振らないといけないのかにや？」

こんな時の礼儀作法とか全く知らないんですけど……?!

え？ 割とマジでどうすればいいのっ!?

(にやって言った)

(にやって言いましたわね)

(猫耳つきたい。思い切り愛でたい)

うう……なんで肝心な時に千冬さんと山田先生はいないんだよ！

二人はこのアリーナの管制室に行っていて、ここで行われる試合の様子をチェックする役目があるそうなの。

因みに、皆は後で観客席に行つて試合を観戦するって言った。

先生たちの所に行こうとはしない分、原作よりも常識人にはなっているのかな。

「し…心配はご無用ですわ。特に挨拶とか名乗りとかしなくても大丈夫ですから。緒理香さんは、ステージに出たら試合までの僅かな時間を利用して、対戦相手である鈴さんと軽く言葉を交わして、少しでもリラックスをすればいいのです」

「ホント？ 本当にそれだけでいいの？」

「ええ。ですから、肩の力を抜いてくださいな」

「うん……」

流石は現役の代表候補生。

こんな時にどうすればいいのかを、ちゃんと熟知している。

なんか、少しだけ私の中でセシリアに対する好感度が上がったかも。

ちよつとだけ『緒理香・オルコット』になってもいいかも、なんて思っっちゃった。

『第一試合に出場する選手は、ステージに出てください』

あ……とうとう来てしまった。

心臓が凄まじい速度で早鐘を打ってるよ〜！

「では、私達はさっき言った通り、観客席で見守っているからな」

「御武運をお祈りしますわ」

「頑張つてね、おりりん！」

「が…がんばりましゅ……」

一番肝心な所で噛んだ。

どうしてこうも私は締まらないんだろう……。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「遂にこの日が来たわね」

「ソ…ソ…ダネ…」

白式を装備してステージに出ると、其処には既に鈴が自身の専用機『甲龍』シエンロンを纏って待機していた。

うん。原作と同じで凄く刺々しいです。

「それが緒理香の専用機？」

「白式だよ」

「名は体を表すね。文字通りの真っ白な機体じゃない」

「まあね。でも、これはこれでカッコいいと思う」

「それはなんか分かる気がする」

ん？　なんか、少しだけ緊張が解れてきた？

セシリアの言ってた通りだ！

でも、これはきつと仲がいい鈴だからこそ効果があったんだろうな。

もしも相手が見知らぬ相手たつた場合、増々緊張していたに違いない。

よし。今度セシリアのお部屋に遊びに行こう。

勝つにしろ負けるにしろ、頼りになるアドバイスをくれたお礼はちゃんとしないと。

「で、その腰につけているのが……」

「この白式の唯一無二の武装である『雪片式式』だよ」

「剣一本だけ？　正気？」

「その台詞は開発者に言ってください」

「そ…それもそうね」

私だって、好き好んでこんな浪漫溢れる仕様にしたわけじゃないんですよ。

「でも、それを少しでも改善しようとする私の努力はしたんだけどね」

「改善？」

「この雪片を収納している『鞘』だよ」

腰のハードポイントから鞘ごと雪片を取って、鈴に見せつける。

「現状、武器が一つしかないのに態々、拡張領域に収納する必要性を感じなくてさ、こうして鞘を作って貰ったんだ」

「成る程。それが前に緒理香が言ってた『プチ・パワーアップ』なのね」
「そのとーり」

ぶつちやけ、これが有るのと無いのでは本気で大違いな気がする。

なんつーの？ 安心感が段違いだよね。

「鞘があるだけでも、出来る事は多くなるからね」

「そうね。ふふ……柄にもなく、ちよつとだけ緒理香との試合が楽しみになってきたわ」

不敵な笑みを浮かべる鈴。

あんな顔も出来たんだな……。

『では、これよりクラス対抗戦、一年の部の第一試合を始めたいと思います。両者は既定の位置まで移動をしてください』

き……来た！

私と鈴は静かに前方に移動をして、ある程度の距離を取ってから止まった。

(そういえば、鈴の専用機の名前って完全に当て字だよな。だって、どう考えたって『甲龍』と書いて『シエンロン』なんて呼ぶ筈ないもん。つーか、シエンロンって名前なら衝撃砲なんて癖の強い武器じゃなくて、ドラゴンハングとか火炎放射器とか装備しろよな)

なんて、一番緊張するはずの場面で非常にどうでもいい事を考えてしまう私。

きつと、これは誰もが一度は経験したことがあるんじゃないだろうか。

例えるなら、会社やバイトの面接の時とか。

「ISを装備した状態で手の平に『人』って書いて飲み込んでも効果つてあるのかな？」

「さ……さあ？ あんまし意味は無いんじゃない？」

「そっか……」

こんな時に何を言ってんだ私はあああああああつ!!?
ほら〜! 鈴も本気で困ってるじゃないか〜!

『では……試合開始!』

ブ————つてブザーが鳴りましたよって、少しは空気を
を読まんかい!!

すっごい変な空気のまま、試合が始まつちやつたよおおおおおっ
!?

・

・

・

・

・

「と……とにかく、行くわよ!」

「よ……よおうしー!」

鈴がでっかい近接ブレードを二本、両手に装備してから構えた。

それを見て私も、鞘ごと雪片を腰に当ててから左手で持ち、右手は
軽く柄に添えて、いつでも攻撃出来るように腰を低くした。

あのブレード、名前なんて言ったっけ?

「……………」

動かない。

正確には、動けない。

私も、多分は鈴もだけど、先制攻撃を仕掛ける事の恐ろしさをよく
理解している。

昔はよく格ゲーとかで対戦してたからね。

その辺の事はお互いに御見通しなのですよ。

「はああっ!!」

このままでは時間だけが無駄に過ぎていく。

ここでもまた私達は意気投合したようで、お互いに真っ直ぐに突っ込んでいった。

「せいっー！」

「はっー！」

従来の雪片よりも、鞘により射程も刃の幅も広くなって威力が増した状態なのに、向こうの大きな刃と互角の鏝迫り合いになっている。逆を言えば、鞘が無い状態だとパワー&重量不足で普通に弾き飛ばされていたに違いない。

「いい踏み込みをするじゃない…！ この甲龍とパワーで渡り合うなんて！」

「いや…白式は普通にパワー負けしてるよ。ギリギリで何とかなってるのは、鞘を付けたお蔭で重量が増した雪片のお蔭だった」

鞘自体を一つの刃とするように注文したのは大正解だった。

これなら、雪片を守りつつも相手と戦うことが出来るし、切り札としての『零落白夜』が使い易くなる。

結果として攻撃力とかも上昇してるしね。

(つーか、前とは違って今回はあの『変な感じ』にはなってないんだな……)

今の私は自分でもハッキリと断言出来るほどに正気を保っている。

そんな状態でも普通に試合が出来ている事に驚きなんだけど。

私って、こんなにも簡単に誰かに刃を向ける事が出来たのか。

今のISはスポーツだって分かってはいるけど、それでも正気の沙汰じゃないよな。

……ヤバい。私も段々と『ISの世界』に毒されていつてる気がする。

常識だけは忘れるな…私……！

「ほらほらあー！ ボーっとしてる場合じゃないわよー！」

「くっ……！」

こっちの刃を受け流すようにしてから鏝迫り合いを終わらせ、そこからステージ中央で私と鈴の激しい攻防戦が繰り広げられる。

「せいっー！ でりゃあああっ!!！」

「あぐ……！」

二振りの刃から繰り出されるコンビネーションは、着実に私の事を後ずらせた。

こつちと向こうの刃が交わる度に火花が散り、同時に自分が確実に押されている事を自覚する。

（パワーもそうだけど、手数が多いのが普通に厄介なんですけど！

向こうは白式こつちに足りない物を全部持つてるー！）

雪片の重量の増加に伴って威力が増したのはいいけど、それでもこつちの武器は雪片一つだけ。

空いた場所に他の武装を搭載出来れば一番なんだろうけど、今回はそうはいかなかった。

というのも、実は鞘が完成した時点で既に他の武装の殆どは他の子達が予約してしまっていたのだ。

装備したくても、装備する武器が無いんじゃない。

結果として、今回は致し方なく鞘だけを追加で装備することになったのです。

「意外と粘るじゃない……それでこそアタシの緒理香ね！」

「それはどう……もっ！」

「つとー！」

僅かな隙を狙って横薙ぎに払うが、それを鈴は後ろに下がる事で回避した。

しかも、移動をしながら器用に二本の近接ブレードの柄を連結させて、ツインプレードしてから振り回し始める。

あ。これはマジでヤバイパターンや。

「ちよつと本気で行くわよく……！ どりゃああああああああつ
!!!」

「ぐあああああ……！」

咄嗟に刃でガードをしたけど、その衝撃までは軽減できずに斜め下に吹き飛ばされる。

飛ばされながら必死に目を開けると、甲龍の両肩付近が急に光り始めた。

この光景は知っている。

私の予想が正しければ、冗談抜きでピンチだ。
腹立つレベルで、使うタイミングが最高すぎる。

「これはおまけよ!!」

辛うじて体勢を整える事は出来たけど、上を向いた時には既に『見えないうか』が自分に向かって飛んできているのが分かった。

完全不可視の龍の咆哮。

普通ならばこのまま直撃コース一直線だろうけど、この時の私は不思議と違った。

(あれ? なんか……空気が歪んでいる?)

時間にして一秒にも満たない刹那。

私は確かな違和感を信じて、反射的にその『歪み』に向かって刃を振り下ろした。

「なっ!?!」

「手応えあり……!?!」

何も無い筈なのに、確かな斬り応えがあった。

周りからすれば、私が何をしたのか意味が分らないだろう。

でも、私には分かる。自分が何を斬ったのかを。

「嘘……でしょ……!?! 初見であたしの『龍砲』を見破ったの……!?! どうやって……」

「なんか、妙な歪みが見えたから……思わず斬っただけだよ……」

「は……? 歪み……ですって……?」

本気で脊髄反射で腕が動いたけど、どうやら正解だったみたいだ……!

地味に分の悪い賭けだったけど。

(じよ……冗談でしょ……? 確かに、周囲の空間を圧縮して弾丸として発射している以上、多少の歪みが発生しても不思議じゃないけど、それを観測するにはハイパーセンサーの感度を最大にしておかないと不可能な筈……。少なくとも、一瞬一瞬の判断の間違いが命取りとなる戦闘中にそれをするなんて出来るわけがない……。となると、緒理香はハイパーセンサーとか関係なく、肉眼で歪みを見つけた上で、自分の

勘を信じて刃を振るったっていうの……？)

…!
今のは完全にまぐれだったけど、次も同じようにいくとは限らない

…!
何回か練習をすればなんとかかなりそうだけど、んな事をさせてくれるわけないし……。

今の攻防で『衝撃砲』を攻略したとはお世辞にも言い難い。

まだまだ油断は禁物だ……！

黒の異形

なんとかかして『衝撃砲』の初撃を防ぐことには成功した。

だけど、あんな事をもう一回やれと言われれば、自信満々に『出来ません!』と断言してやろう。

さっきのは真正銘の偶然なんだよ!

アレを何回も出来たら、誰も苦労なんてしないツツーの!

(なんて言ってる場合じゃないか…。なんとかして衝撃砲を攻略しないと、こつちがやられる!)

幸いなことに、鈴はなんでか攻撃を仕掛けてくる気配が無い。

さっきの衝撃砲真つ二つがいい感じのブラフになってくれているのかな?

(まさか、初見でこつちの『龍砲』が見破られるとはね……。! かなり驚きはしたけど、そうでなくつちや面白くないわ! 流星はあたしの大好きな緒理香よね! 本当に…。いつもいい意味でこつちを驚かせてくれる!)

……。うん。

ハイパーセンサーのお蔭で、鈴の表情がめっちゃよく分かる。

最初は驚いた顔をしていたけど、すぐに嬉しそうな笑顔に変わった。

しかも、あの笑顔はアレだ。

鈴の『やる気スイツチ』が入った時の顔だ。

中学の時にあった運動会のクラス対抗リレーの時も、今と全く同じ顔をしてたもん。

(あそこは素直に攻撃を受けてお気べきだったかな……。)

いや、それはそれでヤバイような気がする。

あの時は何をすれば正解だったのやら。

(いやいや。そんな事を考えている暇があったら、少しでも衝撃砲攻略の鍵をだね……。)

緊張で掻いた汗が頬を伝って地面に落ちる。

そういや、今の私ってかなり下の方にいるんだっけ。

道理で地面が近いと思った……ん？

(ちよい待てよ……地面?)

地面スレスレで飛行しているから、白式のブースターで私の周りには僅かだけど土煙が発生していた……って！

(ああああ!!?)

お…思い出した…！ 完全に思い出した！

よくISの二次創作に出てくるオリ主がしている『対衝撃砲必勝対策』を!!

どうして、今の今まで忘れていたんだ私は！ 緒理香ちゃんのおバ

カさん！

「これしかない……！」

未だにポン刀しかない私には、もうこれしか残されていない！

原作一夏じゃない私は、私なりのやり方でこの試合を制してやる！

「鈴……」

「どうしたのかしら緒理香？」

「…その『見えない攻撃』…攻略させて貰うよ」

「なんですって……？」

・
・
・
・
・
・
・

一方、観客席では箒と本音、セシリアが試合を観戦していた。

「な…なんだあれはっ?! 緒理香がいきなり『何も無い空間』を斬ったかと思ったら、その直後にあいつの周りで何かが弾けたような感じがした！」

「リンリンが何かをしたって事なのかな…？」

「あの急に光った肩部装甲が怪しいが……」

本音と箒が二人で色々と考えている横で、セシリアが険しい顔をしてステージを見ていた。

「さっきからどうした？」

「もしかして、さっきの攻撃について何か知ってるの？」

「ええ……。恐らく、鈴さんが放ったのは『衝撃砲』ですわ」

「『衝撃砲？』」

初めて聞いた単語に、二人は揃って小首を傾げる。

それを見て、セシリアは丁寧の説明を始めた。

『衝撃砲』とは、中国が開発した第三世代兵装の一種ですわ」

「それって、セツシーのビット兵器と同じ……」

「その通り。空間自体に圧力をかけてから砲身を形成。その余剰で生成された衝撃を砲弾として発射する兵装なんですの」

「な……成る程……？」

「箒さん……全く理解してませんわね？」

「うぐ……」

一発でバレた。

代表候補生の目は誤魔化せない。

「しかも、あの衝撃砲には発射角度の制限が無いらしく、理論上ではどのような体勢、どのような状況でも攻撃が可能らしいですわ」

「そんな凄いものを中国は作っていたのか……」

「まだ試作段階だとは聞いていたんですのに、もう実機に装備していたなんて……」

同じ代表候補生として、絶対に見過ごせない事態。

自分の『ブルー・ティアーズ』とは全くの逆に位置する機体が、目の前で猛威を振るっている。

緒理香が負けるとは思ってはいないが、それでも苦戦は免れないだろうと思っていた。

「せめてもの救いは、射程と威力がアサルトライフルと同程度ってことかしら……」

「それでも、脅威であることには違いないな。空間を圧縮するが故に、

発射した本人以外には見る事すらも出来ない、文字通りの『不可視の弾丸』：か」

自分ならば、間違いなく避けようとするだけで精一杯になるだろう。

少なくとも、緒理香のように『迎撃しよう』という考えには至らない。

「けどけど、その衝撃砲をおりりんは斬ったんだよね？」

「やろうと思えば出来なくもないですけど……確実に至難の業ですわ。恐らく、可能なのは織斑先生を初めとした、国家代表選手レベルじゃないと……」

「緒理香は、そんな凄い事をしていたのかっ!？」

「そうですわ。しかも、初見で斬り裂くなんて、代表でも出来るかどうか……」

「おりりん……」

自分達のクラスメイトが、目の前でとんでもない偉業をしていた。

改めて、彼女の凄さを実感した三人だった。

「ともかく、これで精神的には優位に立ったでしょうね」

「鈴も、自分の切り札をあかも呆気なく見破られるとは思ってないだろうしな」

「けどけど、もう一回同じことって出来るのかなく？」

「難しいかもしれませんが……。なんとかして、本当の意味で衝撃砲を攻略する手立てを考えな限り……」

三人が不安に駆られて暗い顔になった……その時。

何を思ったのか、いきなりステージにいる緒理香が雪片で地面を攻撃し始めたのだ。

「きゅ……急にどうしたんだ緒理香はっ!?! 自棄にでもなったのかっ!?!」

「ううん……そうじゃないよ、しののん」

「なに?」

「おりりんの顔……すっごく真剣だよ」

本音の言う通り、緒理香が全力で地面を斬り、その衝撃で徐々にで

はあるが、ステージにいる二人の間に土煙が充満していった。

「地面を斬る……ここは一種の密閉空間で風は無い……土煙……まさかっ!？」

何かに感づいたのか、思わず立ち上がった大声を上げたセシリア。

その行動に、周りにいた生徒全員が驚いていた。

「流石は緒理香さん……よもや、そのような方法で衝撃砲の弱点を見破るだなんて!」

「弱点……だと? それはどういう事だ?」

「簡単な事ですわ箒さん。弾丸が『見えない』のであれば、単純に『色』をつければいいだけの話なのです!」

『色』を……」

「つける?」

「ええっ!」

流星に立ったままでは周囲に迷惑だと思ったのか、軽い謝罪と共に席に座り直した。

「思い出してくださいませ。衝撃砲は周囲の『空間』を『圧縮』する兵器。その圧縮する空間には勿論、『空気』も含まれています」

「そ……そうか! 土煙で鈴や自分の周りを覆えば……」

「圧縮時に土煙も一緒に巻き込んで、衝撃砲に『色』がついてしまう……」

「その通り! たった一回見ただけで弱点まで看破してしまうなんて……本当に素晴らしいですわ……」

うつとりとした顔を浮かべるセシリアの視線の先では、必死に衝撃砲の遮断空間を作っている緒理香がいた。

・
・
・
・
・
・
・

「し……しまったっ！」
やられた！

思わず心の中で舌打ちをしてしまう。

雪片で地面を抉って土煙を発生させている緒理香を見て、完全に拙いと思った。

衝撃砲最大の弱点。

それは、煙幕などを散布されると、空間の圧縮時に煙も巻き込んでしまい、結果として不可視の弾丸が『着色』されてしまう事。

（今の緒理香にスモークグレネードの類は無かった。けれど、それを土煙で代用してくるなんて！）

普通ならば、そんな地道な事でどうにかなるのかと思ってしまうが、ISにはパワーアシスト機能が搭載されている。

これにより、通常では考えられないような力を発揮出来るため、たった一撃でもかなりの土煙を発生させることが可能となる。

「これなら……！」

自分がいる高度までは全ての土煙は上がってこないが、緒理香がいる場所は完全に覆われてしまって、完全に彼女の姿を覆い隠してしまった。

緒理香に奇襲のチャンスを与えたばかりか、十八番である衝撃砲も封じられてしまった。

あつという間に、鈴は不利な状況へと陥ってしまったのだ。

（見えない段階でも普通に防がれたのに、色がついた状況で放つても命中率は3割にも満たないでしょうね……！ 奇襲、強襲こそがあたしの『甲龍』の真骨頂なのに、まさかされる側になるなんて！）

咄嗟にハイパーセンサーの感度を最大にし、自分の肉眼と合わせて周囲を警戒する。

ここで下手に追撃しても、それは完全に緒理香の思う壺。

かといって、ここでジツとしていたら、緒理香にとっていい的になる。

ならばどうすればいいか。答えは一つだった。

(緒理香が仕掛けてきたタイミングで、カウンターをするしかない!)
同じカウンターでも、衝撃砲はもう効果が無いだろう。

ならば、ここはお互いの距離である『近接戦』に賭けるしかない。

鈴は、連結していた近接ブレード『双天牙月』を分離させ、二刀にしてから両手で構える。

万が一、左右のどっちから仕掛けられても対応し易くなるように。

(どっ……どっから来るの……?)

今度は、鈴が冷や汗を流して唾を飲む番になった。

目まぐるしく視線を巡らせ、最大級に神経を張りつめる。

「……はっ!」

次の瞬間、ハイパーセンサーが自機に向かって何かが急速接近している事を知らせた。

鈴自身も即座にそれを察して防御の構えを取る。

彼女に向かって接近してきたもの、それは……。

「……これは……鞘っ!」

先程まで、雪片の刀身を覆っていた鋭い刃の形状をした鞘だった。

それが、まるで何者かに全力で投擲されたかのような速度で鈴に向かってってきたのだ。

「グッ……!」

急いでガードするが、またはやハイパーセンサーが敵機の接近を知らせた。

視線だけを後ろに向けると、そこには抜き身の刃を両手で構えた緒理香が凄まじい速度で飛び出してきていた。

(なにあれ……緒理香の目から……真っ赤な火花が散ってる……!?)

今まで見たことが無い緒理香の『戦士』としての顔。

目は鋭くなり、口はしっかりと閉じられたまま。

全身からは、圧倒的なまでの『剣気』を放っていた。

(は……早い! ……これは……イグニッション・ブースト瞬時加速っ!?)

万事休すか。

誰もがそう思った、その時……。

事態は、誰一人として予想だにしない展開になっていくのだった。

・
・
・
・
・
・
・

IS学園上空。

そこには何も無い。

穏やかな青空と、真つ白な黒だけが広がっていた。

飛ぶ鳥は気持ち良さげに風に乗り、遙か遠くの方で旅客機がどこかに向かっている。

そんな、何の変哲もない空の真ん中で、人知れず『とある異変』が起きようとしていた。

ゆつくりと雲が流れ、それが丁度、試合の真つ最中であるアリーナの真上を通過した瞬間、どこからともなく『ソレ』は音も無く出現した。

空間が開いた訳でもない。

誰かが送り込んできたわけでもない。

ましてや、どこからかやって来た訳でもない。

『ソレ』は本当に突如として、この空域に姿を現したのだ。

漆黒の装甲に包まれた『ソレ』は言葉の類を全く発せず、まるで何かを待っているかのように、その場にジツと滞空している。

だが、そんな時間はすぐに終わり、『ソレ』の深紅の目が怪しく光り出し、まるで深海にダイブするような体制になってから、真下にあるアリーナ目掛けて急降下を始める。

それこそが己の役目であるかのように、一切の迷いなく突撃していく。

およそ、普通の人間がするような行動ではない。

『ソレ』の深紅の目は、アリーナで試合をしている一人の少女だけを見据えている。

無言で、只管に、少女がいる場所へと向かっていく。

その光景を遠くで見っていた一人の女が、静かにこう呟いた。

「どんなに足掻いても…『歴史』原作は変えられない」

皆がいるから

土煙の中から飛び出してきた緒理香が、凄まじい速度で接近し、そのまま雪片の刃を振り下ろそうとした瞬間、アリーナ全体が大きく振動し、それと同時に『ナニか』がアリーナのシールドバリアーを突き破ってステージへと落下してきた。

「!!?」

余りにも突然の事で、鈴も緒理香も驚きながら落下物が落ちてきた場所に視線を向ける。

鈴は何が起きたのか分らずに混乱し、一方の緒理香は言葉に出来ない不可思議な感覚がして、咄嗟に振り下ろしかけた刃の向きを変えて、そのまま鈴を追い抜いてから彼女を庇うように背にしながら、二人目掛けて飛んできた紅蓮の光線らしきものを切り裂いた。

「お…緒理香?!」

「なに…これは……」

それは、謎の存在に対して言ったものではなく、自分が感じた感覚に対して放たれた言葉だった。

だがしかし、そんな彼女の心境なんて知る由もない周りは、謎の乱入者に対して言ったのだと勘違いをする。

「なんなのよ一体……って、緒理香?」

「鈴……ちよつとだけ下がって……」

「う…うん」

普段は見せない緒理香の迫力に圧され、鈴は素直に従った。

それを確認してから緒理香は、いきなり大きく叫んだ。

「……来い!!」

その叫びに呼応するかのようになり、さつき鈴にガードされて弾かれて地面に転がっていた鞘が飛来して、そのまま真っ直ぐに雪片の刀身に収まった。

「え…え? その鞘って、ビット兵器的な物なの?」

「うんにゃ。なんか試しに呼んでみたら勝手に飛んできた」

「なによそれ……」

『なんか』で、あんな芸当が出来てたまるか。

本当はそう叫びたかったが、状況が状況なので、ここは流石に黙っておいた。

「けど……いきなり何なのかしら……」

「さあね……それは、相手さんに聞いてみれば分かるんじゃないかな!!」

力任せに雪片を横に振ると、一気に周囲を覆っていた土煙が消え去った。

その中から出現した者。それは……。

「な……なに……あれ……」

「……………」

異形。

そうとしか表現できない物体が、其処に立っていた。

パツと見はISのようだが、大半の物が知っているISとは色々な部分が大きく違った。

異常なまでに伸びた巨大な腕。それだけで、人型とは言い難い。

頭部にはカメラアイとして真紅の複眼がある。それはまるで昆虫のように。

辛うじて人型を保ってはいるが、あくまで『人型』であり、これを『ヒト』と定義する者は何処にもいないだろう。これは『人型』というよりは、『ヒトを取り込んだナニか』と表現した方が正しいかもしれない。

その姿、その威容だけで他者を畏怖させ、戦意を削ぐ。

「黒い……悪魔……」

思わず鈴が呟いた言葉こそが、この場における皆の心境の全てを代弁していた。

「ねえ……ちよつと待ってよ」

「どうしたの？」

「あれってIS……なのよね……？」

「多分……ね」

「だとしたら……なんで……」

冷や汗を流しながら、鈴は震える唇を必死に動かして言葉を出す。

「なんで……アイツから何の反応もしないのよ……!」

「反応がない……?」

鈴に指摘され、緒理香も白式のハイパーセンサーを初めとした各種センサーで確認してみる。

すると、驚愕の事実が表示されていた。

「なん……だと……!?!」

コア反応…無し。

生体反応…無し。

各種反応、一切検知出来ず。

「これは……どういう事なのさ……!?!」

あろうことか、ISのセンサーの全てが眼前にある謎の物体の存在を全否定していた。

目の前には何もない。ここにある物体は『白式』と『甲龍』だけだ。

そう語っていたのだ。

「目には見えているのに……確かに地面を踏みしめているのに……この場には存在していない……?」

本当は、もつと色々と考察をして確認したい。

けれど、意志持たぬ鋼鉄の塊は、そんな暇も隙も与えてはくれなかった。

「背部ブラスターを吹かし始めたっ?! 鈴! 急いでここから離脱を

……」

「緒理香! 前!!」

「え……?」

その異形は、恐るべき速度を持って一瞬で間合いを詰め、一直線に緒理香に向かって突撃してきた。

紅の複眼に反射して映った自分の顔を見た時、緒理香は生まれて初めて生理的嫌悪というものを味わった。

……

・
・
・
・
・

突如として上空から落下してきた謎の物体。

緒理香の剣の一振りにて、それがISらしき者であることが判明した頃。

その光景を見ていた観客席もまた混乱し、まるで嵐の前の静けさのように静まり返っていた。

「おい…セシリア……」

「なんですの……？」

「あれは…IS…なのか……？」

「見た目的にはそう見えますけど……」

緊急事態という事で、セシリアはティアーズの頭部センサーだけを部分展開して、ステージに降りてきた存在を調べていた。

だが、その顔色はお世辞にも優れているとは言えない。

「あれからはISコアの反応は愚か、熱反応や生体反応すら検知してませんわ……」

「それって…あれには人間が乗ってないって事なの……セツシー……？」

「それどころじゃありませんわ…本音さん。全てのセンサーが『あそこには何もいない』と言ってるんですよ……！」

「!!」

言っている自分でも信じられないセシリア。

だが、それでも事実なのだ。

物質的には確かに存在はしているし、こうして見る事も出来る。

けれど、そこには誰もいない。

「今はまだ、状況把握が上手く出来ていないせいで、これといった混乱は起きていないようですけど……」

「それも時間の問題だろうな。この状況は云わば、破裂寸前の風船だ。何が切っ掛けとなつて決壊するか分らないぞ……」

思わず立ち上がり、ステージにいる緒理香と鈴の二人に注目する箒とセシリアとい本音。

他の生徒達も、何事かと思つて立ち上がつて状況を見守っていた。

「にしても、なんて不気味な姿なんだ……。あれではまるで、ISというよりは物の怪の類じゃないか……」

「箒さんの仰る通りですわね。私も、あれはISというよりはモンスターと言われた方がしつくりと来ますわ……」

「……っ!? 二人とも！ アレが動くよ!」

いきなり腰を低くしたかと思うと、背部にあるブースターに火を入れた。

その無機質な視線は何処を向いているのか。

「と…飛ぶ気ですわ!」

「奴の狙いはまさか……!」

箒の危惧通り、黒い鋼の物の怪は一直線に緒理香へと突貫していった。

その速度は通常のISは愚か、並の専用機のスピードすら軽く凌駕していた。

「緒理香!! 避ける!!」

「緒理香さん!!」

「おりりん!!」

三人の必死の叫びも虚しく、緒理香はその巨大な両腕に組み付かれ、その場にいた鈴を置き去りにする形で無理矢理押され、アリーナの壁に激しく激突した。

それが切っ掛けとなり、遂に生徒達の緊張が破裂した。

「!!」
「キヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!」

生徒達は我先にとアリーナの入り口に殺到し、一気に場が混乱の渦に包まれた。

こうなる事を予想していた箒達は、巻き込まれないように端の方に移動していた。

「案の定か……!」

「クツ……! 箒さん! 本音さん! 私達も早く避難しますわよ!」

セシリアが箒の腕を引つ張って移動させようとするが、彼女の体はビクともしなかった。

「悪いがセシリア……私は避難しない」

「いきなり何を言つて……」

「あそこを見ろ」

箒が視線を向けた先には、黒い機体の怪力に必死に抗おうと、全力で相手の体を押し出そうとしている緒理香の姿があった。

思い切り歯を食い縛り、彼女がどれだけの力を込めているのかが一発で分かる。

「緒理香は逃げようとしていない。あんなにも小さな体で、あいつは皆が逃げ出すような相手に立ち向かっているんだ! それなのに、あいつの事を好いている私が逃げるわけにはいかないだろう!」

「でも! 緒理香さんは貴女が危険に晒される事を望んでは!」

「分かっている! これは完全に私の我儘だ! だが! なんと叫ぶれようとも! 目だけは逸らしたくないんだ!」

そう叫ぶ箒の顔は今にも泣きそうで、彼女もまた必死には歯を食い縛っているのが分つた。

「本当は私だつて、怖くて怖くて仕方ないさ……。ほら、見てくれ……。さつきから手が震えて、脚もブルブルが止まらないんだ……」

「箒さん……」

「だが、あそこで戦っている緒理香は、私達以上に怖い思いをしている筈だ! ここで我が身可愛さに逃げたりしたら、私は必ず後悔する!」

恐怖に負けるのはいい。泣くもの良いだろう。

だが、自分にだけは何かがあつても負けるわけにはいかない。

「……分りましたわ」

「セシリア……?」

盛大な溜息を吐きながらセシリアは徐にISを展開し、箒の傍に近寄つた。

「箒さんの事は私が必ず守ってみせます。だから、好きなだけここに
いるといいですわ」

「…ありがとう」

「礼には及びません。私も緒理香さんをお慕いしている身。想い人が
戦場に赴いているのに、一人だけ逃げたとあつては英国貴族の名折
れ。ノブレス・オブリージユを体現する身として、最後まで引くわけ
にはいきません！」

「ふっ……お前もそんな顔が出来たんだな」

普段の優雅さは何処へやら。

今のセシリアは誰が見ても立派な『戦士』の顔をしていた。

「そんな訳ですから、本音さんだけでも先にお逃げになつて……」

「ううん。私も一緒にいるよ」

「…いいのか？」

「うん。今の自分に出来る事なんてこれぐらいしかないし、それに
……」

二人の方を向き、いつもののんびりとした表情から一変、真剣な顔
でハッキリと言った。

「私も、おりりんの事が好きだから」

「本音……」

「本音さん……」

強力なライバルがまた一人誕生した。

けれど、それは決して不愉快ではない。

寧ろ、歓迎すべきライバルだった。

「ならば、このセシリア・オルコツトが、代表候補生の名に懸けて、必
ずやお二人の事を守り抜いて見せますわ！」

「頼りにしてるぞ」

「ええ！」

恋する少女達の精一杯の勇氣。

その行動が逃げ惑う生徒達の動きを止め、途端に彼女達の心を冷静
にした。

避難誘導している教師も、その事に驚きを隠せなかった。

「そう…だよね……」

「緒理香ちゃんが頑張ってるのに、私達だけ逃げて……」

「私達…めっちゃカッコ悪いなあ……」

「だったら……!」

「うん!」

いきなり生徒達が元の場所まで戻ったかと思ったら、いきなり全員揃って叫びだした。

「!」「緒理香ちゃん!! 頑張れ———!!!」

.....

.....

.....

.....

.....

一方、管制室にいる千冬と真耶の方も謎の乱入者の出現に戸惑いを隠せないでいた。

「緒理香!! クソっ…なんなんだ奴はっ!? 山田先生!」

「どれだけ分析しても、なんの反応も出ません! 全てのセンサーが

『何もいない』と言っているんです!」

「そんな馬鹿な事があるか! 現に今、私達の目の前にある画面に映って緒理香たちに襲い掛かっているじゃないか!」

「分かっています! 分かっていますけど、どれだけやっても答えは同じなんです!」

「おのれ……!」

緒理香と鈴の試合に突如として介入してきた謎の存在。

しかも、なんでか奴は緒理香だけを目の敵にして掛かってきた。

「菜鞭さん!! 凰さん!! 聞こえますかっ!? 返事をしてください

！」

真耶も必死に通信越しに二人に呼び掛けるが、それだけやっても帰ってくるのはノイズ音だけ。

何も出来ない事に歯痒さを感じていると、それ以上に自体が襲い掛かってきた。

「こうなったら、私がISで出る!!」

「残念ながら…それは出来そうにありません……」

「なんだって?」

「恐らくは、あのISの仕業と思われませんが…次々とアリーナ内の隔壁が閉じていつてるんです!」

「ハッキングか?!」

「だと思います! けれど、少し不可解なことが……」

「不可解な事?」

「はい。こちらからステージに行く道や、格納庫に続く道は全て封鎖しているのに、なんでか避難経路だけは一切封鎖せずに、そのまま開けているんです」

「逃げ道だけは作って、介入することは許さないと…そう言うつもりか……?」

相手の企みが全く予想できない。

分かっているのは、今の自分達は悲しい程に無力で、あの場にいる緒理香と鈴に全てを託すしかないという事だ。

「あ…れ? 逃げようとしていた生徒達が……」

「今度はどうした?」

「い…いえ。生徒達の混乱が急に止んで、皆で一斉に緒理香さんの事を応援し始めてるんです」

「応援…だと…!?!」

真耶の言う通り、モニターを見てみると、そこには必死に声を出して緒理香を鼓舞する声が轟いていた。

「あの機体はなんでか観客席には一切危害を加えていないから、今はまだ大丈夫だけど……」

「いつ、奴が周りに牙を剥くか分らないというのに…あいつらは……」

教師としては怒るべき場面なのだろうが、千冬と真耶の顔は不思議と笑っていた。

「全員揃って、後で反省文だな」

「あはは……」

ご愁傷様と心の中で憐れむが、すぐに気持ちを切り替えてモニターに視線を向けて真耶は両手を合わせて祈るように緒理香に聞こえない応援を送る。

「頑張ってください……緒理香ちゃん……!」

目の前で謎の脅威と必死に戦う想い人の少女に、千冬もまたエールを送る。

(これだけ多くの人々がお前の事を応援しているんだ……! お前は決して一人じゃない。だから……)

「負けるなよ……緒理香……!」

刃

いきなり、無人機から突撃され、その大質量から放たれる一撃に完全に押され、壁と挟まれるような形で身動きが取れなくなってしまう緒理香。

白式が各部から火花と悲鳴を上げる中、彼女は歯を食い縛りながら必死に耐えていた。

「なんつー馬鹿力だよ……こなくそく……!」

全身から汗が噴き出る。

相手からは人の意志を全く感じないのに、その全身から放たれる謎のプレッシャー。

そもそも、剣で戦うことを前提としている白式は、お世辞にもパワータイプとは言い難い。

寧ろ、無駄なパワーは省き、流麗な動きで相手を圧倒するのが本来の戦闘スタイルなのだ。

鈴の甲龍や、目の前にいる無人機『ゴーレム』のような典型的なパワータイプとは致命的に相性が悪かった。

「……このままじゃ……!」

白式の腕部装甲に罅が入り、段々と壁の中へと押し込まれていく。万事休すか。

緒理香がそう思った瞬間、横から見覚えのある姿が飛び込んできた。

「あたしの緒理香に何してんのよ! このクソ野郎!!」

「り…鈴っ!」

双天牙月を両手に持ち、鈴が緒理香とゴーレムの間に割り込むようにして斬撃を繰り出した。

それに反応して、すぐさまゴーレムはその場から退避をして後方に下がる。

相手にダメージは与えられなかったが、そのお蔭で緒理香はゴーレムの拘束から抜け出す事が出来た。

「大丈夫、緒理香っ!」

「う…うん。なんとかか……」

鈴に手を引かれながら立ち上がると、観客席から歓声のようなものが上がっているのが聞こえた。

「え？ こ…これって……」

「嘘でしょ…？ なんて逃げてないのよ……」

本来ならば、ここは一目散に逃げるのが正しい判断だ。

それなのに、実際には全く逃げる素振りを見せずに、その場にて大声を上げて緒理香たちの事を必死に応援していた。

『がんばれー!! 葉鞭さくん!!』

『そんな奴なんかに負けないでく!!』

『いつけく! そこだく!! やっつけろく!!』

誰も彼もが好き放題に言っているが、その言葉の一つ一つが不思議と緒理香と鈴に立ち上がる勇気をくれた。

「ねえ…あそこ見てよ」

「あそこ？ あ……」

鈴が指さす方向には、いつの間にか自身のISを展開したセシリアが、箒と本音を守るようにして立っていた。

「セシリア…箒…本音……」

「あいつ等もまだ残ってたのね……」

ここからでもよく分かる。

必死に恐怖に耐えながらも、二人の事を応援している姿が。

更にここで二人に向けてプライベート・チャンネルが入る。

『緒理香！ 凰！ 聞こえるかっ!?』

「ち…千冬さんッ!?!」

ここでちよつと『先生』と呼ばなかった事を思い出してヤバいと感じたが、流石に緊急時なので、そんな細かい事は全く気にする様子が無かった。

実際には、普段でも割と普通に気にしなさそうだが。

『お前達が相手をしている』『ソイツ』の作業なのはわからんが、ステージへと繋がる道だけが綺麗に封鎖されてしまった! こちらからは増援が全く出せない状況だ!』

(やっぱり……)

その展開は予想出来ていた。

原作でも、ゴーレムはアリーナのシステムをハックして、アリーナ内の隔壁を閉じて身動きを取れないようにしていたから。

『悔しいが……今はお前達に頼るしかない。済まん……!』

声だけでも分かる。

千冬は今、拳を握りしめながら唇を噛み締めているのだろうと。

普段は色々と鬱陶しい千冬だが、それでも世話になっっているのは紛れもない事実なので、ここは少しだけ彼女を安心させてあげることにした。

「大丈夫ですよ。千冬さん」

『緒理香……?』

「あんな意味不明な奴なんかには、私達が負ける道理なんてありませんから。必ず勝ってみせますよ。だから、千冬さんは山田先生と一緒に、そこでドンと構えててください」

『緒理香……!』

これでよし。

後は、あの野郎を二人でぶっ飛ばすだけだ。

『これはもしや告白なのではないのか……? だ……ダメだぞっ!? その気持ちは非常に嬉しいが、その手のフラグは大抵の場合は折れずに成り立ってしまうからなっ!?』

「さっきのセリフのどこをどう取れば、告白に聞こえるんですかねえッ!? つーか、勝手に人の決意を死亡フラグにしないで貰えませんっ!?」

頼むから、シリアスをシリアルにしないでほしい。

本気で気が抜けてしまうから。

『緒理香っ!? そっちは大丈夫っ!?』

「簪っ!」

今度は簪からの通信。

どこからだろうと探すと、箒達がいる場所とは真逆にある観客席にてISを展開し、セシリアと同じように方が一に備えているようだ。

『こっちの事は気にしないでいいから！ 思い切りやっちゃって！』
「うん！ 任せて!!」

これで後顧の憂いは無くなった。

いや、本当ならば皆が避難をしてくれるのが一番なのだが、彼女達がこの場に残る事を選んだ以上、自分達にはもう何も言えない。

ならば、一刻も早く奴を倒し、この事態を収拾する事こそが最適解なのでは。

普段は周囲のせいでネガティブな考えになりがちな緒理香が、この時ばかりは珍しく前向きな考えに至った。

「あ、そうだ。緒理香、これ」

「雪片……」

ゴーレムに組み付かれた時に吹き飛ばされていた雪片は、どうやら鈴が回収してくれていたようで、傷一つない状態で戻ってきた。

「ありがとう、鈴」

彼女から雪片を受け取った瞬間、再び緒理香のゾーンが強制発動。

その目からは真紅の火花が散り、その表情にも鋭さが戻った。

「……皆のお蔭で元気が戻ってきた」

「やる気の間違いじゃない？」

「正確にはどっちとも……だよ」

けど、どれだけモチベーションが上がっても、消耗した体力だけではどうにもならない。

鈴との試合からこっち、云わば二人は碌な休憩もせずに二連戦をしているに等しいのだ。

実際、二人は全身から汗を流し、呼吸だって早くなっている。

気力で体を支えている状態に等しいのだ。

「そういや、あいつ……こうしてあたし達がのんびりと話しているってのに、全く襲い掛かってくる気配が無いわね……」

鈴が口にした疑問を聞き、緒理香は頭の中にある原作知識と照らし合わせる。

(そーゆー所まで忠実に再現してるってか……)

ん？ ちょっと待てよ？

緒理香は自分で自分の言葉に大きな疑問を持った。

(再現…？ 何を言ってるんだ私は……)

この世界の住人が『原作』の事なんて知っている筈がない。

存在自体は非常にあやふやだが、それでもアレが自分のよく知っているゴーレムである事には違いない。

それなのに、どうして自分は『再現』なんて言葉を使用した？

(……ダメだダメだ。余計な事は今は考えるな。それらの事は後で千冬さんや山田先生が探ってくれるだろうし、いざとなれば私から直接、束に聞けばいいだけの話だ)

取り敢えずの結論を出してから、改めて黒い無人機を見据える。

「重装甲に高機動…か。無人機である事のメリットを最大限に生かしてる感じか……」

「人が乗っていないって事は、パイロットの安全を考慮しなくてもいい。つまりは、普通では出来ない無茶をし放題って事になるのよね……」

「それもだけど、無人機のメリットはそれだけじゃない」

「へ？」

「あれには操縦者がいない。それはすなわち、その分だけ他にも武装が詰めるってことだ」

「ってことは……」

二人がゆっくりとゴーレムの方を向くと、そこには前傾姿勢となつて突撃準備をしているゴーレムの姿が。

「あ……あたし、なんか分っちゃったかもしれない……」

苦笑いを浮かべながら、鈴が顔を青くする。

「操縦者の分だけ空いたスペースに付けているのは武装なんかじゃなく……」

ゴーレムの火が大きくなり、一気に迫力が増す。

「あの重装甲を支える為のPICをもう一個搭載してるんだ!!」

次の瞬間、ゴーレムが凄まじい速度で再びの突貫を敢行してきた!

それは正しく、黒い隕石。

鋼鉄の塊が自分達に向かって突撃してくる様は、只管に恐怖しかな

かった。

「散開!!」

緒理香の叫びで我に返った鈴は、咄嗟に全力で横に飛んで突撃を回避。

同じように緒理香も反対方向へと飛んで回避をしたはいいが、ゴレムは壁に激突した直後に即座に立ち上がり、緒理香の方へと向かってビームを放つ。

(回避……いやダメだ! 後ろには皆がいる! ここは……)

「斬り裂く!!」

横薙ぎではなくて、縦に斬る形でビームを打ち消す。

その衝撃は凄かったが、悲鳴なんて挙げている暇は無いので我慢した。

「出力は向こうが圧倒的に上……か」

(自分に果たして『原作一夏』のような真似が出来るのか……?)

未だに閉じたままの雪片を見つめ頭を振る。

(出来る出来ないじゃなくて……やるんだ!)

地面に転がっている鞘を見て、それに向かって指を曲げると、まるで意志があるかのように緒理香の方へと飛んできて、それをキャッチしてから腰につける。

鞘の中へと雪片を納めるが、今回は何故かそれでもゾーンが解除される事は無かった。

まるで、装備などに関係なく、緒理香の精神が極限の集中状態にあるかのように。

(鈴)

(分かったわ)

僅か一秒にも満たないアイコンタクト。

だが、鈴はたったそれだけで緒理香が何を望んでいるのかを察し、行動を開始する。

「ほらほらほらあ!! とろとろしてんじやないわよ!!」

いきなり、鈴は衝撃砲を連射してゴレムに攻撃を仕掛ける。

だが、自慢の機動力のせいで華麗に回避され、全く命中する気配が

無い。

「やるじゃない……でも、まだまだここからよ!!」

どれだけ避けられても、鈴は全く攻撃を止めようとはしない。

それもその筈。彼女の本来の目的は『攻撃を当てる事』ではないのだから。

鈴が己に課した役目。それは『牽制攻撃を仕掛ける事』と『相手の注意を自分に向けさせて緒理香の攻撃の隙を作る』ことだった。

どれだけゴーレムが緒理香に執着しようとも、別の対象から攻撃をされては対処をしない訳にはいかない。

実際、ゴーレムのカメラアイは鈴の方だけを向いていた。

『今よ!!』

プライベート・チャンネルで緒理香に叫ぶ。

すると、もうそこには彼女の姿は無く、腰を低くした構えで瞬時加速を掛けていた。

「あの構えは!?!」

鈴もよく知っている。

剣に詳しくない人間でも、それが強力であることは一発で分かる構え。

抜刀術。居合之剣。

(う…嘘でしょっ!?!)

緒理香の接近にいち早く気が付いたゴーレムは、即座にその巨腕を振るつての迎撃行動に移るが、それをなんと、緒理香は居合の体勢から完全に見切つて回避してみせたのだ。

そのまま一気に懐に入り、緒理香の全身に力が漲る。

(下から仕掛ける気っ!?! けど、その体勢じゃダメよ! そんな体勢じゃ居合は放てない! 強い攻撃は撃てない!!)

だがここで、緒理香はこの場にいる誰もが全く予想すらしていなかった行動をした。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
!!!!」

瞬間、鞘を握っていた左手が離れ、ゴーレムの顔面に向けてアツ

パーを繰り出したのだ!

「うそ…でしょ…?」

信じられなかった。

まさか、あの体勢から拳を繰り出すとは思わない。

だが、その一撃でゴーレムの体勢は、ほんの一瞬だけではあるが完全に崩れた。

『!!?』

例え、その中に人が入っていないとしても、それが人の形をしてい
る場合、大抵は頭部に重要な部品が入っていたりすることが多い。

ゴーレムもその例に漏れなかったようで、緒理香のまさかの拳での
一撃により、数秒間だけではあるが完全に全機能が麻痺してしまっ
た。

そして、その事が表す事実はただ一つ。

緒理香の次の攻撃は何があっても絶対に避けられない!

(間違いない…! 今のアツパーは我武者羅にした攻撃じゃない!
自分の最大の一撃を確実に当てる為に計算されたコンボだ!)

緒理香が鞘から雪片を引き抜く。

すると、そこから現れたのは先程までの鋼鉄の刃ではない。

白く光り輝く消滅の光。

嘗て、世界中の人間が目撃した、とある女を世界最強にまで押し上
げた絶対にして必滅の刃!!

零 落 白 夜

「き…斬った! 初めて直撃した!!」

それはまさに神速の居合。

いかに相手が無慈悲な機械であろうとも、この一撃だけは
絶対に避けられない。

緒理香の斬撃はゴーレムを文字通り真つ二つにし、上半身と下半身
を永遠に別れさせた。

空中で体内から備品をばら撒きながら吹き飛び、そのまま重々しい音を出しながら地面に落下。

その切断部からは油が流れ、周囲に漏れていた。

「はあ…はあ…はあ…」

今の一撃で全ての体力を使い果たしたのか。

緒理香は剣を振り抜いた状態で固まっており、ゆつくりと雪片の刀身が閉じていき、元の形状へと戻った。

その瞬間、雪片が地面に落ち、それと同時に白式が強制解除。

力尽きた緒理香がその場に倒れそうになる。

「緒理香!!」

鈴が急いで緒理香の元まで行き、彼女の体を支える。

まだ意識はあるようで、につこりと弱々しく微笑みながらピースをしていた。

「やった…よ…ブイ…!」

「うん…うん!」

本当は、今すぐにも眠りたい。

けど、最後の力を振り絞って、もう少しだけ意識を保っていた。

何故か知らないが、そうしないといけない気がしたから。

ふと、自分が斬ったゴーレムの方を見る。

バチバチと火花を散らしてはいるが、完全に沈黙しているようで全く動く気配が無い。

だが、そこで全員が驚愕する現象が起きた。

「えっ!?!」

突如として、ゴーレムの残骸が幻影のように薄くなっていき、数秒ほどでその場から完全に消滅してしまった。

その場に垂れ流した油ごと、まるで最初から存在なんてしていなかったかのように。

勝利の喜びを示す歓声は起きずに、不気味な静寂だけが場を支配していた。

「あいつは…一体…」

眠気の限界に達した緒理香が夢の世界に旅立つ前に呟いた一言が、

この場にいる全員の気持ちを代弁していた。
こうして、クラス対抗戦は何とも言えない空気のまま粛々と終了し、中止となった。

夢だけど夢じゃなかった！

毎度御馴染みの束の特製の移動式ラボ。

今回も束は不敵な笑みを浮かべながらモニターを見つめていた。

「ふうん…成る程ね。『役目』を終えたら、跡形も無く消えてなくなる…と」

モニターに映っていたのは、先程まで緒理香たちが戦っていた謎の機体。

それが倒され、消滅していく光景だった。

「ふむふむ…こっちのセンサーでも確認できない…と。しかも、全くログが残ってないと来たもんだ。しっかし…」

背凭れに体を預けながら、両手を頭の後ろに回す。

「意外と呆気なく倒されるんだね。いや…違うか。そうじゃない。アレは最初から『おーちゃんに倒される為だけに現れた』んだから、あの意味で『予定通り』なのか。そっかそっか。うんうん」

一人で何を納得しているのか、束はしきりに何度も頷いていた。

この場にクロエがいれば確実に訝しむところだろうが、生憎と彼女は今、お昼寝タイム中なので夢の中にいる最中だ。

故に、この場で束の言動に対して何かを言う人物は誰もいない。

「けど、ここでやっと『零落白夜』を発動するなんて、おーちゃんも分かっているねえ。ある意味、最高に盛り上がるタイミングで発動しちゃってるじゃん。完全に『主人公』の『必殺技』だね、こりゃ」

そう呟く束の視線の先には、白式の稼働状況が表示されたモニターがあった。

「現時点で既に最大稼働率が70%オーバー…か。これは流石に異常だね。普通に考えれば…だけど」

またもや含みを帯びたセリフを吐く束。

彼女が何を考えているのは本当に誰にも分からない。

「取り敢えず、おーちゃんは『第一関門』を無事に突破出来たけど、問題はここからなんだよねえ…」

先程までとは一変して、途端に束が顔面蒼白になっていく。

「これ、確実にちーちゃんが『あれは一体何なんだ!』的な事を叫びながら電話掛けてくるんだろうなあ……なんて言い訳しよ」

自分のスマホを見つめながら、必死に言い訳を考える束。

いつにもなく彼女の頭はフル回転し、数多くの言葉が何度も何度も束の頭を往復していく。

1 時間 後

「……あれ?　なんか、全くちーちゃんから電話が来ないんだけど……あれえ〜?」

当初の予想に反して、全く連絡が来ない。

もしかしたら、事件の事後処理で忙しくて中々に電話を掛ける暇が無いだけかもしれない。

そう思っ、試しにもう少しだけ待ってみる事に。

1 0 分 経過

「……いや、マジで掛かってこないんですけど。なんで?」

流石にこれはおかしい。

千冬の性格上、真っ先に束の事を怪しんで電話を掛けてきそうなのだが、その気配が全く無い。

何がどうなっているのか気になって、ちよつとだけ学園の様子を探ってみる事に。

すると突然、驚きの光景が目飛び込んできた。

「なんかいきなり、おーちゃんが貞操に危機になつてる——
——っ!?!」

.....

そんな事を言われて、本気で意味不明なんですけどおっ!？」

「なんか、この子の姿もどこかで見たことあるような気がするんだけど、パニックで上手く思い出せない！」

「悪意が無い事は分かるけど、それ以上に危ない匂いがプンプンする！」

「これはアレだ！ 千冬さんと同じタイプの子だ！」

「あ……あれ？ 私の事……分かりませんか？」

「分かるわけないでしょっ!？」

「なんか急に冷静になつて彼女がどいてくれた。」

「そのお蔭で、彼女の全身を見ることが可能になった。」

「……………あ」

「も……もしかして……この子の正体は……まさか……！」

「君つて……もしかして……白式？ いや、性格には白式のコアか……」

「はい！ その通りです！ 私は、ご主人様が『白式』と呼称する機体のコア意識です！」

「やっぱりか……」

「そういや、原作にも超出番は少ないけど、こんな子がいたもんなく。」

「影が薄すぎて完全に忘れてたわ。」

「つていうか、この子つてこんな性格だったっけ？」

「私のうつすらとした記憶が正しければ、かなり大人しい女の子だったよな……。」

「やっど……やっどこうして会えました……。この日をどれだけ待ち侘びた事か……」

「そ……そうなんだ。ごめんね？」

「いいえ、大丈夫です！ こうしてご主人様と直に会えた事で全部帳消しです！」

「は……はあ……」

「なんなんだろうか……この超ハイなテンションは……。」

「いきなり自分の頭をグリグリしたりしないでしょうね？」

「けど、白式がいるって事は、今いる場所はISのコア意識の中って事？」

「そうなります。ご主人様は、あの戦いの後に気を失って、そこを私が意識だけを引き上げたって感じですね。こんなチャンス、今後どれだけあるか分からないですから！ 私、どんなチャンスも絶対に逃さない質ですので！」

「さ……さいですか」

完全に押されてますわ。

普通にこの手の子は苦手です。

「っていうか、そんなどうでもいい説明よりも、今はやるべき事があるんですけど！」

「いや、割と重要な説明だからねっ!？」

しれっと前回のあらすじをどうでもいいこと認定しないで!？」

「ご主人様。いきなりでなんですが、パワーアップしたくないですか?」

「え? マジでいきなりなんですけど。唐突に何?」

「先ほども言いましたが、こうして私とご主人様が会える機会はありません。ですので、これを機に私とご主人様のシンクロ率を上げて、少しでも早く『第二形態移行』セカンド・シフト出来るようになればな〜っと思いまして」

「第二形態移行……」

操縦者とISが同調した時、機体そのものが変化して強化される形態。

原作でも、白式は驚異的な速度で進化していったけど、私にもそれをしろと?」

「そうです! 私が強くなれば、必然的にご主人様もパワーアップ! するわけです!」

「そりゃあ……そうだけど……」

シンクロ率を上げる……ねえ……。

単語が単語だけに、妙に引つかかるんだよなあく……。

「因みに、どうやってシンクロ率とやらを上げるの?」

「セックスです」

「……………ハイ?」

えつと……私の聞き間違いかな？

クラス代表や普段の訓練で疲れちゃってるのかな？ アハハ。
「だから、セックスです。私とご主人様が物理的にくつついて、イチヤ
イチヤしてグチヨグチヨしてネチヨネチヨするんです。そうすれば、
私とご主人様の距離が近づいてババ〜ン！ と強化されるわけです
ね」

「いやいやいや！ なんでセックスなわけっ!? もっと他にいい方法
は無いのっ!?」

「ありません!!」

「断言しないで!？」

「いいじゃないですか〜！ きつと、画面の向こうでこれを読んでい
る読者の皆さんも、私とご主人様のイチヤレズセックスを待ってます
よっ!？」

「仮に待ってたとしても、そんな事は出来ません！ この作品は健全
な全年齢向けなの！ R-18な描写は不可能です！」

「そんな道理！ 私の雪片式（意味深）でこじ開ける!!」

「仮にも女の子がそんな事を言っっちゃいけません!!」

「ええ〜い！ こうなったら力づくでも!!」

「や

め
れええええええええええええええええええええええええつ
!!!!」

・
・
・
・
・
・
・

「はっ!？」

な…なんだろうか…今、とてつもない悪夢を見ていたような気が…。

具体的に言えば、全身が真っ白な美少女にレイプされそうになる夢。

「いやいやいや…幾ら夢でも、そんなことあるわけが…」

「つか、なんか見た事のあるような無いようになって感じの天井。

ここはあれですね。IS学園の保健室の天井ですね。分かります。

これまでに何回か胃薬を貰いにここに来てるからね。

つてことは、私が今寝てるのは保健室のベッドか。

あれから、誰かが私の事をここまで運んできてくれたんだね。

あの時の状況から察するに、鈴辺りかな？ 後でちゃんとお礼を言

わないとね。

「にしても、今日は本当に疲れたな〜」

ゴロンと寝返りを打って、もう少しだけ仮眠を取って…。

「よく眠れたか？ 私の可愛いお姫様♡」

……………あれ？ まだ夢の中にいるのかな？

千冬さんが私と一緒にベッドに入って添い寝をしているように見

えるんだけど…………。

「アイラブユー。フォーエバー」

……………」

凄まじく片言な英語で愛を囁く……………ああ…間違いないわ。

これは現実で、私のすぐ隣には千冬さんがいて……………ある意味で絶体

絶命の大ピンチなわけで…………。

「というわけで、今日こそ夫婦の契りを交わすぞ緒理

香あああああつ!!!」

「きいいいいいいいいいいいい

やあああああああああああああつ!!!」

夢 だ け ど 夢 じや な かつ

たあああああああああああああつ!!!?

こ ん な 形 で タイ ト ル 回 収 と か イ ヤ

だあああああああああああつ!!!

「どうした緒理香っ!？」

「何事なのっ!？」

「緒理香さんっ!？」

「いつの間にか織斑先生がベッドの中に潜んでるっ!？」

「おりりんの貞操のピンチだっ!！」

「ここでもさかの救助部隊登場!！」

「年生専用機集団（一部を除く）がやって来てくれた!！」

「なんだ貴様等! 私と緒理香の逢瀬の邪魔をすることは許さんぞ
!!」

「私達はちゃんと『協定』を守っているんですよ! それなのに!」

「一人で抜け駆けとか酷いじゃないですか!」

「そうですね! 幾ら教師だからといって、やっていい事と悪い事が
ありますわよ!」

「黙れ! 私が法律だ!!」

「なんかいきなりとんでもない暴言を吐きだしたんですけどツ!？」

「なんなのこの暴君っ!？」

「おりりくんっ!？」

「ちよつと聞き捨てならない単語が聞こえてきたんですけどっ!？」

『協定』とは一体なんぞやっ!？」

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．

．

「……というわけで、結局は何も分からないのが現状だ」

「そ……そうなんです……」

やって来てくれた皆の奮闘のお蔭で、なんとか私の貞操は守られ

た。

これで千冬さんに寝込みを襲われたのって二度目なんですけど……。

冗談抜きで油断もへったくれもあつたもんじゃない。

で、辛うじて冷静さを取り戻してくれた千冬さんによって、例の無人機の事について説明された。

説明って言っても、実際には『何も分からないのが分つた』って事なんだけど。

「鳳の報告通り、お前達の I S のログはおろか、学園の機器のログにも全く記録が残っていなかった。まるで、最初から存在していなかったかのように」

最初から存在していなかった……か。

そう聞くと、増々オカルト染みてくるな。

「け……けど、実際にあたしや緒理香は実際に交戦しましたよ?」

「分かっている。私達だけじゃない、あの場にいた全員がそれを目撃しているんだからな。どれだけ記録が残っていなくても、私達の記憶にはちゃんと残っている」

本当に、あいつはなんだつたんだろうな……。

束のラボでもあんなのは見た事無いし、仮に私が学園に来てから製作したとしても、余りにも完成度が高すぎる。

幾ら束とはいえ、そんな短期間にあれ程の機体を作れるとは思えない。

そもそも、束には無人機でここを襲撃する明確な『理由』が無いだろう。

「兎に角、引き続き調査は続ける。今回の事は念の為に箝口令を出す事にした。といっても、誰も信じないだろうがな……」

この科学一色の世の中に『いきなり幽霊ロボットに襲われました』なんて言ったら、一笑に伏されるのが目に見えている。

誰だって、自ら恥を掻きには行きたくないだろう。

「お前達も他言無用だぞ。いいな」

「「「「はっ」」」」」

これで話は終わりかな。

んじや、改めてもう一眠り……。

「では、お前達はもう戻れ……って、なんでジツとこつちを見る？」

「いや……」

「織斑先生が出るのを見届けてから出ようかと思って……」

「ちっ……！」

今の舌打ちは何ツ!?

皆がいなくなった後に何を企んでたのツ!?

「緒理香は一先ず、今日一晩だけは保健室で安静にしているように」

「分かりました」

「ではな。……おのれ……！」

た……助かった……。

「それじゃあ、私達も行きましようか」

「そうね。本当はもつと居たいけど、あたし達がいたんじや、緒理香も

ゆっくりと休めないだろうし」

「だな。では緒理香。また明日な」

「うん……おやすみ」

「おやすみ、緒理香」

「おりりん。おやすみ」

皆が保健室から退出し、一気に静かになった。

こんな時は大人しく寝るに限る。限る……けど……。

「また、あの子に襲われないだろうな……」

それだけが本当に心配だった。

結局、私の心配は杞憂だったようで、次に見たのはなんでかクロエと遊園地デートをする夢だった。

遊びに来たヨ!

6月初頭の日曜日。

例の無人機事件での疲れ&傷が完全に癒えた私は、特に何もすることが無く学生寮の自室にて完全に暇を持て余していた。

「暇だねく……」

「暇だな……」

私はベッドの上で、箒は椅子に座って、お互いにボケくつとしながらテレビを眺めている。

画面の中では、ニコニコ笑顔で美人キャスターさんがニュースを読んでいる。

特にこれといった事件は無く、街中で起きた些細な出来事の特集していた。

「休みの日だから、当然のように生徒会は無いらしい……」

「部活だって無い……」

本音はクラスの子達と何処かに遊びに行つてて不在だし、彼女のお姉さんである虚さんは楯無さんと一緒に実家に帰っているとの事。

簪もそれに着いていつているので、当然のように学園にはいない。

セシリアも代表候補生としての仕事とかで、実は前日の夜から祖国であるイギリスに一時帰国をしていた。

それは、ダリル先輩やフォルテ先輩達も同じで、基本的に学園内にいる代表候補生は誰もいないと思つていた方が良さだろう。

「そういうえば、こんな時に真つ先に突撃してきそうな千冬さんの姿を見ないな」

「あの人なら、今頃は山田先生が抑え込んでるんじゃないかな。『仕事』という名の鎖で」

.....

・
・
・

「織斑先生。まだまだありますからね」

「なんだとっ!? これでは今日中に終わるかさえも怪しいかじゃないか!」

「この間の乱入事件で物凄く増えてるんです! 早くしないと、いつまで経っても終わりませんよ!」

「緒理香!! 私に力を貸してくれ! 一刻も早く終わり、お前に会いに行くからなく!!」

・
・
・
・
・
・
・

「少なくとも、今日一日は大丈夫なんじゃないかな」

「じゃないと困るといふか、幾ら身体能力チートな千冬さんでも、デスクワークでは最強じゃないと信じたいたい今日この頃。

「今時の女子高生ならば、このような日には何処かへと遊びに行ったりするんだろうがな……」

「私達、揃いも揃ってその手の場所を全く知らないからね……」

「ゲームショップやプラモ屋とかなら喜んで行くんだけど、そこに箒を連れて行くのもなく。」

「なんかもう、動くのもだるくなってきたし。」

「なんつーか…都合よく誰かが私達を誘いに来てくれないかな」

「いや、流石にそう都合よく誰かが来るなんて……」

なんて言つてたら、いきなり部屋の扉が開いた。

「緒理香！ 遊びに行くわよ!!」

私服を着た鈴が腰に手を当てながらそこに立ってた。

相変わらず服のセンスがいいなく。普通にめっちゃ可愛いや。

「本当に来たね……」

「本当に来たな……」

もしかして、さっきの会話がフラグになった？

見事にフラグ回収しちゃった感じ？

「遊びに行くって、どこに？」

「弾の家よ。久々に日本に戻ってきたんだから、アイツの顔でも見に行こうと思つて」

「成る程……」

そう言えば、私もIS学園に通うようになってから、まだ一度も弾と連絡とかしてなかった。

色々な意味で忙しかったから、完全に頭から抜けてたわ。

うくむ…緒理香ちゃん、一生の不覚。

「どうせなら箸も一緒に来る？」

「私もか？」

「うん。多分、一夏もいるだろうし。アンタもあいつとは腐れ縁なんでしょ？」

「まあな。だが、どうして今から行く場所に一夏がいると分かるんだ？」

「中学の時から、よく一夏は弾の家に遊びに行つてたからよ。今日みたいな休みの日は、ほぼ確実にいるんじゃないかしら」

「そーいやそーうでしたにや〜」

寧ろ、一夏は自分の家よりも弾の家にいる時間の方が多いいんじゃないかって錯覚するレベルで頻繁に行つてたもんね。

「だから、一緒に行きましょうよ。同じ志を持つ『同志』として、親交を深めましょう？」

「そう…だな。鈴がそこまで言うのなら、私も一緒に行くとするか。

どうせ、ここにいっても暇なだけだしな」

「はい決まり！ なら…30秒で支度しなさい！」

「それは無理」

鈴：ネタに走りたいのは分かるけど、それは普通に無理です。
せめて20分は待っててくださいいな。

・
・
・
・
・
・
・

「着いたわよー！」

「早い」

省いちやったよ。

準備から移動までのくだりを全部省いちやったよ。

割と重要な部分だったりしないの？

こんなにもさつくりと行って大丈夫なの？

「五反田食堂。その弾とかいうヤツの家は食事処なのか」

「そうよ。厳さんっていうお爺さんがいるんだけど、その人が切り盛りしてるの。料理も絶品なんだから」

「それは楽しみだな」

いつの間にか話題から一夏が消えて、厳さんの料理に移行しちゃってるし。

ま、私も厳さんの造る料理は大好きだけどね！

「それじゃ、とつとと入りますしよるか。失礼します」

完全に我が家と同じ感覚で戸を開けて中に入る鈴。

そんな所も全く変わってないのね。

「お邪魔します」

そんな鈴に私達も後ろから続いた。

店内は、なんともシツクな感じだけど、其処が却って良かったりする。

割と常連やりピーターも多くて、実は近所の隠れた名店としてマニアの中では密かに有名だったりする。

「いらっしや…って、その声はもしかして鈴か？」

「そうよ厳さん。お久し振りです」

「おう！ いつの間に帰って来てたんだ？」

「ついこの間ね。色々忙しくて連絡出来なかつただけど、それならいつそのこと休みの日に遊びに来ればいいと思って」

「そうかそうか！ んで、その後ろにいるちっこいのは緒理香か？」

「ちっこいは余計ですよ、厳さん」

「はっはっはっ！ 悪い悪い！」

鍛えられた体に浅黒い肌。

『お願いマツチヨ』している、このおじいちゃんこそが弾の祖父である『五反田厳』さんだ。

御年80オーバーの凄人。

頻繁にこの家に来ていた私や鈴のことは、まるで自分の孫のように可愛がってくれるいい人でもある。

「で、緒理香と一緒にいるのが同級生の……」

「篠ノ之箒と申します。初めまして」

「これはこれはご丁寧に。ウチの弾もこれぐらい礼儀正しければなあ……」

しれっと孫の事をディスプレイしましたよ、この人。

「弾は上ですか？」

「ああ。今は一夏の奴も遊びに来てるぞ」

「「やっぱり」」

もう行動が単純だよ。簡単に予想できる。

「あれ？ 蓮さんはいないの？」

「あいつなら、今は買い出しに出かけてる。暫くすれば帰ってくるだろうよ」

あの人もあの人で凄いよね。

何気に娘を差し置いて、未だに自分の事を『看板娘』なんて言うんだから。

それだけ魅力的な人だっことは否定しないけどさ。

「なら、アイツの部屋に行きましようか」

「い…いいのか？　まずは挨拶とかしなくても…」

「いいのいいの。あたし達にとっちゃ、いつもの事だし。ね、緒理香？」

「そうだね。なんつーか、弾の部屋って殆ど私達の占領下にあるもんね」

「せ…占領下…」

ぶつちやけ、私はあいつが隠しているエロ本場所も全て把握しております。

弾の弱みは完全に握っているも同然なのだよ！　にやつはつはつ〜！

「そんな訳だから、行くわよ。お邪魔します」

「します」

「お…お邪魔します」

「おうおう！　遠慮なく上がっていきな！」

・
・
・
・
・
・
・

弾の部屋は二階にあるんだけど、そこまで広くは無いからすぐに到着する。

目の前には、これといって何も無いドアが一つ。

「んじや、ノックしてもしも〜し」

私達が何かを言う前に鈴がドアをノックする。

すると、部屋の中から誰かがやってくる気配がした。

「蘭か？ 何の用だ…よ…？？」

「やつほー。久し振り」

「り…鈴っ!? なんでお前がここにいるんだよッ!?」

「失礼ね。日本に戻ってきたからに決まってるじゃない」

「そ…そっか。そうだよな」

いや、弾の反応は当然だと思うよ？

全く連絡無しでいきなり家に来てるんだから、弾じゃなくても驚くでしょ。

「しかも、来たのはあたしだけじゃなかったりして。ほら」

「おい〜っす。おひさ〜」

「緒理香っ!? お前も来てたのかっ!?」

鈴か横にずれると、私と箒を前に出す。

いやはや、なんとも懐かしい御顔ですな。

「お…お前も久し振りだな」

「そだね〜。元気そうで何よりだよ」

「ま…まあな」

なんか緊張してません？

明らかに鈴の時とは反応違うし。

「あれ？ 緒理香の隣にいる子は誰だ？」

「えつとね。この子は…」

「篠ノ之箒だ。初めまして」

「は…初めまして」

おうおう。愛い反応ですな〜。

そうだよね〜。箒は美人だもんね〜。

スタイルも抜群だし、弾みたいな男の子は緊張しちゃうよね〜。

「ここに一夏の奴が遊びに来てると聞いて、私も一緒に来たんだ」

「え？ 君って一夏の知り合いなのか？」

「知り合いというよりは、幼馴染だな。小学四年生までは一夏や緒理

香と同じ小学校に通っていた」

「小4ってことは、鈴と入れ替わりで転校していったって事か。成る程な」

わお。一発で事情を把握しおったで。

弾って何気に勘がいいから話しやすいんだよね。

「一夏なら、中でゲームしてるよ。ほれ」

「「お邪魔しま〜す」」

弾がドアを大きく開いて、私達三人が揃って中に入る。

目の前には、非常に見慣れた男の子が胡坐を掻いて、テレビを見ながらコントローラーを握っていた。

「さっきからなんか話してたけど、一体誰だったんだ…んだ…よ…?」

「おつす」

「久し振りだな。一夏」

原作主人公にして、我等が鈍感王。

本当ならばIS学園に入学してハーレムを作っている男。

千冬さんの弟である『織斑一夏』その人が、そこにはいた。

けど、なんかこつちを見てアストロン掛けられたみたいに硬直してる。

「り…鈴っ!?! いつの間に日本に帰って来てたんだっ!?! しかも、緒理香まで一緒にいるし! その隣にいるのは…もしかして箒…なのか?」

「そうだ。小学四年の時に引越していった篠ノ之箒だ」

「あ…ははは…なんじゃこりや…」

一夏にとっては、いなくなっていた幼馴染が三人一緒に現れた事になるもんね。

見ていて面白いぐらいに滅茶苦茶驚いてるわ。

「一夏。俺は今から下にお茶取りに行ってくるから、お前は三人と話ししてろよ」

「わ…分かった」

震える手でゲームのスイッチをオフにしてから、一夏はこつちを向

いた。

私達は私達で、好きな場所に適当に座った。

「な…なんで三人が一緒に弾の家に来てるんだよ…?」

「ここに来たのは、日本に戻って来てからまだ一度も弾や一夏に連絡とかしてなかったから、それならいつそのことサプライズで遊びに行こうって思ったから」

「確かにサプライズにはなったな…:本気で驚いたわ」

「そして、あたしと緒理香と箒と一緒にいる理由は単純。一緒に学校に通ってるからよ」

「一緒に学校って…:」

「IS学園よ」

「マジでッ!?!」

ここで、鈴から一夏への説明タイム。

自分が中国の代表候補生になった事。

当然のように『代表候補生って何ぞや?』って言ってきたから、その説明もした。

私は束からの推薦で半ば無理矢理に入学させられたこと。

箒は政府の事情で入学させられたこと。

これらの適当に端折ってから話した。

「一度に色んな事を教えられて頭がパニックになつてきた…:」

「無理もないわよ。それと、一夏って千冬さんがIS学園で教師をしてるのを知ってるの?」

「一応な。春先に聞かされたよ。その時もかなり驚いたけどな」

「でしようね」

ここでの一夏は、ISを動かしてないから千冬さんが先に話してたのか。

流星に、自分の就職先ぐらいは話しておかないといけないよな。

「あれ? ちょっと待てよ?」

「どうした?」

「緒理香がIS学園に入学をして、千冬姉がそこで教師をしてる…:」

「ついでに言うと、緒理香と箒の担任でもあるわよ」

「冗談だろ……」

一夏が呆れるのも無理はない。

こいつは知っているから。千冬さんが私に超が付くほどにご執心なことを。

あんな過剰なスキンシップは、別に今に始まった事じゃないんだよ。

「緒理香」

「なに？」

「千冬姉に何かされてないか？ 思い切り抱きしめられたり、ベッドにいきなり忍び込んで来たり、お前の着替えの残り香を嗅ごうとしたり……」

「うん。それ全部やってるよ♡」

死んだ目からのサムズアップでキメ。

一夏：見事にビンゴしてるよ……。

「身内がすみませんでした」

「ダイジョーブだよ。ワタシハキニシテナイカラ」

「緒理香の目がハイライトオフになってるっ!？」

え？ そう？ あはは……はあ……。

「一応、私達も気に掛けているんだがな……」

「あたしたちじゃ千冬さんを完全に食い止めるのは不可能だしね……」

「千冬姉：頼むからさ……良い大人だからさ……マジで節度を持ってくれよ……」

分かる。その気持ちは超分かる。

いい加減にしないと、その内に山田先生の胃に穴が開くかもしれない。

その時は私が傍で看病してあげよう。

「持ってきたぞー」

ここで弾が帰ってきた……けど、その隣に同じ赤い髪の子がいた。

「さつき捕まっちゃった……」

「蘭じゃない。あんたも久し振りね」

「お久し振りです。鈴さん」

弾の隣にいる子は、彼の妹の『五反田蘭』といって、今はなんとかつて言うお嬢様学校に通ってるんだっけ。

「緒理香さんも本当にお久し振りです！ ああ…いつ見ても超可愛い…♡」

「ひ…久し振り…だね、蘭ちゃん…」

そうなんです。この子も千冬さんに負けず劣らずのロリコンなんです。

最初に出会った時から、ずっとこの調子なんだよね…。

まあ…賑やかで楽しいからいいけどね。

明鏡止水の心で頑張ります

おはよう。こんにちわ。こんばんわ。菜鞭緒理香です。皆さんはいかがお過ごしでしょうか？ 私は元気です。

私は現在、幼馴染二人と一緒に中学時代の友達の家にお邪魔しています。

なんとも懐かしい再会で、ここからは昔話に花を咲かせながらのんびりとした時間が過ぎていく……と思っていた時期が私にもありました。

現実とは本当に残酷なもので、そうは問屋が卸してくれませんでした。

つまり、私が何を言いたいのかというところ……。

「「可愛い!!」」

……こーゆー訳ですよ。

突如としてやって来た弾の一つ下の妹である蘭ちゃんが武力介入したことで、場の流れが一気に別方向へとシフト。

なんでか蘭ちゃんが所持していた、私にサイズがジャストフィットする可愛い服を着せられています。

要は、着せ替え人形ですね。ハハハ……。

「こんな事も有ろうかと思つて、緒理香さんにピッタリなサイズの服を買つておいたんです!」

「ナイスよ蘭! やっぱ、緒理香みたいなロリっ子にはゴスロリが似合うわよね♡」

「全くだ。まるで、緒理香の為に誂えたと錯覚しそうになる程にな」
女子三人で意気投合しやがって……くすん。

一応、私だつて女子なんですけど？

しかも、初対面な筈の筈と蘭ちゃんは、軽く自己紹介した後、私の話題になった途端に一瞬で仲良くなるし。

筈つて、こんなにもコミュ力が高かつたかしらん？

「緒理香の奴……目が死んでないか?」

「だな。確かに可愛いけどさ……完全に無の表情になつてるもんな」

おいこら、その男共。

そんな事を言ってる暇があったら、とつと助けんかい。

さもないと、お前達がベッドの下に隠し持っているエロ本を一般公開するからな。

私は知ってるんだぞ。弾は眼鏡っ子風委員長系の女の子が沢山載ってるエロ本を、一夏は明らかに小学生としか思えないような幼い女の子ばかりが出てくるエロマンガを大量に所持していることをな！

それだけで、お前らの性癖がバレバレなんだよ！ この変態共が！！

「今度は緒理香がこつちを睨んできた」

「何かを訴えようとしているんだろうが…悪いな。俺達はサッカー日本代表じゃないんでアイコンタクトだけじゃ、お前の言いたい事は読み取れないんだわ」

だったら、今すぐにでも日本代表の皆さんに習ってこいや！！

「緒理香さん！ まだまだ私の部屋に沢山ありますから、行きましよう！」

「勿論、あたし達も行くわよ！」

「当然だな。ちゃんと撮影をしてから、セシリア達にも見せなくては……」

なんでそうなるの！

けど、千冬さんにだけは絶対に見せないでね？

もしも見せたりしたら、本気でどうなるか見当もつかないから。

結局、私は三人に連れられて再び着替えさせられるのでした。

はあ……デパートやブティックとかにあるマネキンって、こんな気持ちなのかな……。

・
・
・
・
・
・

緒理香が三人に連行され、残されたのは男子二人だけ。

単純に元の状況に戻っただけなのだが、不思議な虚しさが残った。

「なあ一夏」

「なんだよ」

「告白しないのか？」

「誰に？」

「緒理香だよ。お前、好きなんだろう？」

「それは……」

男同士だからこそ話せる話題。

さつきまでは話してはいなかったが、緒理香が来てから自然と話していた。

「……今はいいよ」

「なんで。今を逃したら、いつまた会えるか分からないんだぞ？」

「いや。夏休みとかに会えるだろう」

「そういやそうか……」

一夏に正論を言われて黙る弾。

だが、これは偏に親友を気遣ったの事だった。

「多分、緒理香は俺の事なんて幼馴染の一人としてしか見てないよ。仮に告白するとしても、それはあいつが俺の事を少しでも異性として見てくれた時だ」

「だよなあ……。昔から、緒理香って浮いた噂とか皆無だったしな。寧ろ、可愛い物好きな先輩や同級生や後輩に追い駆け回されてたし」

「懐かしいよな。特に、生徒会長が凄かった」

「まさか、マジで購買部に緒理香のグッズを売り出すとは思わなかったわ。買ったけど」

「同じく。未だに部屋に飾ってるわ」

この二人、同じ穴のムジナだった。

ある意味で似た者同士だ。

「もしも見られたら……」

「間違いなく軽蔑されるな」

「……緒理香に睨まれたり、踏みつけられるんならアリなんだけどな……」

「え？」

親友が言ったまさかの一言にドン引きする弾。

聞き違いだと信じたいが、ハッキリと耳に聞こえてきてしまったので否定のしようがない。

「にしても、まさか緒理香や鈴がIS学園に入っていたとはなあ……」

「箒もだよ。あいつ、いつの間にISに興味なんて持ったんだ？」

因みに、一夏は箒が政府のプログラムで日本各地を転々としていた事は全く知らない。

だから、彼女が半ば強制的にIS学園に入学された事なんて知る筈も無いのだ。

「昔から、二人とも頭良かったもんな」

「緒理香とか、三年連続で平均点が97点ぐらいだったもんな」

「一番凄い時なんて、五教科全部100点とかだったりしたしな。あれを見た時は本気で驚いたわ」

「あんなの、漫画やアニメの世界だけだと思ってたからな。当の本人も滅茶苦茶驚いてたけど」

「そりやそうだろ。普通、あんな事になるなんて思わねえよ」

さつきから緒理香の話ばかり。

それだけ、二人にとって緒理香の存在が大きい証拠なのだろう。

「なあ……弾よ」

「なんだ、一夏」

「お前さ……ISの選手が着てる『ISスーツ』って見たことあるか？」

「テレビやネットでなら。お前は？」

「同じぐらいだな。テレビや雑誌とかで見た」

「で、それがどうかしたのかよ」

「いやな。IS学園に緒理香が通ってるって事は……」

「あいつも、ISスーツを着たりしてるのかなって……」
「……………」

急に黙る二人。

揃って顔を伏せ、何かを妄想しているようだ。

数分後、徐に一夏が立ち上がって部屋を出ようとする。

「おい一夏」

「なんだ？」

「どこへ行く？」

「ちよつとトイレに」

「そうか……トイレか……」

弾も一緒に立ち上がり、一夏の腕をガシツと掴んだ。

「テメエ!! 人ん家のトイレでナニしようとしてんだゴラアツ!!」

「別にナニもしねえよ!! トイレだつってんだろうが!!」

「んじや言ってみろよ! トイレで何するんだよツ!? 大か? それ

とも小か? どっちだよ!!」

「あ……ある意味『小』……かな」

目を逸らしながら呟く一夏に、弾は体をプルプルと振るわせる。

「何が『ある意味』『小』だ!! どう考えても黄色い液体の代わりに真っ

白なミルクを出す気満々じゃねえか!!」

「ちげーし!! これは純粋な生理現象だし!!」

「だったら俺も一緒に着いていく! トイレをするだけなら問題無い

よなっ!？」

「問題大ありだわ!! 何が悲しくて個室トイレで連れションしなく

ちやいけないんだ!!」

「お前がウチのトイレで一発抜こうとしてるからだだろうが!!」

「してねーって言ってるだろうが!!」

男同士の醜い争い。

当然だが、この会話は女子達にも筒抜けだった。

後に女子全員から汚物を見るような目で蔑まれたのは言うまでもない。

.....

.....

「男ってやゝね」

「やゝね」

「うぐ……！」

人のいない間に猥談をしていた男二人を精神的に制裁してから、私達は改めて弾の部屋に集合した。

因みに、今の私の格好は博麗霊夢のコスプレだ。

蘭ちゃんの手作りらしい。

どうやって私の体のサイズを知ったのかとかツツコンではいけない。

後で絶対に後悔するから。

「にしても、まさか緒理香さん達がI S学園に通ってたなんて驚きだなあ。あそこって、物凄く倍率が高いんですよ？」

「らしいね。よくネットとかじゃ『入学出来るのはエリートの中のエリートのみ！』とか言ってるけど、割と普通の子も入学してるし」

「そうだな。確かに授業は難しいが、全く分からないという訳でもない」

「ちやんと、予習と復習さえしておけば大丈夫でしょ」

「ここで補足だが、この場にいる三人に入学倍率云々の話は無意味である。」

緒理香は東によって強制的に連れてこられ、箒もまた政府によって強制入学、鈴に至っては代表候補生として国によって派遣されているので、試験なんてしなくても入学は確実なのだ。

つまり、この三人は揃いも揃って入学試験を経験していない。

そんな彼女達に試験のことを聞いても無意味なのだ。

「そつちでの緒理香さんってどんな感じなんですか？　箒さんと同じクラスなんですよね？」

「まあな。まず、緒理香はクラス代表をやっている」

「クラス代表？　もしかして、学級委員的なやつですか？」

「その通りだ。なんとというか…見事に満場一致だったな」

「私が反論する余地すら無かったしね」

トントン拍子に話が進んじやってさ…マジで私が割り込む隙が無かったんだよね…シクシク。

「流石は緒理香さんですね…」

「それだけではないぞ。緒理香はISの操縦技術でも天武の才を發揮している」

「マジで？」

「大マジよ。なんたって、中国の代表候補生である、このあたしを圧倒してみせてるんだから」

いや、それは単純に私が原作知識を持っただけですから。

地の力じゃ絶対に敵わないから。

「代表候補生ってアレだろ？　国の代表の卵みたいなもんで、かなりのエリートなんだって」

「表向きにはそうなってるわね。けど、実際にはそういういもんでもないわよ？　上の連中は五月蠅いし、あれしろくこれしろくって耳にタコが出来るツツーの」

鈴がプンプンと怒りながら文句を言ってるけど、セシリアも前に似たような事を言ってたっけ。

『責任ある立場になれた事は誇らしいけど、それ以上に大変なことが多い』って。

「それを圧倒するって、緒理香ってどんだけ凄いんだよ」

「言葉では表現しにくいな。だが、少なくともこれだけは言える」

「なんだよ？」

「今や、剣の腕だけならば一夏よりも緒理香の方が完全に上だ」

「…冗談だろ？」

「こんな事を冗談で言うものか。一夏、お前は居合斬りとか出来るか？」

「出来るわけないだろ」

「緒理香は出来る」

「うそくん……」

そうなんだよね。なんでか出来ちゃうんですよね。

ぶっちゃけ、私にも謎です。誰か教えて。

「それと、もう既に学園内に『緒理香ちゃんファンクラブ』が発足してるわよ」

「ちよっとそれは初耳なんですけどッ!? いつの間にッ!?」

どうして本人の意思を無視して発足しちゃうかなっ!?

完全に非公認なんですけどっ!?

「全校生徒の約9割は入会してるみたいね。勿論、あたしも入ってるわ」

「無論、私もな」

だと思つたよ。道理で時々、二人してどこかに出かけてた筈だよ。

あれは絶対にファンクラブの会合的なやつでしょ。

だって、二人と一緒にセシリアや本音も一緒だったし。

「そうだ。緒理香は生徒会にも入ってるんだつたな」

「しかも副会長。一年で副会長だなんて凄いわよね」

「なんかもう、ずっと緒理香のターンじゃねえか」

「ワンターンキルだな」

「しないよ」

そんなコンボはこっちからお断りじゃい。

「来年辺りには生徒会長になってたりして」

「いやいや、それは流石に飛躍し過ぎだって」

?
IS学園の生徒会長つてアレだよ? 学園最強って意味なんだよ?

私なんかを務まるわけないじゃんよ。

「学園で大活躍をして…ファンクラブもあつて…未来の生徒会長でもあつて……」

おお？ おおお？ なにやら蘭ちゃんが顎に手を当ててブツブツと呟いていますよ？

これはもしやアレを言い出す気かな？

「決めました。来年、私はIS学園を受験します!!」

「「言うと思った!」」

「同じく!」

誰も驚かない。完全に思考パターンを読まれてるね。

「別に受験すること自体は問題無いけど、適正は大丈夫なの？ あそこは頭いいだけじゃ入れないわよ?」

「問題ありません! 実は、この前に学校であった『簡易IS適性検査』でこんな結果を出してますから!」

そういうと、どこからか蘭ちゃんは一枚の書類を取り出して私達に見せつけるように前に出した。

「えくつと…なにになに? 『五反田蘭 適性』『A』ランク』…マジ?」

「マジです! これなら大丈夫ですよね!」

「そ…そうね。後はあんたの頑張り次第じゃないかしら?」

分かってはいたけど、Aランクかあ。

確か、鈴も同じAで、セシリアに至ってはA+なんだよね。

私はBだから、箒以外は皆揃って私よりも上なのか。

「つてことで、入学した暁には緒理香さんに手取り足取り腰取り教えてほしいです!」

「おいこら妹よ。手取り足取りはともかく、腰取りつてなんだ」

「え? 文字通りの意味だけ?」

文字通りつて…君は私に何を求めているの?

「おおお〜い!! 昼飯だぞお〜!!」

ここで、厳さんが下から叫んできた。

お昼ご飯つて…もうこんな時間か!

完全に忘れてたわ…。

「多分、他の皆の分も用意してると思うから行こうぜ」

「緒理香や鈴が絶品と言う程の料理…実に楽しみだな」

「期待していいわよ。絶対に気に入ると思うから」

それから、私達は揃って店の方に降りて行って、厳さん特製の肉野菜定食を頂いた。

相も変わらずの超絶的な美味さで、思わずご飯のお替りをしてしまった。

箸もかなり気に入ったようで、物凄い勢いで食べ進めてたっけ。

色々あったけど、中々に充実した日曜日だったな。

因みに今回、私が着させられた衣装は全て蘭ちゃんに無理矢理持たされる形で持ち帰る事になった。

彼女の好意を無下には出来ないから貰うけど……こんなにもいらないんだよね……。

量産機は最高だぜ！

フランス パリ デュノア社ビル 社長室

豪華な絨毯が敷かれているその部屋に、一組の男女がいた。

一人は腰の後ろ辺りで手を組みながら窓の外を眺めている中年男性。

もう一人は、ブロンドの髪が眩しい少女だった。

「シャルロット……お前の役目は分かっているな？」

「はい。お父さん」

シャルロットと呼ばれた少女の言葉から察するに、どうやらこの二人は親子の関係のようだ。

「もうすぐ、お前は日本にあるIS学園へ行くことになっている。そこでお前は……」

ゆっくりと後ろを振り向き、鋭い眼で娘を睨み付け、そして……。

「改めての決意表明だ！　こういうのは雰囲気大事だからな！」
「だからって、わざわざ社長室でやること？」

夫の性格についてはよく把握しているつもりだが、だからと言ってそれを許容できるかどうかはまた別問題だ。

彼の量産機に対する情熱は凄まじく、その情熱のお蔭で、デュノア社はISの量産機シェア世界第三位というところまで上り詰めたのだ。

しかも、本人は上の段階である第三世代機なんて作る気は全く無く、あくまで第二世代の量産機でとことんまで勝負する気満々なのだ。

本来ならば無謀と一笑に伏せられるところだが、なんでか上手くいつているので始末が悪い。

「いい、シャルロット。貴女が本当にやるべき事は、フランスの代表候補生としてIS学園で研鑽を積む事と、デュノア社製の試作武器の数々をテストしたりする事なのよ？」

「分かってるよ義母さん！　ちゃんと、量産機の魅力を伝えるついでにやっておくから安心してて！」

「ちよつとおっ?!　なんか順番が逆になってるから?!　最初に言った方が本来の主目的なのよっ!?!」

この父にして、この娘あり。

夫の量産機好きは、見事に娘にまで遺伝してしまったようだ。

「そうだ。出来ればで構わないから、日本製第二世代型量産機である『打鉄』の写真を撮ってきてくれないか？」

「任せておいてよ！　最高のアングルと最高の画質で撮影してくるかー！」

「頼りにしてるぞ！　我が娘よ！」

「うん！」

「もうイヤ……誰でもいいから、この二人をどうにかして……」

今日も今日とて、量産機大好き親子はテンションを上げて、それを見て妻の胃がキリキリと痛み出すのであった。

・
・
・
・
・
・

ドイツ国内 某基地内 隊員寮

その一室にて、銀色の綺麗な髪を持つ少女が、一人でいそいそと外
行きの準備をしていた。

「ふむ……服などが少ない分、他に色々と詰められそうだな。念には
念を入れて、色々と持っていておくか……」

目の前に置かれた旅行鞆の中には、僅か数着しかない軍服や下着に
加え、軍の教本のような物が数冊、他には絶対に空港で没収されるだ
ろと思われる銃器が多数。

「これから行く日本は未知の国だからな。どれだけ治安がいいとして
も、万が一ということとは十分に有り得る。戦いとは、準備の段階から
始まっているものなのだ」

用心深いのはいい事だが、それでも限度がある。

銃刀法違反で捕まらない事を祈ってあげよう。

「日本……か」

準備をしている手を止め、胸ポケットの中に入れてある写真を撮り
出す。

そこには、彼女の他に色々な女性が並んで立って写っている。

その中央には、どこかで見たことがあるような日本人女性が。

「織斑教官の生まれ故郷の国……どんな所なのだろうな……」

未だ知らない国ではあるが、自分が尊敬してやまない人物の故郷と
いうわけで、言葉に出来ないワクワクが生まれてくる。

「そして、教官が嬉しそうに話していた『ライムチ・オリカ』なる者……

私はそいつが教官の隣に立つに相応しいか、この目で見極めなければいけない」

拳をグツと握りしめて決意を形にする。

遠い空の向こうで憧れの人と、その人が敬愛する人間が待っている。

「もしも、奴が教官の伴侶に相応しくない人間だった場合は、私がこの手で……！」

いつも腰に着けているホルダーからコンバット・ナイフを取り出し、その磨かれた刀身に自分の顔を映す。

そこには、眼帯を付けた自分の顔があった。

「ん？ なんだ？」

ここで彼女の携帯が震え、着信を知らせてきた。

何事かと思いい電話に出ると、そこからは彼女の部下の声が聞こえてきた。

『ボーデヴィツヒ隊長。今、よろしいですか？』

「クラリツサか。私ならば問題無い。なんだ？」

『司令官が隊長に話したいことがあると、先程からお呼びです』

「了解した。司令官にはすぐに向かうと伝えておいてくれ」

『分かりました』

通話を切り、携帯をポケットに仕舞ってから立ち上がる。

ずっと座っていたので体が硬くなっていたのか、無意識の内に体を伸ばしていた。

「んん……！ さて、行くとするか。余り司令官をお待たせする訳にはいかないからな」

少女は自室のドアから外に出て、司令室へと向かう事に。

果たして、彼女の未来には何が待ち受けているのだろうか。

.....

IS学園の食堂で、箒や鈴やセシリア、本音や簪たちと一緒に夕食を食べていると、いきなり背中に言い知れない悪寒が走った。

「な……なに……？」

なんだろう……猛烈に嫌な予感がしてきた気がする……。

これは、千冬さんが興奮して襲ってくる前によく似ている。

「おりりん、どうかしたの？」

「う……うん。なんでもないよ、本音」

そうさ、きつと気のせいに違いないよ。

確かに、今までに色んな事が起きたけど、これから先も同じような事が起きる訳が……。

「あ」

「今度はどうした？　まるで、何か重要な事を思い出したかのような顔をしているぞ？」

「そ……そうかな……あはは……」

お……緒理香ちゃん……一生の不覚パート2……！

例の無人機騒動が終わったら、今度はフランスとドイツから『あの子達』がやって来る番じゃないか！！

あれから、すっかり穏やかな生活に逆戻りしてたから、完全に忘却の彼方に行ってたわ……。

(でも……この世界じゃ一夏がISを動かしてないから、スパイをする動機が全く無いんだよね……もしかして、原作改変されて、このまま来なかったりとか？　それも十分に有り得るかも……)

それならそれで一向に構わないんだけどね。

非情かと思われるかもしれないけど、全く見知らぬ家族の事情にまで首を突っ込むほど、私はお人好しじゃないからね。

(ドイツの方はどうなるんだろう？　やっぱ、出会い頭にビンタとかされちゃうのかな？　だとしたらヤダなく。私、盛大にぶっ飛ぶ自信

があるよ〜)

別に私は誘拐なんてされてないし、ビンタされる理由は無いです…だよね？

ドイツで千冬さんが余計な事を言っていない事を祈るだけだ。

けど、あの人の事だから、絶対に碌な事を言っていないんだよな〜…。

「今度は顔色が悪くなりましたわ。緒理香さん、どこか具合でも悪いのですか?」

「そんな事は無いよ? ただ、ちよつと季節の変わり目でキツいだけ」

「成る程。確かに、日本はもうすぐ暑い季節に入りますものね。体温調節は重要ですわ」

なんとか誤魔化せた……。

セシリアの心配は嬉しいし、言ってることも大事なんだけどね。

(けど…これで遂に第一期のヒロインが全員集合しちゃうのか〜…。賑やかになるのか、それとも今まで以上にカオスな事になるのか)

最初の段階から非常に大きな原作解離が起きてるから、先の事が全く予測できない。

現時点で、私が持っている原作知識は微塵も役に立たないと思っておいた方が良さだろうね。

「ああ〜…デザートは何にしようかにや〜…」

「もうデザートのことを考えてるの?」

「うふふ……。緒理香さんは小さな体に似合わず、沢山食べますからね」

「成長期なんだよ〜」

食べた分の栄養がどこに行くのかは本気で謎なんだけど。

どうして私の体は全く成長しないのかしら……。

「私的にはモナカがオススメ。緑茶との組み合わせは最強の一言」

「え〜? やっぱり、チョコレートパフェだよ〜」

「何を言う。食後のデザートと言えば、矢張りバニラアイスだろう」

「いいえ。ここはレーズンパイなどが良いかと。紅茶と一緒に食べれば最高ですわ」

「アタシ的にはプリンがいいけどね〜」

モナカにパフェにアイスにパイにプリンか〜…。

どれも甲乙つけがたい…！

女の子として、これは本気で迷いますな……。

「いっそのこと…全部食べるか…？」

「」「え？」「」

いや、流石にそれはないか。

そんなに食べたなら、私のお腹がパンクしちゃうわ。

結局、この日のデザートはバニラアイスを食べましたとき。

・
・
・
・
・
・

「ふくん…」

暗闇の中で、モニターの出す光だけを浴びながら、束は静かに笑みを浮かべる。

「ドイツも随分とクソな連中がいたもんだね。これもある意味の『予定調和』か」

後頭部で手を組んで、楽しそうにする束の後ろで、クロエがジト目で立っていた。

「まくた何を企んでいるのやら」

「人間きが悪いよくクーちゃんくん。私自身は何処までも『傍観者』に過ぎないってば〜」

「束様の場合は、傍観者と言うよりはストーカーと呼称した方が良いのでは？」

「酷っ!?!」

「緒理香さんのプライベートを覗きまくって何を言っているのやら」
「クーちゃんだって一緒になって覗いてたじゃん」

「私はいんです。私は」

「なんでっ!？」

「私だからです」

「うう…クーちゃんが反抗期になった……」

「反抗期じゃありません。緒理香さんが大好きなだけです」

「おーちゃんが好きなのは私もなんだけどなく……」

こうして、二人は今日も緒理香の事を観察し続けましたとき。

遂に来たよ、あの二人が！

「ふにやあく……」

欠伸を噛み殺しながら、私は毎度御馴染の面々と一緒に教室へ向かっている。

別に睡眠不足って訳じゃない。

誰だって、朝は欠伸が出るもんでしょ？

（朝から緒理香が可愛くて今日も元氣100倍だな！）

（本当に緒理香さんは天使ですわ……♡）

（にやって言った。おりりんがにやって言ったよお♡）

もう完全に慣れたけどさ、一緒に歩いている三人から変な目で見られてない？

因みに、違うクラスである鈴と簪はもう自分達のクラスの教室に入っている。

「やっぱり、私はハツキ社のがいいかなあ〜」

「マジ？ あそここのってなんかデザインだけって気がするんだけど」

「それがいいんじゃない！」

「でも、私的にはミューレイの方が良い気がするんだよね〜。性能的な意味で。特にスムーズモデルなら文句なし」

「あそこね〜。確かに性能はいいけど、その代わりにメツチャ高いじゃん」

「それを言っちゃおしまいよ……」

「なんだ？ 今日は妙に教室が盛り上がりつつあるけど、何の話してるのかしらん？」

ハツキとかミューレイとか言ってるけど、何の呪文？

「なにやら、カタログ片手に何かを話しているな」

「内容的に、どうやらISスーツの話をしているようですけど……」

ISスーツとな。

これまたなんとも、人の黒歴史を抉るような事を話してるのね。

「あつ！ おはよう皆！」

「おはよ〜」

「おはよう」

「おはようございます」

私達が教室に入ってきたことに気が付いた一人が朝の挨拶をしてくる。

うんうん。これでこそ学生の朝って感じだよな。

「そういうえば、菜鞭さんの着てるISスーツって、どこの会社の物なの？ 見た目的には市販の物っぽいけど……」

「ああ……やつぱり、それを聞いちやうのね……」

なんとなく『聞かれるんじゃないかな』とは思ってたけど、かなりストレートに聞いてくるんだね……。

仕方がない。ここで下手に無視してクラスの空気を悪くするのもアレだし、ここはこの緒理香ちゃんが犠牲になってあげようじゃないの。

「話してもいいけど、これは聞くも涙、話すも涙、綴るも涙の大感動超大作だからね？ 最低でもハンカチ三枚は必須だから」

「え？ なにそれ……」

人の黒歴史を無遠慮に暴こうとするんだ。

それなら、それ相応の覚悟をして貰わないと。

そう簡単に、私のマウンテンサイクルは発掘できないんだじえ？

「自分で言うのもアレだけど、私って皆と比べても体が小さいじゃない？」

「うん。小さくて可愛くて最高だよな」

「誰もそこまで言えとは言ってない」

一々の発言が大きさすぎじゃない？

そして、他の皆も堂々と頷かない。

「んで、デザイン自体は学園から支給されている物と一緒にして貰ったんだけど、問題はサイズだったんだ」

「確か、一番小さいのはSSサイズだったよね？」

「うん。山田先生も、私に合うようになって気を使ってくれて、SSサイズのISスーツを私にくれようとしたんだけど……」

ああ……ヤヴァい（誤字に非ず）。

あの時の事を思い出すと涙が込み上げてくる。

「それでも……大きかったんだよね……」

「え？」

「一番小さい筈のSSでも、私にはブカブカだったの！」

「」「ええええ————つ!?!」「」

驚くよね。無理ないよね。

だって、SSサイズって言えば、小学生3〜4年生ぐらいの子が着るサイズだし。

それでも私の体に合わないなんて……最近の小学生はとても大きいんだね……。

「だから、私の為だけに特別に、もうワンサイズ小さいSSサイズのISスーツをメーカーさんに作って貰ったんだ……」

もうさ……なによSSサイズって……。

そんなの、スパロボでも見た事無いよ。

人間がユニットになってもSSサイズ扱いなのに、私ってばそれ以下なの？

「ただだけ小さいの？　ありんこ？　ノミ？　ミジンコかな？　は

はは………（泣）

「えつと……ごめん」

「気にしないで……もう過ぎた話だから……」

「そうだよ。どれだけ辛くても、過去なんてのは乗り越えてナンボなんだから。」

「ううう……緒理香……私達が知らない所で、そんな悲劇を体験していたとは……」

「この話を基にハリウッドで実写化すれば……大ヒットは間違いないですわ……」

「興行収入第一位は確定だね……」

「んで、其処の三人は何を言ってるの？」

「筈はともかく、後の二人はもう何にも関係ない話をしてるよね？」

「あ……あの……皆さくん……？」

あれ？　いつの間にか山田先生が近くまで来てた。

もしかして、原作通りにISスーツの説明でもしてたのかな？
だとしたら、なんだか悪い事をしちやったかも。
めっちゃ涙目になってるし。

「私の話…聞いてましたあ…？」

ごめんなさい。多分、誰も聞いてませんでした。

後で詫びとして、山田先生の抱き枕になってあげよう。

・
・
・
・
・
・

その後、なんやかんやあつて山田先生は泣き止んで、その直後に千冬さんが教室にやって来た。

ここまではいいんだよね…ここまでは。

問題は、この先なんだよね。

「諸君。おはよう」

「「おはようございます」」

最初の挨拶は問題無し…と思いきや、話ながらしれっと私の頭を撫でとりますがな。

「うむ。今日も緒理香の髪はサラサラとして触り心地最高だな。そして…」

私の頭を触った手を嗅ごうとしない。っていうか嗅ぐな。止めれ。

「いい香りだ。今日も健康そのものだな」

なんで髪の毛の匂いで私の健康状態が分かるんだよツ!?

冗談抜きでめっちゃ怖いわ!!

ほら〜! 山田先生が青い顔をして後ずさりしてるし〜!

「こほん。あ…本日から、本格的な実戦訓練を始めていく。学園に

配備してある訓練機ではあるが、お前達にとっては初めてのISを使った授業になるので各々、今まで以上に気を引き締めて取り組むように」

「そうだよね。」

離れた場所から見ていると分り難いけど、ISは想像以上に危険だから。

扱い方を間違えれば大怪我だけじゃ済まないし。

「ここは、専用機を持っている私達が良いお手本にならなくちゃね。予め注文をしておいたISスーツが届くまでは、基本的に学園指定のISスーツを使用して貰うので決して忘れないように。万が一にでも忘れてしまった者は……そうだな。学校指定の水着で授業を受けて貰うか。それすらも忘れてしまった阿呆は下着で受けて貰う」

うくわく。厳しく（棒読み）

ま、私達の場合は忘れる心配自体ないんだけどね。

だって、外での授業の時は下からISスーツを着るように心掛けているから。

その気になれば、スーツ自体をISに収納して、展開と同時に着用する事も出来るし。

「と言う訳だ。緒理香は明日から普通に忘れてもいいぞ。緒理香のスク水姿も、下着姿も私は大歓迎だ！ 寧ろ、ISスーツなんて着ないで下着で授業を受けてくれ！ とうか見せてくれ！ 出来れば二人っきりの時に！」

「絶対に嫌ですよ!!」

一瞬で前言撤回しないでください!!

なに皆の前で暴走してるかな〜!

つーか、アンタは前に私の裸を見てるだろうが!!

「あの……織斑先生？ そうその辺で……」

「そうだな。緒理香の可愛さを語るのはまた別の機会にして……山田先生。ホームルームをお願いします」

もしも山田先生が止めなきや、延々と語り続けてただろうな……。

「えつとですね。いきなりでアレなんですけど……今日は皆さんに転校

生を紹介します。しかも二人……」

「「「ええ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜つ!?」「」」」

いきなりの衝撃発言に皆は驚いてるけど、発言をした山田先生は凄く疲れた御様子。

多分、『あの二人』が転校してきたことで、また一気に仕事が増えたんだろうな……。

「はあ……どうして一組に二人も来るのかな……。普通は分散とかさせるんじゃない……」

山田先生が非常に当たり前な事を呟く。

教壇の目の前に私の机があるから、完全に丸聞こえだ。

だけど、それに関しては気にしたら負けですよ。

「それじゃあ……入ってきてください」

「はい」

教室の扉が開き、すごく見覚えのある二人組が入ってきた。

金髪と銀髪。

教室の喧騒は一気に止んで、シーンとなった。

その内の片方……金髪の姿を見て、私は内心『やっぱりか』と思った。だって、普通に女の子の制服を着てるから。

・
・
・
・
・
・
・

「初めまして。フランスの方から来た代表候補生の『シャルロット・デュノア』といます。これから、よろしくお願いします」

まずはシャルロットから挨拶をする。

原作でもそうだったけど、礼儀正しい女の子だから、性別を偽って

なくても皆には好かれそうだ。

現に、クラスの皆から拍手をされているし。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ。ドイツから来た代表候補生だ。コンゴトモヨロシク」

ええっ!?! あのラウラが普通に挨拶をしてるっ!?!

原作じゃ、千冬さんに促されて初めて自己紹介してたのにつ!?!

それと、最後の方に言ったフレーズ:どこかで聞いたことがあるよ
うな気がするのは私だけ?。

「それじゃあ、お二人には空いた席に座って貰って……どうしました
?」

「……………」

ん? なんか二人が私に注目してる? なんで?

「な……なんで……こんなに小さい子がここに? 飛び級?」

「違うからね。確かに見た目は小さいけど、私は立派な高校一年生。
年齢も君と一緒だよ」

「そうなのっ!?!」

分かっていたけど、やっぱり初見さんには私って小学生にしか見え
ないのかな……。

早く大人になりたくい!

「ご……ごめんね。けど……可愛い……♡」

……もう何も言わないよ。

好きなだけ悶絶してあげればいいさ。

私もなんか疲れてきたし。

「けど……こんなに可愛い子なら……」

んん? 急に黙って真剣な顔で考え事をし始めましたよ?

(可愛い美少女Ⅱマスコットガールに最適Ⅱ量産機に乗って貰って魅
力倍増Ⅱ皆が量産機の魅力に取り憑かれるⅡ完全勝利!!)

おかしいなく? シャルロットからカシャカシャカシャーンって
計算するような音が聞こえたぞ? なんだろなく?

「君!!」

「ひゃ……ひゃいっ!?!」

「これをあげる!!」

大声を挙げながら手渡されたのは、デュノア社の商品カタログ。
これを貰って私にどうしろと？

「君の魅力を爆上げする商品がギッシリ詰まってるから是非とも買ってね! 今後ともデュノア社をよろしく!!」

「う…うん?」

シャ…シャルロットって、こんなにも商魂逞しい女の子だったかしらん?

ヒロイン達の中では比較的ノーマルな女の子だった印象しかないんだけど……。

「大丈夫! 本社の方はフランスにあるけど、日本にも幾つか支社があるから、商品はすぐに届くと思うよ!」

「さ…さいですか……」

言ってることが完全に深夜の通販番組の司会者になってるよ……。
デュノア社って通販もやってるの?

「ふっ……早くも転校生を、その可愛さの虜にしてみましたか。流石は私の嫁である緒理香……流石だな」

そのこの担任は、少しは彼女の事を止めようとはしないんですね。

またもや山田先生がオロオロしちゃってるし。

なんかもう、今回は全くいいところがないじゃない。

「緒理香…? もしや、貴様が『菜鞭緒理香』か?」

「そ…そうだけど?」

今度はラウラですか……。

まさか、原作みたいにバチコロン! ってされるんじゃないや……。

歯を食い縛って耐えてやる! どんとこい超常現象!!

「お前が教官の……」

まだか? まだなのか? 覚悟はいいか? 私は出来てる!

覚悟とは! 暗闇の荒野に進むべき道を切り開くことだ! (混乱)

「……………」

あ…あの……なんでさつきから、私の顔をめっちゃ凝視してるの?
ピンタしないの? 気持ちの良い一撃をお見舞いしないの?

「ふみゅっ!?!」

なんか突然、ラウラにほつぺたプニプニされてるんですけどツ!?
ビンタちゃんかいつ!?

「これはまたなんとも……」

「みゅ……」

全く痛みは無く、それどころかちよつと気持ちがいい。
けど、どうして私はラウラにほつぺを揉まれてるんだろう?

「あによ……」

「はっ!? す……すまない。柔らかそうだと思っていたら、無意識の内に手が動いて……」

なんじゃそりゃ。

割と本気で意味不明だわ。

この子もこの子でキャラがぶつ壊れてるなあ。

天然具合が倍増してない?

「そ……そうだ! 菜鞭緒理香!」

「は……はい?」

「えつと……その……貴様は……教官の……だから……んと……」

言ってることが支離滅裂ですよ。

ちゃんと整理してから言おうね。

「ま……負けんからな!」

「へ?」

言うだけ言ってから、ラウラは自分の席へと向かっていった。

顔がメツチャ赤くなつてたけど。

「では、これでHRを終了する」

「」「今までのやり取りを全部スルーっ!?!」「」

千冬さん、絶対に収集するのが面倒くさくなつて、強制的に終わらせようとしたな。

気持ちは分かるけど、何か一言ぐらい言おうよ……。

「各々はすぐに着替えてから第二グラウンドに集合するように。今日は二組との合同授業を行う事になる。以上!」

本当に終わりやがった……。

なんか、今まで以上にカオスが増したような気がする……。
胃薬……また保健室に貰いに行こうかな……。

奇妙奇天烈な二人の転入生

先生たちが教室から去って、私達は授業に備えてISスーツに着替える事に。

って言っても、専用機持ちである私達は他の子達とは違って態々、手を使って着替える必要はないんだけどね。

前日も言っただけど、専用機持ちのISスーツは機体の方に収納されているので、頭の中で考えるだけで制服と交換するような形でお着替えできるのです。

これが出るのは本当にデカイメリットだよ。

だから、絶対にスーツを忘れる事は無いんだよ。悪かったね千冬さん。

因みに他の皆は、こう言っただけの授業の日には予め、制服の下にスーツを着るようにしているとか。これも前に言っただよ。

はいそこ、水泳の授業の前みたいとか言わない。

それは、この場にいる日本出身の皆が思っている事だから。

「むう…相変わらず早着替えだな緒理香は……」

「なんで箒は残念そうにしてるの？」

まさか、私の着替えを見たいとか言うんじゃないよね？ 信じてもいいよね？

余談だが、前に私の着替えを覗きこもうとした束は、私必殺の目潰しをお見舞いした。

「え……え？ それって……」

で、そこでこの世の終わりみたいな顔をして私の事を見ているデユノアさんはどうしたのかしらん？

「あ……あの…葉鞭さんって…もしかして……専用機持ち…だったり……？」

「う……うん。そうだけど……」

「そ……そんな……！」

え？ ええ？ 私、何か悪い事でも言った？

なんかスローモーションで床に倒れ込んで横座りになって、其処に

なぜかスポットライトが当てられてるんですけど……。

「君だけは…信じてたのに……」

「いや、会ってまだ数分しか経ってないのに勝手に信じられても」
割と普通に反応に困る。

君はこんなキャラだったかな？

(い…いや、まだ諦めるには早すぎる！ 魅惑の美少女である菜鞭さんが専用機持ちだったのは確かにショックだったけど、それならそれで、デユノア社の商品を売り込めばいいだけの話じゃないか！ 幾ら専用機とはいえ、拡張領域はちゃんとあるんだし、そこにデユノア社製の武装を装備して貰えば……)

あ。またシャルロットの目が怪しく光り出した。

めつちや『ギューピーン』いつてる。

「菜鞭さん……」

「な…なに？」

「僕はまだ諦めないからね！」

「さ…さいですか」

何を？

「……………」

んで、さつきからラウラは自分の手を見つめながら何をしてるの？

早く着替えないと千冬さんに怒られるよ？

(なんとという触り心地だったのだ……。まるで、ふわふわのマシユマ口を触っているような……。いやいや！ 何を考えている私！)

……あの子もあの子で百面相してるな。

マジでもう二人とも、原作の面影全く無いじゃん。

完全に別キャラじゃん。特にシャルロット。

(これまでに何度も自分に言い聞かせてきたけど……深く考えたら負けだな、こりゃ……)

……

・
・
・
・
・

着替え終わってグラウンドに向かう途中で、私達は二組の皆と合流する事になった。

つて事は、必然的に鈴とも会う訳で。

「あれ？　なんか見ない顔の子がいる？　誰？」

「転入生だって。しかも二人」

「なによそれ。冗談でしょ？」

「そう思いますわよね……」

「だが、事実なんだ」

「箒とセシリアが言うって事はマジなのね……」

鈴も、二人の根っこが真面目な事は知っているから、信用度は高いんだよね。

何気に原作以上に仲良くなってる？　私的には嬉しいけどさ。

「どこから来てるの？」

「あの金髪の方はフランスからで、銀髪の方はドイツからだそうですわ」

「しかも、二人揃って代表候補生らしい」

「……なんか分かった。それ、完全に厄介事を千冬さんに任せようとしてるでしょ」

「だよね……」

理由自体は原作と一緒なんだろうけど、この世界の場合はそれ以上に山田先生への負担がハンパないからなあ……。

割とマジで、いつの日か必ず山田先生を労う事を考えよう……。

じゃないと余りにも不憫すぎるから。

「しかも、なにやら二人とも唯者じゃない雰囲気だったな」

「それってどんな？」

「フランスから来た方…シャルロット・デュノアさんというのですけど、彼女は開口一番でいきなり緒理香さんに自社のパンフレットを渡してきて宣伝してきましたわ」

「せ…宣伝？ それに『デュノア』ってことは…」

「十中八九、あの『デュノア社』の御令嬢でしょうね。代表候補生をしていると風の噂で聞いてはいましたけど、まさかあそこまで商魂逞しい人とは思いませんでしたわ…」

だよ。その気持ちはチョー分かるよ。

今思い出しても、あのインパクトは絶大だった。

今だってほら、他の子達に色々と話しかけてなんかしてるし。

「これ見てよ！ 凄いでしょ！? なんとって、このデザインが…」

「そ…そうだね…あはは…」

めっちゃ困ってるじゃん。貴公子と言われていた彼女は何処にもいないじゃん。

完全に商売人と化してるじゃん。

「あれは…普通に関わりたくないわね…」

「うんうん」

根は普通に良い子なんだけどな。

どこがどうなって、あんな風になっちゃったの？

「もう一人の子はどうなのよ？」

「ああ…ラウラ・ボーデヴィツヒの事か。奴もまた意味不明というか…」

「じつと緒理香さんの事を見つめたかと思うと、いきなりその頬を揉み始めたんですの」

「はあ？」

その台詞は私が一番言いたい。

当事者である私が最も困惑してるから。

「その後、緒理香さんに『負けない』と宣言しましたわ」

「何に『負けない』のよ…」

間違はなく千冬さん関係なんだろうけど、言葉足らずになってるか普通にヘツポコキヤラになってるんだよね。

寧ろ、原作よりも初期から可愛くなってる気さえする。

「確かに、緒理香のほっぺは最高にプニプニだけど、どうしてそこから『負けない』に発展するのかしら?」

「さあ?」

全く先が読めない展開になってきたな、こりや……。

だけど、たった一つだけ断言出来ることがある。それは……。

(ラウラはともかくとして、シャルロットと同室になる子には心から同情するよ……)

数週間後には完全な『デュノア社信者』になってそうだ……。

・
・
・
・
・
・
・

一組、二組の全員がグラウンドに集合し、きちんと整列をして授業の開始を待っている。

千冬さんがジャージ姿で私達の前に仁王立ちになっていて、山田先生の姿は何処にも見えない。

因みに、私は背の関係上、列の一番前に立っている。

小学生の頃から、一度もこの場所から移動したことが無い。しくしく……。

(多分、山田先生はISを取りに行ってるんだろうなあ……)

ってことは、操縦をミスって上空から落下してくるのかな?

山田先生なら助けてあげたいけど、体格的な意味で無理だからね?

絶対に他の誰かが助けてあげてよ?

「それでは、今日から実際にISを使った実技授業を開始する」

「「「はー!!」」」」

やっと本格的にISに触れるとあって、みんな気合が入ってるね。

「まずは専用機持ち達による軽い模擬戦でもして貰うか。というわけで、オルコットに風。前に出ろ」

「はい」

ここまででは原作通りの流れだ。

問題は、ここから…だよな。

「って、なんか言われるがままに前に出たけど、もしかしてあたし達で試合をするんですか？」

「確かに、前々から鈴さんとは試合を試してみたいとは思っていましたが…」

「血気盛んなのはいい事だが、生憎と対戦相手は別に存在している」

「それは？」

「もうすぐ来る。少し待て」

や…やっぱ落ちて来るの？ 私がキャッチしなくちゃダメ？

よ…よし！ 多少の無茶は承知の上で、いつでも白式を展開できるように準備をして…。

「お待たせしました〜！」

「この声って…」

「まさかっ!?!」

おおっ!?! まさかのまつ!?!

「よいしょ…つと」

ラファール・リヴァイヴを装備した山田先生が、非常に慣れた感じで上空からやって来て地面に着地をした。

両足が地面に付く瞬間も殆ど音も煙も出なくて、たったそれだけでこの人が凄い人だって嫌でも理解出来た。

「対戦相手って…」

「山田先生ですのツ!?!」

「そうだ」

一同騒然。

普段からドジっ子な部分しか知らない山田先生の秘められた実力

の一端を垣間見た上に、代表候補生二人と一人で戦うというのだから驚きだ。

けど、それが普通に出来ちゃうのが山田先生って人なんだよね〜！
「で…でも、流石に2対1というのは…」

「どうかと思うのですが…」

「心配するな。こう見えても、山田先生の実力はお前達二人よりも遙かに上だ。なんせ…」

「いや〜！ にしても、やって来る時の山田先生…本当にカッコよかつたな〜っ！」

「やっぱ、私を娶るのはこの人しかないね！ うん！」

「山田先生！ めっちゃ凄かったです〜！ 憧れちゃうなあ〜…」

「そ…そうですか？ 菜穂さんに言われると、なんだか照れちゃいますね…」

照れてる山田先生も最高！ もう……本当にお嫁さんにしてくれないかな〜…。

「緒理香のツインテールが…」

「今までに見たことが無い程にピコピコと動いてますわ…」
「……………」

「はあ〜……思わず溜息が零れちゃう…」

胸が本気でキュンキュンするんじや〜！

「緒理香…全身で興奮を表現するなんて……可愛過ぎるぞ〜！」

「おりりん……なんで、おりりんはそんなにも可愛い……？」

なんか箒と本音が鼻血を出しながら目をキラキラさせてるけど、今は気にしない。

他の皆も非常に穏やかな顔をしてる。まるで何かを悟ったような顔をしてる。

「おい…お前達…」

「はい？」

「手段は問わん！ 絶対に真耶を倒せ!!」

「ええ」

「っ!!？」

「どうしていきなりそうなるの」

「っ!!？」

「真耶め……！ 緒理香は絶対に渡さんぞ……！」

「……完全に私怨に走ってる————っ!?」

それでいいのか担任教師————っ!?

「まさか……あそこまでラファールを使いこなせる人がいるなんて……！」

あの人こそ僕と父さんが最も理想とする人……！」

シャルロットはシャルロットで、超真剣に山田先生の事を見てるし……。

値踏みをしているというよりは、スカウトマンみたいな顔になっている。

君はどこまで会社一筋なの？ いや、社長令嬢として考えは正しいんだろうけど……。

「成る程……伊達に教官が副官にしている訳ではない……という事か。あれ程の実力者……本国にも何人いるか……」

ラウラは軍人目線で山田先生を評価してるみたい。

山田先生が彼女から高く評価されるのは純粹に嬉しいな。

「山田先生！ 頑張ってくださいいね！」

「はい！ 先生に任せてくださいい！」

二人には悪いけど、今回だけは山田先生を全力で応援させて貰うよ！

本当に頑張つて！ 山田先生！

「オルコット……凰。もしも勝つたら、私がなんでも好きなものを奢つてやる」

「……もしも負けたら……？」

「特別レッスンだ……！」

(ぜ……絶対に負けられない……！)

なんで千冬さんは、さつきからカリカリしてるのかにや？

緒理香ちゃんは子供だから分らないや。

「では……試合開始いいいいいいいいいいいいいっ!!!」

「なんで遊戯王風に言うのッ!?!」

これって本来は、生徒達から舐められている山田先生の凄さを皆に知らしめる為の模擬戦じゃなかったっけ？

いつからマジモードの試合になってるの？

まあ：それでも、二人が山田先生に勝てる可能性は非常に低いと思ってるけど。

私の周りが皆揃ってキャラが濃すぎる

はい。千冬さんの脅しという名の強迫から始まりました。

授業前のデモンストレーションとして鈴&セシリアVS山田先生の変則マッチ。

青い顔をしながら上空に昇っていった二人だけど、本当に大丈夫かな……。

「この勝負：絶対に負けられないわよ！ 分かっているわねセシリア！」

「当たり前ですわ！ あんな顔をされながら言われたら、悪魔だって裸足で逃げ出しますわ！」

自分達を鼓舞する為に言ってるんだろうけど、完全に聞こえていますからね。

「それじゃあ、行きますよ！ 二人とも！」

「どんとこい!!」

大凡、女子高生が言うセリフじゃないよね……。

「では、あいつ等が試合をしている間に、誰かにラファールの説明でもして貰おうか。えっと……」

千冬さんが周囲をキョロキョロと見渡しながら、誰にしようかと模索していると、そこにめっちゃキラキラした視線を送るシャルロットが。

あれは私でも分かっちゃうよ。

『是非とも、僕に説明をさせてください!!』って目で訴えてる。

千冬さんもそれを一瞬で察したのか、すぐに彼女から目を逸らした。

「では…そうだな。緒理香、頼めるか？」

「いいですよ」

「え————っ!？」

何が『えー』か。何が。

原作ならばいざ知らず、私の目の前にいる彼女に説明を任せたら、それだけで授業が終了するのは目に見えている。

ほら、周りの皆も『よく言った!』って顔をしてるし。

「菜鞭さん」

「ふえ?」

なんて説明しようか考えていると、いきなり横からシャルロットが参考書顔負けのめっちゃ分厚い本を持ってきた。

「……なにこれ?」

「台本だよ。この中にラファールに関する全てが記載されているから、思う存分に参考にしてね!」

「あ……ありがと……」

なんか断れそうにないから仕方なく受取ると、持った瞬間に体が地面に沈むような感覚が襲ってきた。

「つーか重っ!? 重すぎいいいつ!? これ本当に本なんですかッ!?

明らかに参考書の数倍の重さはあるんですけどッ!?

「緒理香に何を持たせている。このバカ者が」

「うぎやっ!」

はい、シャルロットさんに天下無敵の出席簿が振り下ろされました。

これも通過儀礼だと思って諦めて頂戴な。

「緒理香。これは私が預かっておこう」

「ありがとうございます……」

私の手から千冬さんに本が渡り、軽々と片手で持ち上げてみせた。

「やっぱり、千冬さんって力持ちなんだなあ。」

「……なんだこれは。本の形をしたダンベルか?」

「やっば、そんな感想が出るよね。うん、超分かる。」

「では、改めて頼む」

「はい」

ここから、私は空の上で必死に戦っている三人を見上げながらラファール・リヴァイヴの説明をすることに。

え? どんな説明をしたかだつて? 原作と殆ど同じだよ。

そんなに知りたかつたら、自分で調べなさい!

緒理香ちゃんとの約束だぞ!

・
・
・
・
・
・

私がラファールの説明をし終えても、まだ三人の試合は続いていた。

「セシリア！ 一気に突っ込むから援護頼むわよ！」

「了解ですわ！ 背中には任せてくださいまし！」

うん。原作みたいに喧嘩しながら……って感じじゃないみたい。

即席の割には、かなりいい動きをしている。

流石に阿吽の呼吸とは言い難いけど、ちゃんと逐一、声を掛け合って動きを確認し合っているから、少なくともお互いにぶつかってって事は無いみたい。

でも、今回ばかりは相手が悪かったと言わざる負えなかったみたいで……。

「やりますね……流石は現役の代表候補生です！ でも！」

鈴の突貫&セシリアのビット攻撃を、両手に持ったアサルトライフルの一斉掃射でまさかの完封。

仮に接近戦に持ち込まれても、即座にハンドガンに持ち替えて応戦してるし。

「あ」

セシリアのビットが山田先生のショットガンに全部撃墜されちった。

「そこです!!」

「グ……グレネードランチャーっ!? きゃあああっ!?」

「セシリアッ!? ……げ」

一瞬の隙を突かれたセシリアが、山田先生の撃ったグレネードランチャーの餌食になって脱落。

それに動揺して、思わず鈴が後ろを振り向いた瞬間に、後頭部にアサルトライフルの銃口を突き付けられた。

「はい。チェックメイトです♡」

「ま…参りまじだ…（泣）」

握っていた双天牙月を収納し、両手を挙げての降参のポーズ。

結局、勝ったのは山田先生でしたとき。

（あの二人のコンビは見事に1+1を10にも20にも底上げしたけど、地の力が100以上もある山田先生の前じゃ勝ち目は無かったか……）

実際、二人揃って山田先生には一度も攻撃を当てられてないからね。

こりや、マジで凄すぎだわ。

いや〜…惚れ直すつてのはこういう事を言うんだろうね。

「ううう…緒理香にカツコ悪い所を見せちゃった…」

「情けないですわ…」

「あはは…」

完全に意気消沈して降りてきた代表候補生コンビと、勝者であるにも拘らず素直に喜べずに苦笑いを浮かべている山田先生。

もっと誇ってもいいと思うんですけど？

「これが学園教員の実力だ。これからは、もっと敬意を持って接するように」

本当はそれが言いたかったんだろうけど、皆は揃って『お前が言うな』って顔になってるからね？ ちゃんと気が付いてる？

「それから、其処の二人…」

「は…はい！」

「今日の放課後を楽しみに待っている…！」

「は…はい…」

「愁傷様としか言えない。」

こればかりは、私じゃどうしようもないからね。

それよりも……。

「山田先生……めちゃんこカッコ良かった……♡」

「ありがとうございます」

これからはもう、何か困ったことがあればすぐに山田先生に相談するようにしよう。

絶対にそうしよう。うん、もう決定。確定。

「ちっー」

そこの担任教師。デカイ舌打ちをしない。

「はあ……まあいい。これから先、幾らでも挽回のチャンスはあるのだからな」

一体どこから、その自信は出てくるんですか？

「あの二人も決して動きは悪くは無かったが、今回の場合はいかんせん相手が悪すぎたな。流石は教官が副官として認めただけはあるという事か。あの着地の時から、ある程度の実力はあると思っただけはいたが、まさかあれ程とは……。私でも勝てるかどうか怪しいな……」

にやんと。あの『他人を見下すマン』であるラウラは素直に山田先生の事を褒めているっ!?

明日は雨か、それとも嵐かっ!?

「では、これよりISを使用する形式の実習を始める。今いる専用機持ちは…オルコットに凰、デユノアにボーデヴィツヒ。それから緒理香の五人か……」

ですよね。やっぱ私も頭数に入ってますよね。

ちゃんと教えることが出来るかな〜？

「ならば、それぞれ八人ずつのグループに分かれてから実習をすることにする。各グループのリーダーは専用機持ちが勤めること。分かったな？ では、早速分かれろ」

原作じゃ、男の一夏がいた事でめっちゃグループが偏って大変な事になったんだよね。

けれど、今回はそんな事が無いから、ちゃんと均等に分かれてくれる筈。

「まあ…仮にも代表候補生だしね。オルコットさんなら大丈夫だよね

「？」

「なんで疑問形なんですか？」

「さっきの試合を見たからじゃない？」

「凰さんなら平気かな？ 緒理香ちゃんとの試合の時は凄かったし」

「そ…そう？ まあ、あたしと緒理香のコンビは最強って言うか…」

話逸れてますよ。

「大丈夫！ 僕がラファールの素晴らしさを徹底的に教えてあげるから！」

「う…うん…よろしく」

案の定、彼女の班の子達はドン引きしてます。

「少し厳しい言い方をするかもしれないが…隣よりはマシだろう」

「だよね…うん。私達もなんか、ボーデヴィツヒさんか、菜鞭さんの班が一番マシだと思えてきた…」

なんだろう…この凄く嬉しい違和感は。

まるで猛獣が懐いてくれたかのような嬉しさと同時に、一番の問題児だったラウラが一番マシになっているという違和感…。

そして、私の班はと言うと…。

「緒理香にはいつも勉強を教えて貰っているが、まさかISの事まで教わる日が来るとはな。今日はよろしく頼むぞ」

「おりりん。よろしくね」

箒と本音はある意味で予想通り。

それ以外にも、ちゃんと私の班に来てくれた子がいたことが素直に嬉しい。

「緒理香!!」

「来たよ……」

想定していたと言いますか、やっぱり千冬さんが血相を変えて走ってきた。

「自分で言っておいてアレだが、本当に大丈夫かつ!? 困ったことがあれば、すぐにお姉ちゃんを呼ぶんだぞっ! いいな?」

「大丈夫ですよ。ちゃんと何かあれば(山田先生を)呼びますから。それと、誰がお姉ちゃんか」

しれつと私の事を妹認定しないでくださいな。

本当に油断も隙もあつたもんじゃやない……。

「そうだ！ このルナ・チタニウム合金製の出席簿でも貸そうか？ いざという時はこれを盾にして……」

「いや、何から身を守るんですか。つていうか、今なんて言いました？ ルナ・チタニウム合金っ!？」

この出席簿つて、そんな凄い素材で出来てたのっ!? マジでッ!? よく原作の一夏は頭蓋骨陥没とかしなかつたな……。

いや、それどころじゃすまされないか。下手しなくても普通に死んでるわ。

「ううう……心配だ……」

「なんで今生の別れみたいな雰囲気を出してるんですか。すぐそこで全体を見てるでしょうが。目と鼻の先に普通にいますでしょうが」

「私にとっては、この距離は三千里にも等しい!!」

「別に私は千冬さんに会いに行くために旅なんてしませんからね」というか、何もしなくても勝手に向こうから来そうな気がする。

「ほら、千冬さんがいたんじゃ何もできないじゃないですか。とつとに戻った戻った」

「分かった……」

渋々って感じで、千冬さんはこつちを見ながら手を振ってから去っていった。

数メートル先にいる山田先生の元まで。

普通にここからも見えています。

「んじゃ……やろつか?」

「」「」「うん……」」「」

なんか、凄く気まずい雰囲気になりながら実習を始める事に。

「え……えーつと…皆さん、いいですか? これから予め持つて来ている訓練機を一班につき一機ずつ取りに来て下さいね。『リヴァイヴ』が二機で、『打鉄』が三機ですからね。好きな方を皆で話し合つて決めてください。早い者勝ちですよ」

早い者勝ち…ね。

個人的には打鉄よりはリヴァイヴの方が良いんだよね。

理由？ 普通にカツコいいし、性能もバランスが取れて好きだから。

「私はリヴァイヴがいいと思ってるけど、皆はどうする？ 好きな方でいいよ」

「それならば、私は緒理香が決めた方でいいぞ」

「私もそれでいいよ」

「え？ ほ…他の皆は？」

「私達も！」

「緒理香ちゃんの決定に！」

「従います！」

「ぐへへ…：間近で見る緒理香さんの I S スーツ姿…：超可愛くてセクシー…：♡」

約一名を除いて、意見が一致しているようになにより。

それから、こんな幼女体型の奴をそんな目で見ている同性は、それだけで普通にドン引きです。

「じゃあ、リヴァイヴで決定って事で。取って来るね」

トコトコと小走りで山田先生と千冬さんがいる場所に行ってから、話し合った結果を報告した。

「…てなわけで、私達の班はリヴァイヴをお願いします」

「分かりました。リヴァイヴはあと一機しか無かったのでギリギリでしたね」

「それって、もしかして…：」

「はい…：デュノアさんの班が即座に取りにきました…：」

「だと思った…：」

彼女の事だから、微塵も迷う事も無く取りに来たんだろうな…：。

試しにチラッと見てみると、すっごい鼻息を荒くしながらリヴァイヴの事を延々と語っていた。

…：あれは変に関わらない方が賢明だな。

「けど、大丈夫ですか？ 一応、移動式のハンガーに乗せているので持っていくこと自体は問題無いと思いますけど…：」

初めて教師って職業を尊敬しました

本格的に実習が始まる前に凄く疲れたけど、とつとウチの班も始めないとね。

千冬さんのお蔭で少しだけ時間も短縮できたし、なんとか間に合うでしょ。

「えっと…それじゃ、出席番号の順にISの装着から起動までをして、それから歩行…でいいんだよね？」

「うむ。まずはそれぐらいでいいだろう。では、非常に残念だが私は戻らなくてはいけない。緒理香、何か困ったことがあればいつでも言うといい。光の速さで駆けつけてやる」

「さいですか」

リヴァイヴを運んでくれた千冬さんは、なんだかいい汗を掻いたっ感じの顔で山田先生の元まで戻っていった。

しれっと去り際に私の頭を撫でる事も忘れずに。

「…担任のお墨付きも貰ったし、さつき言った感じでやろうか。となると、一番最初は……」

「はいはいーい！ 出席番号順なら最初は私だよ！」

「えっと…相川さん…だったよね？」

「そう！ つていうか、ちゃんと私の名前を覚えててくれてたんだ！

普通に感激〜！」

「クラスメイトだしね。それぐらいは……」

「緒理香ちゃん…めっちゃ良い子……！」

えっと…名前を憶えてるだけで、其処まで感動するような場面かな？

割と普通の事だと思っただけど……。

「うんうん。緒理香ならば当然だな」

「おりりんだしね〜」

何が？

「あ…相川さんって授業とかでISに乗った事はあるよね？」

「一応ね。本当に数えるぐらいしか乗ってないけど」

「それでも十分だよ。一通りの手順は知ってるって事なんだから。じゃあ、目の時の事を思い出しながら装着と起動をやってみようか。ミスりそうになったら、ちゃんとアドバイスするから」

「緒理香ちゃんがそう言ってくれるなら百人力だよ！　ありがとね！」

「どういたしまして」

「よろし！　やるぞー！」

気合が入るのは結構だけど、入れすぎて空回りしないようにね。

あと、相川さんもしれつとりヴアイヴに乗る直後に私の頭を撫でて行きよりましたがな。

．
．
．
．
．
．
．

私が特に何かを言う事も無く、相川さんは見事に装着と起動をこなし、歩行までやり遂げた。

後は降りて、次の人にバトンタッチするだけ……だったんだけど……。

「あ……ヤバ。やっちった……」

「はにゃ〜……」

にやんと、相川さんはリヴアイヴを立たせたまま操縦席からジャンプで飛び降りてしまったのだ。

普段から訓練機に触れる機会が少ないからすっかり忘れてしまっていたけど、今回みたいに訓練機を使用する場合、装着を解除する際に必ずISを膝立ちに刺せないといけない。

じゃないと、次に使う人がISに乗る事が出来ないから。

「こんな時は……」

他の班の様子を見て、似たような状況に陥っていないか確かめてみる。

もしかしたら、何か打開策を見つけられるかもしれないから。

そうしてふと視界に入ったのは、シャルロット達の班だった。

「ほら見てよ！　この関節部のアクチュエーターなんてかなりの衝撃にも耐えられるように設計されてるんだよツ!?　本当に凄いよね！　どんな武装を使用しても問題無いようにされてるなんて…素

晴らしい……」

「あの…さつきから説明ばつかでも進んでないんですけど…聞いている？」

……あれは世界で一番の悪い例の一つだ。

私は何も見ていない。私は何も見ていない。よし。

「莱鞭さん。どうしました？」

ここで私の嫁であり救世主の山田先生の御光臨だ〜！

この人ならきつと来てくれると信じていました〜！

「えつとですね、実は……」

かくかくしかじか。かくかくうまうま。

「…という訳なんです。どうしたらいいんですかね？」

「成る程…初心者の子が良くやる失敗の一つですね。私も昔はよくしてました」

にやんですと。

今の発言で一気に私の中で山田先生に対して親近感が湧いた。

「では、莱鞭さんがISを使つて……」

「その必要はなあああああああああああああああい!!!」

「「「「えっ!?!」」」」

担任の叫び声が聞こえてきたと思つて上を見上げると、そこには大きく右腕を振り上げて特大ジャンプをしている千冬さんの姿があった。

「お…織斑先生ツ!?　一体何をツ!?!」

「こうするんだ!!　チエストオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ

「」「うん……」「」

・
・
・
・
・
・

二番目の子も無事に終了し、三番目は箒になった。

前回の失敗を活かして、ちゃんとしやがんだ状態で降りてくれた。

また千冬さんのジャンピングチョップが来るのは普通に怖いしね……。

「いつも放課後の訓練で打鉄は乗っているが、リヴァイヴの方は初めてだな……」

「防御重視の打鉄とは違って、リヴァイヴは超汎用型って感じだからね。特徴が無いのが特徴って言えばそれまでだけど」

「その分、他の機体よりも操縦者の技量が試されるISという事なんだろう。よし、では行くか」

他の皆よりはIS操縦の経験があるお蔭で、箒はかなりスムーズに進んだ。

あつという間に装着をしてから起動まで終わり、難なく歩き始めている。

「む？ 気のせいか……リヴァイヴの方が打鉄よりも軽いような気がする……」

「あつちはデフォで分厚い装甲を持つてるから重量があるんだよ。でも、リヴァイヴは装甲も標準値にしてあるし、固定装備とかも無いから……」

「成る程。装甲と装備の差か……」

あつちゆうーまに箒も終了。

この調子なら、すぐに全員が終わるね。

「四番目は誰？」

「私だよ」

お次は本音か。

この子は整備士としての印象が強いから、あんましISに乗っている姿は想像出来ないな。

でも、整備をするって事は同時にISの構造とかも詳しく熟知してけなきやいけない訳で。

となると、思ってるよりは動けたりするのかな？

「アドバイスとかはいる？」

「だいじょーぶだよー。よいしょっと」

言うが早いのか、本音は軽々とリヴァイヴに乗り込んでちやちやつと装着と起動を同時にやってのけた。

「これでよし…と。んじゃ、歩くから少しどいててね」

流石に歩行スピードや歩く際の姿勢なんかは箒と比べて劣っているが、それでも十分過ぎるほどに上手だった。

これにはウチの班の皆もお口あんぐり。

「ええ…本音ってこんなにも上手だったの…」

「人は見かけによらなさすぎでしょ…」

「本音め…想像以上にやるな…」

結局、一分と掛からずに本音は私達の所に戻ってきて、これまた慣れた感じで機体を座らせてから装着解除。

いや…本音で見直したわ…うん。

「ちやくちく。どうだった？」

「うん…見事だよ…」

「やった〜！ おりりん、ありがとね〜！」

「わぷ」

私は何にもしてないのに『ありがとう』はおかしくない？

なんて言いたいけど、抱き着いてきた本音の胸に顔が圧迫されて何も言えない。

く…くりゆしい…。

「ほ…本音だけズルいぞ！ 私も緒理香をハグする！」

「私達も！」

「勿論するからね！」

えええええつ!? ちよ…ちよつとおつ!? 皆さくんつ!?

「緒理香く!!」

「緒理香ちやくん!!」

「うにゅ……」

ワタシ…ツブレチャウ…ヘルプミー……。

「わくつ!? ら…菜鞭さくんつ!? 大丈夫ですかくつ!?」

「貴様らく!! 私も混ぜんかく!!」

「織斑先生っ!?!」

あれ…? なんか星が光って見える…彗星かな…?

いや…違うよね…彗星はもつとバーって光るもんね…ははは…。

それよりも、誰かここから私を出してくれませんかねえ…?

…

…

…

…

…

「もう！ 皆さん揃って何をやってるんですか！ 危うく菜鞭さんが窒息しそうになったんですよっ!?!」

「…すみませんでした…」

あの後、皆はグラウンドに正座させられてからの山田先生のお説教を受けている。

やっと息が吸える…生きてるって素晴らしい……。

「全くだぞ。緒理香に何かあったらどうする」

「織斑先生も反省してください！」

「だが断るー！」

「断らないでください!!」

この二人が真つ向から言い合ってるのも珍しいな…。

というか、あそこまで堂々とされると、逆に千冬さんを凄いと思つてしまう不思議。

「全く…私は他の班を見てきますから、もうこんな事が無いようにお願いしますよ?」

「「は〜い…」」

「織斑先生、行きますよ」

「いや、私はここに残って…」

「い・き・ま・す・よ?」

「あ…ああ…分かった…」

遂に山田先生が千冬さんを圧倒した（別の意味で）。

普段から温厚な人が本気で怒ると怖いって都市伝説…本当だったんだなあ。

「緒理香…本当に済まなかった…」

「ごめんね〜…おりりん〜…」

「ごめんなさい…」

「だ…大丈夫だよ? 私はこの通りピンピンしてるし、皆に悪気が無かったのは知ってるし…ね?」

「緒理香…お前は女神か?」

なんでやねん。

普通に皆を許しただけじゃろがい。

「だが、このまま何も詫びないのは私自身が許せん。だから…」

ん? 急に箸が顔を近づけてヒソヒソ声で話しかけてきたよ?

「お…屋上で一緒に昼食なんてどうだ? 緒理香の為に弁当を作つてあるんだが…」

「ほんと? うんうん、私なら全然いいよ!」

「そうか! それはよかった!」

朝から何かキッチンでしてると思ったら、お弁当を作ってたんだ。

何気に箸って料理も出来るしね。

…あれ？　もしかして箸って、口よりも手が出やすい性格さえ矯正すれば、割と理想の嫁なのでは？

今からお昼の事を考えていた私だが、箸の背後に控えていた本音の目が怪しく光っていた事に全く気が付いていなかった。

(ちゃんと聞こえてたからね…しののくん…)

その後、他の班も全て終わったようで、後片付けをしてから午前の授業は終わった。

帰る時に本音が専用機持ちの皆と話していたのが気になったけど…なんだろうね？

セシリアが死んだ!? この人でなし!

お昼休みになり、私は箒と一緒に屋上へとやって来ていた。

普通、学校の屋上と言えば『危険だから立ち入り禁止』なんて理由で入れない筈なのだが、このIS学園は事情が違みたい。

私も学校の屋上に来るなんてことは前世&今世合わせて生まれて初めてなんだけど、なんか普通に備え付けのベンチや丸テーブル、ちよつとした芝生なんかもあって、明らかに生徒達がここで寛ぐことを前提にしている感じだ。

…屋上でワイワイするなんて、それこそフィクションだけの話だと思ってた…。

「……で? どうして『お前達』もいるんだ…?」

私と箒は並んで丸テーブルに座っているが、その箒はさつきから眉間に血管を浮かべながらピクピクとしている。

その理由は恐らく、一緒のテーブルに座っているセシリアと鈴と本音と箒とシャルロットだろう。

「私達は本音さんに教えて貰ったのですわ」

「アンタ一人だけにいい思いはさせないんだから」

「……箒は?」

「授業が終わった直後に本音からメールを貰った」

「本音」

「?!」

「しののん……抜け駆けは良くないと思うんだよ…?」

ほ…本音…虫も殺せないような顔をしてるのに、なんて強かな子なんだ…。

意外と、本音みたいな子こそが一番敵に回したら怖いのかもかもしれない。

「それで、どうしてデユノアもここにいる?」

「後ろからこつそりとついてきた」

「お前はストーカーかっ!?!」

「失礼だなく。純粹に皆と一緒に食事がしたいと思っただけなのに」

「だったら普通に来い……」

「なんだか照れくさくて」

「どの口が言うか……」

それには激しく同感。

皆の目の前で、あんなにも堂々と量産機愛を語っていたのに、今更にそんなしおらしい事を言われても……ねえ？

「ま……まあいい。それよりも今は昼食が先決だ。緒理香」

「お？　これがさつき言ってたお弁当？」

「そうだ。お前の口に合うと良いのだが……」

箒が私の目の前に置いたお弁当を開けると、鮭の塩焼きに鶏肉の唐揚げ、こんにやくと牛蒡の唐辛子炒めとほうれん草の胡麻和えといった、非常にバランスの良く取れた組み合わせ。

うん。どれも普通に私の好きなメニューですな。

そういや、最近の若者たちは『鶏肉って何の肉？』って聞かれても分からないらしいね。

なんとも嘆かわしい事だ。

「ど……どうだ？」

「どれも凄く美味しそうだよ。箒、いつ料理なんて勉強したの？」

「ま……まあ……中学の時に知り合った者とかに……な」

「へえ……」

箒も箒で、私が知らない所で独自のコミュニティを創り上げてたんだなあ。

幼馴染として緒理香ちゃんは感動しておりますよ。

「それじゃあ早速……いただきます。あむ」

まずは一番最初に目についた唐揚げを頂くことに。

少し時間が経過しているにも拘らず、かなりジューシーに仕上がっている。

歯で噛むと肉汁がジュワッって出てくるし。

「ん……♡　美味しい♡」

「そうか！　それはよかった！　どんどん食べてくれ！」

「うん！」

「こんなお弁当なら喜んで食べますとも！」

この鮭の塩焼きも、ちゃんと中まで火が通っていて美味しいな〜♡
「むむ…やるわね箒…！ けど、こつちだつて負けてないんだから！
こんな事も有ろうかと…つてね！ 緒理香！」

「もきゅもきゅ……にやに〜？」

「実は、あたしも今日はこんなものを作つて来たの！ よかつたら食べて頂戴！」

「おお〜！」

鈴が取り出したタッパーには、なんとも美味しそうな酢豚が入つていた。

なんだか懐かしいなあ〜。

「それじゃ、遠慮なく貰うね。あむ！ ん〜！ これも美味しい〜！
めつちや白米が欲しくなる〜！」

「ま…まあ？ 伊達に中華料理店の娘をやつてないつて言うか？ これぐらいは当然つて言うか？」

酢豚のように油分が多い料理と白米のコンビネーションは最強だよね〜！

いや…マジでご飯がどんどん進むんですけど。

「おりりんは沢山食べるんだね〜」

「成長期？」

「その筈なんだけどね〜……」

どれだけ食べても、その栄養分は背にも胸にも行き届かないんだよね…。

私が今まで摂取した栄養はどこに消えたの…？

イデの覚醒によつて因果地平の彼方にでも行つちやつたのかしらん…？

「美少女が満面の笑みで食事をする姿……これは社内ポスターに使えるかも？ いや、ポスターよりもパンフレットに採用すれば……」

んで、その量産機愛好者はさつきから何もぶつぶつと言つてるのかしらね？

「ところで、緒理香さんはお料理が出来るのですか？」

「出来るつていうか、せざる負えなかつたというか」

「どういう意味だ？」

「そのまんまの意味。ほら、私が少し前まで束と一緒に暮らしてたのは知ってるでしょ？」

「そう言えば、そうだったな」

「で、アイツってば家事の類を滅多にしようとしなから、必然的に私がする羽目になるんだよ。その過程で自然と上達していった感じ。普通に料理すること自体が楽しかったってのもあるけど」

ネットや本とかで色んな料理のメニューを調べていた時は割と楽しかった。

一時期は、私が試験的に作った料理をクロエに試食して貰うのが日課だったりしたっけ。

「因みに、得意料理は何だったりするの？」

「割と何でも出来るよ？ 特に苦手な料理とかもないし。学園に来る少し前にはビーフ・ストログノフにもチャレンジしたっけ」

「マジでツ!? 緒理香ってチャレンジヤーなのね……」

チャレンジヤーってよりは、普通に好奇心が強いだけだよ。

「お…おほん！ 緒理香さん？ 実は私も昼食を作ってきてまして……」

「[[[[[?]]]]」

「へ？」

セシリアの言葉を聞いた途端、私達は本気で戦慄をし、同時に背筋に氷柱を入れられたかのような恐怖を覚えた。

何にも事情を知らないシャルロットは目を丸くしてキョトンとしているけど。

もう既に、私達はセシリアの料理スキルが壊滅的なレベルに到達しているを知っていた。

そりやもう、言葉では到底言い表せないぐらいに。

「これなんですけど……」

彼女がテーブルの上に置いたバスケットからは、真っ黒なオーラが浮かび上がっているように見えた。

普通ならば幻覚だと思いかもしれないが、生憎と見えているのは私

だけではないらしい。

「箒も鈴も本音も簪も、顔に冷や汗を掻いて唾を飲んでる。

セシリアがバスケットの蓋を開けると、其処には綺麗に並んでいるサンドイツチが。

「見た目はいい。そう…見た目だけは。」

「ねえ…セシリア？ 少しいいかしら？」

「なんですか？」

「これ…ちゃんと味見はしたわけ？」

「してないですわ。緒理香さんに一番に食べて貰いたいと思ってましたので」

((((やっぱりか……)))

「ここで少しでも味見をしていけば、この悲劇を少しは回避出来るかもしれないのだが、この少女は変に気を効かせてそれを全くしようとならない。」

「いい加減に自分の料理の酷さを自分の身を持って味わうべきなのかもしれない。」

「その思いは私達の共通認識となったようで、目が合った鈴が力強く頷いてくれた。」

「…セシリア？ まずは自分で味わったら？」

「でも、これは緒理香さんに……」

「いいから。緒理香だってまだ他のを食べてる途中なんだし。今からでも遅くは無いから、まずはアンタが味見をした方が良いわ」

「それもそうですわね。では……んぐっ!!」

「自分自身のサンドイツチを一口食べた途端、セシリアの顔が真っ青になってテーブルの上に向かって伏すようにして倒れた。」

「ちよ…オルコットさんッ!? 大丈夫ッ!」

「これまた何にも知らないシャルロットだけがセシリアを心配する。私達は、こうなる事が最初から分かっていたので、そこまで大きな反応はしなかった。」

「ね…ねえ…あれ……」

「簪が恐る恐るセシリアの頭上を指差す。」

そこにはなんか文字が浮かんでいた。

【セシリア・オルコット】状態：毒

「「「サンドイツチ食べて毒になつてる——つ
!?!?!」」」

明らかに体に悪い事は分かつてたけど、まさか毒状態になるレベル
なのッ!?

って事は、下手をしたら私が毒になつてたつて事…?

「ちよ…セシリア！ アンタ大丈夫なのッ!?!」

「だ…大丈夫ですわ…：代表候補生たる者…この程度で狼狽えたりは
……」

「台詞の部分まで毒を表す緑色になつてるじゃないのよーっ！ だ…
だれか解毒薬とか持つてないのッ!?!」

「そんなの持つてるわけないだろ！」

「それもそっか！ んじゃどーすんのよ〜!?!」

「ぐ…御心配なく…：自分で保健室に行けますわ…：」

ヨロヨロとしながらも静かに椅子から立ち上がり、震える体で一歩
を踏み出すと、どこからか変な音が聞こえてきた。

グジャッ！

「なんか歩く度に毒のスリップダメージを受けてるんだけど——
——つ!?!」

「このままでは保険室に辿り着く前に力尽きてしまうぞ！」

「私達でセシリアを抱えて…：…あ」

簪が急に変な声を上げる。

その視線の先を見ると、屋上の出入り口の前に一人が入るぐ
らいの棺桶が置いてあった。

「セシリアが死んだっ!?!」

「この人でなし——つ!!」

はいはい。お約束、お約束。

「言つてる場合か——！ 早く棺桶を保健室まで持つていくぞ！」

「だ…大丈夫なのかなあ…：…?」

シャルロットの言い分は御尤もだけど、気にしちゃいけないよ。

ギャグ時空じゃ何でもアリだからね！

・
・
・
・
・
・
・

昼食を中断して、皆で力を合わせてセシリアが入っている棺桶を御神輿みたいに担いでから保健室まで直行。

急いで中に入ると、そこにはどこぞの超有名RPGの教会にいそうな神父っぽいおじさんが白衣を着て椅子に座っていた。

「先生!! セシリアが毒で瀕死になっちゃいました! どうにかしてください!」

「分かつた。イイヨ」

「なんでカタコト...?」

「そこもツツコミは無しだよ、シャルロット。」

「セシリアサンヲ生キ返ラセルニハ、550ゴールドが必要ニナルネ」

「お金を取るのツ!」

「私モ、慈善事業デヤツテル訳ジヤナイカラネ。才金ハ取ルヨ」

「学校の保健室でお金を払うとか前代未聞な気がするんだけど……」

「このIS学園に常識を求めちゃいけない。」

「私達の担任がアレな時点だね。」

「デ、払ウノ? 払ワナイノ? ドツチ?」

「因みに、1ゴールドって日本円に換算すると幾らになるんですか?」

「1ゴールド11円ネ」

「要はたったの550円っ!? めっちゃ安っ!」

「というか、セシリアの命って550円の価値しかないのかっ!」

「モシモ彼女ガ国家代表ニナレレバ、ソノ時ハ値段ガ二倍ニナルヨ」

「それでもたったの1100円っ!？」

凄くリーズナブルと言うべきか、それともこの人の価値観がシビアなだけなのか。

「ここはあたしが払うわよ。焚き付けたのはこっちだし。はい、550円」

「ソレジャア、生き返ラセルネ」

ピロリ〜ン♪

そんな音と共にセシリアが棺桶状態から復活した。

これで一安心だね。

「後ハ、ココデ安静ニシテイレバ問題ナイネ」

「それもお金を取るんですか?」

「エ? ナニ言ツテルノ? ソンナワケナイジヤナイ」

「え〜……」

さつきまで量産機への愛を語っていたシャルロットはどこへやら。

今は完全にIS学園の洗礼を受けているね。

一刻も早く、このカオスな環境に慣れる事をお勧めするよ。いやマジで。

じゃないと本気で気疲れしちゃうからね。

この後、私達で山田先生に報告をして、セシリアは午後の授業を休んで体調回復に努めた。

え? なんでそこで担任の千冬さんじゃないのかって?

その理由を言う必要がある?

勿論、途中で食べそこなった筈のお弁当と鈴の酢豚は後で全部食べました。

どっちも凄く美味しかったとだけ言っておこう。

・
・
・
・
・
・
・

放課後。

校舎裏にあるゴミ捨て場にてセシリアの作ったサンドイッチを処分することにした筈と鈴。

「お……おい……鈴?」

「何よ?」

「セシリアの作ったサンドイッチをビニールに入れるのは構わんのだが……どうして袋に危険物バイオハザードマークを書くんだ?」

「それを敢えて聞くわけ? 迷い込んだ野良猫とかが間違ってこれを食べて突然変異とかしたらどうすんのよ。あの子が作った料理は核廃棄物と同等の扱いぐらいが丁度いいの。万が一にも何かあっても、あたしは責任とか取りたくないし」

「それに物凄く納得出来てしまう自分が嫌だな……」